

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第170集

美里町

広木上宿遺跡

—古代・中世編—

県道広木末野線関係埋蔵文化財発掘調査報告

— I —

1996

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



小型宝塔・小型未開敷蓮華



金製小型宝塔



銀製小型宝塔



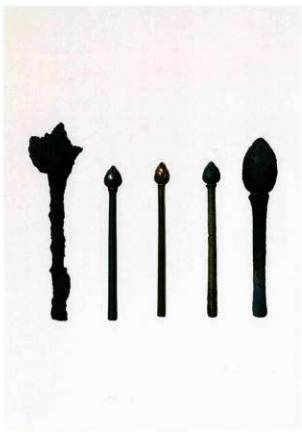
金銅製小型宝塔



銅製小型宝塔



鉄製小型宝塔



小型未開敷蓮華



小型宝塔・小型未開敷蓮華出土狀況



小型宝塔・小型未開敷蓮華出土狀況

序

埼玉県は首都圏の一翼を担い、現在、人口増加率が最も高い県です。これに伴う住宅建設や工場の進出などをはじめとして、その開発ぶりにはめざましいものがあります。

埼玉県では多様化する県民の生活圏の拡大や、高度化する産業活動の円滑化などを図るため、生活環境の保全と道路交通の安全性を重視しながら、総合的な道路網の整備が行われております。

特に、県内を結ぶ幹線道路の整備については、地域間の連携を高めるために、県内1時間道路網構想を目標とした道路網の整備が進められ、県道広木末野線の建設工事も計画されました。

この路線は、児玉郡美里町広木から川良田湖を経由して、大里郡寄居町末野に至り、国道254号線と国道140号線を結ぶ道路であります。

建設予定地には貴重な遺跡が知られており、美里町に1遺跡、寄居町には4遺跡が所在しております。これらの埋蔵文化財の取り扱いについては、関係機関により協議が重ねられた結果、当事業団が発掘調査を実施して、その記録を保存することになりました。今回報告いたします広木上宿遺跡は、美里町に所在する遺跡であります。

発掘調査の結果、縄文時代と古墳時代から奈良・平安時代の集落跡や、中世の寺院関連遺構などが発見され、土器や鉄製品などが出土しました。これらは当時

の人々の生活を考える上で、貴重な資料となるものであります。

特に、埼玉県有形文化財に指定された、漆塗に伴って発見された金・銀・金銅・銅・鉄の5種類の金属で作られた5基の小型宝塔と5本の小型末開敷蓮華は、全国にも類を見ないものであります。当時の信仰や金工技術を考える上で貴重な資料であると同時に、考古学をはじめとして美術・芸史、宗教史などの資料としてもたいへん価値の高いものであります。

これらの発掘調査の成果をまとめた本書が、埋蔵文化財の保護に関する教育・普及の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行にいたるまで多大な御協力を賜りました教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、土木部道路建設課、同本庄土木事務所、美里町教育委員会、並びに地元関係者各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県児玉郡美里町大字広木宇上宿2988番地他に所在する広木上宿遺跡の発掘調査報告書である。

発掘調査届に対する文化庁長官からの指示通知は平成4年7月10日付け委保第5の802号・平成5年6月4日付け委保第5の501号である。

2. 遺跡の略号は、H.KMZYKである。
3. 発掘調査は、県道広木木野線（美里地内）建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課の調整のもと、埼玉県土木部道路建設課の委託によって、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 発掘調査は、平成4年4月1日から平成5年12月28日まで実施した。

整理報告書作成作業は、平成7年4月1日から平成8年3月31日まで実施した。

担当者は以下のとおりである。

平成4年度 今川 宏 田中広明 西口正純

平成5年度 石坂俊郎 山本 靖

平成7年度 山本 靖

なお、発掘調査と整理作業の組織はI-3に記した。

5. 小型宝塔・小型未開敷蓮華・漆箱の取り上げと保存処理については、野中 一が担当した。
6. 出土品の整理・図版の作成は山本が担当した。小型宝塔と小型未開敷蓮華の実測に関しては、小川忠博に実測用写真撮影を委託し、これをもとに実測し、澁瀬芳之が補佐した。
7. 発掘調査時の写真撮影は各担当者が行った。遺物撮影は、山本が行った。ただし、小型宝塔と小型未開敷蓮華については小川良祐が、小型宝塔・小型未開敷蓮華・漆箱の処理過程については、野中が行った。
8. 本文の執筆及び編集は、資料部資料整理第一課の

山本が行い、I-1を埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課、V-3・4、VII-4を野中が分担した。

9. 本書にかかる資料は平成8年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 小型宝塔と小型未開敷蓮華の名称・技法・性格等については、「広木上宿遺跡出土宝塔検討委員会」を組織し、検討を行った。
11. 小型宝塔・小型未開敷蓮華の材質分析に関しては、東京国立文化財研究所修復技術部第三修復技術研究室から御指導をえ、玉稿を賜った。
12. 小型宝塔のγ線透過写真は、東京国立文化財研究所の御協力によって撮影した。
13. 遺跡の基準点測量と航空写真は、株式会社東京航業研究所、須臾器のカラー写真は小川忠博に委託した。

小型宝塔・小型未開敷蓮華の出土状況実測は株式会社シン技術コンサルに委託し、原図を作成した。胎土分析は株式会社第四紀地質研究所、漆膜の分析は漆文化財科学研究所に委託した。

14. 本書の作成にあたり下記の方々から御教示、御協力を賜った。

青木繁夫 荒川正夫 安藤孝一 石川安司

泉谷申一 犬竹 和 岡本幸男 河田 貞

川野辺渉 恋河内昭彦 小林康幸 佐野千絵

鈴木友也 時枝 務 中野政樹 中里善克

長瀬義康 西川杏太郎 西山要一 原田一敏

平尾良光 丸山陽一 三浦定俊 宮本長二郎

三輪嘉六 山口誠治 柳田敏司 四柳嘉章

縮貫悦次郎 常福寺 人念寺 般若寺 西大寺

美里町教育委員会 中世瓦研究会

15. 本書で報告する小型宝塔5基と小型未開敷蓮華5本及び漆箱残欠は平成7年3月16日付けで、埼玉県指定有形文化財・考古資料となった。

凡例

1. 本書における挿図の指示は次のとおりである。

- ・ X、Yによる座標表示は国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。

・挿図の縮尺は、以下を原則としたが、例外もある。

住居跡1/60 カマド1/30 独立柱建物跡1/60

溝跡1/120 溝跡断面図1/60 井戸跡1/60

上坑1/60 基壇状遺構1/80

土器1/4 瓦1/4 埴輪1/3 石製品1/2

鉄製品1/2 石塔類1/8

小型宝塔・小型木簡数連筆2/1

・全測図等に示す遺構表記の略号は以下のとおりである。

SJ…住居跡 SB…独立柱建物跡 SE…井戸跡

SK…土坑 SD…溝跡 SQ…基壇状遺構

・遺構図中のスクリーントーンは以下のことを示す。



・遺構図中に示したドットは、遺物の出土位置及び接合関係を示し、番号は遺物実測図のそれと一致する。

・土器実測図において復原実測を行ったものは、口縁を直線で結ばず、中心線の両側を若干開けた。器種ごとの主な表現方法は下記の通りである。

須恵器…断面黒塗り。図中に示した細線はケズりの単位を示す。釉付着範囲には10%網をかけて示した。

上神器…断面白抜き。黒色処理されたものはその範囲に20%の網をかけて示した。

2. 遺物観察表の凡例は以下の通りである。

・大きさの()内の数値は推定値であり、単位はcmを示す。なお、器高は破片の場合残存高を示す。

・胎土は肉眼で観察できる物質について、以下のように示した。

W…白色粒子 B…黒色粒子 R…赤色粒子
片…片岩粒子 針…白色針状物質

・焼成は3ランクに分けた。

A…良好 B…普通 C…不良

・色調は『新版標準十色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1995）に照らし、最も近い色相を記した。彩度や明度は無視したため、かなり幅のあるものである。

・残存率は5%単位で記した。

目次

口 絵	V 中世寺院関連の遺構と遺物	209
序	1 遺構と遺物	209
例 言	2 小型宝塔・小型未開敷蓮華の出土状況	247
凡 例	3 小型宝塔等の取り上げと保存処理	253
目 次	4 漆箱の調査	261
1 発掘調査の概要	5 小型宝塔	271
1 調査に至るまでの経過	6 小型未開敷蓮華	287
2 調査の経過	VI 広木上宿遺跡出土宝塔検討委員会報告	289
3 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	VII 結語	293
II 遺跡の立地と環境	1 小型宝塔・小型未開敷蓮華の出土状況について	293
III 遺跡の概要	2 小型宝塔・小型未開敷蓮華の製作年代	298
IV 遺構と遺物	3 小型宝塔・小型未開敷蓮華の性格等について	304
1 住居跡	4 漆箱について	311
2 掘立柱建物跡	付 編	323
3 井戸跡		
4 土 坑		
5 溝 跡		
6 その他の遺構と遺物		

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形区分	5	第15図 第07号住居跡出土遺物	26
第2図 美里町周辺の地形	6	第16図 第10号住居跡	27
第3図 周辺の遺跡	8	第17図 第10号住居跡出土状況	28
第4図 遺跡全圖	12	第18図 第10号住居跡カマド	28
第5図 遺跡周辺の地形	16	第19図 第10号住居跡出土遺物(1)	29
第6図 第01・02号住居跡	17	第20図 第10号住居跡出土遺物(2)	30
第7図 第01号住居跡出土遺物	18	第21図 第11号住居跡	31
第8図 第02号住居跡出土遺物	19	第22図 第11号住居跡出土遺物	32
第9図 第03号住居跡・出土遺物	20	第23図 第12号住居跡・出土遺物	33
第10図 第04号住居跡	22	第24図 第15・16号住居跡	34
第11図 第04号住居跡出土状況	23	第25図 第15・16号住居跡カマド	35
第12図 第04号住居跡カマド	24	第26図 第15・16号住居跡出土状況	36
第13図 第04号住居跡出土遺物	25	第27図 第15号住居跡出土遺物(1)	37
第14図 第07号住居跡	26	第28図 第15号住居跡出土遺物(2)	38

第29回	第16号住居跡出土遺物	39	第66回	第50号住居跡	69
第30回	第18号住居跡出土状況	39	第67回	第51・52号住居跡	70
第31回	第18号住居跡	40	第68回	第51号住居跡カマド	72
第32回	第18号住居跡出土遺物(1)	41	第69回	第51号住居跡出土遺物(1)	73
第33回	第18号住居跡出土遺物(2)	42	第70回	第51号住居跡出土遺物(2)	74
第34回	第25号住居跡	43	第71回	第51号住居跡出土遺物(3)	75
第35回	第25号住居跡出土遺物	44	第72回	第53号住居跡	78
第36回	第27号住居跡	45	第73回	第53号住居跡出土遺物	79
第37回	第27号住居跡カマド	46	第74回	第54・55号住居跡	81
第38回	第27号住居跡出土遺物	47	第75回	第54号住居跡カマド	82
第39回	第29号住居跡・出土遺物	48	第76回	第55号住居跡カマド	82
第40回	第30号住居跡・出土遺物	49	第77回	第55号住居跡貯蔵穴	82
第41回	第31号住居跡・出土遺物	50	第78回	第54号住居跡出土遺物	83
第42回	第32号住居跡・出土遺物	51	第79回	第55号住居跡出土遺物(1)	83
第43回	第33号住居跡	52	第80回	第55号住居跡出土遺物(2)	84
第44回	第33号住居跡カマド	53	第81回	第56号住居跡	85
第45回	第33号住居跡出土遺物	53	第82回	第57・58・59号住居跡	86
第46回	第34号住居跡	54	第83回	第57号住居跡	87
第47回	第35号住居跡	55	第84回	第57・58・59号住居跡出土遺物	87
第48回	第36号住居跡	56	第85回	第58号住居跡	88
第49回	第36号住居跡出土遺物	57	第86回	第59号住居跡	89
第50回	第37号住居跡	58	第87回	第60-67号住居跡	90
第51回	第37号住居跡カマド	59	第88回	第60号住居跡	91
第52回	第37号住居跡出土遺物	60	第89回	第61号住居跡	91
第53回	第38号住居跡	61	第90回	第62号住居跡	91
第54回	第38号住居跡カマド	62	第91回	第64号住居跡	91
第55回	第38号住居跡出土遺物	63	第92回	第63号住居跡	92
第56回	第39・40号住居跡	64	第93回	第65号住居跡	92
第57回	第41号住居跡	64	第94回	第66号住居跡	92
第58回	第42・43号住居跡	65	第95回	第67号住居跡	92
第59回	第44号住居跡	66	第96回	第60・61・62・67号住居跡出土遺物	93
第60回	第44号住居跡出土遺物	67	第97回	第68号住居跡カマド	94
第61回	第45号住居跡	67	第98回	第68号住居跡・出土遺物	95
第62回	第46号住居跡	67	第99回	第69号住居跡カマド	96
第63回	第47号住居跡	68	第100回	第69号住居跡	97
第64回	第48号住居跡	68	第101回	第69号住居跡出土遺物	98
第65回	第49号住居跡	69	第102回	第70号住居跡・出土遺物	100

第103回	第71号住居跡・出土遺物	101	第140回	第04・05・06・07号溝跡	141
第104回	第72号住居跡出土遺物	102	第141回	第11号溝跡	141
第105回	第73号住居跡出土遺物	102	第142回	第12・13号溝跡	142
第106回	第74~79号住居跡(1)	103	第143回	第14号溝跡	143
第107回	第74~79号住居跡(2)	104	第144回	第18号溝跡	143
第108回	第75号住居跡	104	第145回	第19号溝跡	144
第109回	第74号住居跡	105	第146回	第20号溝跡	145
第110回	第76号住居跡	106	第147回	第21号溝跡	145
第111回	第74・75号住居跡出土遺物	107	第148回	第23号溝跡・出土遺物	146
第112回	第76・78号住居跡出土遺物	108	第149回	第24号溝跡	146
第113回	第78・79号住居跡出土遺物	108	第150回	第21号溝跡出土遺物	147
第114回	第77・78号住居跡	110	第151回	第01・02号製鉄遺構	149
第115回	第79号住居跡	111	第152回	G-25・26Gr・F-26Gr	150
第116回	第79号住居跡カマド	112	第153回	J-31Gr	151
第117回	第80号住居跡・出土遺物	113	第154回	L-36Gr	151
第118回	第81号住居跡・出土遺物	114	第155回	I-32Gr・J-32Gr	152
第119回	第82号住居跡・出土遺物	114	第156回	J-33・34Gr・K-32・33Gr	153
第120回	第05号孤立柱建物跡	116	第157回	L-37Gr・M-37・38Gr	154
第121回	第07号孤立柱建物跡	118	第158回	M-38・39Gr・N-39Gr	157
第122回	第09号孤立柱建物跡	120	第159回	N-40Gr	158
第123回	第01号井戸跡	121	第160回	O-40Gr	159
第124回	第01~15号土坑	122	第161回	O-42Gr・P-42Gr	162
第125回	第16~35号土坑	123	第162回	O-41Gr	165
第126回	第36~45号土坑	124	第163回	O-43Gr・P-43Gr	166
第127回	第46・47・49~51・55・56号土坑	125	第164回	O-44Gr	168
第128回	第57~64・66号土坑	126	第165回	N-41Gr	168
第129回	第67~70・75・83~85号土坑	127	第166回	P-51Gr	168
第130回	第86・88~100・107号土坑	128	第167回	P-49Gr・Q-49Gr	169
第131回	第101~106・108~110・112・113号土坑	129	第168回	P-52Gr・Q-52Gr	170
第132回	第111・114~123号土坑	130	第169回	P-55Gr・Q-55Gr	171
第133回	第124~135号土坑	131	第170回	R-59Gr・S-59Gr	171
第134回	第136~143号土坑	132	第171回	S-61Gr・T-61Gr	172
第135回	第144~153号土坑	133	第172回	S-62Gr・T-62Gr	173
第136回	第154~159号土坑	134	第173回	T-63Gr	174
第137回	第160~165号土坑	135	第174回	O-43Gr Pit17出土遺物	176
第138回	第46・86・88・123・131号土坑出土遺物	139	第175回	P・Q-46~49Gr 出土遺物	177
第139回	第154・157・159号土坑出土遺物	140	第176回	S-V-60~66Gr(1)	178

第177図	S-V-60-66Gr (2) ……………	179	第214図	第02・15・16・26号溝跡(3) ……………	228
第178図	グリッド出土遺物 ……………	180	第215図	第15号溝跡出土遺物 ……………	229
第179図	石製品(1) ……………	183	第216図	第03・25号溝跡 ……………	230
第180図	石製品(2) ……………	184	第217図	第09・10号溝跡 ……………	230
第181図	土錘(1) ……………	186	第218図	鬼瓦 ……………	232
第182図	土錘(2) ……………	187	第219図	中世瓦(1) ……………	233
第183図	鉄製品・木製品 ……………	189	第220図	中世瓦(2) ……………	234
第184図	埴輪(1) ……………	191	第221図	中世瓦(3) ……………	235
第185図	埴輪(2) ……………	192	第222図	中世瓦(4) ……………	236
第186図	埴輪(3) ……………	193	第223図	宝篋印塔・五輪塔(1) ……………	239
第187図	古代瓦 ……………	195	第224図	五輪塔(2) ……………	240
第188図	古銭(1) ……………	196	第225図	五輪塔(3) ……………	241
第189図	古銭(2) ……………	197	第226図	五輪塔(4) ……………	242
第190図	古銭(3) ……………	198	第227図	五輪塔(5) ……………	243
第191図	古銭(4) ……………	199	第228図	五輪塔(6) ……………	244
第192図	古銭(5) ……………	200	第229図	板碑 ……………	245
第193図	古銭(6) ……………	201	第230図	不明土製品 ……………	246
第194図	古銭(7) ……………	202	第231図	第48号土坑周辺のビット群 ……………	248
第195図	古銭(8) ……………	203	第232図	第48号土坑 ……………	251
第196図	古銭(9) ……………	204	第233図	小型宝塔・小型未開敷蓮華出土状況 ……	252
第197図	古銭(10) ……………	205	第234図	漆箱出土状況 ……………	253
第198図	表塚遺物 ……………	208	第235図	漆箱の取り上げ ……………	253
第199図	中世寺院関連遺構 ……………	210	第236図	取り上げ後の漆箱 ……………	253
第200図	第01号基壇状遺構 ……………	212	第237図	漆箱内部(X線写真横から) ……………	253
第201図	第01号配石遺構 ……………	214	第238図	漆箱内部状況(X線写真から作図) ……	254
第202図	第01号基壇状遺構出土遺物 ……………	214	第239図	漆膜取り上げ作業 ……………	255
第203図	第01号掘立柱建物跡 ……………	216	第240図	和紙による裏打ち ……………	255
第204図	第02号掘立柱建物跡 ……………	216	第241図	漆膜の洗浄 ……………	255
第205図	第03号掘立柱建物跡 ……………	217	第242図	保存処理工程 ……………	256
第206図	第06号掘立柱建物跡 ……………	219	第243図	金製小型宝塔(処理前) ……………	256
第207図	第04号掘立柱建物跡・出土遺物 ……	220	第244図	金製小型宝塔本体底部 ……………	256
第208図	第10号掘立柱建物跡 ……………	221	第245図	鉄錆中の金製小型宝塔扉 ……………	257
第209図	第11号掘立柱建物跡 ……………	222	第246図	銅・鉄・銀製小型宝塔(X線写真) ……	257
第210図	第08号掘立柱建物跡 ……………	223	第247図	銀・鉄製小型宝塔付着部 ……………	257
第211図	第01・17号溝跡 ……………	225	第248図	銀・鉄製小型宝塔(X線写真上から) ……	257
第212図	第02・15・16・26号溝跡(1) ……	226	第249図	銅製小型宝塔(処理前) ……………	258
第213図	第02・15・16・26号溝跡(2) ……	227	第250図	銅製小型宝塔鉄錆付着部 ……………	258

第251図	金銅製小型宝塔 (処理前)	258	第266図	第7層主要漆膜出土状況	267
第252図	金銅製小型宝塔相輪折損部	258	第267図	第7層漆膜 (1)	267
第253図	鉄製小型宝塔切削部	259	第268図	第7層漆膜 (2)	268
第254図	金・銅製小型未開敷蓮華出土状況	259	第269図	小型宝塔部分名称図	271
第255図	銀製小型未開敷蓮華出土状況	259	第270図	金製小型宝塔	272
第256図	金銅製小型未開敷蓮華出土状況	259	第271図	銀製小型宝塔	274
第257図	上層散乱漆膜	262	第272図	金銅製小型宝塔	276
第258図	漆膜出土状況	262	第273図	銅製小型宝塔	278
第259図	第1～3層出土状況	262	第274図	鉄製小型宝塔	280
第260図	第1～3層漆膜	263	第275図	小型宝塔構造復原図	282
第261図	第4・5層出土状況	264	第276図	小型未開敷蓮華	288
第262図	第4・5層漆膜	264	第277図	漆膜の分類 (1)	312
第263図	第6層出土状況	265	第278図	漆膜の分類 (2)	313
第264図	第6層漆膜	265	第286図	各類相当部位	314
第265図	第7層出土状況	267	第289図	漆箱平面形の推定線	315

図版目次

図版1	取上げ直後の小型宝塔 保存処理後の小型宝塔	鉄製小型未開敷蓮華書部 (処理前) 小型未開敷蓮華 (処理前)
図版2	第48号土坑・周辺ビット 第48号土坑漆膜出土状況 金銅製小型宝塔出土状況	銀製小型未開敷蓮華 (処理前) 銅製小型未開敷蓮華 (処理前) 漆膜下出土鉄片
図版3	小型宝塔・小型未開敷蓮華出土状況 (1) 小型宝塔・小型未開敷蓮華出土状況 (2) 金製小型宝塔出土状況	図版6
図版4	金製小型宝塔・鉄製小型未開敷蓮華 (正面) 金製小型宝塔・鉄製小型未開敷蓮華 (裏面) 金製小型宝塔・鉄製小型未開敷蓮華 (下方から) 銀・鉄・銅製小型宝塔付着状況 金製小型宝塔・鉄製小型未開敷蓮華 (右面) 金製小型宝塔・鉄製小型未開敷蓮華 (左面) 銀・鉄・銅製小型宝塔付着状況 銀・鉄製小型宝塔分離状況	金製小型宝塔 (正面) 金製小型宝塔 (背面) 金製小型宝塔 (上面) 金製小型宝塔 (右面) 金製小型宝塔 (左面) 金製小型宝塔 (底面)
図版5	鉄製小型宝塔相輪部 金製小型未開敷蓮華 (処理前) 金銅製小型未開敷蓮華 (処理前)	図版7
		金製小型宝塔 (扉部開放) 金製小型宝塔 (隠蓋・塔身部正面) 金製小型宝塔 (隠蓋部下から) 金製小型宝塔 (相輪部) 金製小型宝塔 (隠蓋・塔身部右面) 金製小型宝塔 (絡繰り状況)
		図版8
		銀製小型宝塔 (正面) 銀製小型宝塔 (背面)

	銀製小型宝塔 (上面)	鉄製小型宝塔 (右面)
	銀製小型宝塔 (右面)	鉄製小型宝塔 (左面)
	銀製小型宝塔 (左面)	鉄製小型宝塔 (底面)
	銀製小型宝塔 (底面)	図版15 小型未開敷蓮華
図版9	銀製小型宝塔 (扉部開放)	金製小型未開敷蓮華
	銀製小型宝塔 (屋蓋・塔身部正面)	銀製小型未開敷蓮華
	銀製小型宝塔 (屋蓋部下から)	金銅製小型未開敷蓮華
	銀製小型宝塔 (相輪部)	銅製小型未開敷蓮華
	銀製小型宝塔 (屋蓋・塔身部右面)	鉄製小型未開敷蓮華
	銀製小型宝塔 (底面・処理前)	図版16 漆膜出土状況
図版10	金銅製小型宝塔 (正面)	漆膜第3層出土状況
	金銅製小型宝塔 (背面)	漆膜第4層出土状況
	金銅製小型宝塔 (上面)	漆膜第5層出土状況
	金銅製小型宝塔 (右面)	漆膜第2層出土状況
	金銅製小型宝塔 (左面)	漆膜第3層
	金銅製小型宝塔 (底面)	漆膜第4層
図版11	金銅製小型宝塔 (扉部正面)	漆膜第5層
	金銅製小型宝塔 (扉部開放)	図版17 漆膜第6層出土状況
	金銅製小型宝塔 (屋蓋部下から)	漆膜第6層
	金銅製小型宝塔 (屋蓋部正面)	漆膜第7層出土状況
	金銅製小型宝塔 (相輪部)	漆膜第7層
	金銅製小型宝塔 (内部木片)	漆膜第6層
図版12	銅製小型宝塔 (正面)	漆膜第6層
	銅製小型宝塔 (背面)	漆膜第7層
	銅製小型宝塔 (上面)	漆膜第7 C層
	銅製小型宝塔 (右面)	図版18 漆塗膜片と観察・分析部位
	銅製小型宝塔 (左面)	Bにおける漆塗膜と下地の状況
	銅製小型宝塔 (底面)	Cにおける下地の状況
図版13	銅製小型宝塔 (請花部)	図版19 Aにおける長軸方向のコソ部分下地
	鉄製小型宝塔 (正面・相輪部未接合)	Cにおける長軸方向の下地
	鉄製小型宝塔 (背面・相輪部未接合)	Bにおける長軸方向の布着せ
	鉄製小型宝塔 (上面・相輪部未接合)	図版20 Cにおける塗膜層断面
	鉄製小型宝塔 (右面・相輪部未接合)	Cにおける塗膜層断面 (拡大)
	鉄製小型宝塔 (左面・相輪部未接合)	上層散乱塗膜の断面
図版14	鉄製小型宝塔 (正面)	図版21 コソ上部における布着せ (No.11の右上部にあたる)
	鉄製小型宝塔 (背面)	Aにおけるコソ彫り全体
	鉄製小型宝塔 (上面)	

- Aにおけるコクソ彫り全体 (拡大)
- 図版22 第74・75号住居跡 墨書土器
第55号住居跡 蓋・坏
- 図版23 広木上宿遺跡航空写真 (南東から)
広木上宿遺跡航空写真 (西から)
- 図版24 広木上宿遺跡航空写真 (南から)
広木上宿遺跡航空写真 (北西から)
- 図版25 広木上宿遺跡航空写真 (調査区中央部)
広木上宿遺跡航空写真 (北東から)
- 図版26 第01・02号住居跡遺物出土状況
第02号住居跡遺物出土状況
第03号住居跡
第03号住居跡カマド
第04号住居跡
第04号住居跡遺物出土状況
第04号住居跡カマド
第04号住居跡掘形
- 図版27 第07号住居跡
第07号住居跡柱穴
第10号住居跡
第10号住居跡遺物出土状況
第10号住居跡カマド
第10号住居跡カマド断面
第10号住居跡遺物出土状況
第10号住居跡遺物出土状況
- 図版28 第11号住居跡
第11号住居跡遺物出土状況
第11号住居跡貯蔵穴
第12号住居跡
第15・16号住居跡
第15号住居跡遺物出土状況
第15号住居跡カマド
第15号住居跡カマド
- 図版29 第16号住居跡カマド
第16号住居跡遺物出土状況
第15号住居跡貯蔵穴
第18号住居跡
- 第18号住居跡貯蔵穴
第18号住居跡貯蔵穴
第18号住居跡遺物出土状況
第18号住居跡遺物出土状況
- 図版30 第25号住居跡
第25号住居跡カマド
第25号住居跡遺物出土状況
第25号住居跡遺物出土状況
第27号住居跡
第27号住居跡
第27号住居跡カマド
第27号住居跡遺物出土状況
- 図版31 第29号住居跡
第31号住居跡
第30号住居跡
第30号住居跡掘形
第32号住居跡
第33号住居跡
第33号住居跡カマド
第35号住居跡
- 図版32 第36号住居跡
第37号住居跡
第37号住居跡カマド
第38号住居跡
第38号住居跡カマド
第38号住居跡遺物出土状況
第38号住居跡遺物出土状況
第39・40号住居跡
- 図版33 第41号住居跡
第42・43号住居跡
第44号住居跡
第45号住居跡
第48号住居跡
第49号住居跡
第50号住居跡
第53号住居跡
- 図版34 第51A-D号・第52号住居跡

	第51号住居跡カマド		第154号土坑	第155号土坑
	第51号住居跡カマド	図版41	第156号土坑	第157号土坑
	第51号住居跡カマド		第158号土坑	第158号土坑
	第54・55号住居跡		第158号土坑	第160号土坑
	第55号住居跡貯蔵穴		第159号土坑	第159号土坑
	第57～66号住居跡	図版42	第161号土坑	第161号土坑
	第57～66号住居跡		第161号土坑	第161号土坑
図版35	第56号住居跡		第163号土坑	第163号土坑
	第68号住居跡		第165号土坑	第165号土坑
	第69号住居跡	図版43	第04号溝跡	第05号溝跡
	第70号住居跡		第12号溝跡	第12号溝跡
	第72～79号住居跡		第13号溝跡	第19号溝跡
	第72～79号住居跡		第21号溝跡	第21号溝跡
	第81号住居跡	図版44	第21号溝跡	第21号溝跡
	第82号住居跡		第21号溝跡	第20号溝跡
図版36	第05号掘立柱建物跡		第01号基壇状遺構南北断面 (1)	
	第07号掘立柱建物跡		第01号基壇状遺構南北断面 (2)	
	第01号土坑		第01号基壇状遺構南北断面 (3)	
	第02号土坑		第01号基壇状遺構南東B軽石堆積状況	
	第05号土坑		第01号基壇状遺構東西断面 (1)	
	第01号井戸跡	図版45	第01号基壇状遺構東西断面 (2)	
	第02号土坑		第01号基壇状遺構東西断面 (3)	
図版37	第03～06号土坑		第01号配石遺構	第01号配石遺構
	第03号土坑		第01号配石遺構	第01号配石遺構
	第03号土坑		第01号配石遺構	第01号配石遺構
	第08号土坑		第01号配石遺構	第01号配石遺構
	第09号土坑		第01号配石遺構	第01号配石遺構
	第10号土坑		第01号配石遺構	第01号配石遺構
	第36号土坑		第01号配石遺構	第01号配石遺構
	第45・46・47・49・56号土坑	図版46	第01号配石遺構	第01号配石遺構
図版38	第57・58号土坑		第01号配石遺構	第01号配石遺構
	第67号土坑		第01号配石遺構	第01号配石遺構
	第68号土坑		第01号配石遺構	第01号配石遺構
	第68号土坑・第12号溝跡		第01号配石遺構	第01号配石遺構
	第75号土坑		第01号配石遺構	第01号配石遺構
	第85号土坑		第01号配石遺構	第01号配石遺構
	第92～99号土坑		第01号配石遺構	第01号配石遺構
	第92～99号土坑		軒瓦出土状況 (第04号住居跡)	
図版39	第101・102・103号土坑		鬼瓦出土状況 (第04号住居跡)	
	第104～106号土坑		軒平瓦出土状況 (第04号住居跡)	
	第111号土坑		平瓦出土状況 (第04号住居跡)	
	第113号土坑	図版47	第01号掘立柱建物跡	
	第141号土坑		第01号掘立柱建物跡	
	第142号土坑		第01号掘立柱建物跡	
	第143号土坑		第01号掘立柱建物跡 Pit1	
図版40	第144号土坑		第01号掘立柱建物跡 Pit2	
	第145号土坑		第02号掘立柱建物跡	
	第146号土坑			
	第148号土坑			
	第149号土坑			
	第152号土坑			

	第02号掘立柱建物跡 Pit1断面		第36号住居跡出土遺物
	第02号掘立柱建物跡 Pit1	図版59	第33号住居跡出土遺物
	第02号掘立柱建物跡 Pit2		第38号住居跡出土遺物
図版48	第03号掘立柱建物跡 Pit2・3		第44号住居跡出土遺物
	第03号掘立柱建物跡 Pit2・3	図版60	第44号住居跡出土遺物
	第06号掘立柱建物跡		第51号住居跡出土遺物
	第04号掘立柱建物跡	図版61	第51号住居跡出土遺物
	第04号掘立柱建物跡 Pit4	図版62	第51号住居跡出土遺物
	第04号掘立柱建物跡 Pit3	図版63	第51号住居跡出土遺物
	第04号掘立柱建物跡 Pit6		第53号住居跡出土遺物
	第02号溝跡	図版64	第53号住居跡出土遺物
図版49	中世寺院関連遺構全景		第55号住居跡出土遺物
	P・Q-46~49Gr 方形壇状部現況(北から)	図版65	第55号住居跡出土遺物
	P・Q-46~49Gr 方形壇状部現況(南から)		第57・58・59号住居跡出土遺物
図版50	調査区近景 (42~45Gr 付近・北から)		第60・61・62・67号住居跡出土遺物
	調査区近景 (47~49Gr 付近・南から)	図版66	第68号住居跡出土遺物
	調査区近景 (50~52Gr 付近・北から)		第69号住居跡出土遺物
図版51	調査区近景 (53~56Gr 付近・南から)		第72号住居跡出土遺物
	調査区近景 (56~58Gr 付近・北から)	図版67	第69号住居跡出土遺物
	調査区近景 (60~64Gr 付近・南から)		第70号住居跡出土遺物
図版52	第01号住居跡出土遺物		第71号住居跡出土遺物
	第03号住居跡出土遺物		第73号住居跡出土遺物
	第04号住居跡出土遺物	図版68	第70号住居跡出土遺物
図版53	第04号住居跡出土遺物		第74・75号住居跡出土遺物
図版54	第04号住居跡出土遺物		第76・78号住居跡出土遺物
	第07号住居跡出土遺物	図版69	第78・79号住居跡出土遺物
	第10号住居跡出土遺物		第80号住居跡出土遺物
図版55	第10号住居跡出土遺物		第81号住居跡出土遺物
	第15号住居跡出土遺物		第88号土坑出土遺物
図版56	第15号住居跡出土遺物		第154号土坑出土遺物
	第18号住居跡出土遺物		第157号土坑出土遺物
	第25号住居跡出土遺物	図版70	第159号土坑出土遺物
図版57	第16号住居跡出土遺物		第21号溝跡出土遺物
	第27号住居跡出土遺物		P・Q-46~49Gr 出土遺物
図版58	第18号住居跡出土遺物		S~V-60~66Gr 出土遺物
	第27号住居跡出土遺物	図版71	S~V-60~66Gr 出土遺物
	第33号住居跡出土遺物		グリッド出土遺物

- 图版72 第11号住居跡出土遺物
 第18号住居跡出土遺物
 第27号住居跡出土遺物
- 图版73 第27号住居跡出土遺物
 第16号住居跡出土遺物
 第25号住居跡出土遺物
 第07号住居跡出土遺物
 第18号住居跡出土遺物
- 图版74 第55号住居跡出土遺物
 第25号住居跡出土遺物
 第53号住居跡出土遺物
- 图版75 第69号住居跡出土遺物
 第10号住居跡出土遺物
 第38号住居跡出土遺物
 第55号住居跡出土遺物
 第27号住居跡出土遺物
- 图版76 第33号住居跡出土遺物
 第51号住居跡出土遺物
 第15号住居跡出土遺物
 第01号住居跡出土遺物
 第10号住居跡出土遺物
- 图版77 第18号住居跡出土遺物
 第57号住居跡出土遺物
 第10号住居跡出土遺物
- 图版78 第15号住居跡出土遺物
 第27号住居跡出土遺物
 第53号住居跡出土遺物
- 图版79 第55号住居跡出土遺物
 第60・61・62・67号住居跡出土遺物
 第78・79号住居跡出土遺物
- 图版80 表採遺物
 P・Q-46~49Gr 出土遺物
 第04号住居跡出土遺物
 第11号住居跡出土遺物
 第27号住居跡出土遺物
- 图版81 第37号住居跡出土遺物
 第55号住居跡出土遺物
- 第80号住居跡出土遺物
 第46号土坑出土遺物
 第01号基壇狀遺構
- 图版82 中世瓦
 图版83 中世鬼瓦 青磁片・四耳壺片 板碑
 图版84 玉類 鈎鎌車 砥石
 图版85 須志器片 土鏃
 图版86 古代瓦 不明土製品
 图版87 鉄製品 鉄滓
 图版88 古銭
 图版89 古銭
 图版90 古銭
 图版91 古銭
 图版92 五輪塔
 图版93 五輪塔
 图版94 五輪塔
 图版95 五輪塔
 图版96 五輪塔
 图版97 五輪塔
 图版98 五輪塔
 图版99 五輪塔
 图版100 五輪塔
 图版101 五輪塔 宝篋印塔
 图版102 漆箱内部狀況 (X線写真)
 图版103 漆箱内部狀況 (X線写真)
 图版104 漆箱第4層 (X線写真)
 漆箱第5層 (X線写真)
 漆箱第6層 (X線写真)
 图版105 漆箱第6層 (X線写真)
 漆箱第7層 (X線写真)
 图版106 金製小型宝塔 X線写真
 銀製小型宝塔 X線写真
 金銅製小型宝塔 X線写真
 图版107 金銅製小型宝塔 X線写真
 銅製小型宝塔 X線写真
 鉄製小型宝塔 X線写真

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、そして「埼玉の新しい92（くに）づくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため様々な施策を講じている。

県民の生活環境の保全と道路交通の安全性を重視し生活圏の拡大への対応、高度化する産業活動の円滑化などを測るための道路網の整備はその一環として展開されている。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、こうした開発事業と文化財の保護について迅速に対応するため、関係各部署、機関と定期的な調整会議のほか、日頃協議を重ね調整を図ってきたところである。

平成3年度に県土木部道路建設課長から美里町広木地内に計画された県道広木野緑線の建設工事予定地における埋蔵文化財の所在及び取扱いについて照会があった。

工事予定地には周知の埋蔵文化財包蔵地「広木上宿遺跡」(遺跡No.56-002)内にあり、現地を踏査したところ、丘陵頂部を中心として多量の縄文土器、土師器などの散布が認められ、この時期の遺構が存在することが明らかであると判断された。このため道路建設課長あて下記の旨回答した。

- 1 工事予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「広木上宿遺跡」が所在する。
- 2 工事計画上、やむを得ず現状を変更する場合は文化財保護法の規定による手続きをとり、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること。

その後の協議で、工事計画の変更が不可能であると判断されたため、平成4年度に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査については財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、道路建設課、文化財保護課の三者で調整し、平成4年4月から12箇月の予定で着手することとし、道路建設課において調査に要する経費が予算措置された。

平成4年度の発掘調査の進行に伴い、遺跡範囲が南北及び東側に拡大することが明らかになったため、平成4年12月11日に拡大する範囲を確認し、埋蔵文化財包蔵地変更増補手続きをとった。美里町教育委員会教育長あて、埋蔵文化財包蔵地調査カード(変更増補)を添えてこの旨通知した。調査対象面積の増加に伴い発掘調査は平成5年度に継続することとなった。

文化財保護法第57条3項の規定による埋蔵文化財発掘通知が平成4年5月6日付け道建第51号で知事から提出され、平成4年5月19日付け教文第3-38号で発掘調査実施についての通知を行った。文化財保護法第57条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から平成4年3月31日付け財理文第956号で提出された。届出に対し文化庁長官から平成4年7月10日付け委保第5の802号で指示通知があった。

平成5年度の調査については平成5年4月1日付け財理文第12号で発掘調査届が提出され、文化庁長官から平成5年6月8日付け委保第5の527号で指示通知があった。

なお、平成5年度調査対象地の中で未買収であった一部の地区の遺構確認調査を平成6年7月29日に実施したが、すでに畑造成のため遺構確認面まで掘削された状態であった。

(埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課)

2. 調査の経過

発掘調査

平成4年4月1日から平成5年12月28日まで実施し、調査面積は8,600㎡である。

平成4年度

調査区北半部の5,000㎡の調査を行った。

プレハブ設置、機材運搬などの発掘準備と平行し、重機による表土除去作業を行った。表土除去作業終了後、順次遺構の調査に着手した。

9月には、金銅製小型宝塔と漆箱が発見され、11月28日に現地説明会を開催した。

3月には航空写真撮影・測量を実施した。

平成4年度の調査では、縄文時代と古墳時代から平安時代の集落跡と中世寺院関連遺構を発掘した。

平成5年度

調査区南半部の3,600㎡の調査を行った。

調査は排土置場等の関連から、便宜的に北側から5A～5D区の4区分けて実施した。用地買収の関係から5D区の調査は行っていない。各区の位置は、5A区が43～49グリッド、5B区が49～59グリッド、5C区が60～66グリッド付近である。

5A区は中世寺院遺構と予想される方形基壇状の高まりが存在していたため、人力によって表土を除去した。方形基壇状部の調査終了後、下層の集落跡の発掘に着手し、8月に航空写真撮影を実施した。

5C区は5A区の集落跡の調査と並行して、重機に

よる表土除去作業を実施した。5A区の調査終了後、順次遺構の調査を行った。

5B区の調査は、5C区の調査終了後、引続いて実施した。12月に5B・5C区の航空写真撮影を行い、調査を終了した。

なお、平成4・5年度の未買収地のうち100㎡については、平成6年度に埼玉県教育委員会が遺構の確認調査を行った。しかし既に削平されており、遺構・遺物は検出されなかった。

整理・報告書刊行

平成7年4月3日から2ヵ年度の計画で実施し、平成8年3月31日に第1分冊を発行した。

4月から6月にかけては、出土遺物の水洗・注記および接合・復元を行った。これと並行して小型宝塔と小型未開敷蓮華の実測及び写真撮影並びに図面・写真整理を実施した。

小型宝塔と小型未開敷蓮華は6月20日から開催された『新発見考古速報展'95』(文化庁主催)に、出品した。

7月から11月には、遺構の岡面のトレース・版組と遺物の実測・トレース、また11月には遺物の版組も並行して行った。

12月から1月にかけて、遺物の写真撮影、原稿執筆・割付の作成を行った。入稿後校正作業を行い、3月に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査

平成4年度

理 事 長	荒 井 修 二
副 理 事 長	早 川 智 明
常務理事兼管理部長	倉 持 悦 夫
理事兼調査部長	栗 原 文 藏
管 理 部	
庶 務 課 長	萩 原 和 夫
主 査	賛 田 清
主 事	菊 池 久
経 理 課 長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 事	長 瀧 美智子
主 事	福 田 昭 美
主 事	腰 塚 雄 二
調 査 部	
調 査 部 副 部 長	梅 沢 太 久 夫
調 査 第 三 課 長	鈴 木 敏 昭
主 任 調 査 員	今 井 宏
主 任 調 査 員	西 口 正 純
調 査 員	田 中 広 明

平成5年度

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	富 田 真 也
専 務 理 事	横 川 好 富
常務理事兼管理部長	柴 崎 光 生
理事兼調査部長	中 島 利 治
管 理 部	
庶 務 課 長	萩 原 和 夫
主 査	賛 田 清
主 事	菊 池 久
経 理 課 長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 事	長 瀧 美智子
主 事	福 田 昭 美
主 事	腰 塚 雄 二
調 査 部	
調 査 部 副 部 長	高 橋 一 夫
調 査 第 三 課 長	村 田 健 二
主 任 調 査 員	石 坂 俊 郎
調 査 員	山 本 靖

(2) 整理・報告書刊行

平成7年度

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	富 田 真 也
専 務 理 事	古 川 國 男
常務理事兼管理部長	新 井 秀 直
理事兼調査部長	小 川 良 祐
管 理 部	
庶 務 課 長	及 川 孝 之
主 査	市 川 有 三
主 任	長 瀧 美 智 子
主 事	菊 池 久
専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二
資 料 部	
資 料 部 長	塩 野 博
主幹兼資料部副部长 兼資料整理第1課長	谷 井 彪
主 任 調 査 員	山 本 靖

(3) 広木上宿遺跡出土宝器検討委員会

平成7年度

委 員	
埼玉県文化財保護審議委員	柳 田 敏 司
埼玉県文化財保護審議委員	鈴 木 友 也
帝塚山大学教授	河 田 貞
東京芸術大学教授	中 野 政 樹
東京国立博物館考古課長	安 藤 孝 一
東京国立博物館金工室長	原 田 一 敏
東京国立博物館考古課	時 枝 務
財団法人埼玉県埋蔵文化財 調査事業団理事兼調査部長	小 川 良 祐
事 務 局	
財団法人埼玉県埋蔵文化財 調査事業団資料部長	塩 野 博
主幹兼資料部副部长兼 資料整理第一課長	谷 井 彪
主 任 調 査 員	山 本 靖
調 査 員	野 中 仁

II 遺跡の立地と環境

広木上宿遺跡は埼玉県児玉郡美里町大字広木字上宿に所在し、JR八高線松久駅の西方約2.5kmに位置している。東経約139°09'20"、北緯約36°10'08"付近である。

美里町の地形は南から北に向かって、標高150m以上の山地帯、標高100～150mの丘陵地帯、標高100m以下の低地帯へと続いている（第2図）。

山地帯は、秩父山地・上武山地の山脚が北東方向へ延びている。丘陵地帯は、町の東部を北東方向に諏訪山・山崎山へと続き、北西部は生野山から浅見山にかけて延びている。また低地帯は丘陵地帯に囲まれた、盆地状に形成されている。現在、丘陵部には畑地や桑畑が、低地部には水田が広がっている。

河川は、利根川水系に含まれる小山川、志戸川、天神川やこれらの支流が、町内を南西から北東方向へと流れている。これらの河川によって丘陵部が開析され、丘陵と扇状地が入り組んだ複雑な地形をしている。

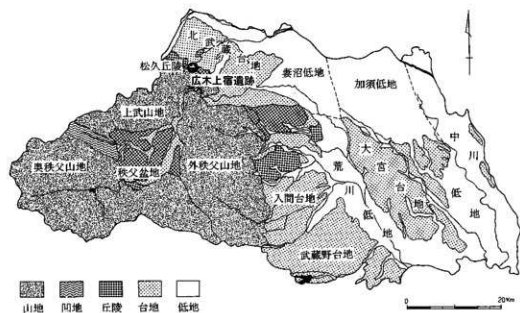
町内には数多くの池沼が存在し、その多くは灌漑用として人工的に造られたものである。なかでも広木上宿遺跡の北東約500mにある摩訶池は、伝説から奈良時代には既にあったものと考えられている。

広木上宿遺跡は上武山地から続く松久丘陵西端の、「トネ山」と呼ばれる一支丘上に立地している。この支丘は北側を身馴川（小山川）、南側を志戸川によって開析され、西から東へと下降しながら延びる瘦せ尾根状のものである。

広木上宿遺跡の周辺には、河川によって開析された丘陵と扇状地が入り組んだ複雑な地形を背景にして、数多くの遺跡が営まれていた（第3図）。

旧石器時代の遺跡は、本格的な発掘例がない。甘粕山遺跡群（39・甘粕）の東山遺跡、如来堂A・B遺跡や西山遺跡（猪俣）から、発掘調査に伴って遺物が採集されている（横川他1980・美里町1986）。

第1図 埼玉県の地形区分



縄文時代の遺跡については縄文時代編で述べるが、中期段階では遺物の散布状況に比べて、遺跡自体の発掘例は少ないという傾向が窺える。これに対し、広木上宿遺跡では中期の集落跡が発見されており、この地域では特異な遺跡としてあげられる。

弥生時代の遺跡として、前期後半では如来堂C遺跡、中期では須和田式土器を出した村後遺跡(8・小茂田)や、環濠集落が発見された神明ヶ谷戸遺跡(41・中里)がある(細田他1984・坂本1980)。

弥生時代後期には、櫛歯文系土器と舌ヶ谷式土器の分布が混在する複雑な様相を示し、塚本山古墳群内遺跡(A・下見玉)や神明ヶ谷戸遺跡があげられる(増田他1977)。

児玉郡地域には、出現期の古墳が集中している。そのため、埼玉県域における古墳文化の解明には、絶対に無視できない地域である。

まず、児玉郡地域における出現期古墳の理解に先だって注目されるのが、いわゆる「前方後方形周溝墓」の存在である。現在までに4基発見されている。塚本山古墳群では14号墓・33号墓の2基、また村後遺跡でも1基調査されている。これら3基はいずれも小規模なものである。

その一方で、前方後方墳と見間違えような南志渡川遺跡4号墓(30・駒衣)がある。これは発見されている9基の方形周溝墓群中の1墳墓であり、「前方後方墳」とはいえない。全長25mの規模で、周溝は前方部前面では幅がきわめて狭く、また前方部南西隅で途切れている。有段I緑帯をはじめ東海系パレス壺等が出土し、4世紀中頃に位置づけられている(美里町1986)。同形態として、岡部町石碓B遺跡8号墓があげられる(佐藤1979、佐藤・斎藤1978)。

これらの前方後方周溝墓と併行して、前方後方墳の児玉町鷲山古墳も築造されている。規模は全長58mで、前方後方形周溝墓を凌駕する規模である。前方部はバチ形に開く形態で、時期は出土遺物から4世紀中頃と考えられている(埼玉県史編さん室1986)。

鷲山古墳と南志渡川遺跡4号墓の規模の差は歴然と

しているが、その一方で、築造企画に共通性が認められている。このように古墳出現期においては、築造企画を同じくする墳墓であっても、独立古墳として築造できた首長と、集団墓域内に築かざるを得なかった首長の存在を知ることができる。

古墳時代前半期における児玉地域の首長墓の変遷は、前方後方墳から円墳へと移行している。この時期の関東地方の首長墓が、前方後方墳から前方後円墳へと移行する情勢とは異なっている。

鷲山古墳に続く首長墓として、長坂型天塚古墳(関)があげられる。径50mの円墳で、埋葬施設が6基検出されている。時期は4世紀後半から5世紀初頭に比定される(菅谷1974、菅谷・坂本1975)。

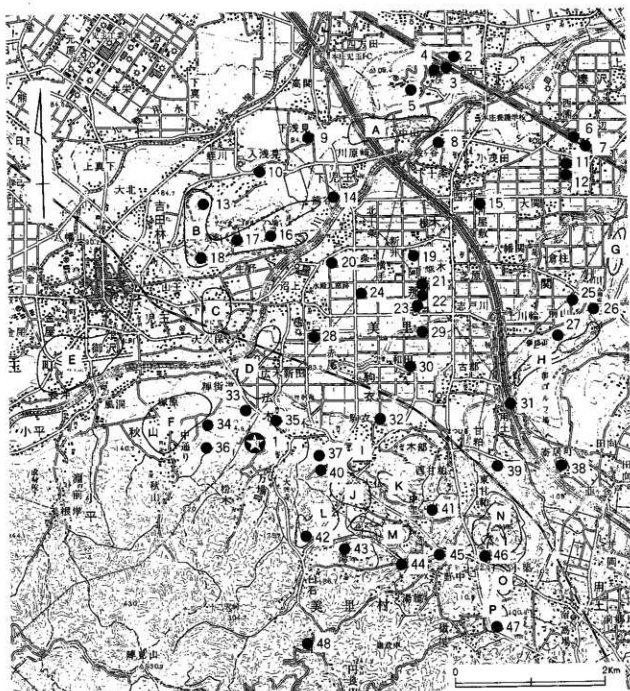
長坂型天塚古墳に続く、川輪型天塚古墳(26・関)、児玉町金鑽神社古墳(円墳・径68m)、木止市公卿塚古墳(円墳・径65m)、児玉町牛野山將軍塚古墳(円墳・径約62m)では、特異な遺物が発見されている。川輪型天塚古墳は5世紀前半の径38m程の円墳で、墳丘からは壘形埴輪が出土している(金谷1957、塩野1973)。また金鑽神社古墳、公卿塚古墳、生野山將軍塚古墳からは、格子目タタキによって調整された埴輪が出土している(埼玉県史編さん室1986、柳田1963・1964、菅谷1970、太田他1991)。このような遺物の出土も、この地域の古墳の特徴といえる。

5世紀後半以降になると、この地域にも前方後円墳が築造される。これと併行して、数多くの古墳群も形成されている。これらの古墳群は小円墳を主体とした、大規模な群集墳である。また古墳群中にも、前方後円墳が築かれている。

広木上宿遺跡の北方約500mの地点に展開する広木大町古墳群・後山王古墳群(D・広木)では、既に前方後円墳7基を含む130基に及ぶ古墳が調査・確認されている(菅谷・笹森1975、小淵1980)。

埴輪は、5世紀後半から6世紀代の古墳の多くに樹立されている。なかでも志ノ川古墳では、外面調整にいわゆるB種ヨコハケが施された円筒埴輪が出土している(美里町1986)。

第3図 周辺の遺跡



1. 広木上宿遺跡 2. 右勝寺北裏遺跡 3. 前山1号墳 4. 前山2号墳 5. 大久保山遺跡 6. 東光寺裏遺跡 7. 伊勢塚遺跡
 8. 村後遺跡 9. 鷺山古墳 10. 金腰神社古墳 11. 石町遺跡 12. 地神稲遺跡 13. 生野山鏡子塚古墳 14. 宮ヶ谷遺跡
 15. 日の高遺跡 16. 生野山16号墳 17. 生野山將軍塚古墳 18. 生野山物見塚古墳 19. 堂山古墳 20. 樋之口遺跡 21. 向屋遺跡
 22. 勝丸稲荷神社古墳 23. 道灌山古墳 24. 鳥森遺跡 25. 石神遺跡 26. 川輪聖天塚古墳 27. 長坂聖天塚古墳 28. 宮下遺跡
 29. 志渡川遺跡 30. 南志渡川遺跡 31. 安光寺遺跡 32. 北貝戸遺跡 33. 諏訪平遺跡 34. 秋山麻訪山古墳 35. 飯倉神社遺跡
 36. 秋山東遺跡 37. 宇佐久保塚輪家跡群 38. 用土平遺跡 39. 甘粕山遺跡群 40. 宇佐久保遺跡 41. 神明ヶ谷戸遺跡 42. 野所遺跡
 43. 白石城 44. 峯遺跡 45. こまヶ谷戸祭祀遺跡 46. 善門寺西山遺跡 47. 一本松古墳 48. 栗山遺跡
- A. 塚本山古墳群 B. 生野山古墳群 C. 下町・大久保山古墳群 D. 広木大町古墳群 E. 長沖古墳群 F. 秋山古墳群 G. 西山古墳群
 H. 諏訪山古墳群 I. 駒衣古墳群 J. 大仏古墳群 K. 中里古墳群 L. 白石古墳群 M. 羽黒山古墳群 N. 善門寺古墳群
 O. 猪俣北古墳群 P. 猪俣南古墳群

この時期の埴輪は、窯室によって焼成されたものである。宇佐久保埴輪窯跡群(37・広木)では、12基の埴輪窯が分布調査によって確認されている(本庄高校考古学部1981)。周辺地域にも本庄市赤坂埴輪窯跡・宍勝寺北裏埴輪窯跡群、児玉町八幡山埴輪窯跡群・蛭川埴輪窯跡群が知られている(本庄市1976、佐々木他1980、後藤1934、児玉高校1961)。これらの埴輪窯の供給関係については明確ではないが、当然、地元の埴輪需要にも応じていたものと考えられる。

このような数多くの古墳・古墳群の造営は、古墳時代の集落の飛躍的な増大を背景にしている。

古墳時代前期の集落跡として、志渡川遺跡(29・駒衣)、日の森遺跡(15・阿那志)、北貝戸遺跡(32・駒衣)、村後遺跡等があげられる(埼玉県1982)。志渡川遺跡第3号住居跡からは、東海地方・北陸地方の影響を受けた土器が出土している(美里町1986)。また日の森遺跡第1溝には、大量の土器が投棄されていた(菅谷他1978)。

古墳時代中期の集落跡は、樋之口遺跡(20・沼上)、如來堂C遺跡、北谷戸遺跡(木部)等がある。北谷戸遺跡第5号住居跡には、早くもカマドが設置されている(美里町1986)。日の森遺跡第3溝は5世紀前半の農業灌溉用水で、矢板列等の護岸工事の痕跡が確認されている。

古墳時代後期の集落跡は、後山王遺跡、樋之口遺跡、瓠藪神社前遺跡(35・広木)、宇佐久保遺跡(40・白石)等があげられる。宇佐久保遺跡では、比企型埴輪の出土が目される(中村1979)。

瓠藪神社前遺跡は、広木上宿遺跡が立地する支庁の先端部に所在している。古墳時代から平安時代の住居跡が、33軒ほど調査されている。このうち6軒の住居跡から埴輪が出土し、特に第14号住居跡の出土量は多い。埴輪は器形や調整の特徴から、6世紀後葉のものである(磯崎・中村1980)。広木上宿遺跡でも遺構に伴わない6世紀代の埴輪片が出土している。このように、両遺跡には共通点が多い。

児玉郡地域の古墳時代集落跡では、田辺稲年

MT15・TK10型式併行および陶色編年第II期頃までの古式須恵器が多く出土している。甕・坏等の供膳形態が中心の器種から、集落内祭祀の祭器としての機能と考えられている(駒宮他1987)。

瓠藪神社前遺跡では第3号住居跡からMT15型式併行の無蓋高坏、第18号住居跡からはTK47-MT15型式併行の坏身が出土している。無蓋高坏は三方透かしの脚部であるが、欠損している。けれども、欠損部が研磨され、坏として再利用されている。

樋之口遺跡では第8号住居跡からは坏蓋2点、第9号住居跡からはTK47型式併行の坏身、第10号住居跡からはいわゆる釜形土器が出土している。第8号住居跡では、和泉期末から鬼高期初頭の土師器と供伴している。坏蓋の1点はTK208型式古段階併行のもので、もう一方はTK47型式に類似するがMT15型式まで降る可能性が持たれている。第10号住居跡の釜形土器はTK73型式や東海地方の初期須恵器に類例がみられるもので、この地域最古の一例である。供伴した土師器は、和泉期のものである。

前畑遺跡(北10条)では、TK47-MT15型式併行の坏身が採集されている。

村後B遺跡では第2号住居跡から釜形と甕、第10号住居跡から坏蓋、第2溝から甕が出土している。第2号住居跡では和泉期の土師器と供伴し、釜形がTK73併行、甕はTK216-TK208型式古段階と考えられている。第10号住居跡も和泉期の土師器と供伴し、坏蓋はTK216型式併行とされている。第2号溝の甕はTK208古段階併行と考えられている。

宇佐久保遺跡では、TK10型式以降の坏身・坏蓋・提瓶・甕・壺・甕が出土している。

広木上宿遺跡でも、第55号住居跡からTK10型式併行と考えられる坏蓋・坏身が出土している。

このようにカマドの早期導入と、古式須恵器出土遺構の集中が、この地域の古墳時代集落の特徴としてあげられる。この地域が北側に接する毛野地域の影響を受け続け、また毛野地域へ向う東山道ルートによって畿内先進地方の文化をいち早く受容することができた

という地理的条件によるところが大きい。

このほかに、向居遺跡(21・根木)と、こぶヶ谷戸祭祀遺跡(45・猪俣)は、特筆される遺跡である。

向居遺跡の第1号溝跡は、五領期から鬼高二期まで機能していたもので、覆土の断面観察から3期におよぶ変遷が確認されている。溝跡の性格については、祭祀遺物の出土、溝跡と平行する2列の櫛列(ビット列)、溝跡の走向上の隣接地の試掘調査では溝跡が発見されていないこと、40m級の古墳が南方100mに所在することから、古墳時代の豪族居館の堀跡と考えられている(岡本1987)。

こぶヶ谷戸祭祀遺跡は天神川上流の「こぶ石」と呼ばれる巨石を中心に行っていたもので、巨石・水源を祭祀の対象としていたと考えられる。遺物は手捏土器や石製模造品が出土し、5世紀から6世紀前半に比定されている(小沢1960)。また北方500mの地点にも亀甲山祭祀跡や岡部町今泉祭祀遺跡が所在し、祭祀遺跡が集中している。

奈良・平安時代の遺跡は、如来堂A・B・D遺跡・東山遺跡・上耕地遺跡(古郡)・烏森遺跡(24・沼上)・北貝戸遺跡・北谷戸遺跡・下道場遺跡(駒衣)・石神遺跡(25・石)・畑中遺跡(木部)・瓊蕨神社前遺跡・宮下遺跡(28・沼上)・向田遺跡(小茂田)などがあげられる。このほかに延喜式内社の瓊蕨神社(広木)が、広木上宿遺跡が立地する支丘の先端部に所在している。

東山遺跡では2×3間、1×2間の掘立柱建物跡に伴って、重要文化財に指定された瓦塔・瓦堂が発見されている。これは伴出遺物から、9世紀代のもものと推定されている(横川他1980)。

瓦塔は、大仏庵寺(大仏)や児玉町寺山庵寺からも発見されている。大仏庵寺は出土した瓦から、8世紀後半代の早い時期に創建されたものと推定されている(埼玉県史編さん室1982)。

烏森遺跡は、県指定史跡として知られる十条糸里遺跡(北十条)の範囲内に位置している。検出された溝跡は、地図上で復原される糸里遺構とほぼ合致してい

る。注目される遺物として丸瓶があり、丸瓶は北谷戸遺跡でも発見されている(菅谷・岡本1980、埼玉県1982)。

如来堂D遺跡では、出土遺物から操業時期が8世紀後半と推定されている。炭焼き窯が検出されている(横川1980)。宮下遺跡ではカマドのみの遺構が3基検出され、第1号カマド内から元豊通寶が出土している。また第2号土坑からは、開元通寶が発見されている(菅谷他1976)。

広木上宿遺跡の南東に接して、万葉集巻20の防人歌に由来する、奈良時代の弘礼郷の豪族捨前舍人石前の屋敷跡推定地(広木)が所在する。また史跡跡井(広木)も、万葉の遺跡として知られている(美里町1986)。

平安末から中世にかけては、武士団武蔵七党が組織・活躍した時期である。このうち猪俣党は猪俣を根拠地として繁栄した有力な党で、猪俣城をはじめとして、これに関連する館跡や城が残されている。

鎌倉時代の幹線道路として、いわゆる鎌倉街道がある。美里町には、寄居町用土から美里に入り、大仏、広木を経由して児玉町から群馬県藤岡市に至る上道本道が走っている。広木上宿遺跡周辺では、立地する支丘先端付近を通っている。

鎌倉時代の遺跡として著名なのは、国指定史跡の水殿瓦窯跡(沼上)である。この窯では、鎌倉市永福寺の寛元・宝治年間(1234～1248)の修理の際に供給していたことが確認されている。窯跡の形態は有林式平窯で、構造的な系譜は京都洛北の栗栖野瓦窯跡に求められるとの考察がされている(丸山1990、小林1989)。美里町周辺では、本庄市早稲田大学本庄校地内遺跡浅見山地区でも、鎌倉時代の瓦窯が発見されている(小林1989)。

このように美里町の遺跡を概観すると、その発展の背景には、陸上交通による地理的条件があげられる。古墳時代から古代には東山道ルート、中世には鎌倉街道といった幹線道路を伝って、多くの文化がもたらされたことが窺われる。

III 遺跡の概要

広木上宿遺跡は埼玉県児玉郡美里町大字広木上宿2988番地他に所在し、JR八高線松久駅の西方約2.5kmに位置している。東経約139°09'20"、北緯約36°10'08"付近である。

遺跡の範囲は、南北約190m、東西約80mである。西から東に張り出す複せ尾根状の支丘を、南北に横切るように所在している。平成4年4月から平成5年12月まで調査した面積は、約8,600㎡である。調査区は、遺跡のほぼ中央部を南北方向に縦断する。

調査区の地形は、40～50グリッド付近が尾根の頂部にあたる。北側は、身馴川(小山川)によって開削された低地部へと下る緩斜面である。南側も緩斜面を下り、さらに比高差約4mの崖を経由して緩やかな傾斜をもつ平坦面に至る。再び比高差約1m程の段を経由して、平坦面が約45mほど続き志戸川に至る。

発掘調査によって発見された遺構は、住居跡88軒、掘立柱建物跡11棟、基壇状遺構1基、配石遺構1基、土坑165基、溝跡25条、井戸跡1基、埋甕1基、ピット多数である。時期は、縄文時代から中・近世にいたるものである。

縄文時代の遺構は、調査区北半の緩斜面部に発見されている。中期後半の加曾利EⅡ式期を中心とする環状集落の西端部と推定される住居跡群を検出した。住居跡18軒、土坑12基、埋甕1基が認められ、縄文土器、土鈴、打製石斧、石鎌などが出土した。なお、縄文時代の遺構・遺物にかかる報告は平成8年度に予定されている。

古墳時代の遺構は調査区のほぼ全面で、奈良・平安

時代の遺構は尾根頂部から南緩斜面に発見された。特に南端の平坦面には、平安時代の遺構が集中していた。遺構は住居跡70軒、掘立柱建物跡3棟、井戸跡1基が検出された。遺物は土師器・須恵器をはじめとして、鉄器・玉類・土鎌・瓦などが出土した。

中世の遺構は尾根頂部付近に集中している。小型宝塔と小型未開敷蓮華を出土した第48号土坑をはじめとして、基壇状遺構1基、掘立柱建物跡8棟、溝跡10条が発見された。これらの遺構は、すべて軸を描えて配置され、ほぼ方位と平行する。遺物は瓦、かわらけ、板碑、古銭などが出土した。瓦には、巴文軒丸瓦や剣頭文・唐草文軒平瓦も含まれ、小型宝塔・小型未開敷蓮華の年代推定の手がかりとなる。

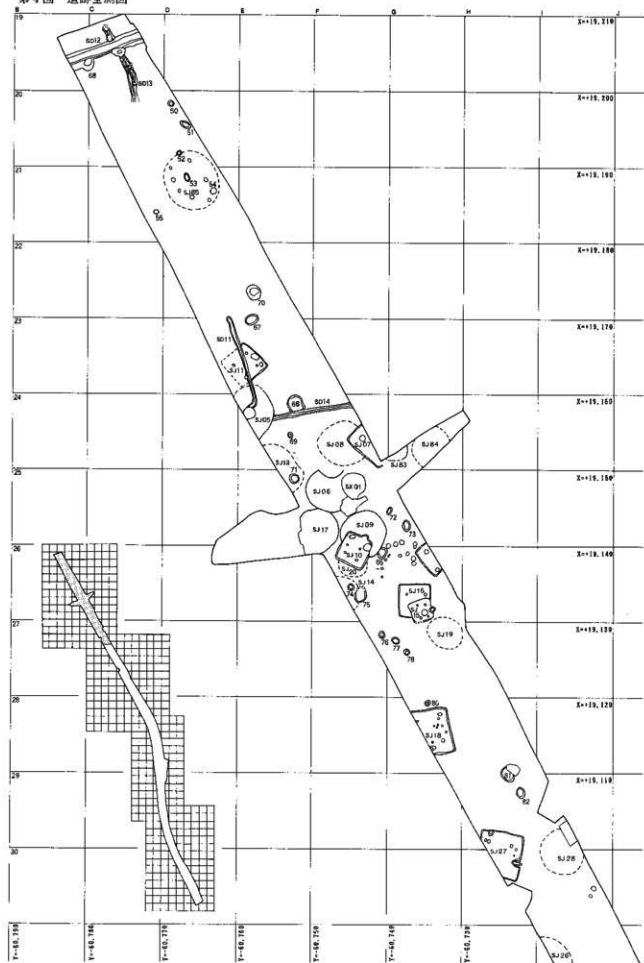
尾根頂部から南側の46～60グリッドにかけて、調査前には基壇状遺構の存在を予想させる、方形土壇状や階段状の現況が認められた。人力による確認調査を実施したが、断面観察では版築や人為的な土盛りを行った形跡を認めることができなかった。また中世寺院を区画する溝と考えられる第15号溝跡が中央を貫き、ほかには寺院に関わるような、掘立柱建物跡などの遺構は検出されなかった。

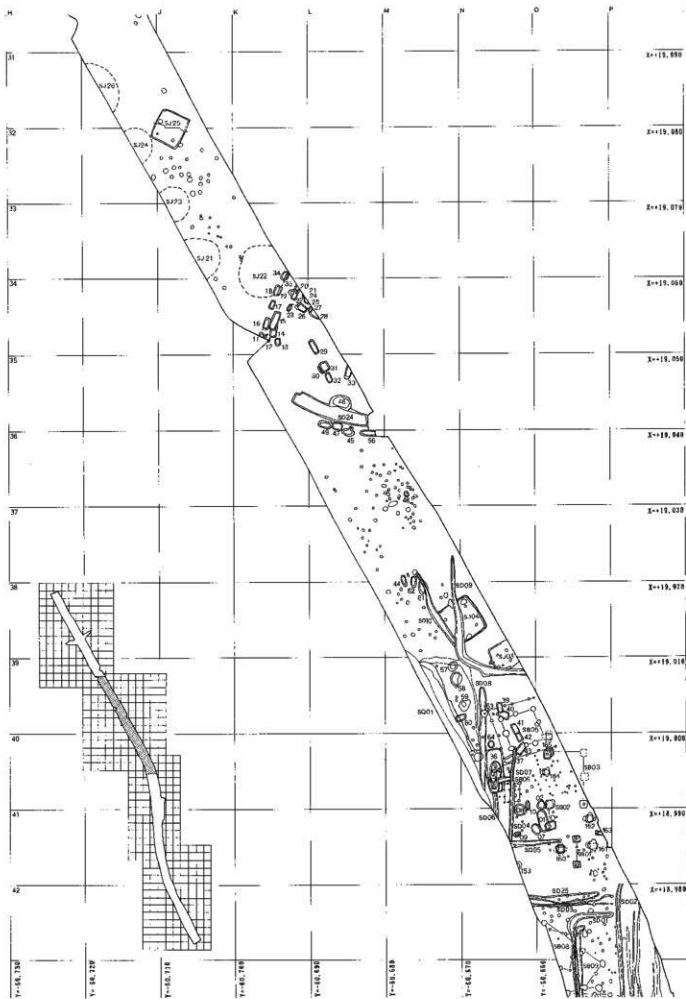
近世の遺構は、土壇墓8基と貯蔵用施設6基が発見された。土壇墓からは、柄鍔や煙管などの副葬品が出土した。

ほかの土坑141基、溝跡15条については、時期を確定する資料に欠ける。

本報告は、古代・中世編として古墳時代以降の遺構と遺物について行う。

第4図 遺跡全測図





X=19, 880

X=19, 880

X=19, 878

X=19, 868

X=19, 858

X=19, 848

X=19, 838

X=19, 828

X=19, 818

X=19, 808

X=19, 798

X=19, 788

Y=48, 730

Y=48, 728

Y=48, 718

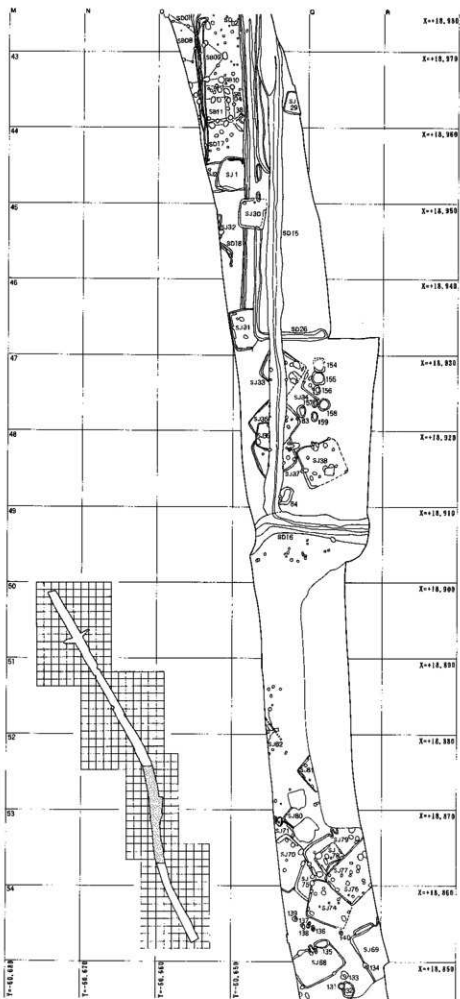
Y=48, 708

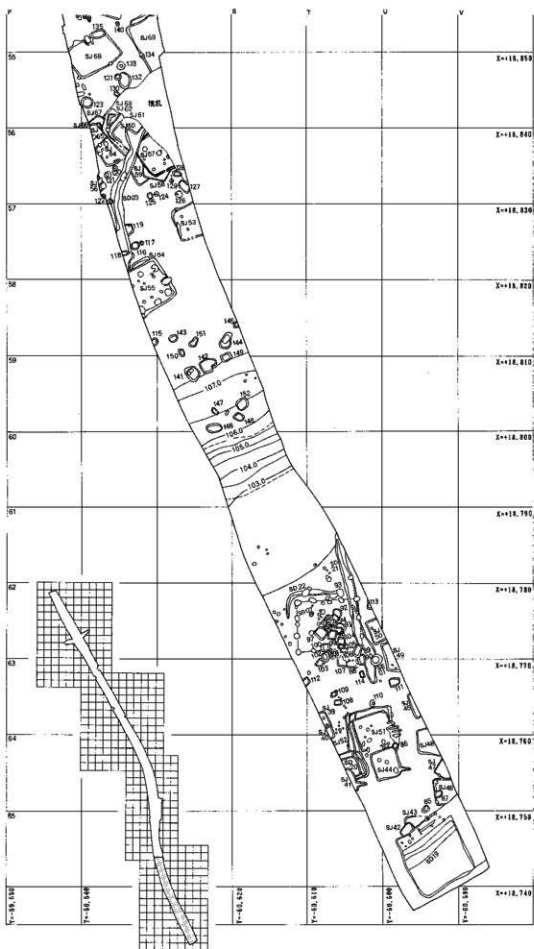
Y=48, 698

Y=48, 688

Y=48, 678

Y=48, 668





0 10m

第5図 遺跡周辺の地形



IV 遺構と遺物

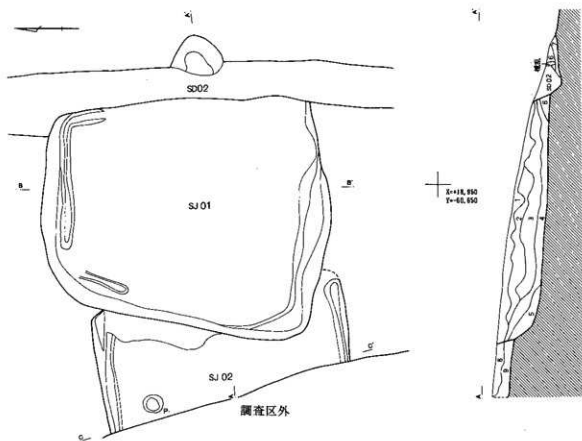
1. 住居跡

第01号住居跡 (第6図)

O-44・P-44グリッドに位置し、重複関係は、第02号住居跡より新しく、第02号溝跡よりも古い。

平面形態は台形で、カマドは東壁部に中央に設置されている。南北幅4.58m、深さは深いところで0.62mで、主軸方向はN-96°-Eである。埋没状況は自

第6図 第01・02号住居跡

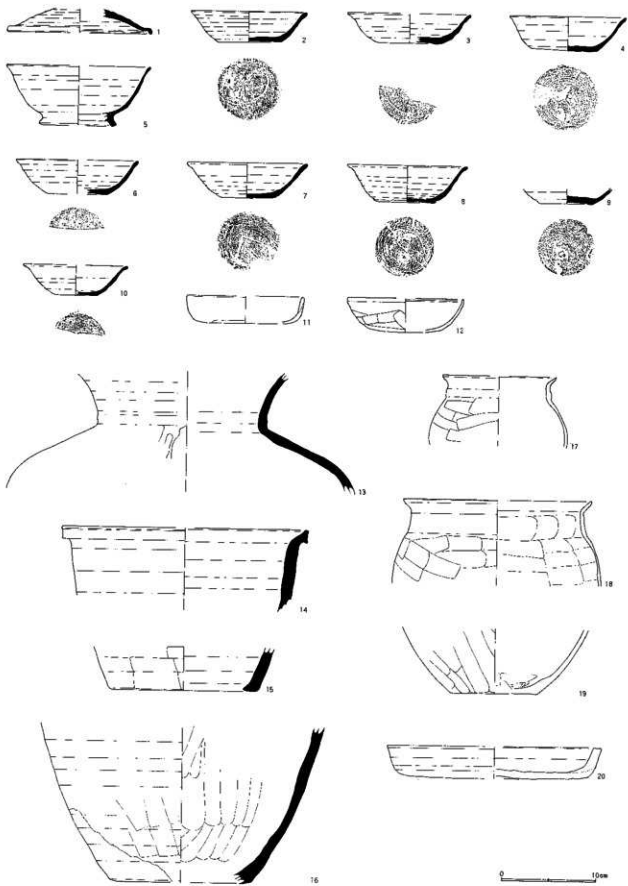


第01・02号住居跡

- | | | |
|---------|------------------------------|-----|
| 1 明茶褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子微量 | 浅間A |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量 | |
| 3 暗褐色土 | 粘性あり ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量 | |
| 4 黒褐色土 | 粘性あり ローム粒子・焼土粒子微量
炭化物粒子少量 | |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子多量 炭化物粒子少量 | |
| 6 暗褐色土 | カマド覆土 焼土粒子多量 | |
| 7 暗茶褐色土 | カマド覆土 焼土粒子・炭化物粒子やや多量 | |
| 8 黒褐色土 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量 | |
| 9 黒褐色土 | ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量 | |

0 1m

第7图 第01号住居跡出土遺物



第8図 第02号住居跡出土遺物



第01号住居跡出土遺物 (第7図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(15.3)	(2.5)		WB	B	灰白	15	
2	坏	12.1	3.2	6.6	WR片	C	褐灰	80	床直 竈部付近の焼成不良
3	坏	(13.0)	(3.1)	(6.9)	WB	B	黄灰	30	貼床下
4	坏	12.3	3.1	6.9	WR片	A	灰	80	
5	高台付碗	(15.2)	(6.3)	(8.2)	W片	B	灰白	30	
6	坏	(12.4)	(3.6)	(6.6)	WR	A	黄灰	25	貼床下
7	坏	12.5	3.7	5.7	WB片	B	灰黄褐	85	床直
8	坏	12.7	3.9	6.4	WB	B	灰	70	ロクロ基台部の残痕
9	坏		(1.6)	(6.0)	WR片	B	黄灰	40	貼床下 ロクロ基台部の残痕
10	坏	(11.1)	(3.2)	(4.7)	W	A	黄灰	20	床直
11	坏	(12.3)	(2.9)		WBR	B	橙	15	
12	坏	(12.2)	(3.6)		WBR	B	明赤褐	30	
13	甗		(12.5)		WB片	B	灰	10	自然釉の付着
14	甗	(26.0)	(8.6)		W	A	灰	10	
15	甗		(4.6)	(16.0)	WBR片	B	灰オリーブ	10	
16	甗		(16.5)	(15.0)	W片	B	褐灰	15	自然釉の付着
17	台付甗	(12.0)	(7.3)		WBR	B	暗赤褐	20	
18	甗	(20.0)	(8.9)		WBR	B	橙	15	
19	甗		(6.8)	(9.2)	W片	B	暗赤褐	5	床直
20	甗	(22.6)	(3.4)	(19.8)	WB	A	にぶい赤褐	30	中世陶器

第02号住居跡出土遺物 (第8図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.3)	(4.6)		WBR	B	明赤褐	25	第01号住居跡に流れ込み
2	甗	(18.3)	(5.1)		WB	C	灰褐	5	

然堆積で、斜面部の上方から下方へ埋没していた状況を看取することができた。

カマドは第02号溝跡に切られているため、燃焼部の底部が確認されたのみである。柱穴は確認されなかった。壁溝は北東コーナー部から北西コーナー部にかけて巡っているが、一部途切れている。幅0.20m、深さ0.10mである。南壁に沿ってテラス状の施設が確認されている。

出土遺物は、土師器・須恵器で、時期は、出土遺物等より平安時代に比定される。

第02号住居跡 (第6図)

O-44グリッドに位置し、西半部は調査区外である。

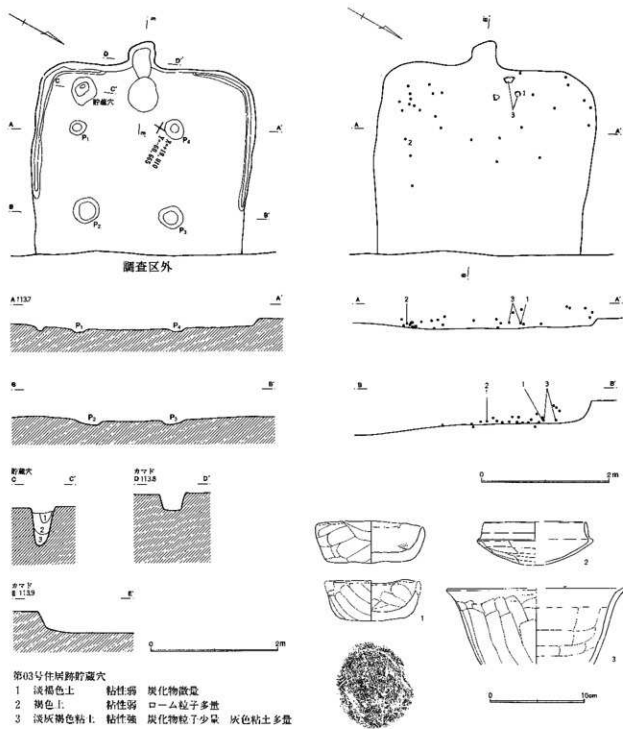
第01号住居跡と重複し、東壁が切られている。

平面形態は方形で、カマドは検出されていない。南北幅4.02m、深さ0.26mで、主軸方向はN-80°-Eを測る。埋没状況は自然堆積である。

壁溝は北壁と南壁に沿って巡り、幅0.22m、深さ0.03mである。確認されたピットは1本のみである。

遺物は少なく、土師器の坏・甗のほかは土釜3点が出土している。時期は、出土遺物等より古墳時代後期に比定される。

第9図 第03号住居跡・出土遺物



第03号住居跡出土遺物 (第9図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎	I:	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坑	11.0	4.4	9.0	WB	B	明褐色	90	底部木炭痕	
2	坏	(10.8)	(4.5)		W	B	黒褐色	40		
3	甌	(18.8)	(8.0)		WBR	B	明赤褐色	20		

第03号住居跡 (第9図)

N-38・39グリッドに位置し、東壁付近は調査区外である。第09号溝跡と重複し、南西コーナー部が切られている。

平面形態は方形で、カマドは西壁中央に設置されている。遺構の残存状態はきわめて悪い。深いところでも0.16mを測るにすぎず、東壁付近では壁の立上がりは認められない。幅3.47mで、主軸長はこれよりも長い。主軸方向はN-116°-Wである。

カマドは燃焼部のみが確認されているにすぎず、袖部などの施設については不明である。貯蔵穴はカマド左側の南西コーナー部に位置し、南北0.39m、東西0.44m、深さ約0.60mの平面円形のものであった。壁溝は北壁中央から南壁中央まで巡っているが、カマドの両脇部には見られなかった。ピットは4本で、いずれも主柱穴と思われるが、床面からの深さはたいへん浅い。

遺物は遺構の残存状態に比例して少なく、多くは西壁付近から出上している。時期は、出土遺物より古墳時代後期に比定される。

第04号住居跡 (第10・11・12図)

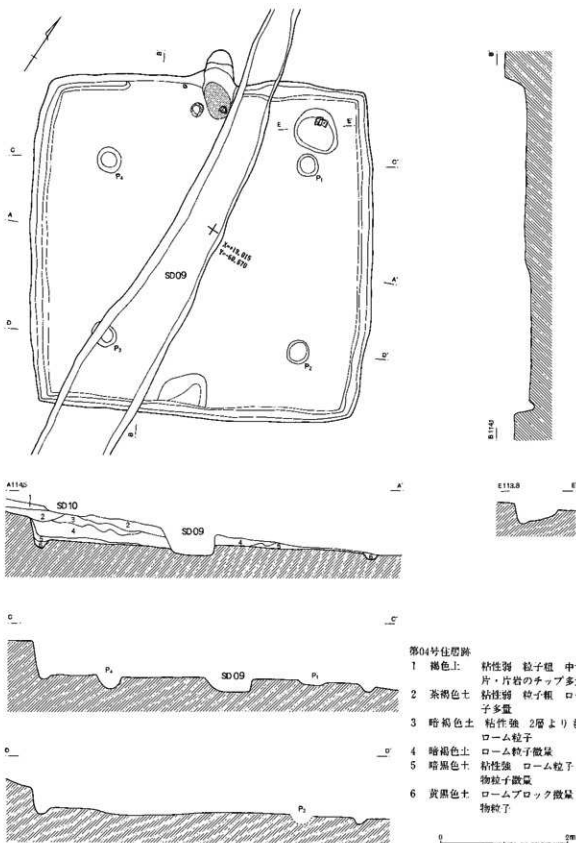
M-38・N-38グリッドに位置し、第09・10号溝跡に切られている。平面形態は方形で、カマドは北壁中央に設置されている。主軸長5.11m×南北幅5.44m×深さ0.77mで、主軸方向はN-59°-Wである。埋没状況は自然堆積で、斜面部の上方から下方へ埋没していった状況を看取することができた。

カマドは燃焼部・煙道部が確認され、袖部等は不明である。燃焼部床面はよく焼け、焼上化していた。貯蔵穴はカマドの西側の、北東コーナー部に位置している。平面形態は不整形で、東西0.74m、南北0.66m、深さ0.33mで、底面は東から西へ傾斜している。壁溝は幅0.2m、深さ0.14mの溝がほぼ全周するが、北壁のカマド西側には巡っていない。ピットは4本で、いずれも主柱穴と思われるが、床面からの深さは浅い。

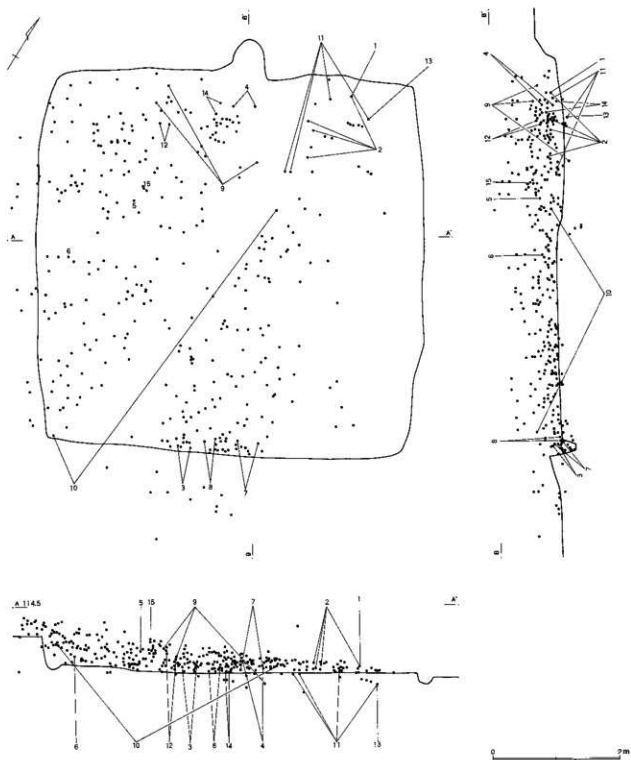
南壁の中央付近のカマドと対向する位置に、出入口施設が確認され、床面が隆起していた。

遺物は土師器のほか、石製紡錘車3点が出上している。また中世の瓦等の遺物も多く、第01号基壇状遺構と関連する資料と考えられる。時期は、出土遺物等より7世紀末～8世紀初頭に比定される。

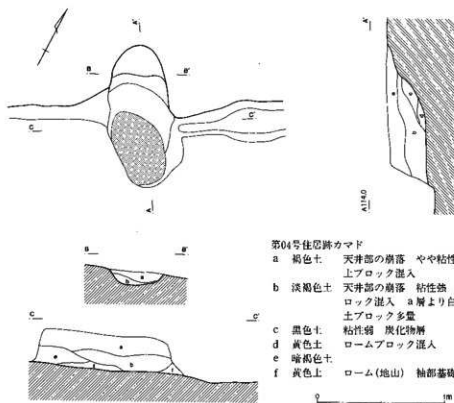
第10図 第04号住居跡



第11图 第04号住居跡出土状況



第12図 第04号住居跡カマド



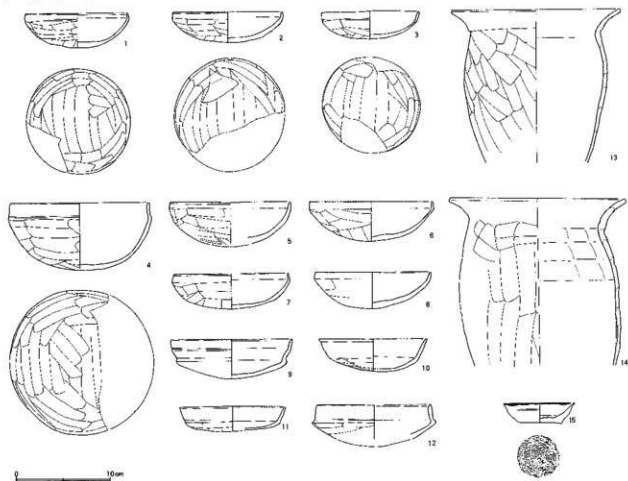
第04号住居跡カマド

- a 褐色土 天井部の崩落 やや粘性強 炭化物粒子・白色粘土ブロック混入
- b 淡褐色土 天井部の崩落 粘性強 炭化物粒子・白色粘土ブロック混入 a層より白色粘土ブロック多量 焼土ブロック多量
- c 黒色土 粘性弱 炭化物層
- d 黄色土 ロームブロック混入
- e 暗褐色土
- f 黄色土上 ローム(地山) 袖部基礎の残痕

第04号住居跡出土遺物 (第13図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	10.8	3.6		B	B	明赤褐色	85	
2	坏	11.6	3.2		WB	B	橙	60	風化著しい
3	坏	10.3	3.0		WB	B	橙	70	
4	鉢	14.6	7.1		WB	B	橙	65	カマド付近 風化著しい
5	坏	(12.8)	(4.4)		WB	A	にぶい橙	20	風化
6	坏	13.0	4.2		WB	B	橙	60	内面風化剥落
7	坏	(12.1)	3.7		WB	B	橙	45	床直 内面風化剥落
8	坏	12.1	3.9		WB	B	橙	60	床直 内外面風化剥落
9	坏	12.9	4.1		WB	B	橙	95	床直 風化剥落著しい
10	坏	11.4	3.0		WB	B	橙	60	内面風化剥落著しい
11	坏	11.2	(2.6)		WB	B	橙	50	床直
12	坏	(12.0)	(3.6)		B	B	橙	30	内外面風化剥落著しい
13	甕	17.8	(16.1)		WB	C	にぶい黄橙	50	床直 内面風化剥落
14	甕	18.3	(17.8)		WB	B	橙	45	カマド付近 内面風化剥落
15	かわらけ	7.5	2.2	4.7	WBR	B	にぶい黄橙	100	灯明皿に転用

第13図 第04号住居跡出土遺物



第07号住居跡 (第14図)

F-24グリッドに位置し、東半部は調査区外である。第08号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。

平面形態は方形で、南北長5.86m、深さ1.10mである。西壁の方向はN-48°-Wを測る。埋没状況は自然堆積である。

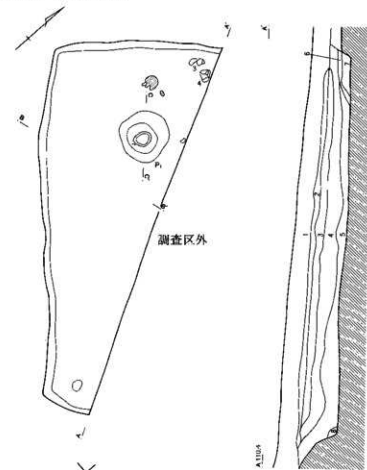
カマド・貯蔵穴は確認されていない。検出されたピットは1本で、主柱穴である。南北0.81m、東西0.78m、深さ0.32mで、断面観察では柱痕が認められた。柱穴北西に、床面が焼けている部分が検出されている。

遺物は少なく、時期は、8世紀末～9世紀初頭に比定される。

第07号住居跡出土遺物 (第15図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	13.2	3.5		BR	B	におい菊	80	
2	坏	(10.9)	(3.3)		R	B	明赤褐	50	
3	小型鉢	17.0	(8.5)		WR片	B	赤褐	40	
4	甕	(16.0)	(15.4)		WB	B	明赤褐	20	

第14図 第07号住居跡



第07号住居跡

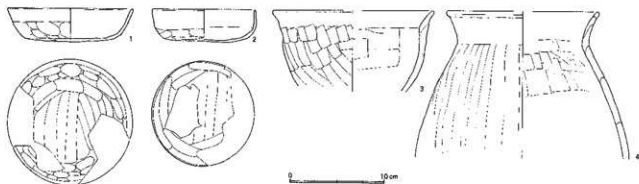
- 1 表土層
- 2 表土層
- 3 黒褐色土 砂質 しまり欠 焼土粒子・炭化物
粒子微量
- 4 褐色土 砂質 しまり欠 炭化物粒子微量
暗茶褐色土ブロック少量
- 5 褐色土 しまり良好 粘性弱 ロームブロッ
ク(径10-20mm)・ローム粒子・焼土
粒子・炭化物微量
- 6 褐色土 5層より炭化物多量
- 7 黒褐色土 しまり良好 粘性弱 炭化物多量
- 8 黄褐色土 堅緻 やや粘性あり ロームブロッ
ク・ローム粒子の混入層 炭化物粒
子微量
- 9 褐色土 柱穴形埋土
- 10 黒褐色土 柱穴

照110

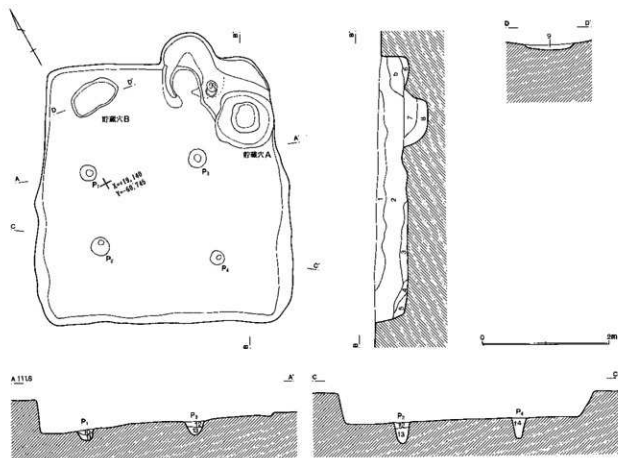


0 10 cm

第15図 第07号住居跡出土遺物



第16図 第10号住居跡



第10号住居跡 (第16・17・18図)

F-25・26グリッドに位置し、第09・20号住居跡と重複している。

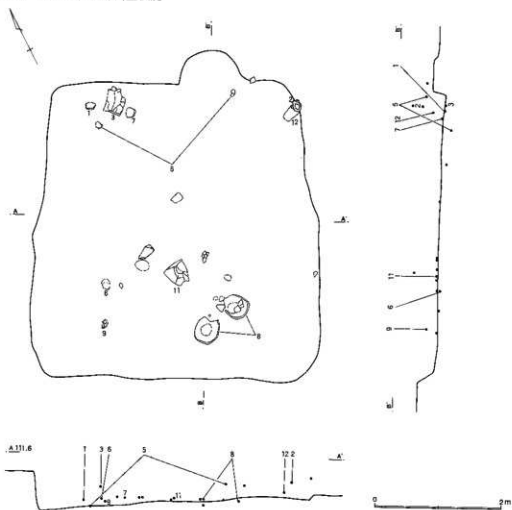
平面形態は方形を呈し、カマドは北壁や東よりの部分に設置されている。主軸長4.08m、東西幅3.98m、深さ0.63mで、主軸方向はN-27°-Eを測る。埋没状況は自然堆積による。

カマドは灰褐色粘土で構築され、東側の袖には土師器の甕が芯として用いられている。燃焼部底面は、硬く焼土化していた。貯蔵穴はカマドの両脇に各1基ずつ、計2基検出されている。貯蔵穴Aはカマド東側の北東コーナー部に位置している。平面形態は隅丸方形で、南北0.94m、東西0.87m、深さ0.76mである。平面プランは不明確であったが、外周には堆状に茶灰

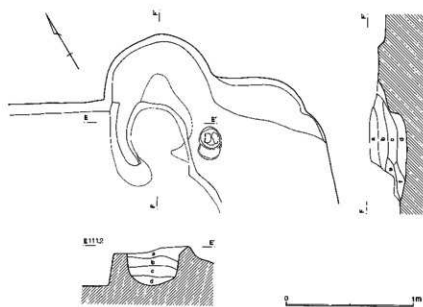
色粘土が貼られていた。貯蔵穴Bはカマド西側の北西コーナー部に位置している。平面形態は楕円形で、南北0.44m、東西0.78m、深さ0.08mである。上面に床面が載り、覆土が硬く締っていたことから、床下土坑の可能性があるが、位置的な条件を重視して、貯蔵穴Aに先行する貯蔵穴として報告する。確認されたピットは4本で、いずれも支柱穴である。底面の標高もほぼ一致している。壁溝は通っていない。

遺物は床面直上付近から大型の破片が出土し、接合率も比較的高い。器種は土師器の坏・壺・甕がある。図示していないが、口縁部の立ち上がりかたい須恵器坏片もある。時期は、出土遺物より古墳時代後期に比定される。

第17図 第10号住居跡出土状況



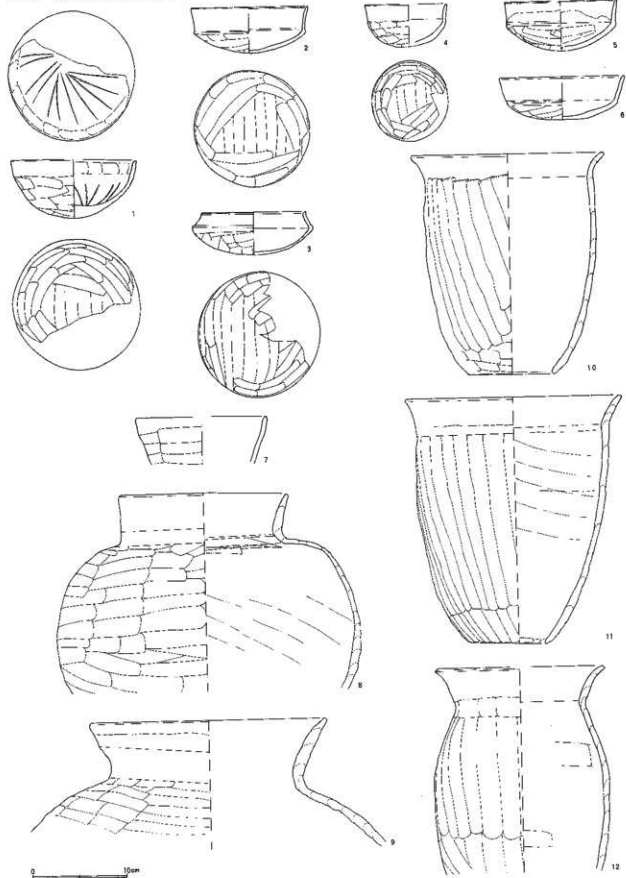
第18図 第10号住居跡カマド



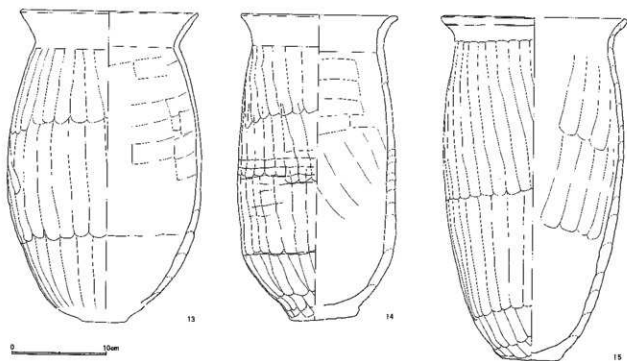
第10号住居跡カマド

- a 灰褐色土 天井部の崩落 整頓
粘性あり 灰褐色粘
土主体 焼土粒子・
炭化物粒子微量
- b 暗茶褐色土 天井部の崩落 灰褐
色粘土粒了多量 焼
土ブロック・炭化物
粒子少量
- c 黒褐色土 焼土粒子・灰多量
炭化物粒子少量 ロ
ーム粒子微量
- d 暗黄褐色土 カマド廻形 ローム
ブロック多量 炭化
物粒子微量
- e 暗赤褐色土 燃焼部 下部に焼土
硬化面 焼土主体に
茶褐色土少量
- f 茶褐色土 カマド廻形 ローム
粒子多量 炭化物粒
子微量

第19図 第10号住居跡出土物(1)



第20図 第10号住居跡出土遺物(2)

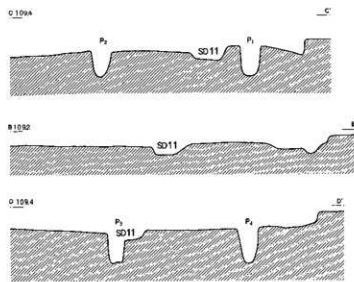
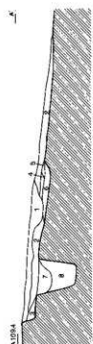
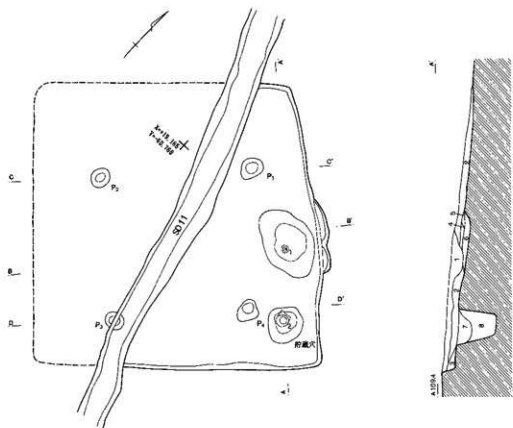


第10号住居跡出土遺物 (第19・20図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	瓶	(13.4)	6.2		WB片	B	橙	50	貯蔵穴B
2	環	12.5	4.8		WB	B	黒褐	90	
3	環	11.2	4.5		WB	B	にふい赤褐	70	貯蔵穴B 内面風化による剥落
4	環	(8.7)	(4.5)		WB	B	にふい橙	70	ミニチュア
5	環	(12.0)	(5.2)		WBR	A	橙	35	床直 重ね焼きの痕跡
6	環	13.3	4.5		WBR	B	橙	70	床直
7	小型瓶	(14.0)	(5.0)		WR片	C	にふい橙	10	貯蔵穴B
8	壺	17.6	(20.9)		WBR	B	明赤褐	50	床直
9	壺	24.7	(13.5)		WR片	C	橙	20	
10	瓶	20.2	23.3	9.1	WB	C	赤褐	70	
11	瓶	(22.4)	(26.0)	(8.2)	WB片	C	明赤褐	75	床直
12	甕	(17.5)	(21.6)		WBR片	B	明赤褐	65	
13	甕	(18.6)	(32.6)	(4.4)	WB片	B	暗赤褐	80	
14	甕	16.4	32.2	7.1	WBR片	B	赤褐	85	
15	甕	(19.0)	(36.2)	(5.9)	WBR片	B	灰黄褐	45	

第10号住居跡

1	黒褐色土	砂質	しまり欠	炭化物粒子少量	8	黒褐色土	貯蔵穴A覆土	緻密	ローム粒子(径1mm以下)
2	茶褐色土	砂質	しまり良好	焼土粒子・炭化物少量					多量 焼土・炭化物粒子微量
3	黒色土	砂質	しまり欠	炭化物粒子多量	9	黄茶褐色土	貯蔵穴B覆土	解織	ローム粒子・暗褐色粘質土多量
4	黒色土	軟質		炭化物粒子多量 焼土ブロック少量					
5	濃茶褐色土	解織		ローム粒子少量 炭化物粒子少量 焼土粒子	10	暗茶褐色土	ローム粒子多量	ロームブロック少量	焼土粒子・炭化物粒子・灰
6	暗褐色土	やや解織		炭化物粒子少量	11	黄褐色土	ロームブロック主体に茶褐色土少量		
7	暗茶褐色土	貯蔵穴A覆土		緻密	12	茶褐色土	ローム粒子多量	炭化物粒子微量	
				暗黄褐色土ブロック状に多量 炭化物粒子微量	13	暗茶褐色土	ロームブロック少量	焼土・炭化物粒子微量	
					14	黒褐色土	ロームブロック多量	炭化物粒子少量	



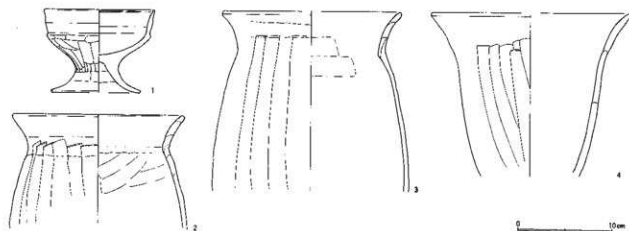
第11号住居跡

- 1 赤褐色土 緻密 粘性欠 ローム粒子(径1-2cm)少量 炭化物粒子微量
- 2 黒褐色土 緻密 粘性欠 黒色土・ブロック多量 ロームブロック(径5-10mm)少量
- 3 暗黄褐色土 緻密 粘性欠 ローム粒子(径1mm以下)多量 炭化物粒子少量
- 4 暗赤褐色土 軟質 やや粘性あり 焼土を主体に焼土ブロック微量
- 5 暗黄褐色土 緻密 やや粘性あり ローム粒子(径1mm以下)多量 焼土粒子微量
- 6 黄褐色土 緻密 粘性欠 ロームブロック(径10-20mm)多量
- 7 暗赤褐色土 貯蔵穴覆土 緻密 粘性欠 ローム粒子(径1mm以下)多量 ロームブロック(径5-10mm)微量 白色微粒子多量
- 8 黒褐色土 貯蔵穴覆土 緻密 粘性欠 ロームブロック(径5-10mm)少量



第11号住居跡出土遺物 (第11図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高杯	11.6	8.75	9.3	WBR	B	橙	75	
2	甕	18.0	(12.0)		WB片	B	橙	30	
3	甕	(18.7)	(18.9)		WB	B	にふい・黄橙	10	
4	甕	(20.9)	(17.1)		WBR	B	明赤褐	5	



第11号住居跡 (第21図)

D-23・E-23グリッドに位置し、第11号溝跡に切られている。住居跡の西半部は削平され、この部分の壁の立上がりは検出されていない。

平面形態は方形で、カマドは確認されていない。南北長4.51m、深さ0.53mで、主軸方向はN-47-Wを測る。埋没状況は、地形の高い方から低い方へと自然に堆積していった状況を看取することができた。

東壁中央壁際に不整形の掘り込みが確認されており、カマド燃焼部の描形の可能性が高い。貯蔵穴は南東コーナー部に位置し、平面形態は不整形を呈している。南北0.56m、東西0.55m、深さ0.86mである。検出されたピットは4本で、いずれも主柱穴である。底面の標高もほぼ一致している。壁溝は巡っていない。

遺物は貯蔵穴から土師器の甕、カマド燃焼部と考えられる掘り込みから土師器の高環が出土している。時期は、出土遺物から古墳時代後期に比定される。

第12号住居跡 (第23図)

G-25・26グリッドに位置し、東半部は調査区外である。

平面形態は方形を呈し、カマドは検出されていない。南北長4.33m、深さ0.92mで、西壁の方向はN-40'-Wを測る。埋没状況は、自然に堆積したことが

看取できた。

北壁際に床面が焼土化した部分が確認された。しかし、あまり焼けしまった状態ではなかったため、カマドに近い部分と判断した。確認されたピットは2本で、いずれも主柱穴である。壁溝は巡っていない。

遺物は少なく、図示し得たのは土師器の環1点のみである。時期は、古墳時代後期に比定される。

第15号住居跡 (第24・25・26図)

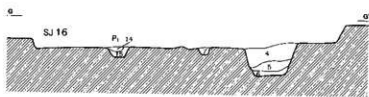
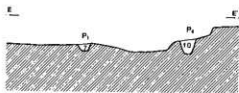
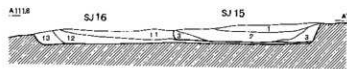
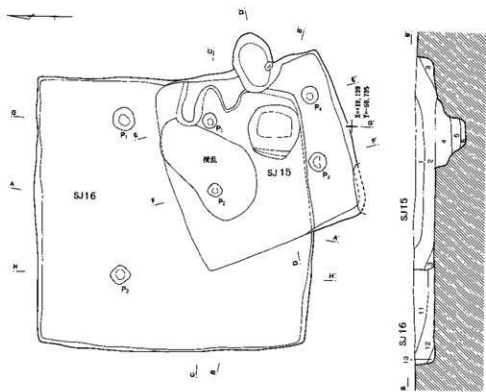
G-26グリッドに位置し、第16号住居跡を切っている。南西コーナー部は攪乱されている。

平面形態は方形を呈し、カマドが東壁中央に設置されている。主軸長2.97m、南北幅2.96m、深さ0.40mで、主軸方向はN-71'-Eを測る。埋没状況は、自然に堆積していったことが看取できた。

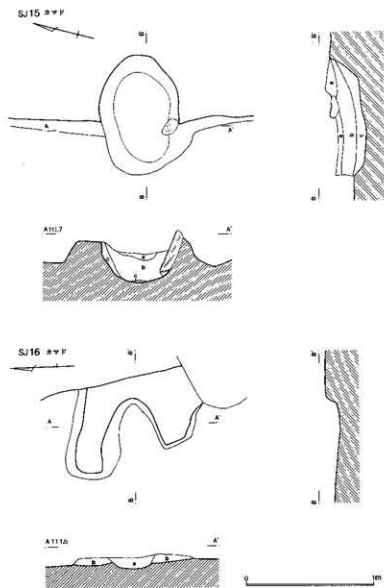
カマドは燃焼部のみが検出され、覆土には灰や焼土が多量に含まれていた。確認されたピットは4本で、いずれも主柱穴である。底面の標高はほぼ一致している。貯蔵穴、壁溝は認められない。

遺物の多くはカマドの周辺部から、床面からやや浮いた状態で出土している。須恵器の環類・甕・甗、土師器の環類・甗類と刀子1点がある。須恵器甕は把手付の三孔式のものである。時期は、出土遺物から平安時代に比定される。

第24图 第15·16号住居跡



第25図 第15・16号住居跡カマド



第15号住居跡カマド

- a 黒色土 堅緻 やや粘性あり 灰・焼上ブ
ロック多量
b 黒灰色土 緻密 粘性欠 灰をブロック状に
含む 焼上粒子・炭化物粒子多量
c 黄灰色土 緻密 粘性欠 黄褐色
土ブロック多量 焼上粒了少量

第16号住居跡カマド

- a 暗茶褐色土 ローム粒子・焼土・炭化物粒子
少量
b 茶灰色粘土 袖部 堅緻 灰白色粘土主体
暗茶褐色土少量混入

第15号住居跡

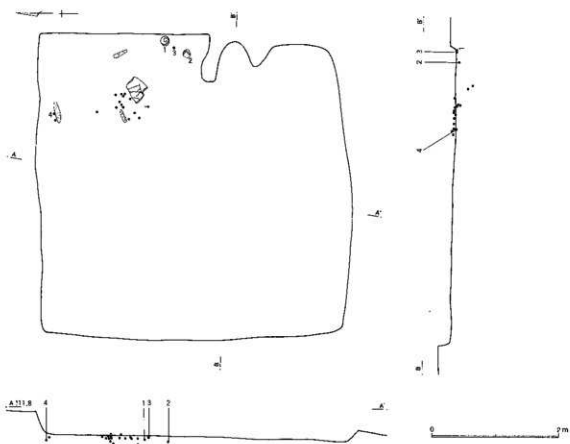
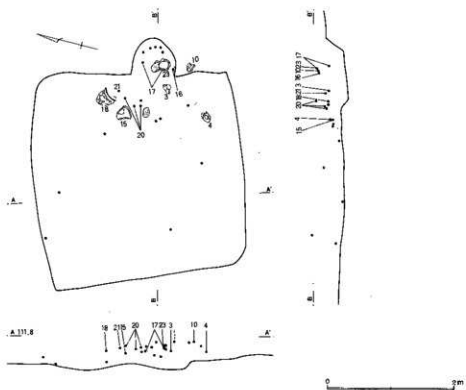
- 1 黒色土 緻密 やや粘性あり 暗黄褐色土ブロック多量
ローム粒子(径1mm以下)少量 焼土・炭化物粒子
多量
2 暗黄褐色土 堅緻 やや粘性あり ロームブロック(径5~10
mm)多量 ローム粒子(径1mm以下)少量 焼土・
炭化物粒子少量
3 黄褐色土 緻密 粘性欠 ローム土主体に茶褐色土少量
炭化物粒子微量
4 暗茶褐色土 貯蔵穴覆土 堅緻 粘性あり 炭化物粒子微量
ローム粒子微量 地山の茶灰色粘土粒子
5 出掘色土 貯蔵穴覆土 堅緻 粘性あり 炭化物粒子多量
焼土粒子微量
6 黒茶褐色土 貯蔵穴覆土 堅緻 茶褐色鉄分多量 灰白色粘
土ブロック多量 炭化物粒子少量
7 暗茶褐色土 Pit1覆土 しまり良好 粘性弱 炭化物粒子少
量 焼土粒子

- 8 黒褐色土 Pit2覆土 しまり良好 粘性弱 炭化物粒子微
量 ローム粒子
9 黄褐色土 Pit3覆土 堅緻 ローム主体層
10 暗茶褐色土 Pit4覆土 堅緻 炭化物少量 ローム粒子

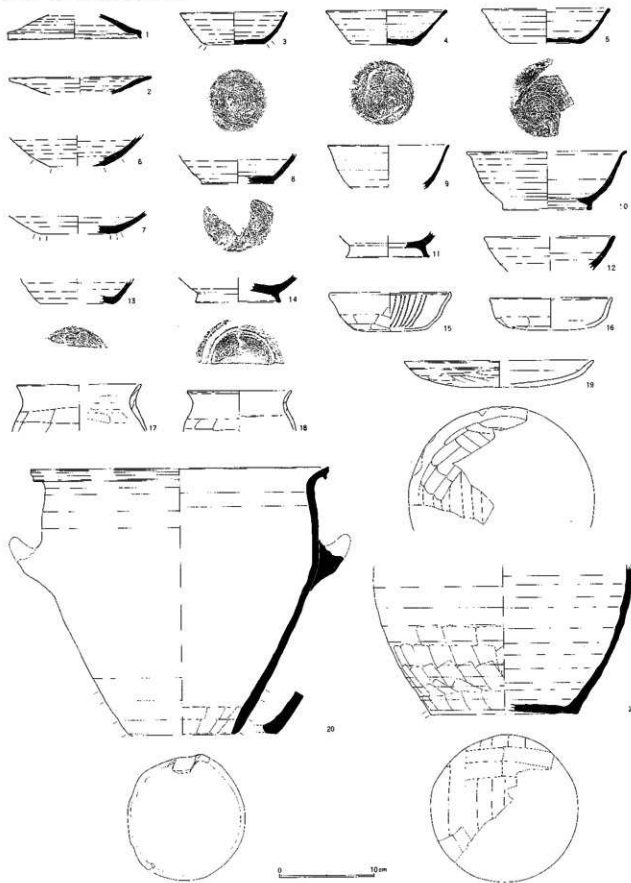
第16号住居跡

- 11 黄褐色土 堅緻 粘性欠 ローム土主体に暗茶褐色土ブ
ロック状を含む
12 暗茶褐色土 堅緻 粘性欠 ロームブロック(径30~50mm)・
ローム粒子(径2~3mm)多量 炭化物粒子多量
13 黄褐色土 緻密 粘性欠 ローム主体に暗茶褐色土少量
14 黒色土 Pit1覆土 しまり欠 炭化物粒子多量
15 黄褐色土 Pit1覆土 堅緻 粘性弱 ローム主体層
16 暗茶褐色土 Pit2覆土 堅緻 黒色土ブロック・炭化物粒子
少量

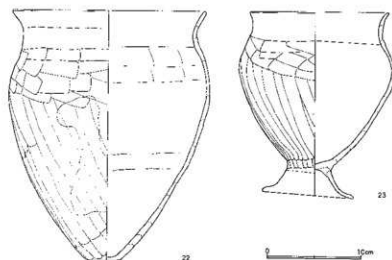
第261图 第15·16号住居跡出土状況



第27図 第15号住居跡出土遺物(1)



第28図 第15号住居跡出土遺物(2)



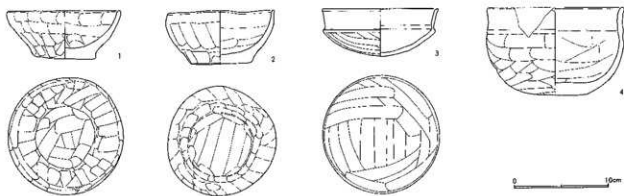
第15号住居跡出土遺物 (第27・28図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(13.9)	(2.6)		WB	B	灰白	5	
2	皿	(15.0)	(1.8)		WB片	B	灰白	5	
3	坏	11.2	3.4	6.0	W	A	灰	90	カマド付近 体部立上りに回転ケズリ
4	坏	12.6	3.7	6.3	WB片	B	浅灰	95	カマド
5	坏	(13.4)	(3.7)	(7.1)	R片	B	にふい黄橙	60	
6	坏		(3.2)		WR片	A	灰白	20	体部立上りに回転ケズリ
7	坏		(2.25)	(8.0)	W片	B	灰	20	カマド 体部立上りに回転ケズリ
8	坏		(3.1)	(7.6)	B	C	橙	15	ロクロ基台部残断
9	高台付碗	(12.7)	(4.6)		FR	B	にふい橙	10	土師質
10	高台付碗	(16.8)	(6.1)	(9.1)	WB片	C	にふい黄橙	20	カマド 酸化焰焼成
11	高台付碗		(2.6)	(8.7)	W	A	灰	10	
12	坏	(13.7)	(3.6)		WR	A	にふい橙	10	
13	坏		(2.7)	(7.6)	W片	B	灰黄	30	
14	高台付碗		(2.8)	(8.8)	WB	B	灰白	25	
15	坏	(12.7)	(4.1)	(7.6)	WBR	A	明赤褐	15	内面に放射状暗文
16	坏	(12.9)	(3.2)		WB	B	にふい橙	20	カマド
17	小型甕	(13.0)	(5.0)		WBR	B	にふい橙	10	カマド
18	小型甕	11.0	(4.3)		WBR	B	橙	10	カマド
19	甕	(20.0)	(2.8)		WB	B	にふい赤褐	30	
20	甕	(41.2)	(28.0)	(11.0)	WB片	B	灰	30	カマド 大きき瓶元
21	甕		(15.6)	(15.6)	WB	B	灰	30	タタキ後ヨコナデ
22	甕	20.3	26.2	3.7	BR	B	にふい橙	90	外面に付着物
23	台付甕	14.5	19.6	9.4	B	B	灰褐	80	カマド

第16号住居跡出土遺物 (第29図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	碗	(11.8)	(5.0)	(6.6)	WBR	A	明赤褐	95	床直
2	碗	11.2	5.4	6.6	WR	C	にふい赤褐	90	床直
3	坏	12.3	5.0		BR片	B	明赤褐	100	床直
4	碗	14.4	9.2		WB	A	にふい橙	60	床直

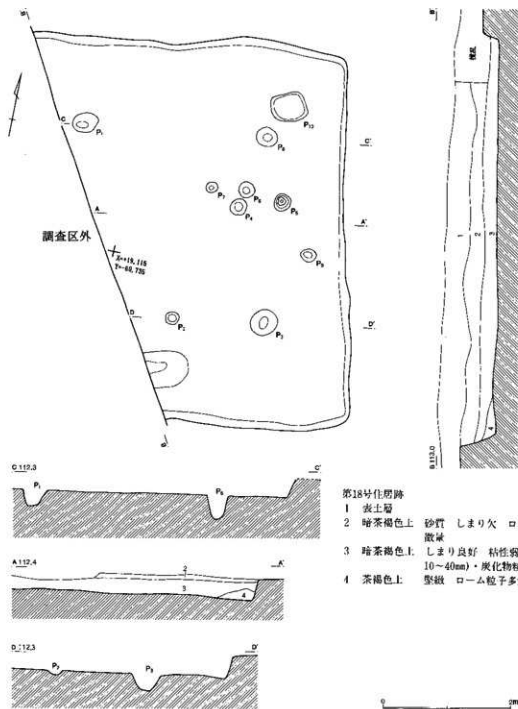
第29図 第16号住居跡出土遺物



第30図 第18号住居跡出土状況



第31図 第18号住居跡



第18号住居跡 (第30・31図)

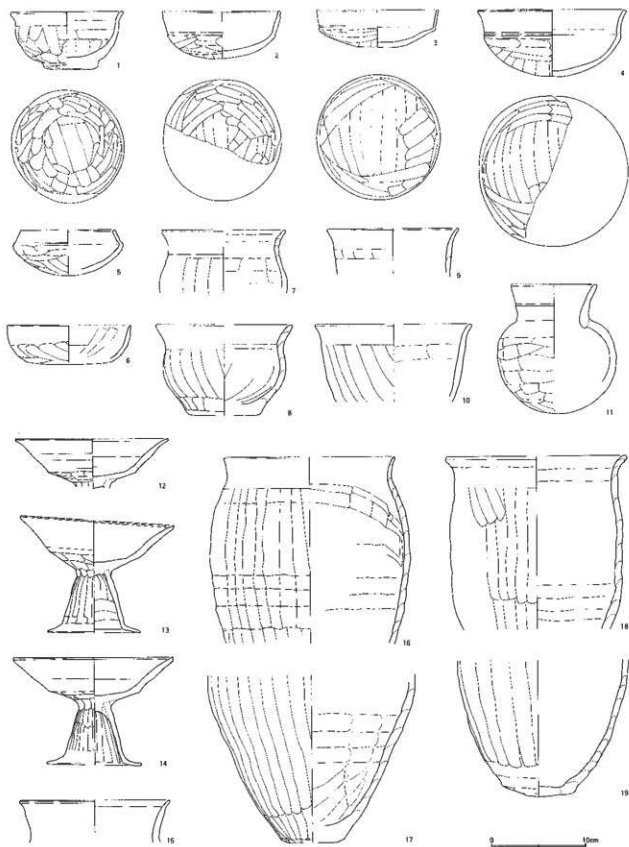
G-28グリッドに位置し、西半部は調査区外である。

平面形態は方形を呈し、カマドは検出されていない。

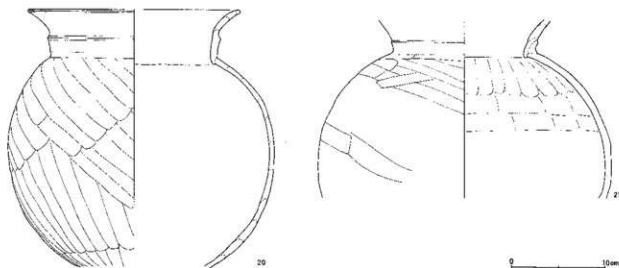
南北幅6.11m、深さ0.91mで、東壁の方向はN-10°-Wを測る。埋没状況は、自然堆積である。

確認されたピットは10本で、そのうちP1・P3・P8の3本が主柱穴である。P1・P3の覆土は暗茶褐色土で、炭化物粒子・ローム粒子を多量に含んでいた。P8は暗茶色土で、白色粘土ブロック・黒色土ブロックを含んでいた。

第32图 第18号住居跡出土遺物(1)



第33図 第18号住居跡出土遺物(2)



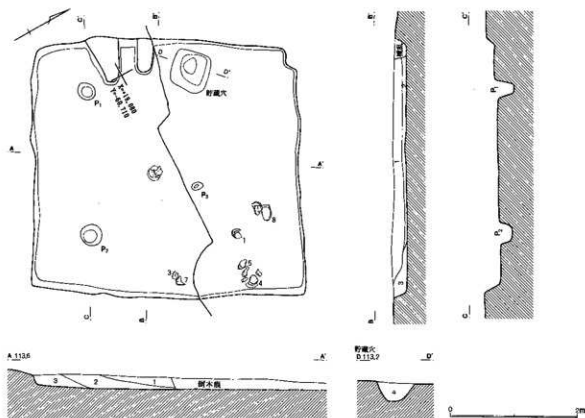
第18号住居跡出土遺物 (第32・33図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	11.7	6.1	5.8	WR片	C	にぶい赤褐	80	床直
2	坏	(12.4)	5.0		BR	B	橙	50	
3	坏	(12.9)	(3.9)		WR	B	暗赤褐	100	
4	坏	(15.4)	7.0		WB	B	橙	45	
5	坏	(10.1)	(4.8)		WR	B	橙	30	
6	坏	(13.0)	(3.9)		WB	B	橙	10	
7	小型甕	(13.0)	(6.7)		WR	B	にぶい赤褐	5	
8	小型甕	(14.4)	(9.5)	(7.0)	片	B	橙	40	
9	小型鉢	(13.8)	(4.7)		WBR	B	にぶい赤褐	5	
10	小型鉢	(16.5)	(8.2)		WR	C	にぶい赤褐	15	
11	小型甕	(9.1)	(13.6)		BR	B	明赤褐	90	
12	高坏	(16.2)	(5.2)		BR	B	橙	50	
13	高坏	(16.2)	(11.8)	(9.7)	B	B	橙	65	
14	高坏	(16.9)	(11.3)	(9.9)	BR	A	橙	80	
15	甕	(15.8)	(4.5)		WR	B	明赤褐	5	
16	甕	(18.0)	(19.6)		WBR片	B	にぶい橙	30	
17	甕		(17.5)	(5.5)	WBR片	C	明褐	40	
18	甕	(18.9)	(18.1)		WBR片	C	にぶい赤褐	30	
19	甕		(14.4)	(7.5)	WB	C	暗赤褐	35	
20	壺	(22.1)	(27.2)		WBR片	B	にぶい褐	45	
21	甕		(18.7)		WB	B	橙	30	

貯蔵穴・壁溝は確認されていない。また南壁壁際に土坑状の浅い掘り込みが存在する。

遺物は比較的多く、土師器の坏類・高坏・壺・甕が出土している。時期は出土遺物から、古墳時代後期に比定される。

第34回 第25号住居跡

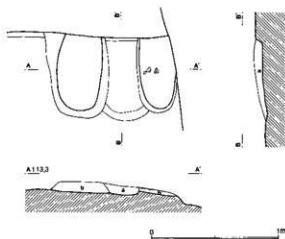


第25号住居跡

- 1 黒褐色土 堅緻 黒色土をブロック状に多量 ローム粒子(径3-5mm)多量 炭化物粒子・白色粒少量
- 2 暗茶褐色土 堅緻 ロームブロック(径5-10mm)多量 焼土・炭化物粒子微量 白色粒子
- 3 黄褐色土 堅緻 ロームブロック(径10-20mm)上体 暗茶褐色土 炭化物粒子微量
- 4 暗黄褐色土 貯蔵穴覆土 堅緻・ロームブロック(径10-20mm)多量 炭化物粒子少量

第25号住居跡カマド

- a 暗黄褐色土 ローム粒子(径1mm以下)多量 ロームブロック(径3-5mm)微量 青灰色粘土少量
- b 青灰色粘土 袖部 堅緻 ロームブロック少量 燃焼部側焼けていない



第25号住居跡 (第34回)

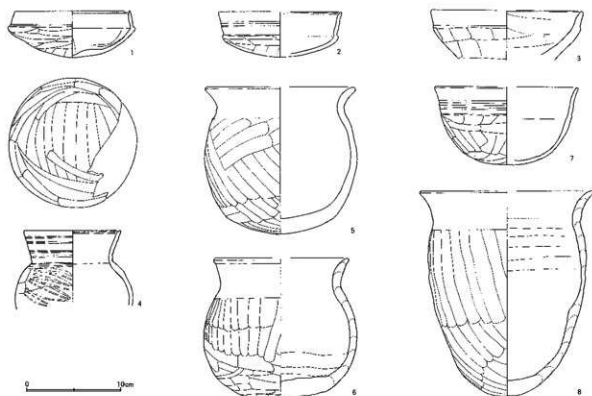
J-31・32グリッドに位置し、北半部は倒木痕によって攪乱され、床面は検出されなかった。

平面形態が方形で、カマドは西壁南西コーナーよりに設置されている。主軸長4.05m、南北幅4.20m、深

さ0.30mで、主軸方向はN-61°-Wを測る。埋没状況は自然堆積である。

カマドは青灰色粘土によって構築されているが、削平によって燃焼部・煙道部は検出されていない。貯蔵穴はカマド北脇の西壁際に位置し、南北0.51m、東西

第35図 第25号住居跡出土遺物



第25号住居跡出土遺物 (第35図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.1	4.9		WBR	B	にぶい橙	80	床直 整形未光
2	坏	(12.8)	(4.7)		WB	B	にぶい橙	30	
3	坏	(15.8)	(5.2)		WB片	C	にぶい黄橙	20	
4	小型甕	10.2	(7.9)		B	A	にぶい赤褐	30	
5	小型甕	(15.5)	15.4		BR片	B	褐	30	
6	小型甕	(14.0)	4.7		WBR片	B	橙	90	
7	碗	(15.0)	(8.2)		WB片	B	にぶい黄橙	50	
8	小型甕	(18.1)	21.5		WB片	C	にぶい褐	50	

0.61m、深さ0.32mである。確認されたピットは3本で、P1・P2が主柱穴である。壁溝は通っていない。

遺物は土師器の坏類・小型甕が出土し、時期は古墳時代後期に比定される。

第27号住居跡 (第36・37図)

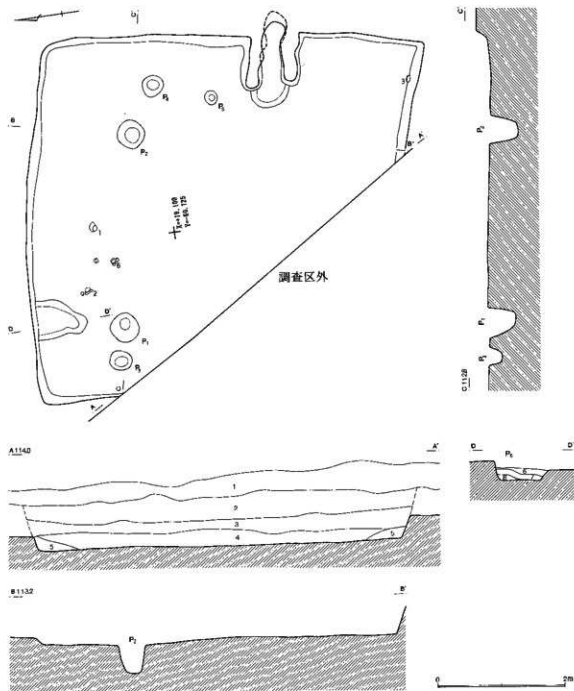
H-29・30グリッドに位置し、南西コーナー部が調査区外である。

平面形態が方形で、カマドは東壁中央に設置されている。主軸長5.76m、南北幅5.89m、確認面からの深さ0.18mで、主軸方向はN-100°Eを測る。埋没状況は自然堆積である。

カマドは灰白色粘土によって構築し、北袖には7の土師器甕を、南袖には9の上師器甕を芯材として使用している。燃焼部は住居内に入り込み、比較的焼けている。煙道部は残存状況がよく、一部天井が残っている。煙出し部は明確ではない。確認されたピットは5本で、P1・P2が主柱穴である。貯蔵穴・壁溝は認められない。北西コーナー付近北壁際には土坑状の浅い掘り込みが存在し、出入口部の施設に関連する可能性がある。

遺物は土師器の坏・甕・甔が出土し、比較的完形率が高い。時期は古墳時代後期に比定される。

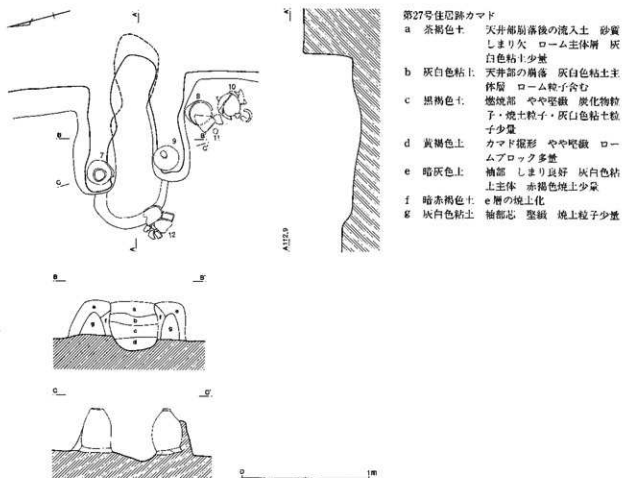
第36図 第27号住居跡



第27号住居跡

- | | | | | | | | |
|-------|---------------------|-----------------------------|---------------------|---------------------|--------------------------------|--------------------------------------|----------------------------------|
| 1 表上層 | 2 黒褐色土 | 3 暗茶褐色土 | 4 暗茶褐色土 | 5 黒褐色土 | 6 暗赤褐色土 | 7 赤褐色土 | 8 暗黄褐色土 |
| | 砂質 しまり欠 炭化物・ローム粒子少量 | ロームブロック(径30-60mm)少量 ローム粒子多量 | ロームブロック(径20-30mm)微量 | しまり良好 粘性弱 ローム・ローム多量 | Pit6覆土 堅緻 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物粒子多量 | Pit6覆土 堅緻 焼土粒子・炭化物粒子多量 焼土ブロックを部分的に含む | Pit6覆土 堅緻 ロームブロック多量 焼土粒子・炭化物粒子微量 |

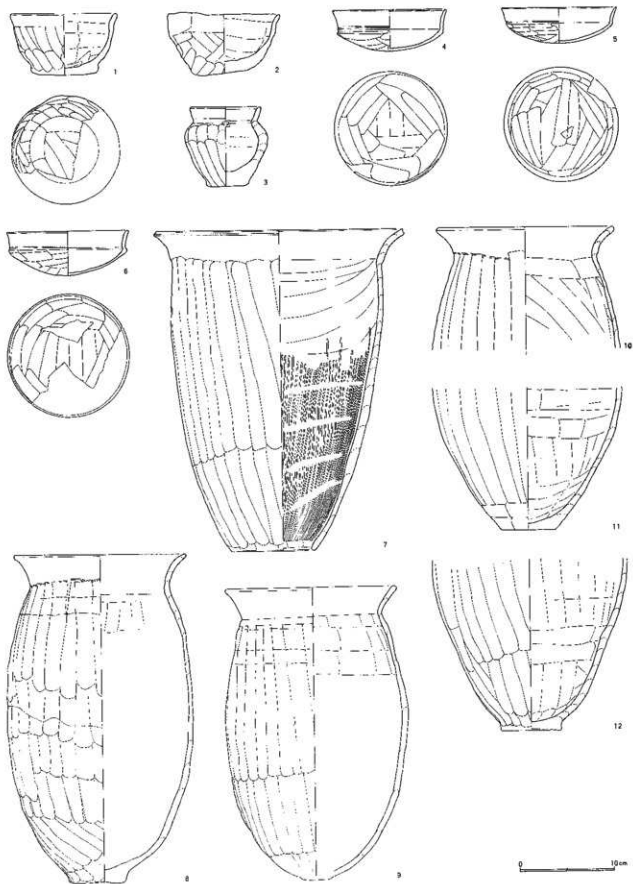
第37図 第27号住居跡カマド



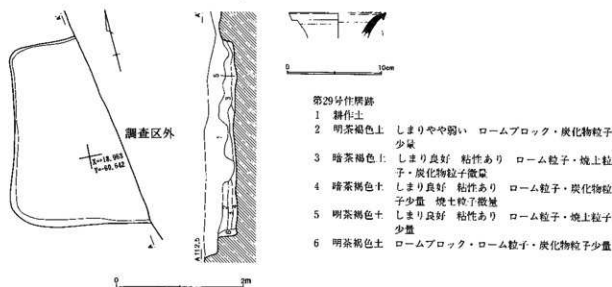
第27号住居跡出土遺物 (第38図)

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	碗	(11.0)	6.4	(6.8)	WB片	B	にぶい黄褐	45	床直
2	碗	11.7	6.7	6.0	WR片	C	にぶい褐	80	床直
3	小型甕	7.3	8.4	3.9	WB片	B	明黄褐	95	床直 新部対面に穿孔
4	坏	11.9	4.3		BR	B	橙	90	Pa04
5	坏	12.2	3.7		HR片	B	明赤褐	95	カマド
6	坏	12.8	4.65		WBR片	B	にぶい褐	96	床直
7	瓶	26.1	34.6	8.7	WBR	B	橙	100	カマド北袖
8	甕	18.0	34.5	5.8	WBR片	B	明黄褐	95	カマド南脇
9	甕	17.6	(30.3)		WBR片	B	明黄褐	75	カマド南袖
10	甕	18.4	(12.8)		WBR片	B	橙	30	カマド
11	甕		(14.9)	(5.7)	WBR片	B	褐	30	カマド南脇床直
12	甕		(18.0)	6.2	WD片	B	にぶい褐	25	カマド南面

第38図 第27号住居跡出土遺物



第39図 第29号住居跡・出土遺物



第29号住居跡出土遺物 (第39図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	長頸壺	(10.2)	(2.7)		WB	B	灰	5	

第29号住居跡 (第39図)

P-43グリッドに位置し、東半部は調査区外である。平面形態が方形で、南北長2.93m、深さ0.52mである。西壁の方位はN-15°-Eを測る。

カマド・貯蔵穴・壁溝・ピット等の施設は検出されていない。

遺物はきわめて少なく、図示し得たのは、須臾器1点のみである。時期は不明である。

第30号住居跡 (第40図)

P-44・45グリッドに位置し、西から東へ傾斜の著しい地点に立地している。さらに第26号溝跡に切られ、北壁中央から南東コーナーにかけての壁の立上がりは検出されなかった。

平面形態が台形で、カマドは東壁北東コーナー付近に設置されている。主軸長3.45m、南北幅3.93m、深さ0.89mで、主軸方向はN-95°-Eを測る。埋没状況は、斜面の上方から下方へ自然に堆積していった状況を看取できた。

カマドは削平されているため、燃焼部底面のみが検

出された。覆土は焼土粒子を多量に含んでいた。壁溝はカマド南壁の東壁中央から北壁中央にかけて巡り、幅0.23m、深さ0.16mである。確認されたピットは2本で、P2が主柱穴であった可能性が高い。貯蔵穴は認められていない。

遺物は少なく、図示し得たのは土師器杯3点で、時期は8世紀前半に比定される。

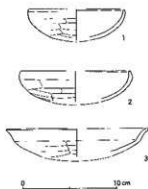
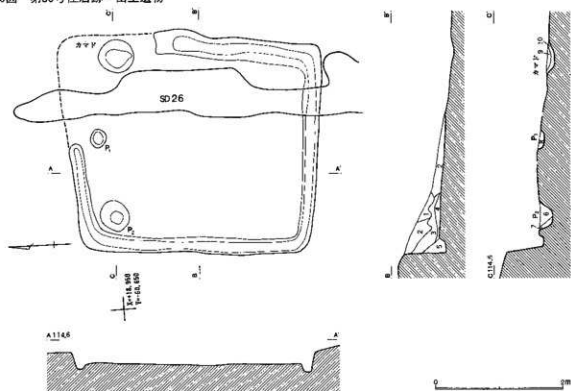
第31号住居跡 (第41図)

O-46・P-46グリッドに位置し、西から東への傾斜が著しい地点に立地している。さらに第26号溝跡に切られ、東半部については明確ではない。

平面形態は方形で、南北長5.33m、深さ0.61mである。埋没状況は、斜面の上方から下方へ自然に堆積していった状況を看取できた。

カマドは西壁中央に煙道部のみが検出されているが、調査区外のため詳細は不明である(カマドB)。カマドBの位置を中心とした主軸方向はN-115°-Wを測る。カマドBにかかわる煙道部以外の袖部・燃焼部等の痕跡は、住居内にはいっさい認められていない。このこ

第40図 第30号住居跡・出土遺物



第30号住居跡

- | | | |
|----|------|--------------------|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒子少量 焼土粒子微量 |
| 2 | 明褐色土 | ロームブロック (径10~20mm) |
| 3 | 黒褐色土 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量 |
| 4 | 黒褐色土 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 5 | 黒褐色土 | 粘性あり ロームブロックやや多量 |
| 6 | 黒褐色土 | Pit2覆土 ローム粒子多量 |
| 7 | 黒褐色土 | Pit2覆土 ローム粒子少量 |
| 8 | 黒褐色土 | Pit1覆土 ローム粒子少量 |
| 9 | 暗褐色土 | カマド覆土 しまり強 焼土粒子多量 |
| 10 | 暗褐色土 | カマド覆土 ローム粒子少量 |

第30号住居跡出土遺物 (第40図)

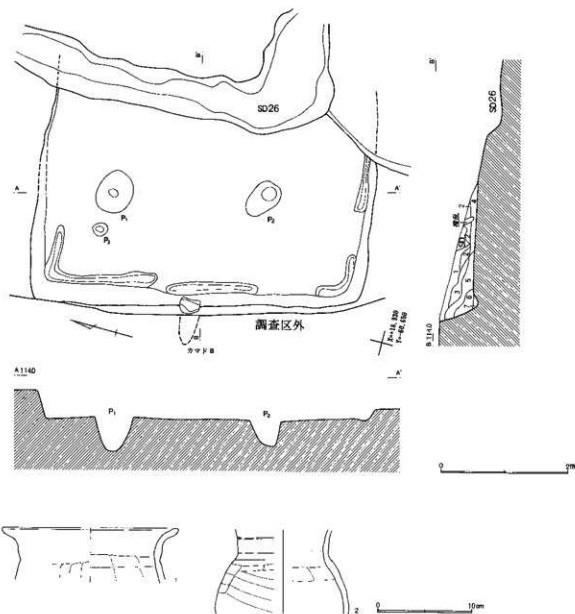
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.2)	(3.3)		WB片	B	橙	5	
2	坏	(11.5)	(3.2)		WB	B	橙	5	
3	坏	(14.8)	(2.9)		WB	B	橙	5	

とから、カマドBを廃絶後、カマドAを新たに構築したものと判断したが、カマドAの痕跡は見つからなかった。周辺に位置する住居跡との関連から、東壁に設置されていたものと考えられる。壁溝は北西コーナー付近から南壁中央に途切れながら存在する。幅0.18m、

深さ0.04mである。確認されたピットは3本で、P1・P2が主柱穴である。貯蔵穴は検出されていない。

出土遺物はきわめて少なく、図示し得たのは土師器の甕と小型壺で、いずれも破片資料である。時期は古墳時代後期に比定されるであろう。

第41図 第31号住居跡・出土遺物



第31号住居跡

- | | | | | | |
|--------|--------------|--------|---------------|--------------|---------|
| 1 明褐色土 | ローム粒子多量 | 4 黒褐色土 | 粘性あり | ローム粒子少量 | 炭化物粒子多量 |
| 2 明褐色土 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 5 黒褐色土 | ロームブロック・ローム粒子 | 炭化物粒子少量 | |
| 3 明褐色土 | ローム粒子少量 | 6 黒褐色土 | ローム粒子少量 | 焼土粒子・炭化物粒子微量 | |
| | 焼土粒子・炭化物粒子微量 | 7 黒褐色土 | 壁溝覆土 | | |

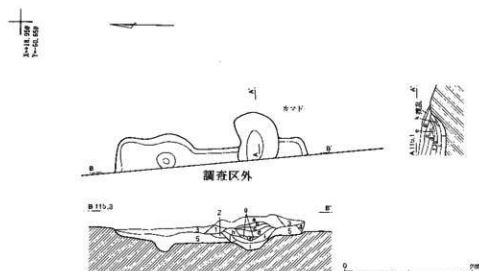
第31号住居跡出土遺物 (第41図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(18.2)	(5.7)		WB	B	橙	10	
2	壺		(8.8)		WR	B	にぶい湯	10	

第32号住居跡出土遺物 (第42図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(18.0)	(4.8)		WB	B	橙	5	
2	甕	(20.3)	(5.0)		WB	B	明赤褐	5	カマド

第42図 第32号住居跡・出土遺物



第32号住居跡

- | | |
|--------|-------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子少量 |
| 2 暗褐色土 | 炭化物粒子少量 |
| 3 暗褐色土 | しまり弱 ローム粒子 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子微量 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック多量 |
| a 明褐色土 | 天井部 白色粘土 焼土粒子・ローム粒子微量 |
| b 明褐色土 | 焼土粒子・粘土粒子・ローム粒子少量 |
| c 明褐色土 | 焼土粒子多量 ローム粒子少量 |
| d 明褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子少量 |
| e 明褐色土 | 焼土・白色粘土多量 |
| f 明褐色土 | 炭化物多量 |
| g 明褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子少量 白色粘土(袖部崩落粘土流入)多量 |
| h 暗褐色土 | 袖部崩落 焼土粒子・炭化物粒子・白色粘土 |
| i 明褐色土 | 焼土粒子・ローム粒子・炭化物粒子少量 |
| j 暗褐色土 | 袖部崩落 炭化物粒子やや多量 |
| k 黄褐色土 | 地山ロームブロック多量 |
| l 明褐色土 | 火床面 焼土粒子多量 |

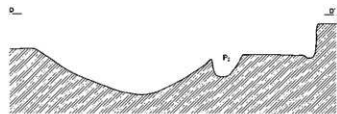
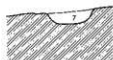
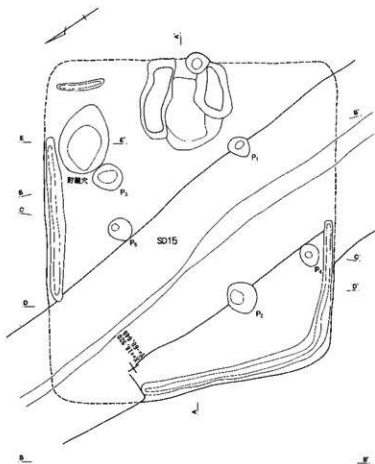
第32号住居跡 (第42図)

O-45グリッドに位置し、東壁付近以外はほとんどが調査区外である。

平面形態が方形で、カマドは北壁南東コーナーよりに設置されている。南北長3.06m、深き0.24mで、主軸方向はN-84°-Eを測る。埋没状況は自然堆積である。

カマドは白色粘土によって構築され、燃焼部・煙道部が検出されており、袖部は明確にはできなかった。火床面はよく焼けている。ピットは1本で、用途は不明である。貯蔵穴や歌溝は確認されなかった。

遺物はきわめて少なく、図示し得たのは十師器の狭口鉢部破片と土鍾3点である。

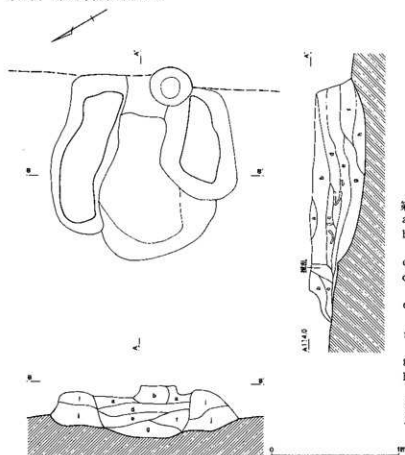


第33号住居跡

- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量
- 3 黒色土
- 4 黒褐色土 ローム粒子少量
- 5 黒褐色土 ローム粒子4層より多量
- 6 褐色土 砂濘覆土
- 7 黒褐色土 貯蔵穴覆土 ロームブロック (径20-30mm)



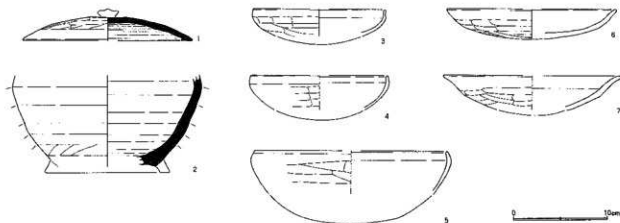
第44図 第33号住居跡カマド



第33号住居跡カマド

- a 黒褐色土 流入土
- b 白色粘土 天井部 天井部内壁はよく焼けている
- c 白色粘土 天井部 焼土粒子少量
- d 黒色土 炭化物層 焼土粒子・白色粘土粒子少量
- e 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量 炭化物粒子多量
- f 黒褐色土 しまり弱 粘性欠 炭化物粒子・焼土粒子多量
- g 明褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- h 明褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
- i 白色粘土 袖部 暗褐色土 埋多量
- j 黒褐色土 袖部 ローム粒子少量

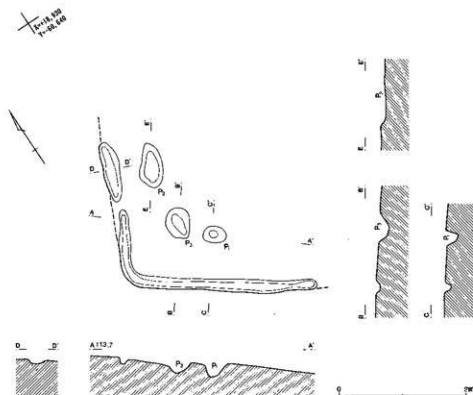
第45図 第33号住居跡出土遺物



第33号住居跡出土遺物 (第45図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(17.9)	(2.4)		WBR片	C	橙	30	宝珠つまみ
2	長頸壺	(17.9)	(9.6)		WB	B	オリーブ黒	25	
3	坏	(14.0)	(2.8)		WR	B	橙	5	
4	坏	(14.6)	(3.6)		WB片	B	明赤褐	5	
5	坏	(20.3)	(4.5)		WB	B	明赤褐	10	
6	皿	(17.7)	(3.1)		BR片	B	橙	30	
7	皿	(18.5)	(3.6)		BR片	B	橙	20	

第46図 第34号住居跡



第33号住居跡 (第43・44図)

P-46・47グリッドに位置し、北西コーナーから南東コーナーに第15号溝跡に切られている。また遺構の残存状態がきわめて悪く、東壁の立上りは削平されていた。

平面形態が方形で、カマドは東壁中央に設置されている。主軸長は推定で5.06m、南北幅4.50m、深さ0.56mで、主軸方向はN-33-Wを測る。埋没状況は自然に堆積している。

カマドは白色粘土によって構築され、煙道部は削平されていた。燃焼部はあまり焼けておらず、壁際にピットが確認された。貯蔵穴はカマド北脇の北東コーナー部に位置し、平面形態は鶏卵形である。南北0.76m、東西1.10m、深さ0.23mを測る。壁溝は北東コーナーから南壁中央にかけて通っているが、ほとんどは第15号溝跡に切られており、北壁の一部と南東コーナー

部に残る。幅0.24m、深さ0.05mである。ピットは5本で、P1・P2・P3が主柱穴である。

遺物は少なく、須恵器の蓋・長頸壺、土師器の環類と、石製臼下1点が出土している。時期は8世紀初頭に比定される。

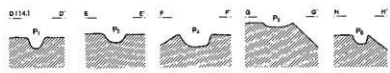
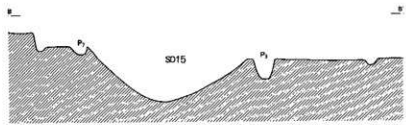
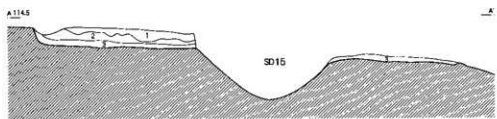
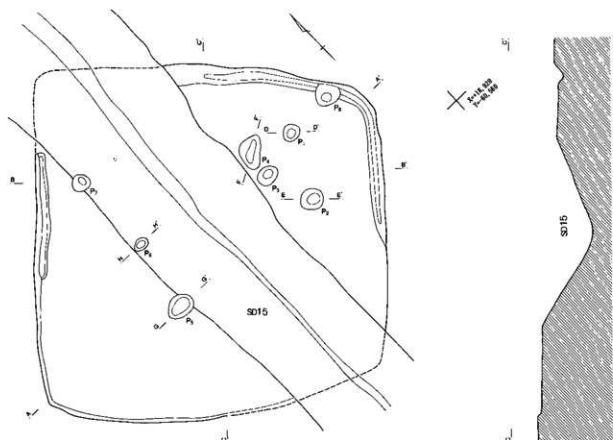
第34号住居跡 (第46図)

Q-47グリッドに位置し、第154～156・158号土坑に切られている。残存状態がきわめて悪く、南西コーナー部分付近が確認されたのみである。

平面形態が方形で、規模は不明である。西壁の方向はN-25-Eを測る。壁の立上りがまったく確認されず、壁溝が「L」形に巡っている。幅0.20m、深さ0.09mである。ピットは3本で、いずれも用途は不明である。カマドや貯蔵穴は見つからなかった。

遺物はきわめて少なく、図示し得るものはない。

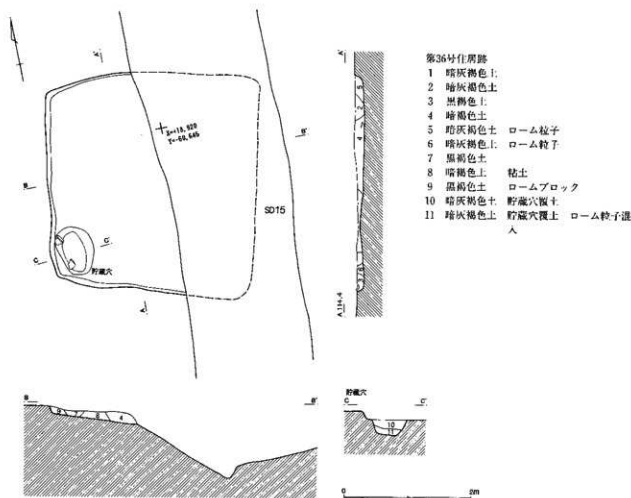
第47図 第35号住居跡



第35号住居跡
 1 黒褐色土 しまり強
 2 暗褐色土 ロームをブロック状に含む
 3 暗褐色土 ローム粒子多量



第48図 第36号住居跡



第35号住居跡 (第47図)

P-47・48グリッドに位置し、第36・37号住居跡と重複している。平面確認と断面観察から、新旧関係は第36号住居跡→第35号住居跡→第37号住居跡の順に古くなると判断した。これら3軒の住居跡はすべて第15号溝跡に切られている。

平面形態が方形で、カマドは検出されていない。南北長5.65m、東西長5.52m、深さ0.28mで、北東壁の方向はN-47-Wを測る。埋没状況は自然に堆積している。

残溝は北西壁の一部と南東コーナー部に巡っている。幅0.27m、深さ0.08mである。確認されたピットは8本で、P3が主柱穴である。カマドや貯蔵穴等の施設は見られなかった

遺物はきわめて少なく、図示し得るものはない。

第36号住居跡 (第48図)

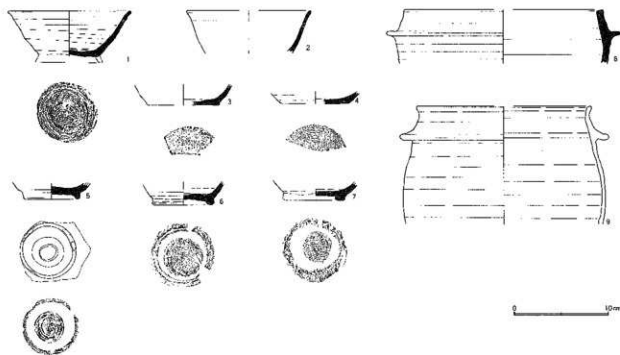
P-47・48グリッドに位置し、東半部が第15号溝跡に切られている。

平面形態が方形で、南北長3.36m、深さ0.26m、西壁の方向はN-11-Eを測る。埋没状況は断面観察から、人為的に埋め戻されている可能性がある。

貯蔵穴は南西コーナーに位置し、平面形態は楕円形である。南北0.78m、東西0.53m、深さ0.36mである。浅い住居跡であったが、床面は硬く踏みしめられていた。カマド・貯蔵穴・ピットなどの施設は確認されていない。

遺物は少なく、須恵器の坏類と羽釜、土錘1点が出土している。時期は平安時代に比定される。

第49図 第36号住居跡出土遺物



第36号住居跡出土遺物 (第49図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	高台付皿	13.0	(5.4)	(7.0)	WB片	C	時赤褐色	85		
2	高台付皿	(13.1)	(4.5)		WB	B	灰オリーブ	15		
3	環		(2.2)	(7.4)	WB	C	灰白	10		
4	環		(1.3)	(7.1)	WBR片	C	にふい黄橙	5		
5	高台付皿		(1.7)	(5.4)	W片	C	にふい黄橙	15		土師質
6	高台付皿		(2.5)	6.05	WB	C	浅黄	10		
7	高台付皿		(2.0)	(6.2)	WB	C	灰	15		土師質 高台付皿
8	羽釜	(21.1)	(5.7)		WB	B	黄灰	5		
9	羽釜	(18.4)	(12.4)		WBR	B	にふい黄橙	15		土師質

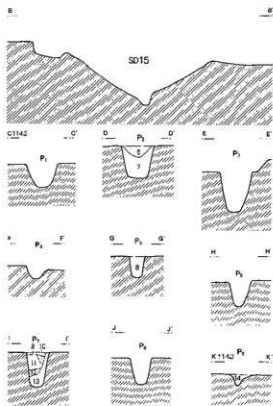
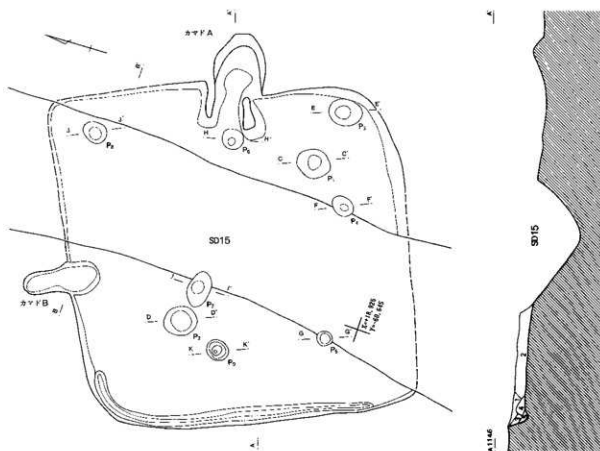
第37号住居跡 (第50・51図)

P-48グリッドに位置し、北東コーナーから南西コーナーが第15号溝跡に切られている。残存状態が悪く、一部壁の立上りが削りされていた。

平面形態が方形で、カマドは東壁中央(カマドA)と北壁中央(カマドB)に2基設置されている。カマドBには袖部が確認できないことから、カマドB廃絶後、カマドAを付け替えたものと判断した。東西長5.44m、南北長5.41m、深さ0.41mで、カマドAの主軸方向はN-69°-Eを測る。埋没状況は壁際が自然に堆積した後、一期に人為的に埋め戻されている。

カマドAは白色粘土によって構築され、燃焼部はよく焼けている。燃焼部前面にピットが確認されている。カマドBも白色粘土によって構築され、燃焼部がよく焼けている。壁溝は西壁に回り、幅0.20m、深さ0.06mである。ピットは9本で、P1・P5・P2が主柱穴である。また北東コーナー部に位置するP8と南東コーナーのP3は相当の深さを有し、カマド付け替えの段階に住居を拡張した痕跡の可能性が有る。貯蔵穴は見つからなかった。

遺物は少なく、図示し得たのは土師器環と甕の3点である。時期は古墳時代後期に比定される。

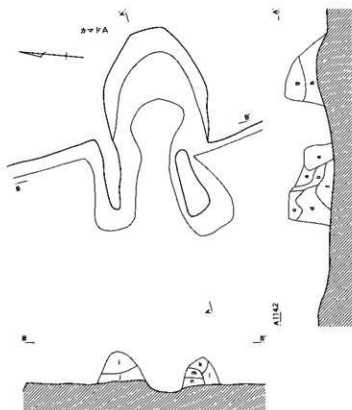


第37号住居跡

- | | | |
|----|-------|----------------------|
| 1 | 暗灰褐色土 | |
| 2 | 暗灰褐色土 | ローム粒子まばら |
| 3 | 黒褐色土 | |
| 4 | 暗灰褐色土 | ローム粒子多量 |
| 5 | 暗褐色土 | 壁溝覆土 ローム粒子 |
| 6 | 暗灰褐色土 | Pit2覆土 ローム粒子まばら |
| 7 | 灰褐色土 | Pit2覆土 ローム粒子 |
| 8 | 黒褐色土 | Pit5覆土 ロームブロック多量 |
| 9 | 暗灰褐色土 | Pit7覆土 |
| 10 | 灰褐色土 | Pit7覆土 ロームブロック |
| 11 | 黒色土 | Pit7覆土 ロームブロック・ローム粒子 |
| 12 | 灰褐色土 | Pit7覆土 ローム粒子 |
| 13 | 崩落ローム | Pit7覆土 |
| 14 | 暗灰褐色土 | Pit9覆土 ローム粒子 |

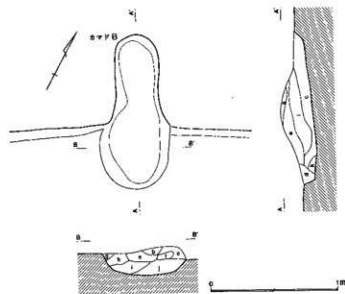
0 3m

第51図 第37号住居跡カマド



第37号住居跡 カマドA

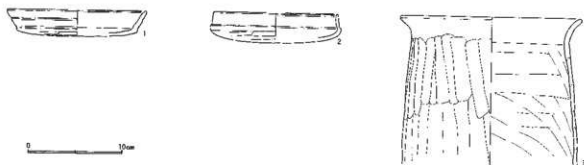
- a 黄灰色土 天井部崩落 焼土粒子多量
- b 暗灰色土 天井部崩落
- c 白色粘土 天井部 暗灰色土・ロームブロックの混ざり
- d 暗黄灰褐色土
- e 赤色焼土 カマド燃焼部
- f 暗黄灰褐色土 ロームブロック
- g 暗灰色土 煙道部流入土 赤色焼土
- h 暗灰色土
- i 暗灰色土 袖部 白色粘土が粒下状に混入 焼土粒子少量
- j 暗灰色土 袖部 焼土粒子
- k 暗褐色土 袖部 焼土粒子
- l 暗褐色土 袖部 ローム粒子・炭化物粒子少量
- m 暗灰色土 袖部 ブロック状焼土多量
- n 暗褐色土 ロームをブロック状に含む



第37号住居跡カマドB

- a 白色粘土+黒褐色土
- b 暗灰色土 天井部 ローム粒下・焼土粒少量
- c 暗灰色土 天井部 白色粘土をブロック状に含む 黒色土混入
- d 暗灰色土 天井部崩落 ローム粒子・赤色焼土粒子まばら
- e 灰褐色土 天井部 赤色焼土塊・白色粘土粒子多量
- f 暗灰色土 天井部 白色粘土(ブロック状)
- g 灰褐色土 天井部崩落
- h 灰褐色土 天井部崩落 赤色焼土ブロック
- i 暗灰色土 赤色焼土多量
- j 赤色焼土 煙道部 灰褐色土まばら
- k 暗灰色土 ロームブロック

第52図 第37号住居跡出土遺物



第37号住居跡出土遺物 (第52図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(14.5)	(2.7)		WB	B	にふい揚	5	床直
2	環	(13.0)	(2.9)		WB片	B	にふい橙	5	カマド
3	甕	(19.0)	(15.5)		BR	B	にふい黄橙	50	カマド

第38号住居跡 (第53・54図)

P-48・Q-48グリッドに位置し、残存状態が悪く、東壁・南壁は確認されていない。

平面形態が方形で、カマドは北壁中央(カマドA)と西壁中央(カマドB)に1基ずつ設置されている。カマドBには袖部が確認できないことから、カマドB廃絶後、カマドAを付け替えたものと判断した。南北長5.54m、東西長5.51m、深さ0.33mで、カマドAを主軸とした方向はN-28°-Wを測る。

カマドAは礫を混入した白色粘土によって構築され、燃焼部が住居跡壁上に位置するタイプのものである。煙道部は短い。カマドBは白色粘土によって構築され、粘土には礫を混入していない。カマドAと同様に、燃焼部の一部が住居跡の壁外に出るタイプで

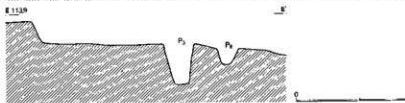
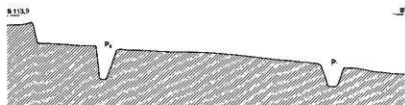
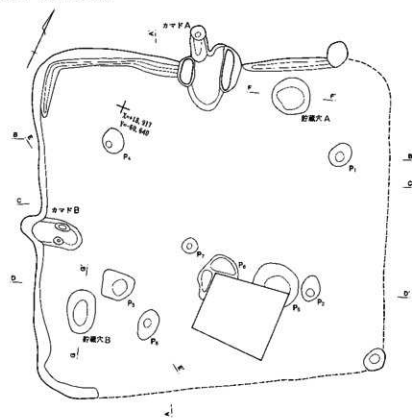
ある。

貯蔵穴も2基検出されている。貯蔵穴AはカマドAの東脇に、貯蔵穴BはカマドBの南脇に位置している。カマドと貯蔵穴はそれぞれ対応するものと考えられる。貯蔵穴Aは平面形態が円形で、南北0.58m、東西0.61m、深さ0.42mである。貯蔵穴Bは平面形態が楕円形で、南北0.70m、東西0.44m、深さ0.36mである。

壁溝は北壁のみ巡り、幅は0.18mである。確認されたピットは8本で、P1・P2・P3・P4が柱穴である。

遺物は少なく、須恵器の蓋、土師器の坏類・甌と土錘1点が出土している。時期は古墳時代後期に比定される。

第53図 第38号住居跡



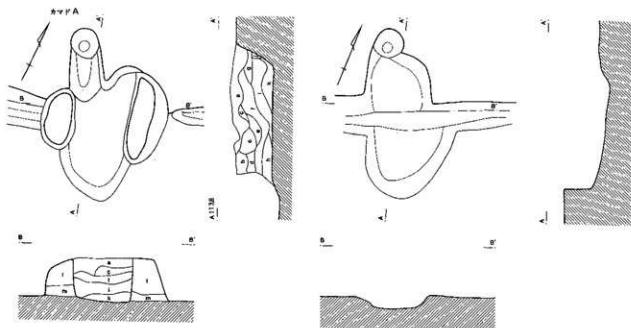
第38号住居跡貯蔵穴A

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子・炭化物少量
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量

第38号住居跡貯蔵穴B

- 4 黒褐色土 ローム粒子多量
- 5 黒褐色土 ローム粒子少量

第54図 第38号住居跡カマド

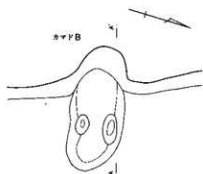


第38号住居跡カマドA

- a 白色粘土 天井部 礎多量
- b 暗茶褐色土 天井部 白色粘土
- c 暗茶褐色土 天井部 白色粘土・焼土粒子多量
- d 暗茶褐色土
- e 暗茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量
- f 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子少量

- g 暗褐色土 焼土粒子少量
- h 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子
- i 暗褐色土 焼土ブロック状
- j 白色粘土
- k 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
- l カマド軸部 白色粘土 礎
- m 暗茶褐色土 軸部 焼土粒子・ローム粒子少量

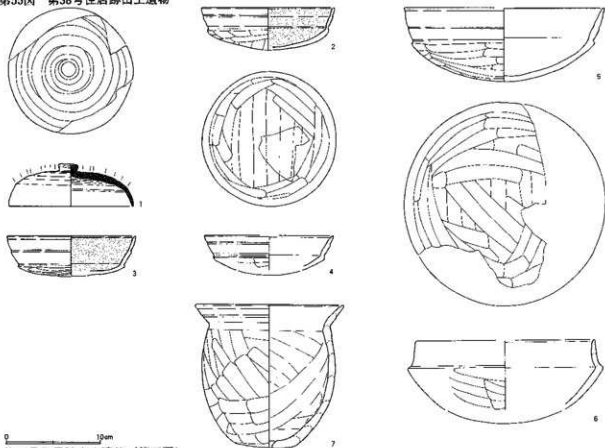
第38号住居跡カマドB



- a 灰褐色土 天井部 粘土ブロック (厚20-30mm) 粘土粒子多量
- b 灰褐色土 天井部 ローム粒子・粘土粒子多量
- c 暗灰褐色土 煙道部 炭まじり 白色粘土
- d 灰褐色土 天井部 ローム粒子・赤化粘土粒子多量
- e 暗灰褐色土 煙道部 ローム粒子・白色粘土粒子多量
- g 白色粘土 構築材
- f 暗灰褐色土 煙道部 ローム粒子多量
- h 暗灰褐色土 構築材 白色粘土塊

0 1m

第55図 第38号住居跡出土遺物



第38号住居跡出土遺物 (第55図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	13.2	4.5		WB片	B	灰白	80	
2	坏	14.1	(3.4)		WBR	B	黒褐	90	内面黒色処理
3	坏	13.6	(4.2)		WB	B	黒褐	45	内面黒色処理
4	坏	(13.6)	(3.6)		WB	B	にぶい黄橙	10	
5	鉢	(21.2)	7.8		W	B	黒褐	50	
6	鉢	19.0	(7.2)		WB	B	にぶい赤褐	5	
7	甌	15.6	(15.0)	(6.8)	WB	B	橙	85	

第39号住居跡 (第56図)

T-63グリッドに位置し、大半の部分が調査区外である。第40号住居跡と重複し、第39号住居跡の方が新しい。

平面形態が方形で、東壁の方向はN-21'-Wを測る。南北長2.22m、深さ0.58mで、規模が小さい。壁溝は北壁から東壁に巡り、幅0.18m、深さ0.08mである。確認されたピットは2本で、いずれも主柱穴である。カマドや貯蔵穴等の施設は検出されていない。埋没状況は自然堆積である。

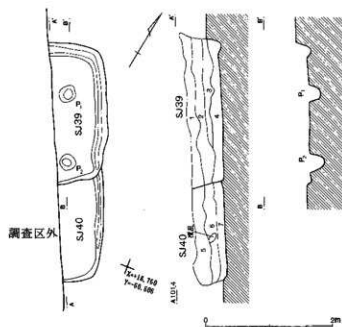
遺物はきわめて少なく、図示し得るものはない。

第40号住居跡 (第56図)

T-63・64グリッドに位置し、大部分が調査区外で、第39号住居跡と重複している。

平面形態は方形であるが、規模は不明である。深さ0.49m、東壁の方向はN-21'-Wを測る。壁溝が東壁に巡り、幅0.13m、深さ0.07mである。カマド・貯蔵穴・ピット等の施設は確認されていない。埋没状況は自然堆積で、このことから後続する第39号住居跡は第40号住居跡埋没後に構築されていると判断した。遺物はきわめて少なく、図示し得るものはない。

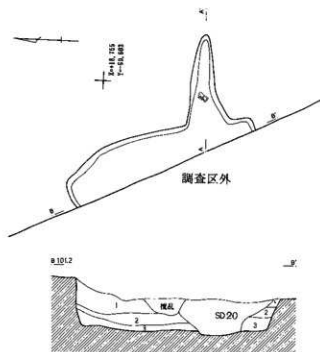
第56図 第39・40号住居跡



第39・40号住居跡

- | | | |
|---|-------|---------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子微量 |
| 2 | 黒褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子少量 |
| 3 | 暗茶褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子微量 茶褐色土粒子多量 |
| 4 | 黒褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子少量 1・2層に比べしまり弱い |
| 5 | 黒褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子微量 |
| 6 | 黒褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子少量 |
| 7 | 暗茶褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子・茶褐色土粒子少量 |

第57図 第41号住居跡



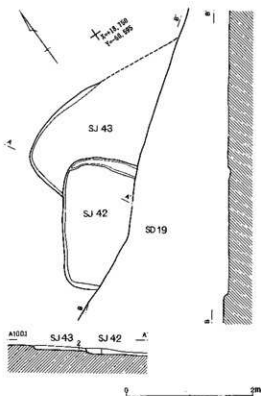
第41号住居跡

- | | | |
|---|-------|--------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子微量 |
| 2 | 黒褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子少量 |
| 3 | 暗茶褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子微量 |

第41号住居跡カマド

- | | | |
|---|-------|--------------------|
| a | 暗茶褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量 |
| b | 暗茶褐色土 | a層より焼土粒子多量 |
| c | 焼土層 | |
| d | 黒色土 | 炭化物粒子多量 |

第58図 第42・43号住居跡



第42・43号住居跡

- 1 黒褐色土 焼土粒多・炭化物粒少
- 2 黒褐色土: ローム粒多

第41号住居跡 (第57図)

T-64グリッドに位置し、大部分が調査区外である。第20号溝跡と重複する。

平面形態が方形で、カマドは東壁南東コーナー部付近に設置されている。南北幅3.13m、深さ0.82mで、主軸方向はN-64°-Eを測る。埋没状況は自然堆積である。

カマドの主軸方向は住居東壁に直交せず、カマドの主軸方位はN-87°-Eを測る。燃焼部が住居跡壁外に存在するタイプで、白色粘土によって構築されている。火床面・煙道部壁は比較的よく焼けている。貯蔵穴・壁溝・ピットなどの施設は検出されていない。

遺物はきわめて少なく、図示し得るものはない。

第42号住居跡 (第58図)

U-65グリッドに位置し、第43号住居跡と第19号溝跡と重複している。新旧関係は第43号住居跡より新しく、第19号溝跡より古い。

平面形態が方形で、カマドは検出されていない。南北長2.08m、深さ0.15mで、西壁の方向はN-35°-Eを測る。壁溝は北壁に廻り、幅0.16m、深さ0.03mである。貯蔵穴・ピット等の施設は確認されていない。

出土遺物はきわめて少なく、図示し得るものはない。

第43号住居跡 (第58図)

U-65グリッドに位置し、第42号住居跡と第19号溝跡に切られている。残存状態がきわめて悪く、北西コーナー部のみが検出された。

平面形態は方形で、平面規模は不明である。深さは0.06mを測る。カマド・貯蔵穴・壁溝・ピット等の施設は確認されていない。

出土遺物はきわめて少なく、図示し得るものはない。

第44号住居跡 (第59図)

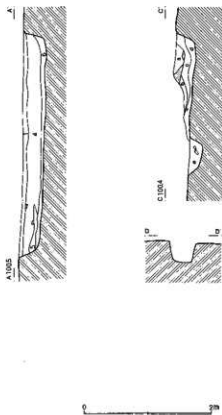
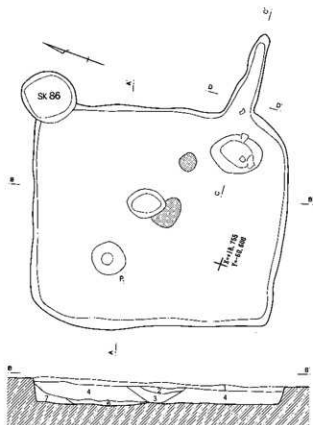
T-64・U-64グリッドに位置し、第86号土坑に切られている。埋没状況は自然堆積であるが、埋没途中で窪みを利用した製鉄遺構が構築されている(第151図)。このため、重複する第51号住居跡との新旧関係は微妙である。さらに完全に埋没する前に、ピットが1本掘り込まれている(第2・3層)。

平面形態が方形で、カマドは東壁の南東コーナー付近に設置されている。主軸長3.44m、南北幅3.98m、深さ0.43mで、主軸方向はN-86°-Eを測る。

カマドの主軸方向が住居東壁に直交せず、燃焼部が住居跡壁外に存在するタイプである。白色粘土によって構築され、燃焼部・壁・天井部はよく焼けている。カマドの前面上には土坑状の窪みが存在する。確認されたピットは1本で、主柱穴である。貯蔵穴・壁溝は検出されていない。床面は硬く縮り、2カ所焼土化した部分がある。

出土遺物は少なく、須臾器類を図示し得た。ほかには土錘1点と、土師器台付甕片も出土している。時期は平安時代に比定される。

第59図 第44号住居跡



第44号住居跡

- 1 黒褐色土 浅間B混入 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 2 黒色土 浅間B・焼土粒子・炭化物粒子多量
- 3 暗茶褐色土 浅間B・焼土粒子・炭化物粒子・質土粒子少量
- 4 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量
- 5 炭化物層 住居跡材の標識?
- 6 暗茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子微量
- 7 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量

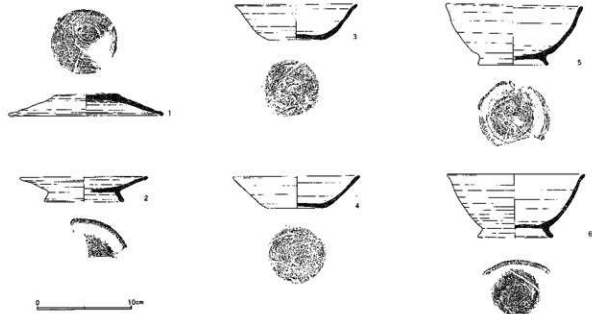
第44号住居跡カマド

- a 煙道天井部 一部は焼土化
- b 黒褐色土 焼土多量
- c 暗茶褐色土 焼土・炭化物多量
- d 黒褐色土 焼土・炭化物多量
- e 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量

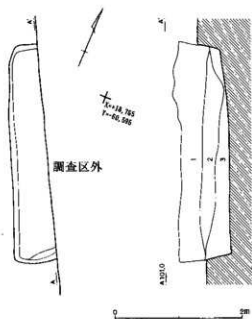
第44号住居跡出土遺物 (第60図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(16.1)	(2.3)	(6.9)	WB	A	灰白	80	
2	高台付甕	(13.6)	(2.6)	(8.3)	WB	B	灰オリーブ	20	
3	環	(12.8)	(3.7)	(5.9)	WR片	B	灰黄	80	
4	環	(13.3)	(3.4)	5.7	WB	A	灰	60	
5	高台付甕	(14.4)	(6.3)	7.2	WB片	A	灰	70	
6	高台付甕	14.6	6.7	(7.9)	W	B	灰オリーブ	80	

第60图 第44号住居跡出土遺物



第61图 第45号住居跡



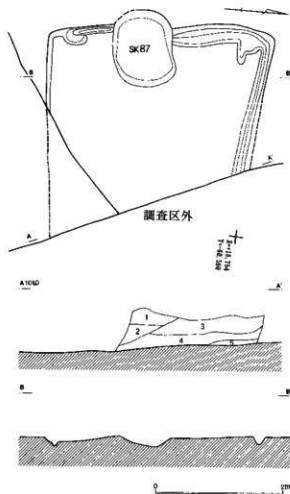
第45号住居跡

- 1 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量 浅間B
- 2 暗茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・黄褐色土粒子少量
- 3 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子微量 黄褐色土粒子多量

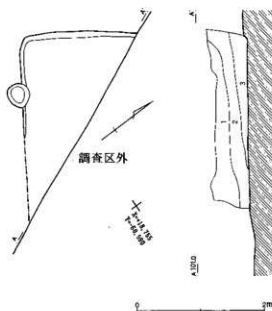
第46号住居跡

- 1 黒褐色土 白色火山灰粒子やや多量 礫(径5~10mm)多量
- 2 黒褐色土 白色火山灰粒子少量 1層より礫(径5~10mm)多量
- 3 明茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色火山灰粒子やや多量
- 4 明茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色火山灰粒子少量
- 5 黒褐色土+ローム土

第62图 第46号住居跡



第63図 第47号住居跡



第47号住居跡

- 1 明茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色火山灰粒子多量
- 2 暗茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色火山灰粒子少量
(1層に比べ人変少ない)
- 3 暗茶褐色土+ローム土混合層

第45号住居跡 (第61図)

U-63グリッドに位置し、大部分が調査区外である。平面形態が方形で、南北長3.43m、深さ0.84mを測る。西壁の方向はN-22°-Wである。埋没状況は自然堆積である。

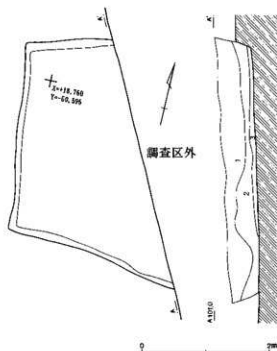
壁溝は南壁に確認され、幅0.15m、深さ0.02mである。カマド・貯蔵穴・ピット等の施設は検出されていない。出土遺物はきわめて少なく、図示し得るものはない。

第46号住居跡 (第62図)

U-64グリッドに位置し、東半部が調査区外である。重複する第47号住居跡より新しく、第88号土坑、第19号溝跡より古い。

平面形態は方形を呈し、カマドは検出されていない。南北長3.46m、深さ0.63mで、西壁の方向はN-07°-Wを測る。埋没状況は自然堆積である。

第64図 第48号住居跡



第48号住居跡

- 1 明茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色火山灰粒子多量
- 2 暗茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 3 暗茶褐色土とローム土

壁溝は西壁から北壁に回り、幅0.20m、深さ0.12mである。貯蔵穴・ピット等の施設は確認されていない。出土遺物はきわめて少ない。

第47号住居跡 (第63図)

U-64グリッドに位置し、大半が調査区外である。重複する第46号住居跡には切られている。

平面形態は方形である。北東コーナー部分のみが検出されているため、平面規模は不明である。深さ0.64mで、北壁の方向はN-35°-Eを測る。埋没状況は自然堆積である。

カマド・貯蔵穴・壁溝・ピットなどの施設は確認されていない。また西壁にピットが存在するが、本住居跡には伴わない。

出土遺物はきわめて少ない。第46・47号住居跡の一括資料として、鉄製刀子1点・土鍬3点がある。

第48号住居跡 (第64図)

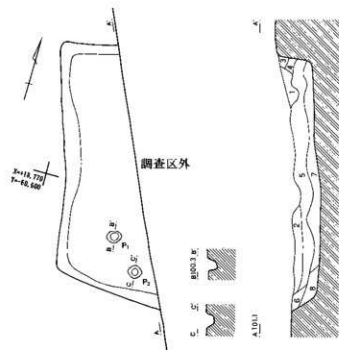
U-63・64グリッドに位置し、東半部が調査区外である。

平面形態は台形で、西壁長2.94m、深さ0.58mであ

る。西壁の方向はN-07°-Wを測る。埋没状況は自然堆積である。カマド・貯蔵穴・壁溝・ピットなどの施設は確認されていない。

出土遺物はきわめて少なく、図示し得るものはない。

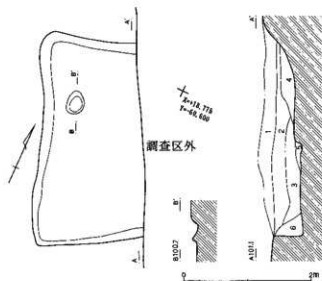
第65図 第49号住居跡



第49号住居跡

- 1 暗灰褐色土 黒褐色に近い 白色砂粒(火山灰?)多量
- 2 暗褐色土 焼土粒さまばら 白色砂粒(火山灰?)多量
- 3 暗褐色土 白色砂粒(火山灰?)多量
- 4 暗灰褐色土 白色砂粒(火山灰?)多量
- 5 黒褐色土 炭化物粒子・焼土粒さまばら 白色砂粒多量
- 6 暗灰褐色土 白色砂粒(火山灰?)多量
- 7 暗灰褐色土 砂質ローム地山上多量 白色砂粒(火山灰?)多量
- 8 暗灰褐色土 黒褐色土 地山ローム上ブロック多量 白色砂粒(火山灰?)多量

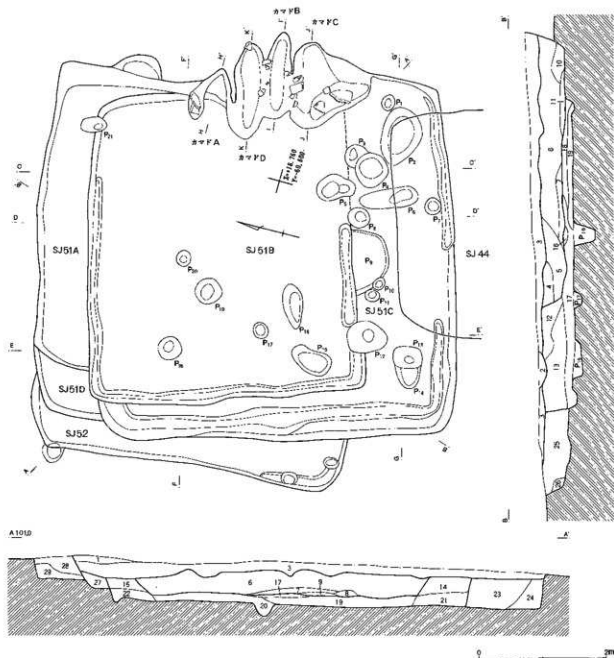
第66図 第50号住居跡



第50号住居跡

- 1 暗褐色土 炭化物粒子・赤色焼土粒多量
- 2 黒褐色土 地山ローム粒多量
- 3 暗褐色土 細かな砂質ローム地山上ブロック・白色砂粒(火山灰?)
- 4 砂質ローム地山土+暗灰褐色土
- 5 砂質ローム地山土+暗灰褐色土
- 6 暗灰褐色土 砂質ローム地山上多量

第67図 第51・52号住居跡



第49号住居跡 (第65図)

U-62・63グリッドに位置し、東側の大半が調査区外である。

平面形態は南壁が広がる台形で、西壁長3.57m、深さ0.53mである。西壁の方向はN-14°-Wを測る。埋没状況は自然堆積である。

確認されたピットは2本であるが、いずれも用途は不明である。カマド・貯蔵穴・壁溝などの施設は検出

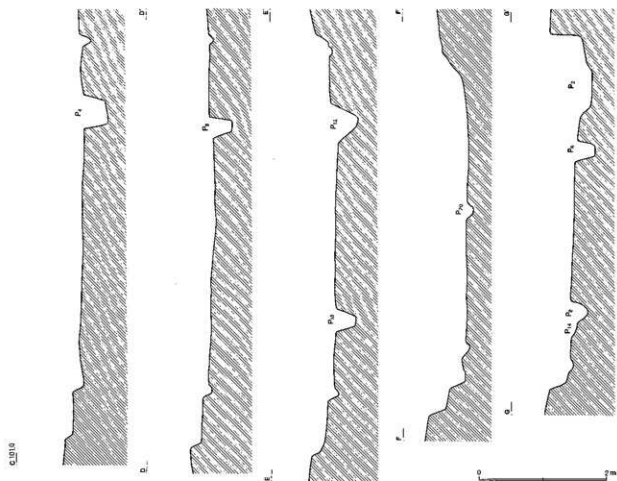
されていない。

出土遺物はきわめて少なく、図示し得るものはない。

第50号住居跡 (第66図)

T-62・U-62グリッドに位置し、東半部は調査区外である。

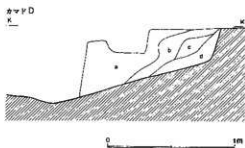
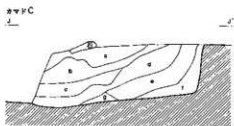
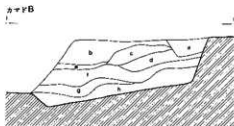
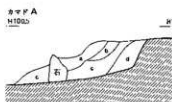
平面形態は方形を呈し、南北長3.19m、深さ0.70mである。西壁の方向はN-26°-Wを測る。覆土は自然



第51・52号住居跡

- | | | | | | |
|----|-------|---------------|----|--------|---------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 焼土粒子まばら | 16 | 暗灰褐色土 | 炭・白色粘土 |
| 2 | 黒褐色土 | 焼土粒子まばら | 17 | 淡茶灰色粘土 | |
| 3 | 暗灰褐色土 | 焼土粒子まばら | 18 | 暗褐色土 | 白色粘土 線状 |
| 4 | 暗灰褐色土 | 白色粘土粒子・焼土粒子多量 | 19 | 淡黄色粘土 | 上面に炭層 白色粘土 |
| 5 | 暗褐色土 | 焼土粒子多量 | 20 | 暗灰褐色土 | 白色粘土塊多量 |
| 6 | 暗褐色土 | 焼土粒子・炭化物多量 | 21 | 白色粘土 | 炭 |
| 7 | 暗灰褐色土 | 炭まばら | 22 | 暗茶褐色土 | 卑緩 白色粘土塊 旧住居埋土 |
| 8 | 暗灰褐色土 | 白色粘土 | 23 | 白色粘土 | カマドのくすれ |
| 9 | 淡黄色粘土 | | 24 | 暗褐色土 | |
| 10 | 黒褐色土 | 白色粘土・焼土多量 | 25 | 暗褐色土 | 焼土粒子・粘土粒子まばら |
| 11 | 暗褐色土 | 白色粘土粒子多量 | 26 | 黒褐色土 | |
| 12 | 暗灰褐色土 | 焼土粒子・粘土粒子多量 | 27 | 暗茶褐色土 | 焼土粒子・白色粘土塊 |
| 13 | 暗灰褐色土 | 焼土粒子・粘土粒子多量 | 28 | 黒褐色土 | 焼土粒子・炭化物粒子・白色粘土粒子少量 |
| 14 | 淡灰褐色土 | 焼土粒子多量 | 29 | 暗茶褐色土 | ローム粒子・炭化物粒子少量 |
| 15 | 暗茶褐色土 | 白色粘土塊・焼土粒子多量 | | | |

第68図 第51号住居跡カマド



堆積で、緩斜面上方の北壁側から埋没していった状況を看取できた。

確認されたピットは1本である。この他のカマド・貯蔵穴・壁溝などの施設は検出されていない。

出土遺物はきわめて少なく、図示し得るものはない。

第51号住居跡 (第67・68図)

T-63・64・U-63・64グリッドに位置する、4軒重複の住居跡である。最上層全面に覆土1~3か覆っていたため、平面で確認できた重複関係は第52号

第51号住居跡カマドA

- a 黒褐色土 焼土粒子多量
- b 暗茶褐色土 焼土粒子・白色粘土粒子微量
- c 黒褐色土+白色粘土(カマド構築材) 焼土粒子・炭化物粒子微量
- d 黒褐色土 白色粘土粒子微量

第51号住居跡カマドB

- a 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- b 白色粘土層 天井部 焼土粒子・炭化物粒子・白色粒子(浅間B?)少量
- c 明茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色粘土少量
- d 暗茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色粘土少量
- e 焼土層 カマド天井部内壁面の焼土化
- f 暗茶褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子多量
- g 暗茶褐色土 焼土粒子・白色粘土多量
- h 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量

第51号住居跡カマドC

- a 白色粘土 天井部 焼土粒子・炭化物粒子・白色粒子少量
- b 白色粘土+黒褐色土 天井部 焼土粒子少量
- c 白色粘土 天井部 焼土をブロック状に含む
- d 暗茶褐色土 焼土粒子・白色粘土粒子多量
- e 暗茶褐色土 焼土粒子・白色粘土少量
- f 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
- g 暗茶褐色土 ローム粒子多量

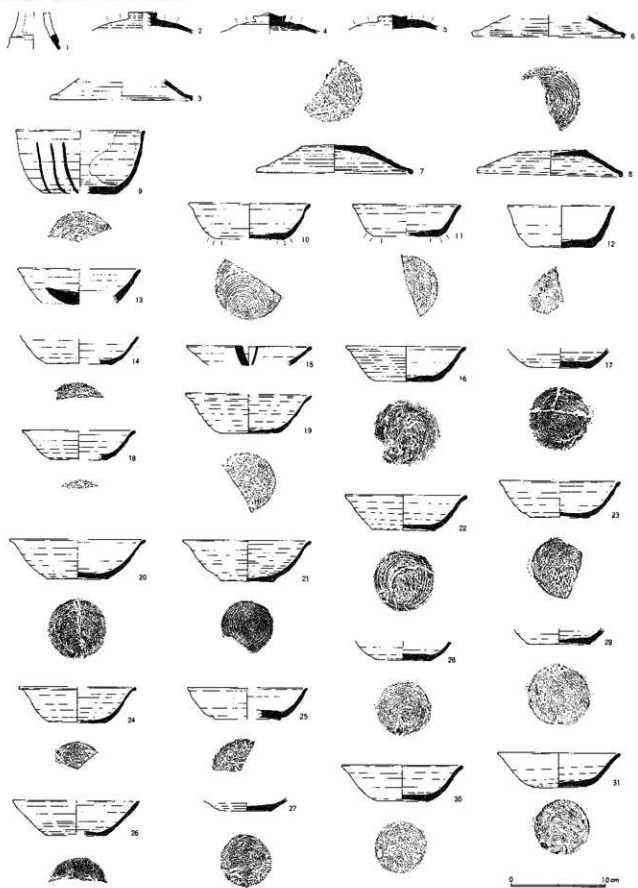
第51号住居跡カマドD

- a カマドBの抽部
- b 黒褐色土 白色粘土をブロック状に含む
- c 黒褐色土 白色粘土多量 焼土粒子少量
- d 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量

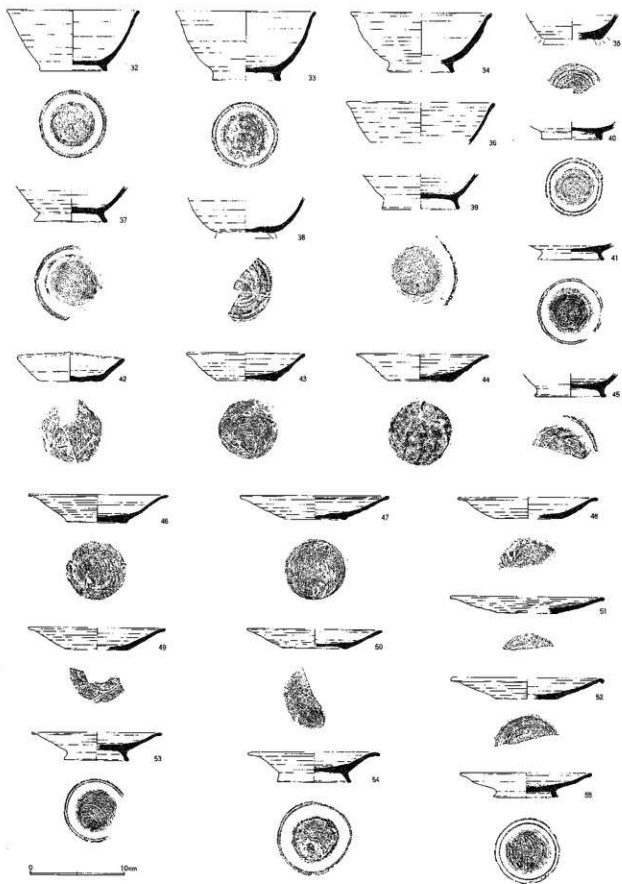
住居跡のみであった。断面観察からはA→B→C→Dの順で構築時期が廻り、第52号住居跡はさらに古い。住居跡と覆土との対応関係は、第4~11層が第51-A号住居跡、第12~22層が第51-B号住居跡、第23~26層が第51-C号住居跡、第27層が第51-D号住居跡、第28・29層が第52号住居跡である。

調査時には埋没状況を把握することができなかったが、覆土の堆積状況と出土遺物に極端な時期差が見られないことから、人為的に埋め戻されているものと考えるのが妥当である。またA・B・C・Dの4軒が単に住

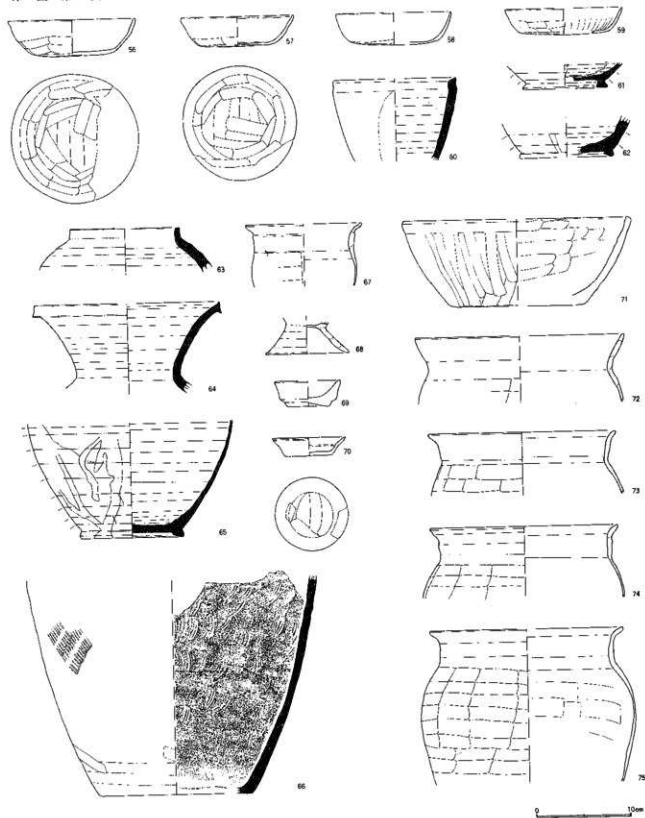
第69图 第51号住居跡出土遺物(1)



第70図 第51号住居跡出土遺物(2)



第71図 第51号住居跡出土遺物(3)



第51号住居跡出土遺物 (第69・70・71図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎七	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	高坏		(3.8)		WB	B	灰黄	5	長脚二段三方透かし	
2	蓋		(2.2)		W片	B	暗灰炭	10		
3	蓋	(15.0)	(2.2)		W	A	灰	10	カマド	
4	蓋		(2.2)	(3.4)	W片	B	暗灰黄	10		
5	蓋		1.5		WB	B	灰	40		
6	蓋	(15.9)	(2.3)		W	A	灰	5		
7	蓋	(16.4)	3.0	(7.0)	WB片	A	灰白	60		
8	蓋	15.1	2.7	7.3	WB	A	灰白	60		
9	碗	(13.7)	6.7	(7.7)	WR片	A	灰白	30		火だすき風の砥鉢 自然釉の付着
10	坏	(12.7)	(3.8)	(7.4)	WB	A	灰オリーブ	40		
11	坏	(11.4)	3.4	(6.9)	WB	A	灰白	30		周辺回転ケズリ
12	坏	(11.2)	(4.4)	(6.7)	WBR片	C	浅黄	20		火だすき風の砥鉢
13	坏	(12.9)	(3.6)		WB	A	灰	5		
14	坏		(3.0)	(7.1)	WBR	C	褐	10		
15	坏	13.2	(2.1)		WB	A	灰白	5		
16	坏	12.6	3.7	6.5	WB	C	灰オリーブ	80		
17	坏		(2.1)	6.1	WBR片	C	灰黄	30		
18	坏	(11.9)	(3.1)	(5.9)	W片	A	灰	20		
19	坏	(13.4)	(4.0)	(6.2)	WB	A	灰	40		
20	坏	(14.3)	4.1	6.4	WBR	C	黒褐	60		
21	坏	13.5	4.3	5.6	WB	A	灰白	70	焼け済み著しい	
22	坏	12.7	3.7	6.6	W片	B	灰	100		
23	坏	(12.6)	3.8	(6.4)	WB	B	にょい赤褐	45		
24	坏	(12.3)	(3.7)	(6.2)	WB	A	黄灰	15		
25	坏	(12.6)	(3.3)	(7.1)	W片	B	灰	15		
26	坏	(13.3)	(3.7)	(6.2)	BR片	C	にょい褐	20		土師質
27	坏		(1.4)	5.5	WB	A	灰黄	10		
28	坏		(2.0)	5.7	W	B	黄白	30		
29	坏		(1.7)	6.5	WB	A	灰白	30		
30	坏	12.7	3.8	5.5	WB片	B	暗赤褐	100		
31	坏	(12.8)	(3.65)	5.8	W片	B	暗赤褐	85		
32	高台付碗	13.9	6.4	7.2	WBR	C	灰黄褐	80	焼け済み著しい	
33	高台付碗	(14.7)	(7.3)	(7.1)	W片	B	灰	60		
34	高台付碗	(15.0)	(6.2)	(7.2)	WB片	B	黄灰	10		
35	高台付碗		(2.75)	(6.0)	WR	B	灰	10		
36	高台付碗	(15.5)	(4.4)		WB	A	灰	5		
37	高台付碗		(3.8)	(7.7)	W	A	灰	60		
38	高台付碗		(3.7)	(6.2)	WBR	C	浅黄	30		
39	高台付碗		(3.2)	8.0	WBR片	B	灰黄	40		
40	高台付碗		(1.9)	6.3	WB	B	灰白	30		
41	高台付碗		(1.8)	7.0	W	B	灰白	20		
42	坏	11.2	3.1	6.6	WB	B	黒褐	95		
43	坏	(12.4)	(3.0)	(6.3)	WB片	A	灰	85		
44	坏	(13.9)	2.8	7.0	WB	C	浅黄	55		
45	高台付碗		(2.5)	(7.3)	WB	B	灰黄褐	15		
46	坏	14.7	2.9	6.4	WBR	C	にょい橙	85		
47	坏	15.6	2.5	6.5	WB	A	灰オリーブ	100		
48	坏	(14.6)	(2.2)	(6.9)	WB	B	灰	40		
49	坏	(14.4)	(2.4)	(6.3)	WB片	A	灰	20		
50	坏	(14.3)	(2.0)	(6.8)	WB片	B	黒褐	40		
51	皿	(15.9)	(1.7)	(6.5)	WR片	B	にょい黄橙	20		
52	皿	(15.7)	(2.2)	(6.6)	W片	B	暗灰黄	20		
53	高台付皿	(13.7)	(2.9)	(6.8)	WB	A	灰	60		
54	高台付皿	(14.0)	3.2	7.9	WB	C	灰オリーブ	70		
55	高台付皿	13.7	2.7	5.8	WBR片	B	灰黄	85		

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
56	環	13.4	3.8		BR	B	橙	80	
57	環	11.8	3.2		WR	B	暗赤褐	90	
58	環	(12.1)	(3.4)		BR	B	橙	15	
59	環	(12.4)	(2.7)		WBR	B	によい褐	10	内面に放射状暗文
60	鉢	(12.8)	(8.6)		WB片	B	灰	10	自然釉の付着
61	長頸壺			(8.9)	WB	B	灰白	15	自然釉の付着
62	長頸壺			(9.8)	WB	B	灰白	5	自然釉の付着
63	短頸壺	(11.5)	(4.9)		WB	A	灰	5	
64	長頸壺	(19.6)	(9.5)		W片	A	灰	5	
65	長頸壺		(12.0)	10.8	WB片	A	灰黄	45	自然釉の付着
66	甕		(22.8)	15.8	W片	B	灰	20	立上がり部タキ後ケズリ
67	小型甕	(12.2)	(6.6)		WB	B	によい橙	20	
68	付付甕		(3.8)	8.8	WB	B	によい褐	10	
69	環	(6.8)	(2.8)	(4.4)	B	B	橙	40	ミニチュア
70	かわらけ	7.7	2.0	4.8	BR片	B	によい褐	90	
71	鉢	(23.8)	(19.1)	(19.2)	BR	C	暗赤褐	20	
72	甕	(22.0)	(7.1)		WB	B	によい赤褐	10	カマド
73	甕	(19.6)	(6.6)		WB	B	によい褐	10	
74	甕	(19.7)	(7.7)		WB	B	によい赤褐	15	
75	甕	(20.3)	(16.2)		WBR	B	によい褐	15	

居跡が重複したものなのか、あるいは拡張されたものなのかの判断は困難であった。構築順序と平面位置からは4軒が重複したものと判断される。ただし、これに遺物から導かれる時間的な問題も加味しなければならぬ。そこで、通常の住居跡では増築で対応するところを、本住居跡では建替え(新築)を行っていたものと捉えられる。カマドが住居跡の数に対応して4基検出されていることも傍証となる。

カマドはいずれも東壁に設置され、カマドの新旧関係からカマドAが第51-A号住居跡に、カマドBが第51-B号住居跡に、カマドCが第51-C号住居跡に、カマドDが第51-D号住居跡にそれぞれ対応するものと考えられる。

第51-A号住居跡は、平面形態が方形である。主軸長4.46m、深さ0.61mで、主軸方位はN-82°-Eを測る。カマドは白色粘土によって構築し、芯材に扁平な礫を用いている。また支脚にも礫を用いている。壁溝や貯蔵穴等の施設は確認されていない。

第51-B号住居跡も、平面形態が方形である。主軸長4.58m、南北幅4.40m、深さ0.64mで、主軸方位はN-77°-Eを測る。カマドは白色粘土によって構築され、内面はよく焼けている。壁溝は北壁中央か

ら南壁中央に掛けて巡り、幅0.20m、深さ0.08mである。貯蔵穴等の施設は確認されていない。

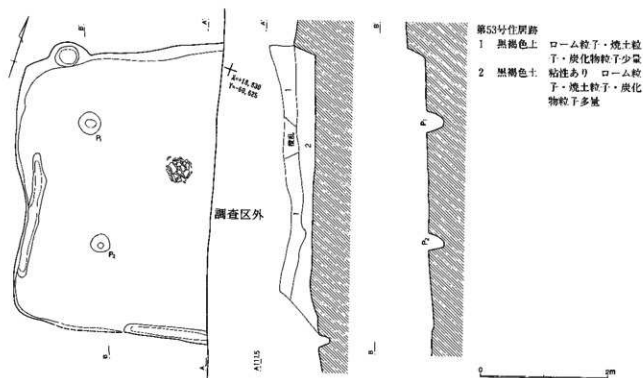
第51-C号住居跡も、平面形態が方形である。主軸長5.48m、南北幅5.54m、深さ0.48mで、主軸方位はN-75°-Eを測る。カマドは白色粘土によって構築され、芯材に礫が多用されている。内面はよく焼けている。壁溝は北西コーナーから南壁に巡り、南壁中央では一部途切れている。幅0.20m、深さ0.16mである。貯蔵穴は明確ではないが、カマド南壁に所在するP2としたものが相当する可能性がある。

第51-D号住居跡も平面形態が方形であるが、北西コーナー部分のみの検出のため、平面規模は明確ではない。カマドの主軸方位はN-65°-Eを測る。カマドは白色粘土によって構築され、比較的煙道部の長いタイプのものである。壁溝や貯蔵穴などの施設は確認されていない。

ピットは21本検出されているが、A・B・C・Dの住居跡との対応関係は明らかではない。

遺物は比較的多く、須恵器の環類・甕類、土師器の環類・甕類と、鉄製刀子2点・鉄製鎌1点・砥石2点が出土している。しかしこれらの遺物個々の帰属する住居跡は明確ではない。

第72図 第53号住居跡



第52号住居跡 (第67図)

T-63・64グリッドに位置し、大半の部分が第51号住居跡に切られている。

平面形態は方形を呈している。南北長5.06m、深さ0.38mで、西壁の方位はN-92°-Wを測る。壁溝は南西コーナー部のみ検出されている。幅0.22m、深さ0.09mで、ピット2本を伴っている。カマドや貯蔵穴等の施設は確認されていない。

本住居跡に明確に伴う出土遺物はきわめて少なく、図示し得るものはない。

第53号住居跡 (第72図)

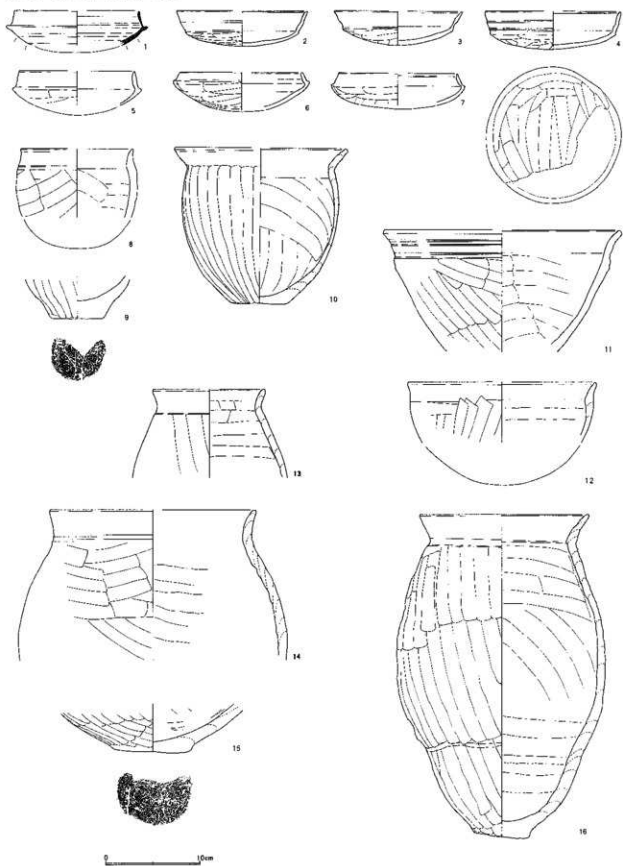
R-56・57グリッドに位置し、東半部は調査区外である。

平面形態が方形で、カマドは検出されていない。南北長4.72m、深さ0.84mで、西壁の方向はN-20°-Wを測る。埋没状況は自然堆積である。

壁溝は南壁・西壁に部分的に残り、幅0.20m、深さ0.18mである。確認されたピットは2本で、いずれも支柱穴である。貯蔵穴は見られなかった。

遺物は須恵器の坏、土師器の坏・鉢・甕・壺と石製臼玉2点が出土し、時期は古墳時代後期に比定される。

第73図 第53号住居跡出土遺物



第53号住居跡出土遺物 (第73図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.2)	(3.7)		W	A	灰	10	
2	坏	(13.9)	3.7		WB	B	黒褐	50	
3	坏	(13.5)	(3.6)		BR	A	にぶい褐	40	
4	坏	(14.2)	4.0		BR	B	にぶい褐	60	
5	坏	(12.2)	(3.6)		BR	B	にぶい黄橙	5	
6	坏	(12.9)	(3.9)		W片	B	黒褐	40	
7	坏	(12.6)	(3.3)		W	B	黒褐	20	
8	小型壺	(11.9)	(7.2)		WB片	B	褐	10	
9	小型甕	(4.5)	(5.3)		WB片	B	にぶい赤褐	5	
10	小型甕	(18.0)	(16.4)	5.7	WB片	B	にぶい赤褐	25	
11	鉢	(24.9)	(12.7)		R	B	暗赤褐	10	
12	鉢	(19.8)	(6.4)		WR	B	にぶい褐	10	
13	小型甕	(11.8)	(9.3)		BR片	B	黒褐	5	
14	甕	(21.7)	(15.8)		WBR片	B	褐	5	
15	壺	(5.2)	(18.1)		WB片	B	にぶい褐	5	
16	甕	17.8	34.0	5.8	WR片	C	明褐	90	床直 表面に二次的な粘土の付着

第54号住居跡 (第74・75図)

Q-57・58グリッドに位置し、重複する第55号住居跡を切っている。平面確認では遺構の切り合い関係を見いだすことができず、第54号住居跡と第55号住居跡を1軒の住居跡として調査してしまった。そのため、第55号住居跡の断面観察用のベルト部分のみが検出された。

平面形態は方形で、カマドは東壁に設置されている。主軸長2.68m、深さ0.73mで、主軸方向はN-62°-Eを測る。北壁にはテラス状の高まりが存在する。

カマドは白色粘土で構築されている。貯蔵穴や壁溝・ピット等の施設は確認されていない。

遺物は少なく、土師器の甕類が出土している。時期は、平安時代に比定される。

第55号住居跡 (第74・76・77図)

Q-57・58・R-57・58グリッドに位置し、西壁付近が調査区外である。重複する第54号住居跡には、切られている。

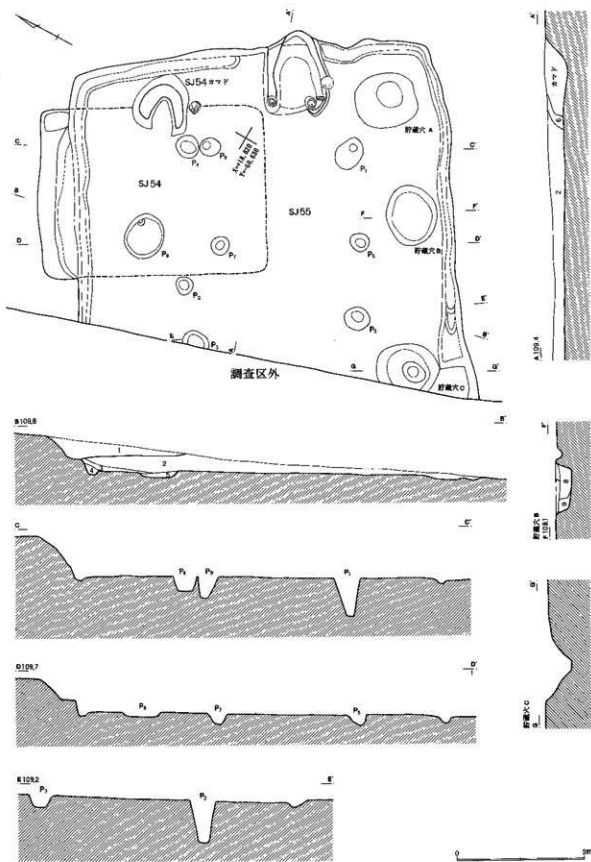
平面形態が方形で、カマドは東壁に設置されている。

南北長5.92m、深さ0.30mで、主軸方向はN-61°-Eを測る。埋没状況は自然堆積で、地形の斜面上方から下方へと埋没していった状況を取ってきた。

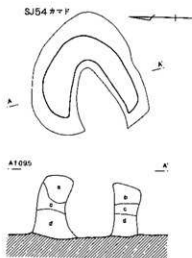
カマドは白色粘土によって構築され、土師器の甕が軸の芯材に使用されている。燃焼部が比較的掘り込まれ、炭化物が多量に検出された。貯蔵穴は3基発見されている。貯蔵穴Aはカマド南脇の南東コーナー部に位置し、平面形態は隅丸方形をしている。南北0.94m、東西0.86m、深さ0.80mの規模である。須恵器の蓋環や土師器の甕が多量に出している。貯蔵穴Bは南壁際中央に位置し、平面形態は円形である。南北0.81m、東西0.96m、深さ0.27mを測る。貯蔵穴Cは南西コーナー部付近に位置し、平面形態は円形である。南北0.98m、深さ0.40mで、円錐状に掘り込まれている。壁溝は調査区内ではカマド部を除き全周し、幅0.25m、深さ0.12mである。確認されたピットは9本で、P1・P2・P3・P4が主柱穴である。

遺物は貯蔵穴Aから出土したものの他に、土師器の坏類・甕類等がある。時期は古墳時代後期に比定される。

第74图 第54・55号住居跡



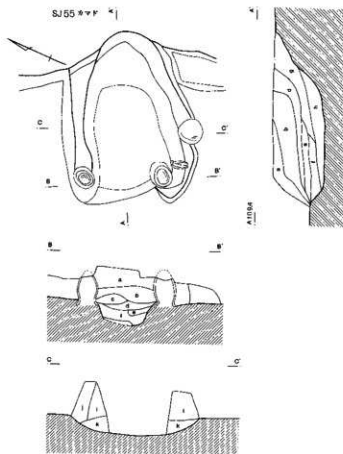
第75図 第54号住居跡カマド



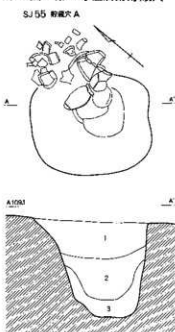
第54号住居跡カマド

- a 白色粘土 袖部
 b 黒色土 袖部 白色粘土
 c 暗褐色土 白色粘土・ローム粒子少量
 d 白色粘土 焼土粒子・炭化物粒子少量

第76図 第55号住居跡カマド



第77図 第55号住居跡貯蔵穴



第55号住居跡カマド

- a 白色粘土 焼土粒子・炭化物粒子少量
 b 白色粘土+暗茶褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
 c 白色粘土層
 d 黒褐色土 焼土多量
 e 黒褐色土 d層にローム多量混入
 f 焼土層
 g 暗茶褐色土+白色粘土 焼土粒子・炭化物粒子多量 ローム粒子少量
 h 黒褐色土 炭化物多量
 i 白色粘土層 袖部
 j 黒褐色土 袖部 焼土粒子少量
 k 黒褐色土 袖部 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量

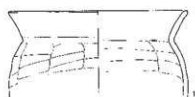
第55号住居跡貯蔵穴A

- 1 明褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
 2 黒褐色土 炭化物粒子多量
 3 黒褐色土 粘性強

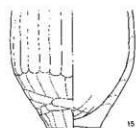
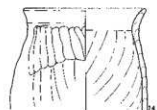
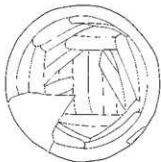
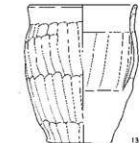
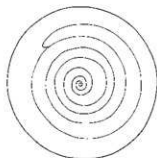
第54・55号住居跡

- 1 明褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子やや多量 焼土粒子少量
 - 4 暗褐色土 壁溝部 ローム粒子多量
 - 5 暗褐色土 ローム粒子多量
 - 6 白色粘土 カマド粘土の流出
 - 7 白色粘土+ローム土 貯蔵穴B覆土
 - 8 明褐色土+ローム土 貯蔵穴B覆土
 - 9 明褐色土 貯蔵穴B覆土 焼土粒子・炭化物粒子微量
- 1・2層面に第54号住居跡床面が部分的に確認できる

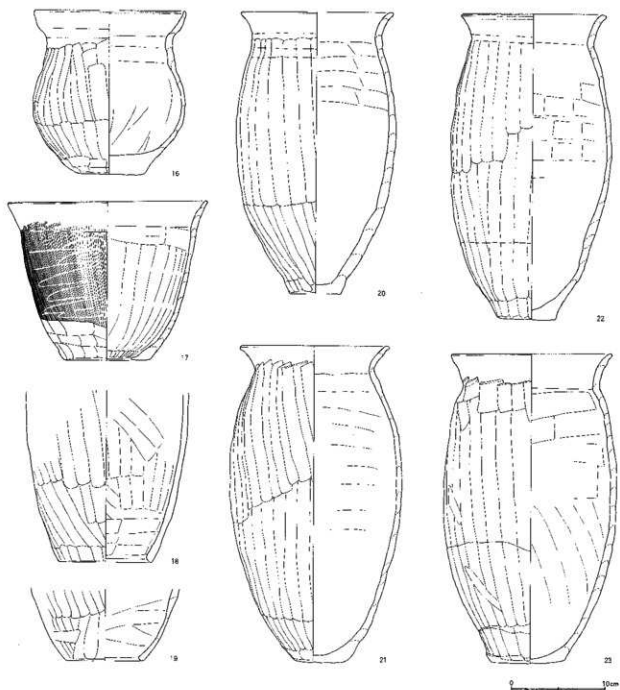
第78図 第54号住居跡出土遺物



第79図 第55号住居跡出土遺物(1)



第80図 第55号住居跡出土遺物(2)



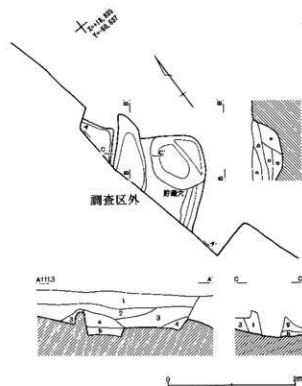
第54号住居跡出土遺物 (第78図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(18.6)	(9.2)		WB	B	にょい橙	30	
2	台付鉢		(3.4)	(9.4)	BR	B	橙	5	

第55号住居跡出土遺物 (第79・80図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	15.2	4.6		WB	A	灰	100	貯蔵穴 A
2	蓋	14.9	5.0		WB 片	A	灰	85	貯蔵穴 A
3	環	13.1	4.8		WBR	A	灰	100	貯蔵穴 A
4	環	16.2	3.9		B	B	黒褐	85	カマド 貯蔵穴 A 内面黒色処理
5	環	11.5	4.5		BR	B	暗赤褐	70	カマド 貯蔵穴 A
6	環	(13.8)	(3.8)		WR	B	にょい褐	15	カマド
7	環	(17.3)	(3.9)		BR	A	にょい黄橙	20	
8	環	(19.9)	(3.7)		WBR	B	暗赤褐	10	
9	環	(13.0)	(4.1)		WB	A	赤褐	20	
10	環	(13.9)	4.1		WBR	B	暗赤褐	25	カマド
11	環	(13.4)	(4.2)	(7.2)	WB	B	にょい黄褐	20	釜の作り損じを底に転用
12	環	12.3	(6.6)		BR 片	B	褐	80	
13	小型甕	11.2	14.6	6.7	WB 片	B	褐	90	
14	小型甕	(12.8)	(10.9)		WB 片	B	にょい赤褐	20	
15	小型甕	(12.3)	(5.6)		WBR 片	B	赤褐	30	貯蔵穴 A
16	小型甕	(15.8)	17.3	6.8	WB 片	B	にょい赤褐	45	
17	甕	20.8	16.8	8.9	WBR 片	B	暗褐	85	貯蔵穴 A
18	甕	(17.8)	(9.7)		WBR 片	B	にょい黄橙	20	
19	甕	(7.6)	(7.8)		WB 片	B	にょい赤褐	5	貯蔵穴 A
20	甕	(15.7)	(29.5)	(5.4)	WBR 片	B	にょい黄褐	45	カマド
21	甕	15.3	33.2	5.3	WB 片	B	にょい赤褐	95	
22	甕	14.8	32.0	6.0	WBR 片	B	橙	95	
23	甕	16.6	32.4	7.8	WBR 片	B	橙	90	

第81図 第56号住居跡



第56号住居跡

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒少量 白色火山灰粒少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子多量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子多量
 - 4 黒褐色土 ローム粒子・炭化物粒子
- 第56号住居跡 カマド
- a 黒褐色土 ローム粒子・炭化物粒少量 白色粘土多量
 - b 黒褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・白色粘土多量 焼土粒子・白色粘土ブロック少量
 - c 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子・白色粘土少量
 - d 黒褐色土 c層よりローム粒子多量
 - e 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒多量 白色粘土・ローム粒子少量
 - f 黒褐色土 袖部 白色粘土
 - g 白色粘土 袖部
 - h 黒色土 ローム粒子

第56号住居跡 (第81図)

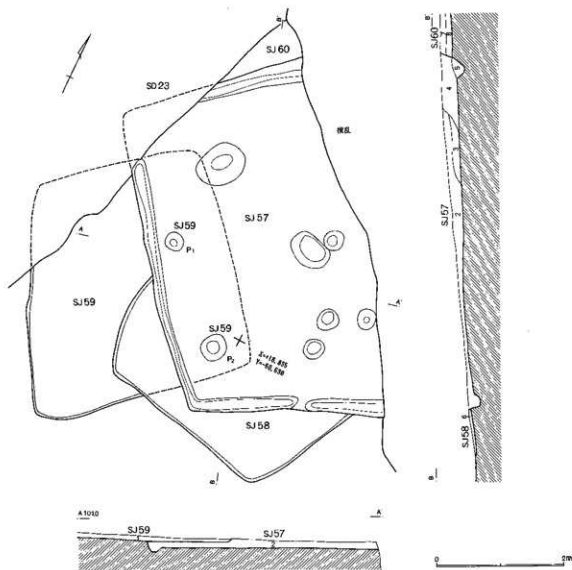
Q-56グリッドに位置している。大部分が調査区外で、南東コーナー付近のみ検出された。

平面形態は方形で、カマドは東壁に設置されている。平面規模は不明であるが、深さ0.67m、主軸方向はN-39°-Eを測る。埋没状況は自然堆積で、地形の斜面上方から下方へと埋没していった状況を看取できた。

第82図 第57・58・59号住居跡

カマドは白色粘土によって構築され、燃焼部が住居内に張出している。貯蔵穴はカマド南脇の南東コーナー一部に位置し、平面形態は円形である。南北0.84m、東西0.84m、深さ0.12mの規模である。壁溝は南壁に巡り、幅0.23m、深さ0.03mである。

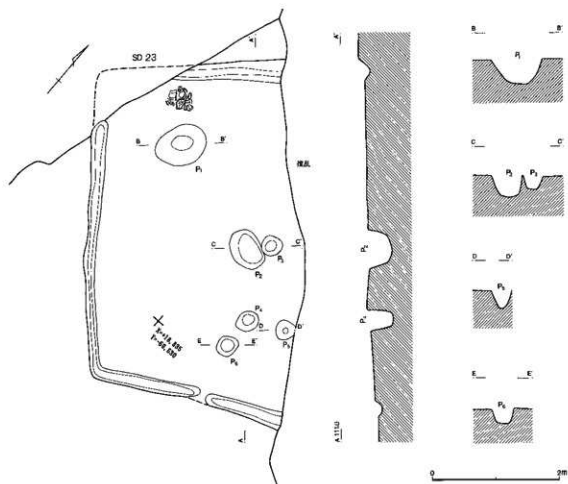
出土遺物はきわめて少なく、図示し得るものはない。



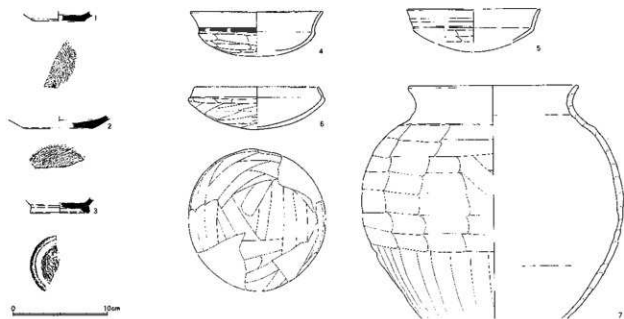
第57・58・59号住居跡

- | | |
|---------------------------|---------------------|
| 1 黒褐色土 ローム粒子多量 | 5 黒色土 ローム粒子・炭化物粒子少量 |
| 2 明褐色土 ローム粒子・焼上粒子・炭化物粒子少量 | 6 明褐色土 ローム粒子多量 |
| 3 明褐色土 2層よりローム粒子多量 | 7 黒褐色土 ローム粒子多量 |
| 4 黒褐色土 焼土粒子少量 | 8 明褐色土+ローム土 |

第83图 第57号住居跡



第84图 第57・58・59号住居跡出土遺物



第57号住居跡 (第82・83図)

Q-56・R-56グリッドに位置し、第58・59号住居跡、第23号溝跡と重複している。新旧関係は第23号溝跡→第59号住居跡→第57号住居跡→第58号住居跡の順に古くなる。西半部は擾乱によって削平されている。

平面形態は方形で、カマドは検出されていない。南北長5.47m、深さ0.25mで、西壁の方向はN-40°-Wを測る。埋没状況は自然堆積で、地形の斜面上方から下方へと埋没していった状況を取取ってきた。

壁溝は北壁・西壁・南壁に巡り、幅0.24m、深さ0.12mである。確認されたピットは6本で、P1が主柱穴である。貯蔵穴等の施設は検出されていない。

第58号住居跡 (第82・85図)

Q-56・R-56グリッドに位置し、重複する第57・59号住居跡、第23号溝跡に切られている。

平面形態は方形で、東西長3.68m、深さ0.24m、南壁の方向はN-103°-Eを測る。カマド・貯蔵穴・壁溝・ピット等の施設は確認されていない。

第59号住居跡 (第82・86図)

Q-56グリッドに位置し、重複する第23号溝跡より古く、第57・58号住居跡よりも新しい。

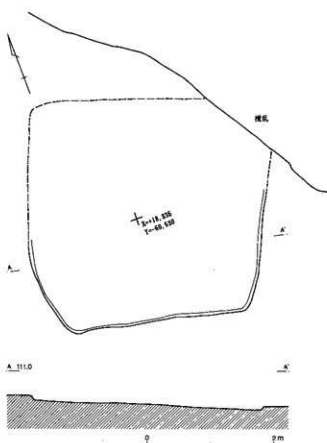
平面形態は方形であるが、平面規模は不明である。深さ0.07mを測る。確認されたピットは2本で、いずれも主柱穴である。カマド・貯蔵穴・壁溝等の施設は検出されていない。

第57・58・59号住居跡から出土した遺物はきわめて少なく、図示した遺物の帰属も明確ではない。

第60～67号住居跡 (第87図)

Q-55・56グリッドには、第60～67号住居跡の8軒が重複して所在している。削平により遺構の残存状態がきわめて悪く、また東側が大きく擾乱されていたために、平面による遺構の切り合い関係の確認は不可能であった。断面観察から、8軒の住居跡の新旧関係は新しい順に、第60号住居跡→第61号住居跡→第62号住

第85図 第58号住居跡

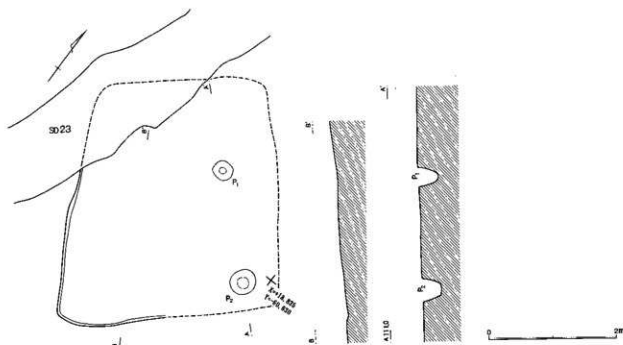


居跡・第63号住居跡→第64号住居跡・第65号住居跡である。第62号住居跡と第63号住居跡、第64号住居跡と第65号住居跡との新旧関係、ならびに第65・66・67号住居跡の新旧関係は断面観察では確認できなかった。また第60・61・63・64号住居跡は第23号溝跡に切られている。

これらの住居跡から出土した遺物はきわめて少なく、図示した遺物の帰属も明確ではない。剣形石製品1点も出土している。

第60号住居跡 (第88図)

L字形の壁溝と西壁の立上りの一部が確認されたことから、住居跡と認定した。平面形態は方形で、深さ0.30mと浅い。平面規模は不明である。壁溝は幅0.25m、深さ0.08mで、北西コーナーのみ存在する。確認されたピットは1本である。カマド・貯蔵穴等の施設は検出されていない。



第57・58・59号住居跡出土遺物 (第84図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏		(1.1)	(5.4)	WR	B	灰オリーブ	5	
2	坏		(1.3)	(7.0)	B	B	浅黄	5	
3	高台付坏		(1.6)	(6.3)	WB	A	灰白	5	
4	坏	(14.0)	(4.6)		WB	B	にょい赤褐	15	
5	坏	(14.0)	(3.6)		WR	B	明褐	5	
6	坏	(13.0)	4.6		WBR片	B	褐	75	
7	壺	17.7	(24.5)		WR片	B	にょい黄褐	70	

第61号住居跡 (第89図)

L字形の壁の立上がりか確認されたことから、住居跡と認定した。平面形態は方形で、深さは0.33mと浅い。壁溝は幅0.15m、深さ0.05mで、北西コーナー部に巡る。カマド・貯蔵穴・ピット等の施設は確認されていない。

第62号住居跡 (第90図)

L字形の掘形状の溝が確認されたことから、住居跡と認定した。平面形態は方形である。掘形状の溝は北西コーナーにあたり、幅0.41m、深さ0.19mである。平面規模は不明である。カマド・貯蔵穴・ピット等の施設は確認されていない。

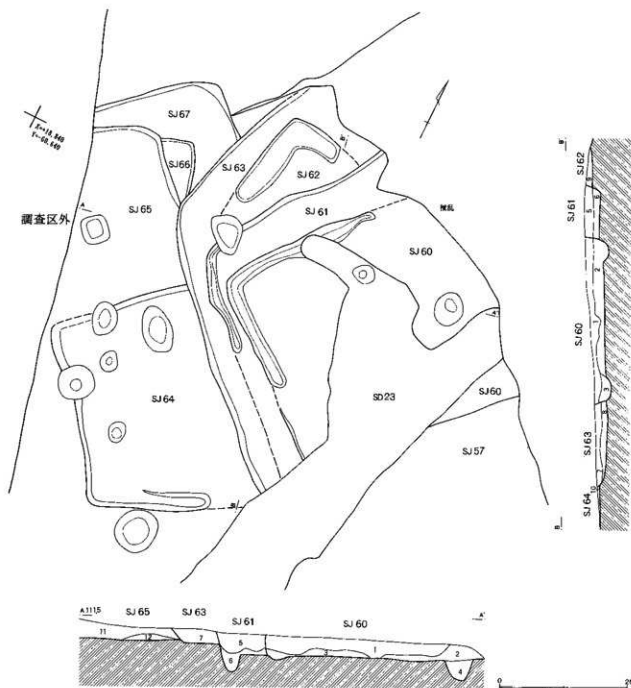
第63号住居跡 (第92図)

西壁と南壁の一部が確認されたことから、住居跡と認定した。平面形態は方形で、深さは0.18mと浅い。平面規模は不明であるが、比較的大型の住居跡と思われる。確認されたピットは1本である。カマド・貯蔵穴・壁溝等の施設は確認されていない。

第64号住居跡 (第91図)

平面形態は方形で、北壁・西壁・南壁が検出されている。南北長3.42m、深さは0.03mと浅い。確認されたピットは5本で、壁溝の一部が南壁中央に認められる。カマド・貯蔵穴等の施設は確認されていない。

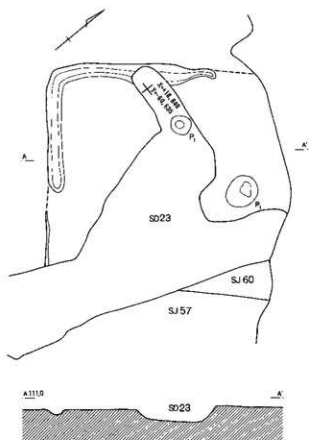
第87图 第60・61・62・63・64・65・66・67号住居跡



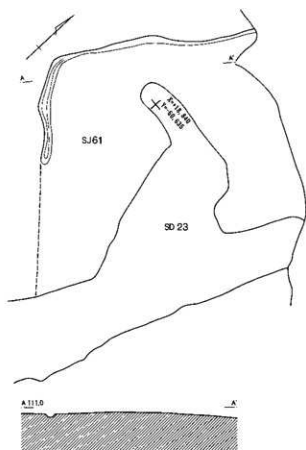
第60・61・62・63・64・65号住居跡

- | | | | |
|-------------|---------------------------|---------|---------------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒子多量 | 7 暗褐色土 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・白色粘土粒子少量 |
| 2 明褐色土 | ローム粒子少量 | 8 暗褐色土 | 7層よりローム粒子多量 |
| 3 明褐色土+ローム土 | | 9 黒褐色土 | ローム粒子多量 焼土粒子少量 |
| 4 明褐色土 | ローム粒子少量 | 10 黒褐色土 | |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・白色粘土粒子少量 | 11 黒褐色土 | ローム粒子・炭化物粒子少量 |
| 6 暗褐色土 | 5層よりローム粒子多量 | 12 黒褐色土 | ローム粒子多量 |

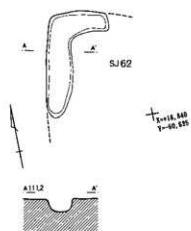
第88图 第60号住居跡



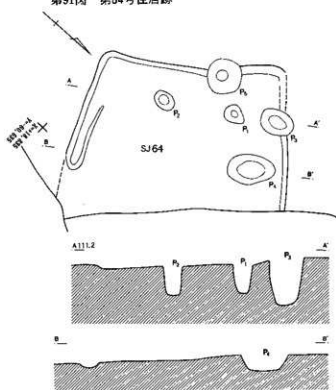
第89图 第61号住居跡



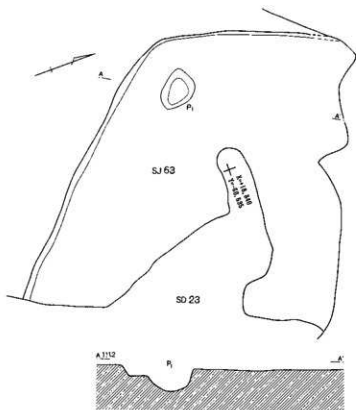
第90图 第62号住居跡



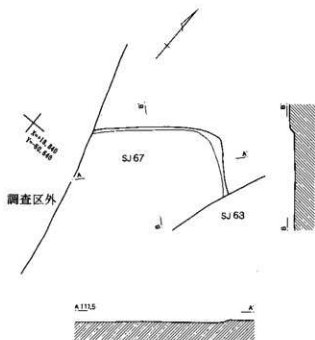
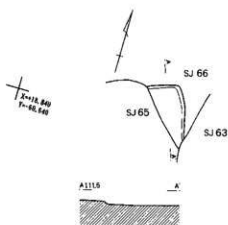
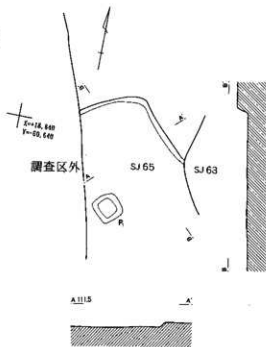
第91图 第64号住居跡



第92图 第63号住居跡

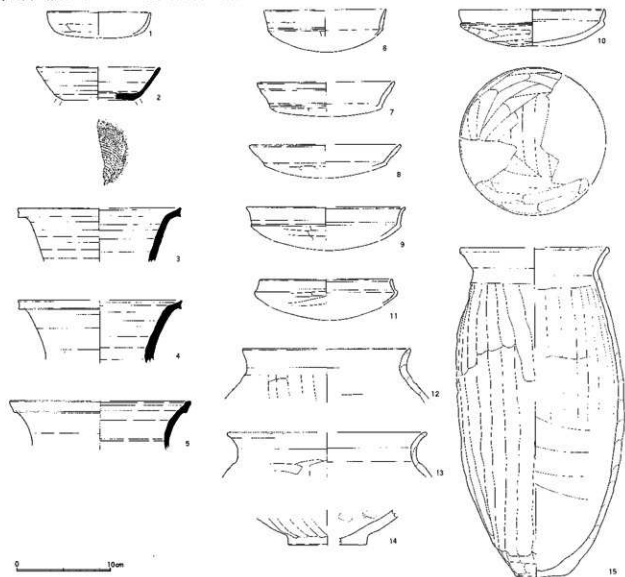


第93图 第65号住居跡



0 2m

第96図 第60・61・62・67号住居跡出土遺物



第65号住居跡 (第93図)

北東コーナー部付近が検出されており、平面形態は方形を呈している。西半部は調査区外で、平面規模は不明である。深さは0.32mと浅い。確認されたピットは1本である。カマド・貯蔵穴・壁溝等の施設は検出されていない。

第66号住居跡 (第94図)

北東コーナー部のみが検出されており、平面形態は方形を呈している。平面規模は不明で、深さ0.05mと浅い。カマド・貯蔵穴・壁溝・ピット等の施設は検出されていない。

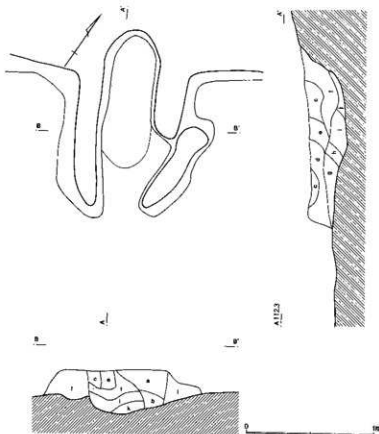
第67号住居跡 (第95図)

北東コーナーが検出された、平面形態が方形の住居跡である。西半部は調査区外で、平面規模は不明である。深さは0.04mと浅い。カマド・貯蔵穴・壁溝・ピット等の施設は検出されていない。

第60・61・62・67号住居跡出土遺物 (第96図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(10.9)	(2.5)		B	B	にふい橙	5	
2	環	(13.1)	(3.5)	(7.3)	WB	A	灰	20	
3	長頸壺	(17.3)	5.8		W片	A	灰	5	
4	長頸壺	(17.3)	(6.6)		W片	A	灰	5	
5	壺	(19.2)	(5.1)		BR	B	灰白	5	
6	環	(12.9)	(2.8)		WBR	B	橙	5	
7	環	(14.4)	(3.1)		WB	B	橙	10	
8	環	(15.8)	(2.7)		W	A	暗赤褐	10	
9	環	(16.8)	(3.5)		BR	A	橙	5	
10	環	15.3	3.9		WR片	B	灰褐	60	
11	環	(14.0)	(2.8)		W	A	黒褐	10	
12	甕	(17.7)	(5.7)		WR	B	にふい赤褐	5	
13	甕	(21.0)	(4.7)		WBR	B	にふい橙	10	
14	甕		(3.7)	(8.1)	WB片	B	にふい黄褐	10	
15	甕	(15.5)	(34.6)	5.6	WBR片	B	にふい黄褐	60	胴中に黒斑

第97図 第68号住居跡カマド



第68号住居跡 カマド

- a 暗茶褐色土 焼土粒子・粘土粒子少量
- b 暗茶褐色土 a層より焼土粒子・粘土粒子少量
- c 白色粘土層 焼土粒子少量
- d 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・粘土粒子少量
- e 暗褐色土 焼土粒子・粘土粒子少量
- f 暗褐色土+焼土ブロック+粘土ブロック
- g 黒色土 焼土粒子・粘土粒子少量 炭化物多量
- h 黒色土 g層に比べ焼土粒子・粘土粒子多量
- i 黒色土 焼土粒子・粘土粒子少量 炭化物多量
- j 白色粘土層
- k 白色粘土+黒褐色土 焼土粒子少量
- l 白色粘土層 袖部

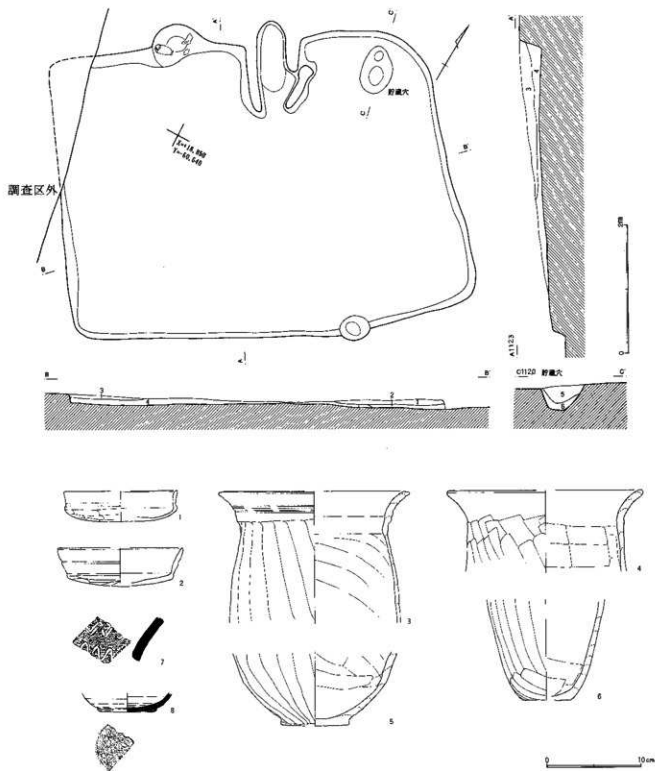
第68号住居跡 (第97・98図)

P-54・55・Q-54・55グリッドに位置し、北東コーナー部を第135号土坑に切られている。また北西コーナー部は調査区外である。

平面形態は方形で、カマドは北壁中央に設置されて

いる。主軸長4.60m、東西幅6.25m、深さ0.35mで、主軸方向はN-28°Wを測る。埋没状況は自然堆積で、地形の斜面上方から下方へと埋没していった状況を看取できた。

第98図 第68号住居跡・出土遺物



第68号住居跡

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量 焼土混入
 2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
 3 暗褐色土 ローム粒子まばら

- 4 暗灰褐色土 ロームブロックまばら
 5 黒褐色土 貯蔵穴覆土 ローム粒子・炭化物粒子少量
 6 黒褐色土 貯蔵穴覆土 粘性あり

カマドは白色粘土によって構築され、燃焼部は住居内に張出している。貯蔵穴はカマド東脇の北東コーナーに位置し、平面形態は楕円形である。南北0.75m、東西0.50m、深さ0.40mである。カマド西脇の北壁際にはピットが掘り込まれ、土師器の甕が出土している。壁溝・ピット等の施設は確認されていない。

遺物は比較的少なく、須恵器の残片、土師器の環・甕が出土している。時期は古墳時代後期に比定される。

第69号住居跡 (第99・100図)

P-54・55・Q-54・55グリッドに位置し、東半部は調査区外で、南壁は掘乱されている。西壁には重複する第134号土坑が切っている。

平面形態は方形で、カマドは北壁に設置されている。平面規模は明確ではないが、比較的大型の住居跡である。深さ0.38m、主軸方位はN-30°-Wを測る。カマド西脇にはテラス状の張出しを持つ。埋没状況は自然堆積で、地形の斜面上方から下方へと埋没している状況を取ってきた。

第68号住居跡出土遺物 (第98図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(11.9)	(3.2)		WB	B	暗褐	10	波状文 流れ込み
2	環	(13.2)	(3.9)		WB	B	橙	40	
3	甕	(19.1)	(13.8)		WR片	B	にふい橙	20	
4	甕	(20.5)	(8.6)		WBR	B	にふい橙	20	
5	甕		(7.8)	(7.3)	WR片	C	にふい橙	15	
6	甕		(10.6)	(5.0)	WR片	B	にふい褐	10	
7	甕				W片	B	灰		
8	環	(2.0)	(5.7)		WB	B	灰黄	10	

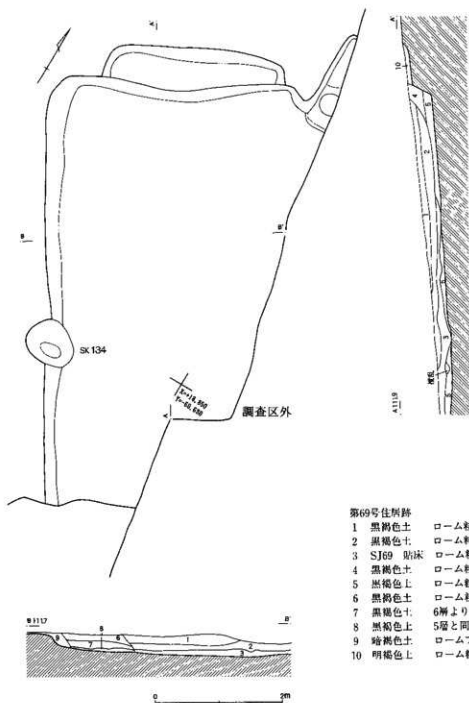
第99図 第69号住居跡カマド



第69号住居跡 カマド

- a 白色粘土 天井部 焼土粒子少量
- b a層の焼土化
- c 白色粘土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
- d 白色粘土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- e 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量 白色粘土粒子少量
- f 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色粘土粒子少量
- g 白色粘土+ローム 焼土粒子・炭化物粒子少量
- h 黒色土 白色粘土少量
- i 掘りすぎ

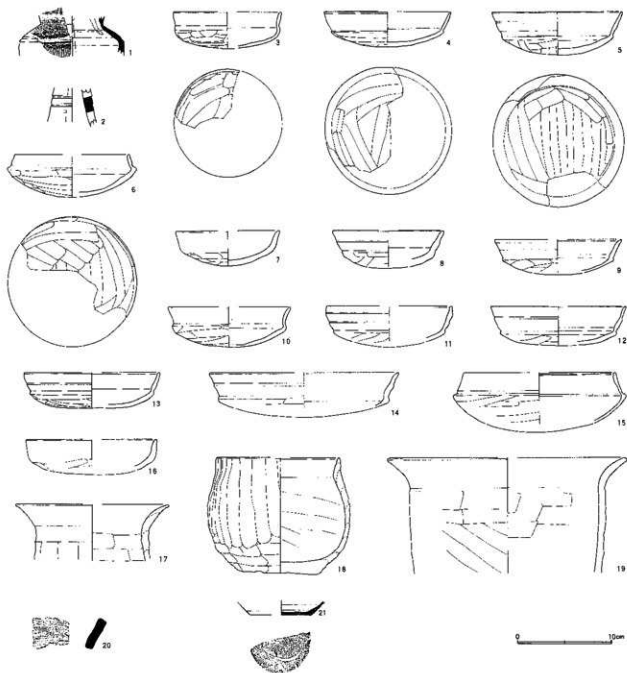
第100図 第69号住居跡



カマドは白色粘土によって構築されて、燃焼部が壁付近にあるタイプである。中心軸の方位は住居跡の主軸方位と大きく異なる。貯蔵穴・壁溝・ピット等の施設は確認されていない。

遺物は須恵器の甕・高環・甕、土師器の坏類・甕類があり、図示していないが須恵器坏片1点も出土している。時期は古墳時代後期に比定される。

第101図 第69号住居跡出土遺物



第69号住居跡出土遺物 (第101図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕		(4.2)		WB	A	灰	5	自然釉の付着 口縁部波状文 胴部連続刺突文 長脚二段三方透かし
2	高坏		(3.6)		W	A	灰	5	
3	坏	(11.4)	(3.8)		WB片	B	暗赤褐	10	
4	坏	(13.3)	(4.7)		WB片	B	褐	45	
5	坏	13.7	4.6		WR	B	黒褐	90	
6	坏	12.0	4.5		WR	A	にょい赤褐	50	
7	坏	(10.9)	(3.8)		W片	B	橙	10	
8	坏	(11.7)	(3.8)		WB	B	橙	5	
9	坏	(13.3)	(3.5)		WB	B	黒褐	20	

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
10	環	12.9	(4.2)		R	B	にぶい橙	50	
11	環	(13.3)	(3.8)		WR	A	黒褐	5	
12	環	(14.2)	(4.1)		W	B	黒褐	20	
13	環	(14.2)	(3.7)		WB片	A	橙	20	
14	鉢	(19.8)	(3.8)		WB	B	にぶい黄褐	5	
15	鉢	(16.0)	(5.4)		WB	B	暗赤褐	15	
16	環	13.6	(3.2)		WBR片	B	橙	5	
17	甕	(16.0)	(6.0)		W	B	にぶい赤褐	15	
18	小型甕	(12.8)	(12.5)	(9.1)	WB片	C	暗灰炭	60	
19	甕	(24.7)	12.2		WB	B	にぶい黄橙	20	
20	甕				W片	B	灰		内面に自然釉の付着 波状文
21	環	(2.0)	(6.4)		WB	C	にぶい褐	10	流れ込み

第70号住居跡出土遺物 (第102図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	13.4	4.4		WBR片	B	暗褐	100	
2	環	12.3	4.3		WR片	A	にぶい赤褐	50	
3	環	(17.0)	(3.4)		WR	B	黒褐	15	

第70号住居跡 (第102図)

P-53・54グリッドに位置し、第71・75・79号住居跡と重複している。また西半部は調査区外である。

平面形態は方形で、カマドは検出されていない。南北長5.82m、東西長5.88m、深さ0.38mで、南北軸方位はN-44°Eを測る。埋没状況は自然堆積である。

壁溝は北西コーナー部にのみ見られ、幅0.32m、深さ0.08mである。確認されたピットは7本で、P1・P2が中柱穴である。貯蔵穴は検出されていない。

出土遺物は少なく、土師器の環と土錘1点がある。時期は古墳時代後期に比定される。

第71号住居跡 (第103図)

P-53グリッドに位置し、重複する第70号住居跡に切られている。また西半部は調査区外で、北東コーナー部・カマド西脇を擾乱されている。

平面形態は方形で、カマドは北壁に設置されている。平面規模は不明であるが、深さ0.37m、主軸方位はN-47°Eを測る。埋没状況は自然堆積である。

カマドは白色粘土によって構築され、燃焼部と煙道

部の境にはピットが掘り込まれている。壁溝は北壁、東壁に巡り、幅0.21m、深さ0.09mである。貯蔵穴・ピット等の施設は確認されていない。

遺物はきわめて少なく、須恵器蓋と土師器環が出土している。時期は古墳時代後期に比定される。

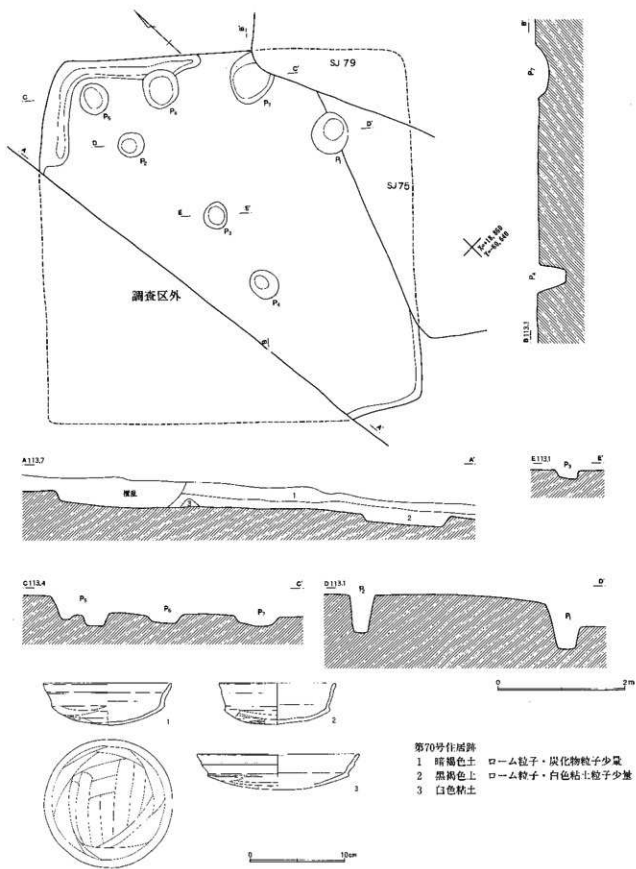
第72号住居跡

Q-54グリッドの第74・76号住居跡南側に位置していた住居跡である。遺構の残存状態がきわめて悪く、床面のごく一部が確認されたのみである。住居の形態や規模などについては一切不明である。遺物は須恵器の環類と土師器の甕類が出土し、時期は平安時代に比定される。

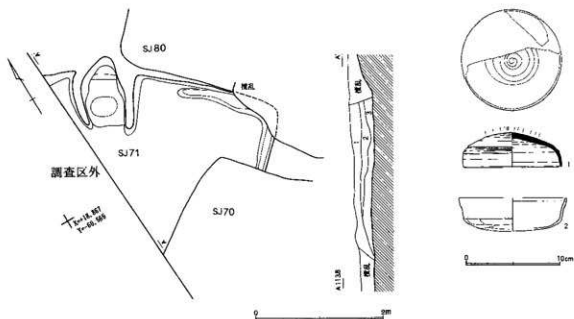
第73号住居跡

Q-54グリッドの第74号住居跡の上面付近に位置していた住居跡である。遺構の残存状態がきわめて悪く、床面のごく一部が確認されたのみである。住居の形態や規模などについては一切不明である。遺物は須恵器の環類が出土し、時期は平安時代に比定される。

第102図 第70号住居跡・出土遺物



第103図 第71号住居跡・出土遺物

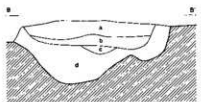
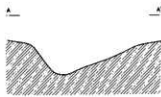
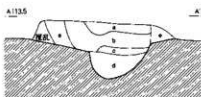
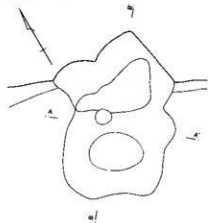
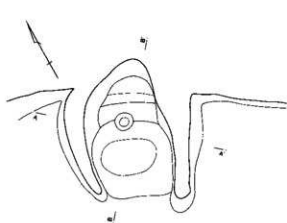


第71号住居跡

- 1 暗褐色土 ローム粒了・炭化物粒子少量
- 2 黒褐色土 白色粘土多量
- 3 黒褐色土 ローム粒子少量

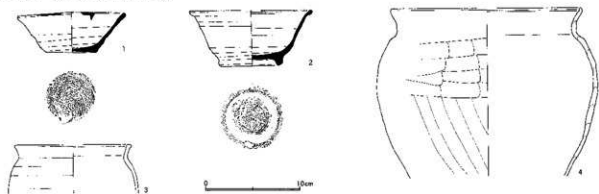
第71号住居跡 カマド

- a 白色粘土 天井部
- b 黒褐色土 焼土粒了・炭化物粒子多量
- c 焼土層
- d 明褐色土 ローム粒了多量
- e 白色粘土 袖部 焼土粒子・炭化物粒子少量

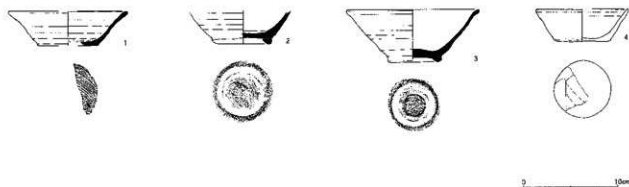


E
D

第104図 第72号住居跡出土遺物



第105図 第73号住居跡・出土遺物



第71号住居跡出土遺物 (第103図)

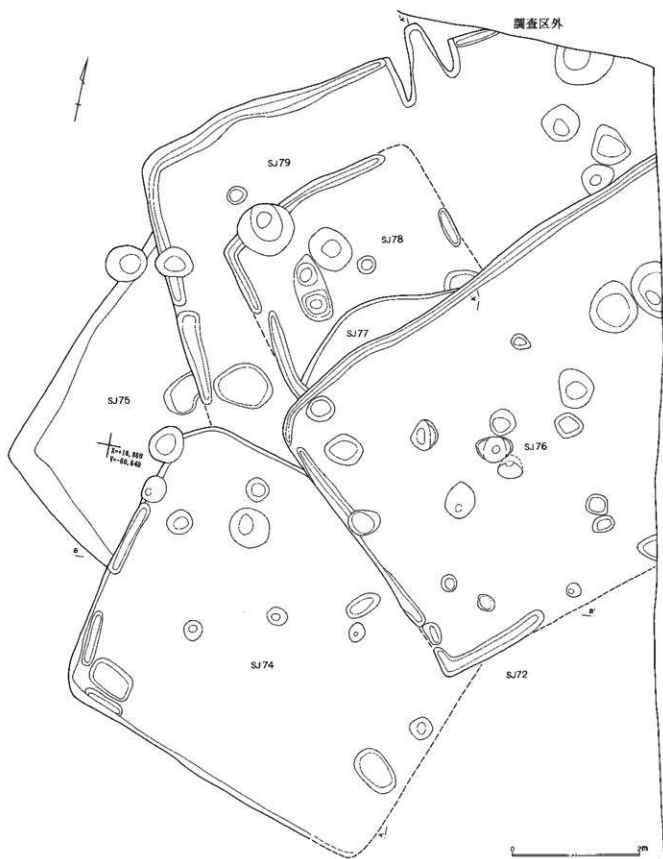
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甌	(10.3)	3.7		WR	B	にぶい黄橙	60	愛知産
2	環	(11.2)	(3.4)		WR	B	橙	20	

第72号住居跡出土遺物 (第104図)

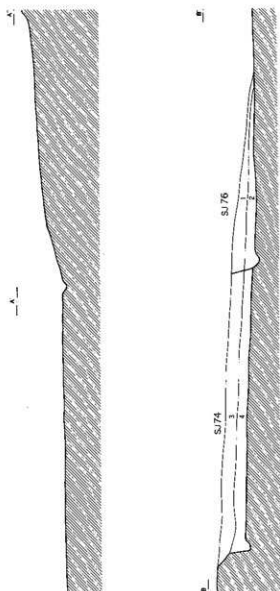
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	11.3	4.3	5.2	BR	C	橙	100	灯明皿に転用
2	高台付甌	(12.7)	6.0	5.8	WB片	B	黄灰	60	
3	小型甌	(11.6)	5.1		BR	B	にぶい濁	15	
4	甌	(19.8)	(17.8)		B	B	灰黄褐	30	

第73号住居跡出土遺物 (第105図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(12.3)	3.6	(6.1)	WBR	B	灰	10	
2	高台付甌		(3.5)	5.6	WB	C	暗灰黄	20	
3	高台付甌	13.8	5.7	5.1	WB	C	にぶい黄	100	
4	かわらけ	(9.5)	3.5	(6.0)	WB	C	黄褐	10	



第107図 第74・75・76・77・78・79号住居跡(2)



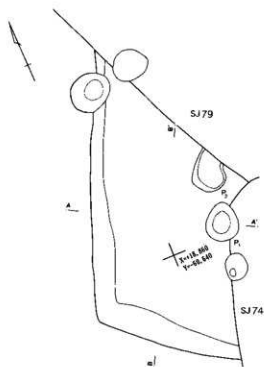
第74～79号住居跡

- 1 暗褐色土 ローム粒子・白色粒子少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量
- 3 暗褐色土 白色粒子(浅明B?)
- 4 暗褐色土 炭化物粒子・ローム粒子少量

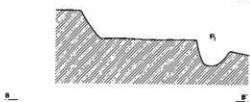
第74・75・76・77・78・79住居跡 (第106・107図)

P-53・54・Q-53・54グリッドには、第70～79号住居跡の10軒が重複して所在している。削平により遺構の残存状態がきわめて悪く、平面観察による確認は不可能であった。特に第74～79号住居跡に関しては遺構の切り合い関係のみならず、住居跡の軒数すら認識できなかった。新旧関係は第79号住居跡→第74号住居跡→第76号住居跡の順に新しくなることは確かであるが、それ以外の住居跡との新旧関係については確認できなかった。

第108図 第75号住居跡



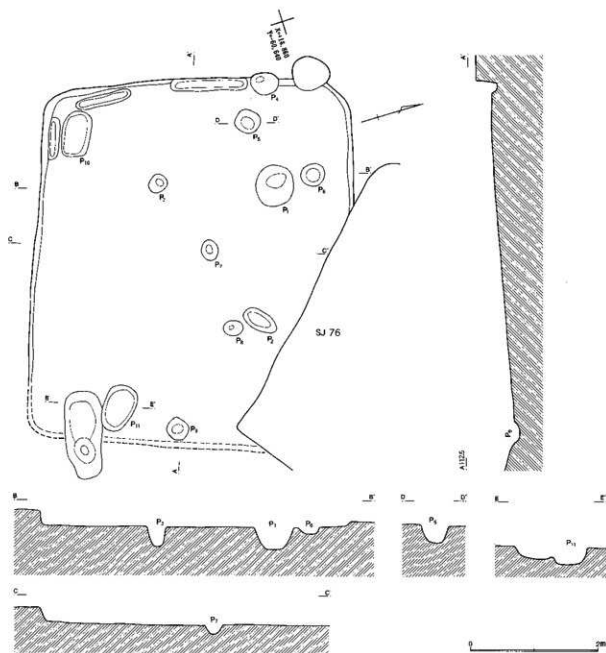
A113.0



0 2m

A112.7

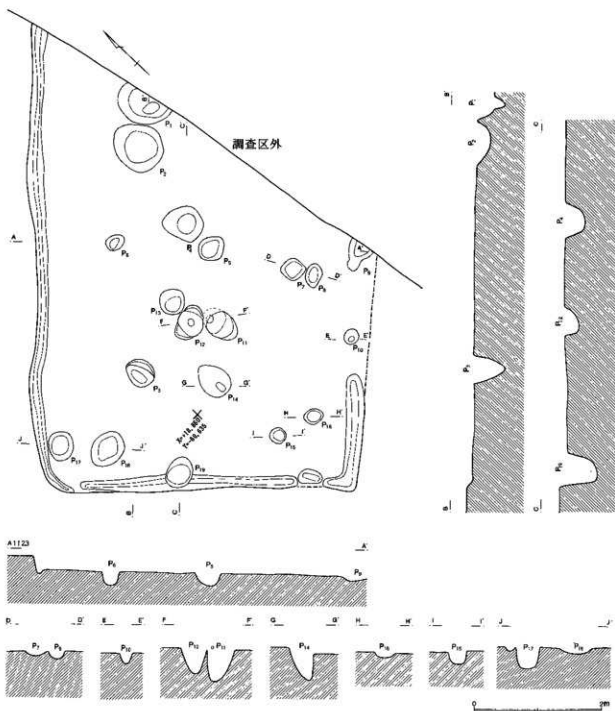
第109図 第74号住居跡



これらの住居跡から出土した遺物は、一括資料として取上げたため、図示した遺物の帰属は必ずしも明確ではない。須恵器・土師器のほかに土鏝18点と、また図示していないが、古墳時代後期の須恵器蓋環の小破片7点もある。

第75号住居跡（第108図）

平面形態が方形の、南西コーナー部付近のみが検出された住居跡である。平面規模は不明であるが、深さは0.46mを測る。確認されたピットは2本で、P1が主柱穴である。カマド・貯蔵穴・壁溝等の施設は検出されていない。

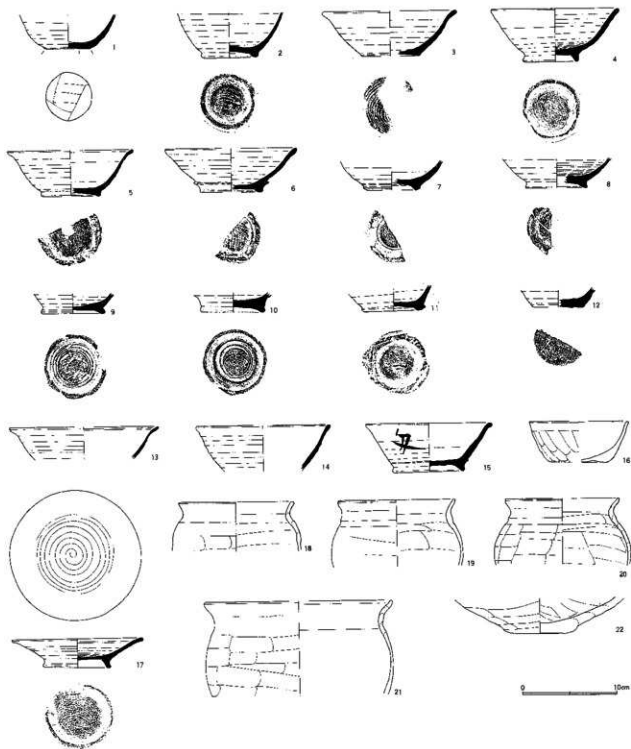


第74号住居跡 (第109図)

平面形態が方形の住居跡で、東壁付近は削平されている。南北長4.99m、東西長は推定で5.80m、深さ0.21mを測る。壁溝は西壁中央から南西コーナーに途切れながら巡り、幅0.18m、深さ0.11mである。確認

されたピットは11本で、P1・P3が支柱穴と思われる。カマド・貯蔵穴は検出されていない。

第111図 第74・75号住居跡出土遺物

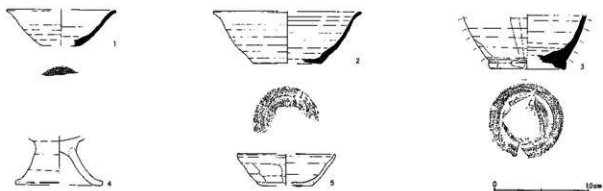


第76号住居跡 (第110図)

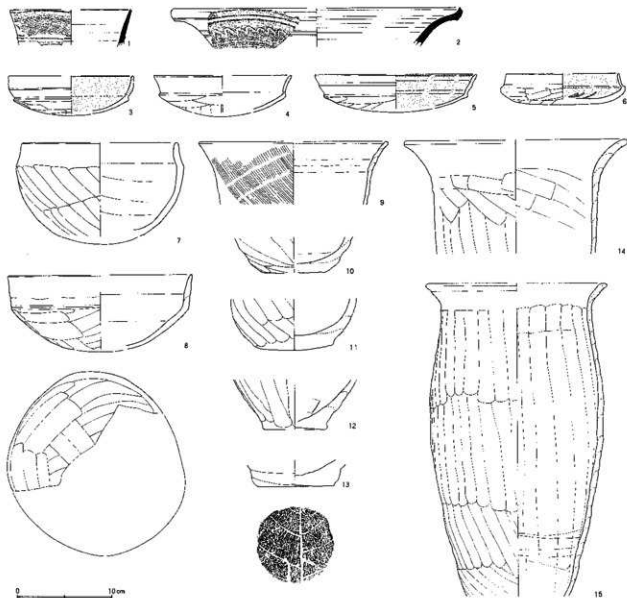
平面形態が長方形の住居跡で、東半部が調査区外である。南北長5.32m、深さ0.21mを測る。壁溝は北壁から南壁南西コーナー部付近まで、コーナー部で途切

れながら巡っている。幅0.20m、深さ0.07mである。確認されたピットは19本で、P1・P3が主柱穴と思われる。カマド・貯蔵穴等の施設は検出されていない。石製円玉2点が出土している。

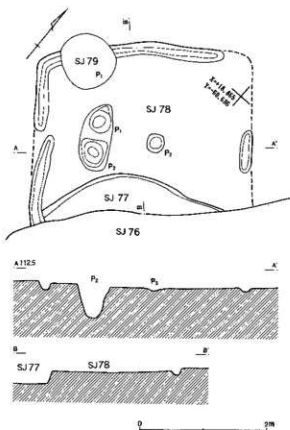
第112图 第76・78号住居跡出土遺物



第113图 第78・79号住居跡出土遺物



第114図 第77・78号住居跡



第77号住居跡 (第114図)

北西コーナー部付近のみが検出された住居跡である。平面形態は方形であるが、規模は不明である。床面の深さは、重複する第78号住居跡から0.20mを測る。カマド・貯蔵穴・壁溝・ピット等の施設は確認されていない。

第78号住居跡 (第114図)

平面形態が方形の住居跡である。重複する第79号住居跡とは床面の高さがほぼ同じで、方形に巡る壁溝によって区別した。東西長3.47mで、壁溝は幅0.21m、深さ0.11mである。確認されたピットは3本で、P2が主柱穴と思われる。カマド・貯蔵穴等の施設は検出されていない。

第79号住居跡 (第115・116図)

平面形態が方形の住居跡で、カマドは北壁に設置されている。南半部は他の住居跡と重複し、東側は調査区外である。そのため平面規模は不明であるが、比較的大型の住居跡である。

カマドは白色粘土によって構築され、袖部の部分にはピットが掘り込まれている。壁溝は途切れながらも全周するものと思われ、幅0.19m、深さ0.08mである。ピットは9本確認され、P1・P2が主柱穴である。貯蔵穴等の施設は検出されていない。鉄製刀子が1点出土している。

第80号住居跡 (第117図)

P-52・53・Q-52・53グリッドに位置している。大部分が攪乱され、残存状態はきわめて悪い。

平面形態は方形であるが、北西コーナー付近のみの検出で、規模は不明である。深さ0.28mで、床面は固く踏みしめられていた。カマド・貯蔵穴・壁溝・ピット等の施設は確認されていない。

遺物は少なく、須恵器の甕、土師器の坏・甕と、土錘1点が出土している。時期は古墳時代後期に比定される。

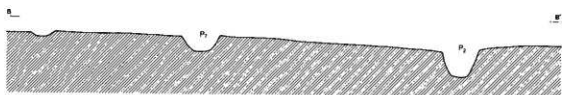
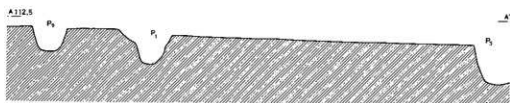
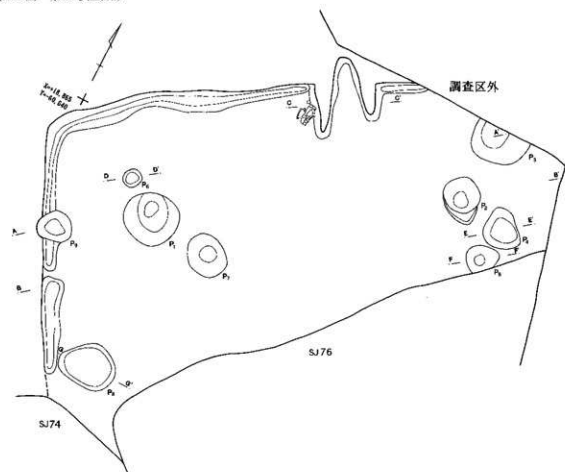
第81号住居跡 (第118図)

P-52・Q-52グリッドに位置し、東半部は調査区外である。削平のため残存状態がきわめて悪く、壁の立ち上がりだけが僅かに認められた。

平面形態は方形で、カマドは検出されていない。南北長は推定で3.77m、深さは深いところでも0.09mほどである。壁溝は北西コーナー付近のみに確認され、幅0.19m、深さ0.10mである。ピットは3本認められ、貯蔵穴等の施設は見つかっていない。

出土遺物はきわめて少なく、土師器の坏・甕と砥石1点がある。時期は古墳時代後期に比定される。

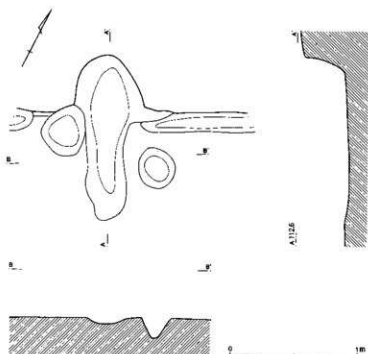
第115図 第79号住居跡



- 第79号住居跡 カマド
 a 白色粘土 内壁は焼土化
 b 暗赤褐色土 ローム状少量
 c 黒色土



第116図 第79号住居跡カマド



第80号住居跡出土遺物 (第117図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(12.9)	4.7		WR	A	暗褐	20	波状文
2	環	(13.4)	(4.1)		WBR	B	にぶい赤褐	15	
3	甕	(17.9)	(15.6)		WR片	B	暗赤褐	40	
4	甕	(19.0)	(12.5)		WB	B	にぶい黄橙	10	
5	甕	19.0	(8.3)		W片	B	灰褐	15	
6	甕				WB	A	黄灰		
7	かわらけ	7.7	2.2	5.8	WBR片	B	にぶい赤褐	80	

第81号住居跡出土遺物 (第118図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	13.4	4.9		W片	B	黒褐	50	内面黒色処理
2	環	(15.3)	(7.2)		WR片	C	黒褐	20	
3	甕	(16.4)	(3.4)		WR片	B	にぶい赤褐	5	

第82号住居跡出土遺物 (第119図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕				WB片	B	灰黄		
2	甕				WB	B	灰白		

第82号住居跡 (第119図)

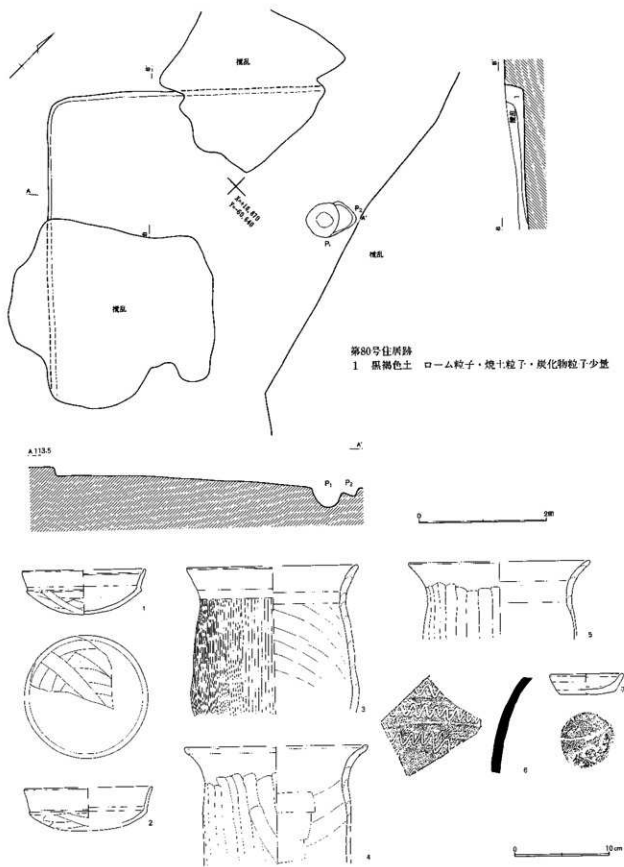
P-51・52グリッドに位置している。西半部は調査区外で、また大半が攪乱を受けている。検出されたのは、東壁と床面の一部である。

平面形態は方形であるが、規模は不明である。深さ

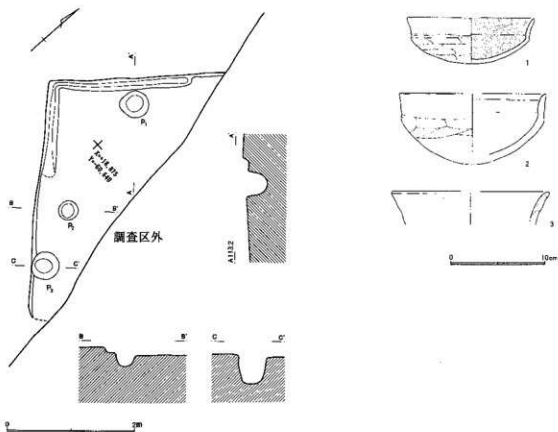
は0.18mである。ピットは1本で、支柱穴の可能性はある。カマド・貯蔵穴・壁溝は確認されていない。

遺物はきわめて少ない。図示し得たのは須恵器の甕片のみで、他に土師器の甕片が出土している。

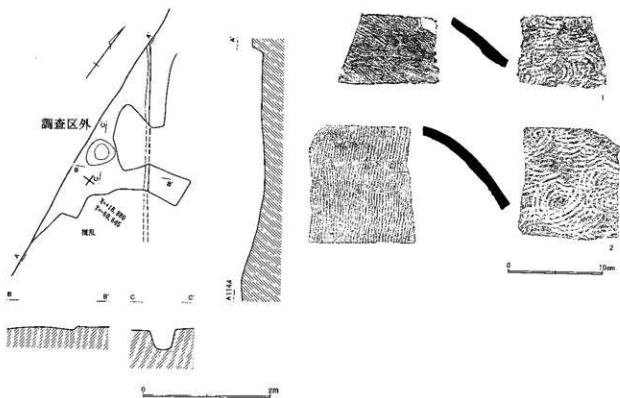
第117图 第80号住居跡・出土遺物



第118图 第81号住居跡・出土遺物



第119图 第82号住居跡・出土遺物



2. 掘立柱建物跡

広木上宿遺跡では掘立柱建物跡が1棟発見された。そのうち第01・02・03・04・06・08・10・11号掘立柱建物跡の8棟は中世寺院に関連するもので、V-1で報告する。

第05号掘立柱建物跡 (第120図)

西から東へ傾斜する地形のN-39・40・O-39・40グリッドに位置する、3面庇付の掘立柱建物跡である。庇は北面・西面・南面に懸かり、東面には認められない。底部の柱列と母屋の柱列とは、柱間が一致しない。

母屋は2間×2間で、南西コーナー部のPit 3は攪乱されている。柱間の規模は東辺は推定4.19m、南辺も推定4.60m、西辺4.23m、北辺4.56mで、南北軸の方位はN-17°-Wを測る。Pit3とPit4の間にPit9が存在し、出入口部の可能性がある。

庇は柱間が不統一で、柱列も乱れている。南辺は母屋の南辺の方向と異なり、西から東に広がっている。規模は南辺7.08m、西辺6.11m、北辺6.23mである。

柱穴底面の標高は西から東へ低くなる。これは斜面下方部をより深く掘り込むことによって、建物の安定を図ったものと考えられる。母屋の柱底跡は明確に確認することができた。

遺物は土師器7片・須恵器1片が出土している。時期は明確ではないが、中世寺院関連遺構と方向が異なっていることから古代のものと推定される。

第07号掘立柱建物跡 (第121図)

S-62・T-62グリッドに位置する、溝持ちの庇付掘立柱建物跡である。庇は1面で、溝は北辺から北西コーナー部にかけて走る。

母屋は3間×3間の側柱建物跡で、台形に柱穴が並ぶ。南東コーナー部のPit 4は確認されていない。東辺6.54m、南辺6.56m、西辺6.60m、北辺5.46m、主軸方位はN-10°-Wを測る。柱穴は南辺を除いてほぼ同規模であるが、柱穴の柱間は統一されていない。南辺のPit 5・Pit 6は小規模で浅い。この部分に出入口部が設置されていた可能性がある。

庇は西辺に付設され、6.60mを測る。柱間はほぼ等間隔で、規模も等しい。

溝は幅0.72m、深さ0.20mの浅いものであるが、南落ち溝とは異なる。S-62・T-62グリッド付近の地形は、調査区南側の崖下に広がる北から南に緩やかに傾斜している。雨天時には斜面上方から雨水が流れ落ちてくるため、それを防ぐための溝である。

遺物は土師器3片が出土している。時期は明確ではないが、周辺に所在する住居跡群が平安時代に比定されることから、ほぼ同時期のものと推測される。

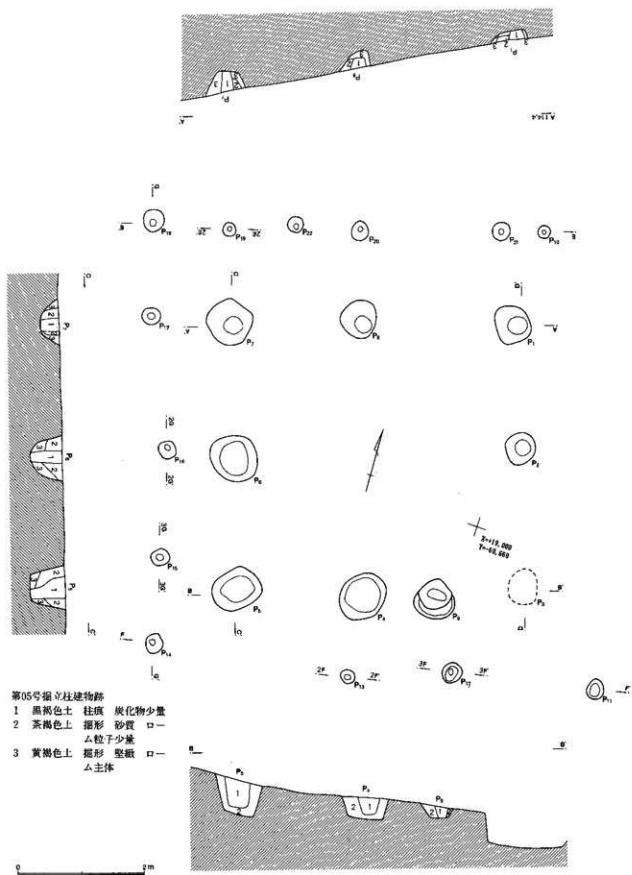
第09号掘立柱建物跡 (第122図)

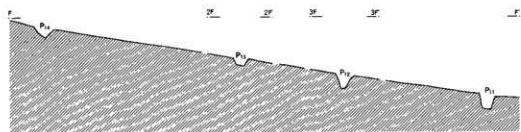
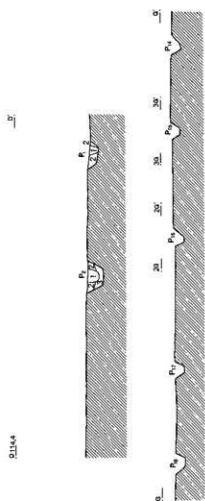
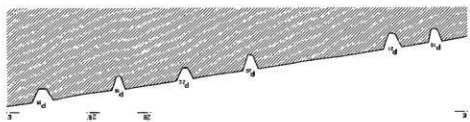
O-43グリッドに位置する側柱掘立柱建物跡で、西半部は調査区外である。いずれの柱穴も調査時には単独のピットとして調査し、整理作業の段階で掘立柱建物跡と認定した。覆上は茶褐色土で、ローム粒子・ロームブロックを多量に含んでいた。

規模は基本的には2間×3間で、桁行9.60m、梁行6.25m、主軸方向はN-47°-Wを測る。柱間は不統一で、Pit 1とPit 3の間にPit 2が、Pit 11とPit 12の間にPit 13が存在する。

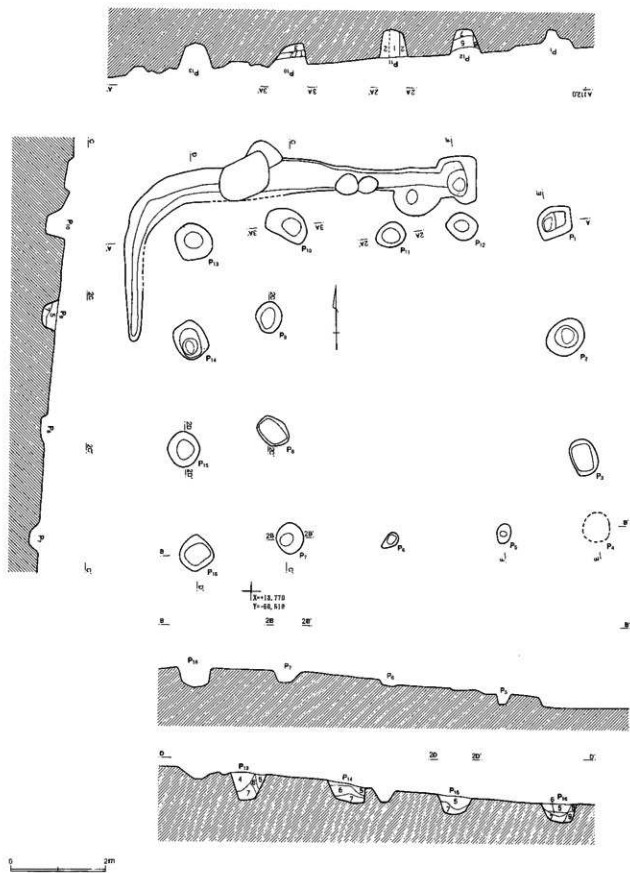
遺物は土師器10片が出土しているが、時期は不明である。中世寺院関連遺構とは方向を違えることから、古代のものと推測される。

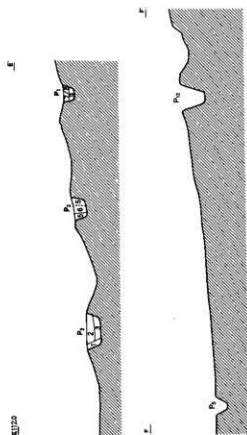
第120图 第05号独立柱建物跡





第121图 第07号掘立柱建物跡



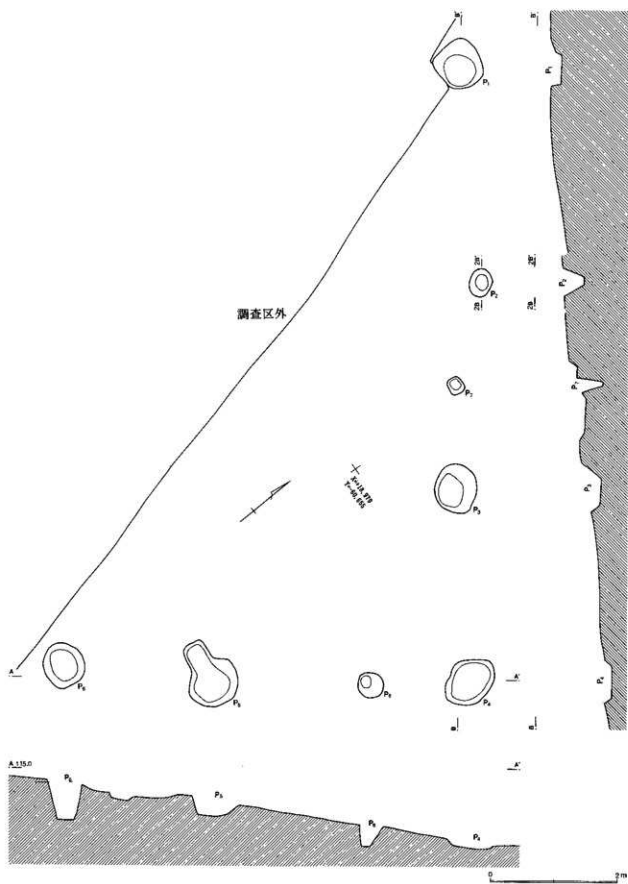


E1123

第07号獨立柱建物跡

- 1 暗灰褐色土 柱痕 ロームブロック少量
- 2 暗灰褐色土 地山ブロック混入
- 3 黒褐色土
- 4 暗茶褐色土+ロームブロック
- 5 暗褐色土 ロームブロック少量
- 6 暗灰褐色土
- 7 暗灰褐色土 ロームブロック多量
- 8 淡黄灰色土 地山土混入
- 9 淡黄灰色土 地山土再堆積

第122图 第09号掘立柱建物跡



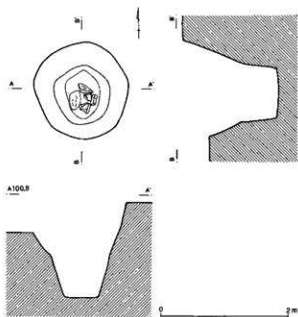
3. 井戸跡

支丘上に所在する遺跡の立地条件から、発見された井戸跡は1基のみである。

第01号井戸跡 (第123図)

T-62・63グリッドに位置し、第21号溝跡と重複している。平面形態は円形で、南北径1.53m、東西径1.52mを測る。確認面からの深さは1.51mで、底面はほぼ水平である。底面付近には人頭大の礫が出土しているが、人為的に積み上げたような形跡は認められなかった。礫の他に出土遺物はなく、時期は不明である。

第123図 第01号井戸



4. 土坑

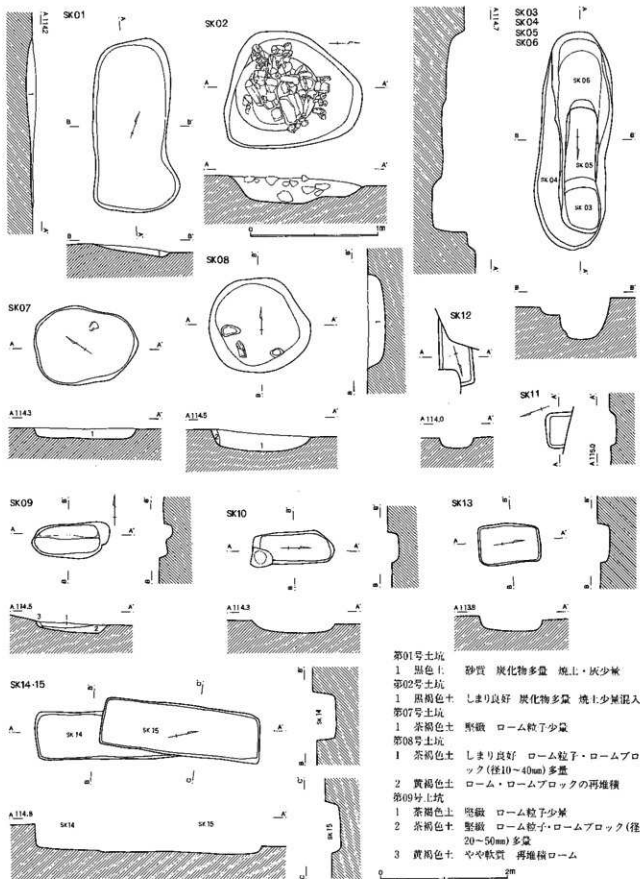
広木上宿遺跡から発見された土坑は165基である。

そのうち第11・12・52・53・54・63・71・72・73・74・76・77・78・79・80・81・82・87号土坑の18基は縄文時代のもので、これらについては縄文時代編で報告する。

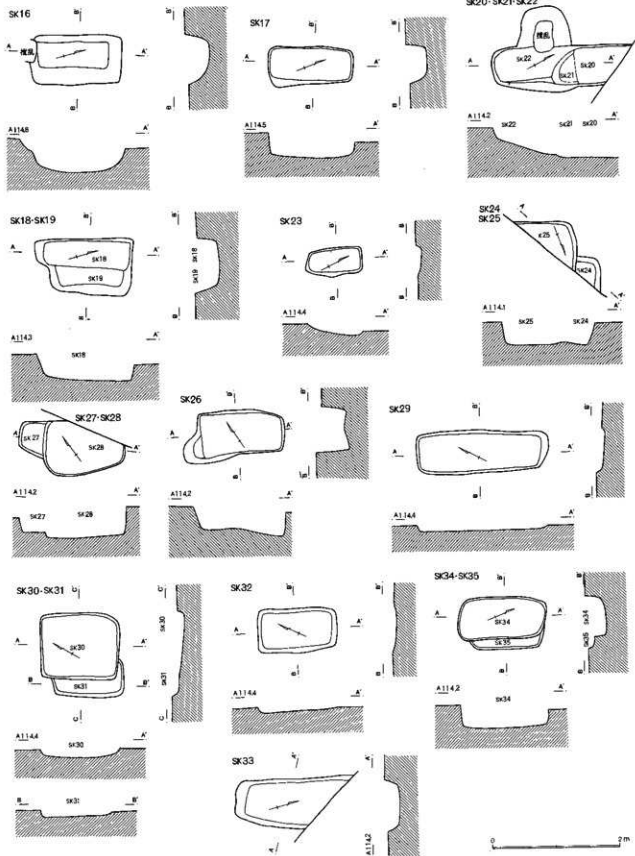
本書で報告する147基の土坑は古墳時代後期から近世にかけてのものであるが、多くの土坑については時期・用途を判断するに足る資料に欠ける。近世の土坑

の中には墓塚や貯蔵施設などの、用途が明確なものもある。墓塚は第148・150・154～159号土坑の8基で、寛永通寶や柄鏡・煙管などが副葬されていた。貯蔵施設は第160～165号土坑の6基で、壁に横穴が掘り込まれていた。

特筆すべきは、小型宝塔5基と小型未開数蓮華5本を出土した第48号土坑であるが、これについてはV-5・6で報告する。

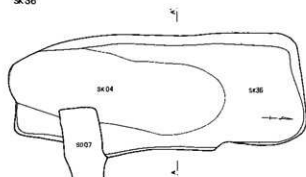


第125图 第16~35号土坑

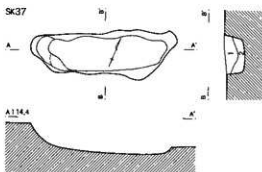


第126图 第36~45号土坑

SK36



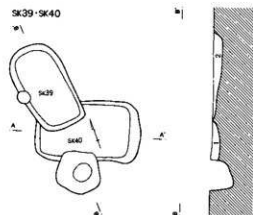
SK37



A1144



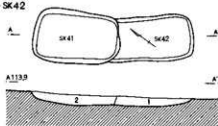
SK39-SK40



A1141



SK41-SK42

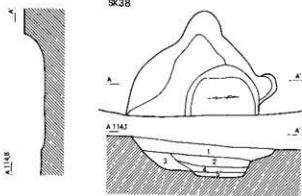


A1139



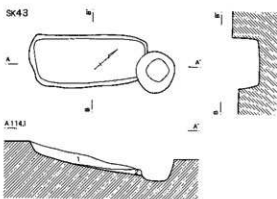
0 2m

SK38



A1148

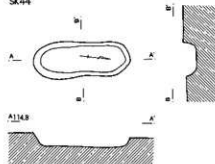
SK43



A1143



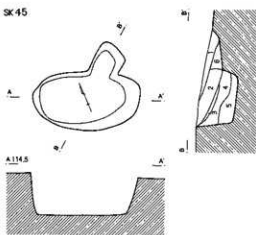
SK44



A1148



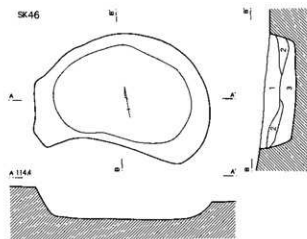
SK45



A1145



第127図 第46・47・49～51・55・56号土坑



第37号土坑

- 1 暗黄褐色土 しまり欠 ロームブロック多量
- 2 暗黄褐色土 粘性弱 ローム粒多量

第38号土坑

- 1 茶褐色土 砂質 軟質 ローム粒子少量 炭化物微量
- 2 黄褐色土 砂質 しまり良好 ローム多量
- 3 褐色土 砂質 軟質 ローム粒子・炭化物微量
- 4 褐色土 しまり良好 ローム粒子・ロームブロック多量
- 5 黄褐色土 しまり良好 ローム主体層

第39・40号土坑

- 1 黄褐色土 硬くしまったロームブロック多量
- 2 暗褐色土 硬くしまったロームブロック・ローム粒子・炭化物

第41・42号土坑

- 1 淡褐色土 粘性弱 ローム粒子多量 炭化物粒子等は含まれていない
- 2 暗褐色土 粘性弱 粒子粗 炭化物やや多量

第43号土坑

- 1 淡褐色土 粘性弱 ローム粒子多量 炭化物粒子等は含まれていない

- 2 淡黄褐色土 粘性強 粒子粗

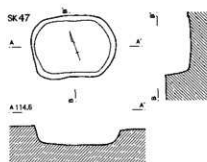
第45号土坑

- 1 淡灰褐色土 堅緻 浅間A多量
- 2 淡褐色土 粒子粗 小礫(径50mm)
- 3 茶褐色土 堅緻 ローム粒子微量
- 4 淡茶褐色土 軟質 粒子粗 ローム粒子微量
- 5 淡黄褐色土 ロームブロック
- 6 淡茶褐色土 軟質 ロームブロック混入

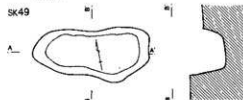
第46号土坑

- 1 淡灰色土 浅間A多量 ローム粒子混入
- 2 暗黄褐色土 粘性弱 浅間A少量 ローム粒子主体 小礫多量
- 3 黄褐色土 粘性弱 浅間Aは含まない 炭化物微量

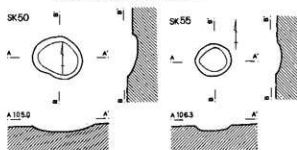
0 2m



A1145

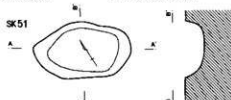


A1150

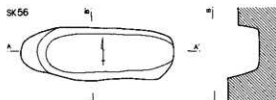


A1050

A1063

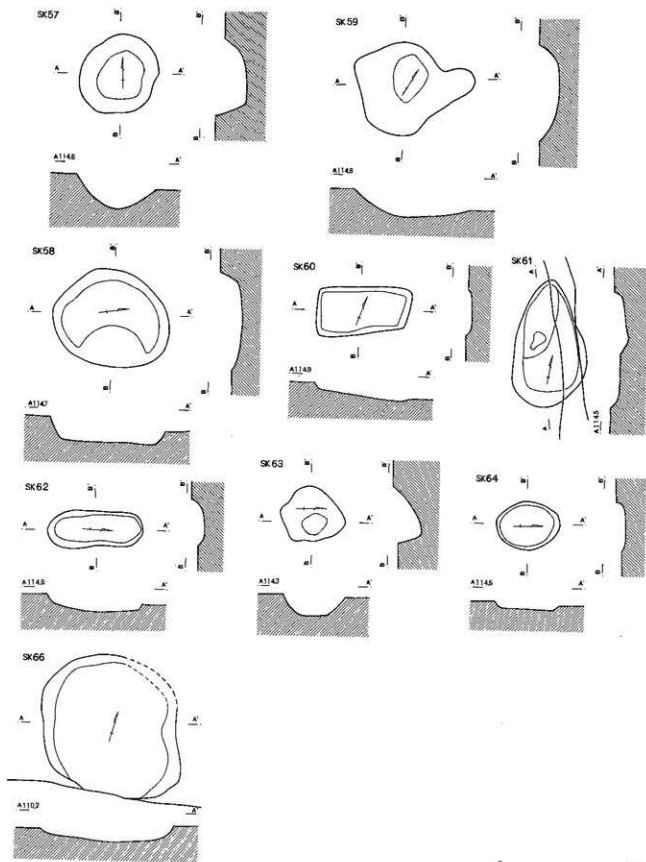


A1055

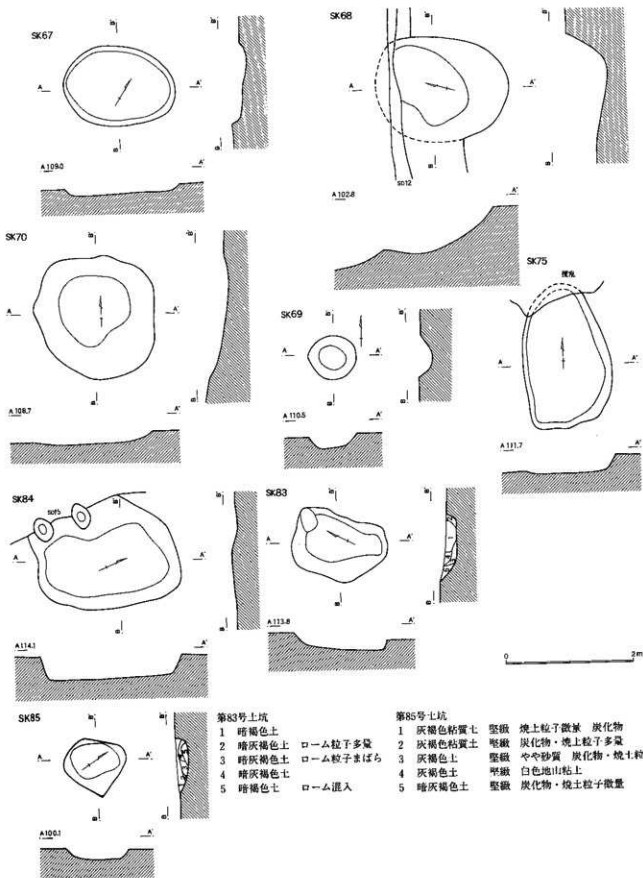


A1143

第128图 第57~64·66号土坑



第129図 第67~70・75・83~85号土坑



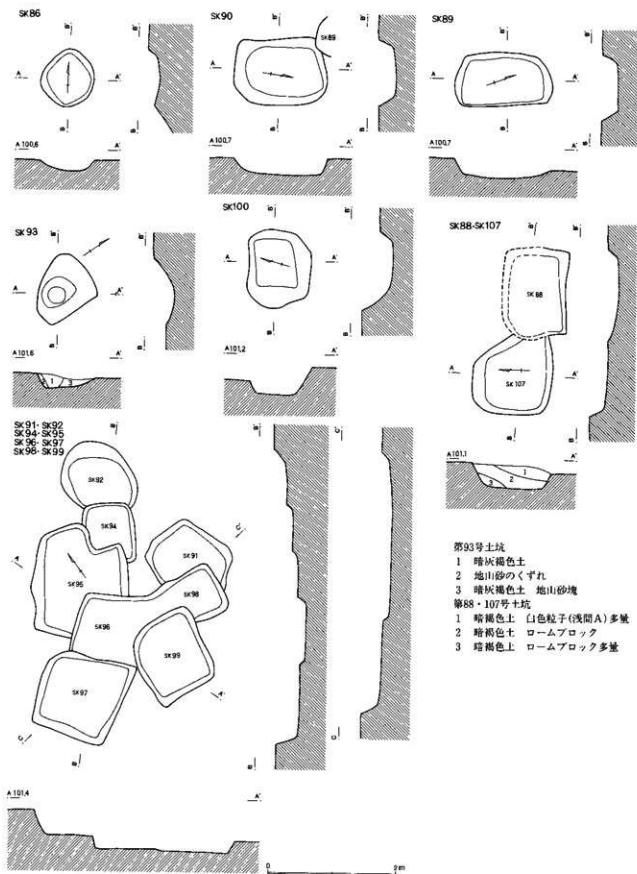
第83号土坑

- 1 暗褐色土
- 2 暗灰褐色土
- 3 暗灰褐色土
- 4 暗灰褐色土
- 5 暗褐色土
- ローム粒子多量
- ローム粒子まばら
- ローム混入

第85号土坑

- 1 灰褐色粘質土
- 2 灰褐色粘質土
- 3 灰褐色土
- 4 灰褐色土
- 5 暗灰褐色土
- 堅緻
- 堅緻
- 堅緻
- 堅緻
- 堅緻
- 焼土粒子微量
- 炭化物
- 炭化物・焼土粒子多量
- やや砂質
- 炭化物・焼土粒子多量
- 白色地山粘土
- 炭化物・焼土粒子微量

第130図 第86・88~100・107号土坑



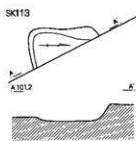
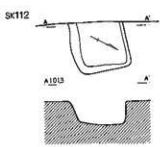
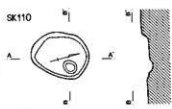
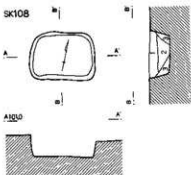
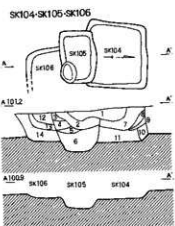
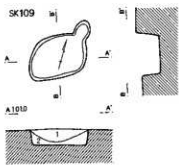
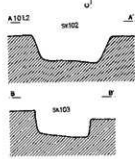
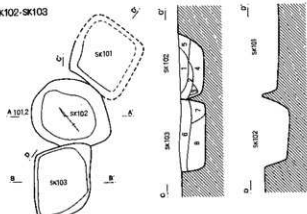
第93号土坑

- 1 暗灰褐色土
 - 2 地山砂のくずれ
 - 3 暗灰褐色土 地山砂塊
- 第88・107号土坑

- 1 暗褐色土 白色粒子(浅間A)多量
- 2 暗褐色土 ロームブロック
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量

第131図 第101~106・108~110・112・113号土坑

SK101-SK102-SK103



131B

第101・102・103号土坑

- 1 暗灰褐色土
 - 2 暗灰褐色土
 - 3 暗灰褐色土
 - 4 暗灰褐色土
 - 5 暗灰褐色土
 - 6 暗灰褐色土
 - 7 暗灰褐色土
 - 8 暗黄褐色土
- 第104・105・106号土坑

- 1 黒褐色土
- 2 暗灰褐色土
- 3 灰褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 黒褐色土
- 8 暗褐色土
- 9 暗褐色土
- 10 暗灰褐色土
- 11 暗褐色土
- 12 暗灰褐色土
- 13 黒褐色土
- 14 暗灰褐色土

第108号土坑

- 1 黒褐色土
- 2 明茶褐色土
- 3 黒褐色土

第109号土坑

- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土

第110号土坑

- 1 黒褐色土

第111号土坑

- 1 暗褐色土
- 2 砂質ローム地山ブロック

第115号土坑

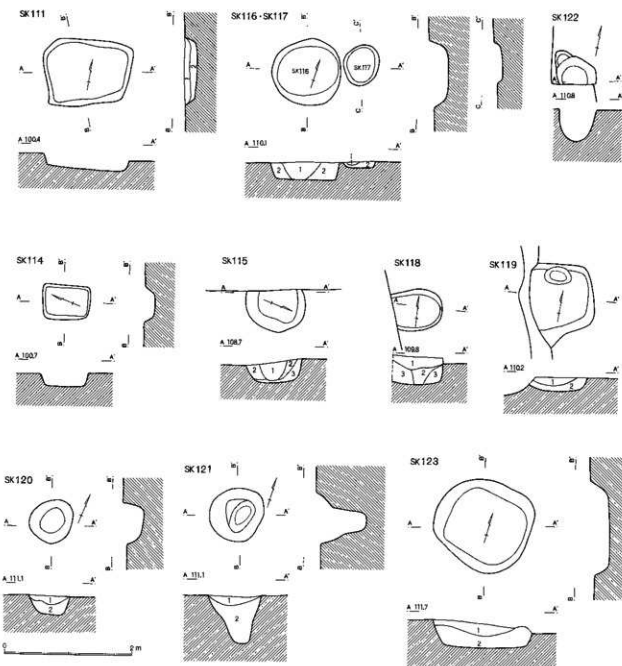
- 1 黒褐色土
- 2 明褐色土
- 3 明褐色土

第116号土坑

- 1 黒褐色土
- 2 明褐色土



第132図 第111・114～123号土坑



第117号土坑

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量
- 2 明褐色土 ローム粒子やや多量

第118号土坑

- 1 黒褐色土 白色粒子(浅間B?)多量 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色土 白色粒子少量 ローム粒子多量
- 3 黒褐色土 ロームをブロック状に含む

第119号土坑

- 1 黒褐色土 ローム粒子・白色粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子ブロック状に含む

第120号土坑

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量

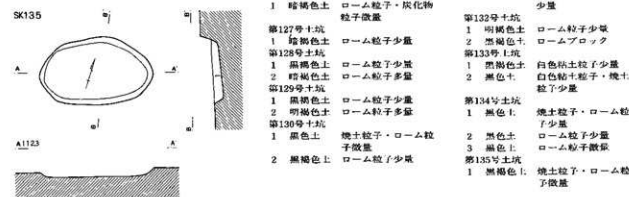
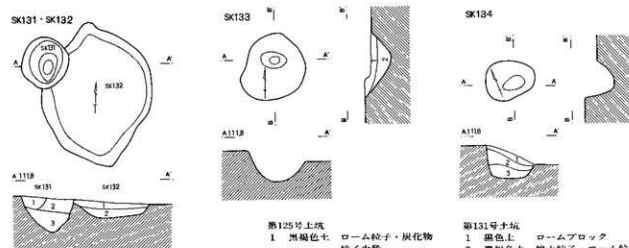
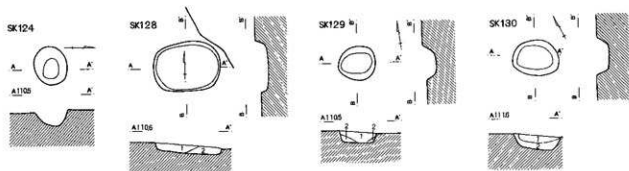
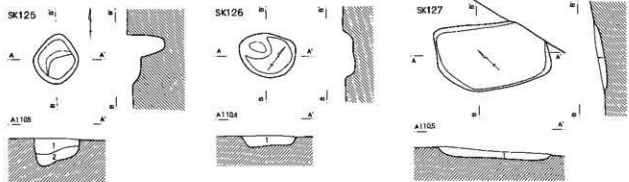
第121号土坑

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量

第123号土坑

- 1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 黒色土

第133图 第124~135号土坑

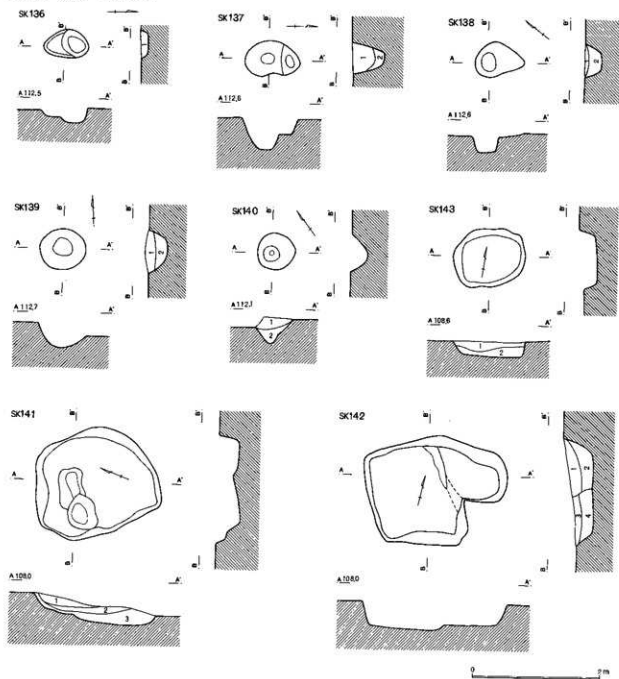


- 第125号土坑
 1 黑褐色土 ローム粒子・炭化物
 粒子少量
 2 黑褐色土 ローム粒子多量
 第126号土坑
 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物
 粒子微量
 第127号土坑
 1 暗褐色土 ローム粒子少量
 第128号土坑
 1 黑褐色土 ローム粒子少量
 2 暗褐色土 ローム粒子多量
 第129号土坑
 1 黑褐色土 ローム粒子少量
 2 暗褐色土 ローム粒子多量
 第130号土坑
 1 黑色土 焼土粒子・ローム粒
 子微量
 2 黑褐色土 ローム粒子少量

- 第131号土坑
 1 黑色土 ロームブロック
 2 黑褐色土 焼土粒子・ローム粒
 子少量
 3 黑色土 焼土粒子・白色粘土
 少量
 第132号土坑
 1 暗褐色土 ローム粒子少量
 2 黑褐色土 ロームブロック
 第133号土坑
 1 暗褐色土 白色粘土粒子少量
 2 黑色土 白色粘土粒子・焼土
 粒子少量
 第134号土坑
 1 黑色土 焼土粒子・ローム粒
 子少量
 2 黑色土 ローム粒子少量
 3 黑色土 ローム粒子微量
 第135号土坑
 1 黑褐色土 焼土粒子・ローム粒
 子微量

0 2m

第134图 第136~143号土坑



第136号土坑

1 明褐色土 白色粘土粒子(浅間B?)

第137号土坑

1 暗褐色土 ローム粒子・白色粘土粒子・

2 黒褐色土 ローム粒子多量

第138号土坑

1 明褐色土 ローム粒子少量

2 明褐色土 ローム粒子多量

第139号土坑

1 暗褐色土

2 暗褐色土 ローム粒子少量

第140号土坑

1 黒褐色土 ローム粒子・炭十粒子・

炭化物粒子少量

2 黒色土 ローム粒子・炭化物粒子

少量

第141号土坑

1 黒色土 ローム粒子少量

2 黒褐色土 ローム粒子多量

3 黒褐色土 ローム粒子をブロック状に含む

第142号土坑

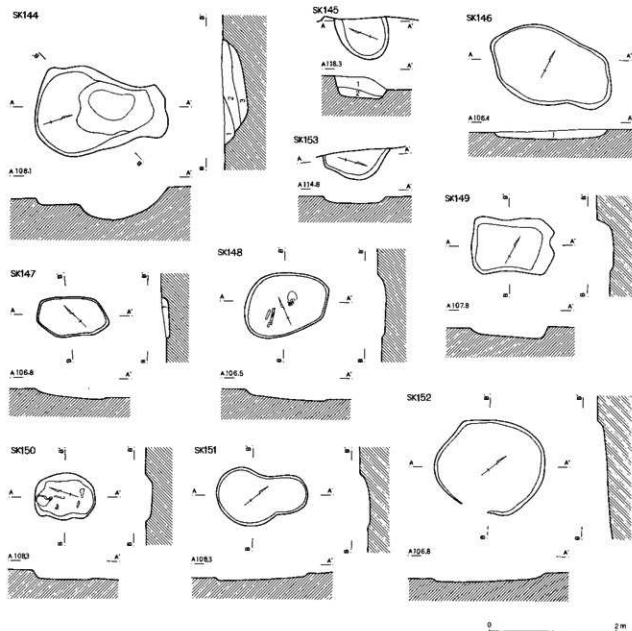
1 黒褐色土 しまり欠 ローム粒子多量

2 黒色土 ローム粒子少量

3 黒褐色土 ローム粒子少量

4 暗茶褐色土

第135図 第144～153号土坑



第143号土坑

- 1 暗褐色土
- 2 ほりすぎ

第144号土坑

- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土

第145号土坑

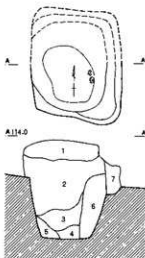
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土

第146号土坑

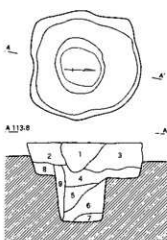
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土
- 1 明褐色土

第136図 第154～159号土坑

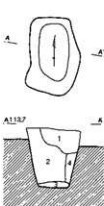
SK154



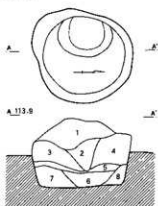
SK155



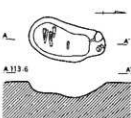
SK156



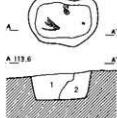
SK158



SK157



SK159



0 2m

第154号土坑

- | | | | |
|---|--------|---------------------------------|-----------------------|
| 1 | 暗褐色土 | しまり良好 | ロームブロック(径20~30mm)多量 |
| 2 | 暗灰褐色土 | ローム粒子・ロームブロック(径20~30mm)粘土ブロック多量 | |
| 3 | 暗褐色土 | 粘土ブロック・ローム粒子・ロームブロック | |
| 4 | ロームと粘土 | | |
| 5 | 黒褐色土 | 淡灰色粘土 | |
| 6 | 暗灰褐色土 | 椀埋土 | ローム粒子・ロームブロック(径3mm)多量 |
| | | | 淡茶灰色粘土ブロック |
| 7 | 暗灰褐色土 | ローム粒子・ロームブロック・淡茶灰色粘土ブロック | |

第155号土坑

- | | | | |
|---|----------------|---------------------------|---------------------|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒子多量・ロームブロック(径10mm)まばら | |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒子まばら | ロームブロック(径20~30mm)多量 |
| 3 | 暗灰褐色土 | ロームブロック(径10~30mm)多量 | |
| 4 | 暗灰褐色土 | ローム粒子・ロームブロック(径10mm)多量 | |
| 5 | 黒褐色土 | ローム粒子まばら | |
| 6 | 暗褐色土 | 崩落ローム | ローム粒子まばら |
| 7 | 白色粘土 | | |
| 8 | 黒褐色土 | ローム粒子と粘土 | |
| 9 | ロームブロック+粘土ブロック | 椀埋土 | |

第156号土坑

- | | | | |
|---|---------|---------|-----------------|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒子多量 | |
| 2 | 暗灰褐色土 | しまり欠 | ローム粒子・ロームブロック多量 |
| 3 | ローム再堆積土 | 暗灰褐色土混入 | |
| 4 | 暗灰褐色土 | ローム粒子多量 | |

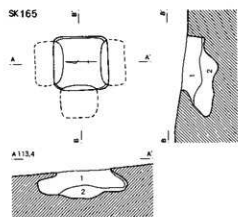
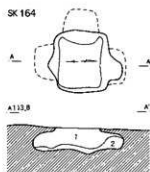
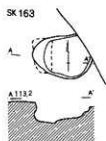
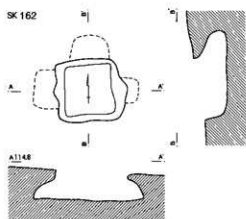
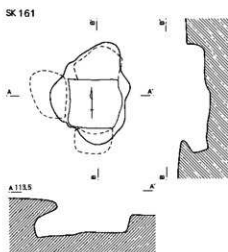
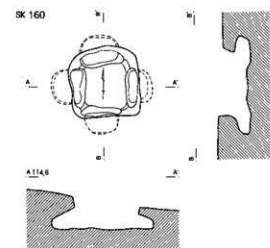
第158号土坑

- | | | | |
|---|-----------|--------------------|-------|
| 1 | 暗灰褐色土 | ロームブロック(径30mm)多量 | |
| 2 | 暗灰褐色土 | ローム粒子多量 | |
| 3 | 黒褐色土 | ロームブロック多量 | |
| 4 | 黒褐色土 | ローム粒子・粘土ブロック多量 | |
| 5 | 淡褐色粘土ブロック | | |
| 6 | 黒色土 | ローム粒子・ロームブロック・粘土混入 | |
| 7 | 黒褐色土 | ローム粒子・粘土 | 崩落ローム |
| 8 | 暗灰褐色土 | ローム粒子 | 崩落ローム |

第159号土坑

- | | | | |
|---|-------|---------|----------------|
| 1 | 暗灰褐色土 | ローム粒子多量 | ロームブロック(径50mm) |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒子多量 | |

第137図 第160～165号土坑



137図

第164号土坑

- 1 啡黄褐色土 粘性弱 ロームブロック多量
2 黄褐色土 粘性弱 ロームブロック

第165号土坑

- 1 黒褐色土 しまり欠 ローム粒子・ロームブロック(径5~20mm)多量 一時的に埋没(埋め戻した可能性大)
2 黄褐色土 しまり欠 再堆積ハードロームブロック一時的に埋没



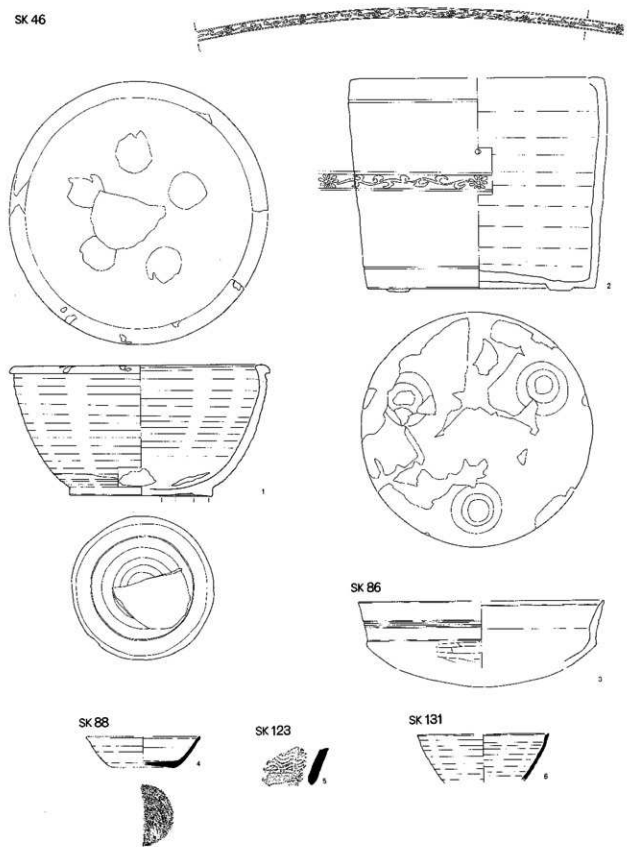
土坑 (第124~137図)

番号	グリッド	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	O-41	長方形	2.72	1.17	0.15	黒褐色土	土師器片6・中世瓦1
02	O-40	隅丸台形	1.05	0.93	0.23		集石土坑
03	N-40	方形	0.86	0.60	0.64		古銭7・木製櫛1・土師器片2
04	N-40	長方形	3.35	1.08	0.12		
05	N-40	長方形	2.08	0.52	0.40		
06	N-40	長方形	3.16	0.91	0.28		煙管・土師器片8・須恵器片2
07	N-41	楕円形	1.62	1.24	0.15		
08	N-40・N-41	円形	1.62	1.45	0.28		
09	N-41	楕円形	1.17	0.53	0.15		土師器片5・陶器片1
10	N-40・N-41	長方形	1.30	0.50	0.20		茶褐色土
13	K-34	長方形	0.99	0.63	0.24		
14	K-34	長方形		0.73	0.36		
15	K-34	長方形	2.52	0.80	0.16		
16	K-34	長方形	1.43	0.80	0.36		
17	K-34	長方形	1.37	0.60	0.32		
18	K-34	長方形	1.54		0.33		
19	K-34	長方形	1.30		0.37		
20	K-34	長方形		0.64	0.48		
21	K-34	円形		0.57	0.47		
22	K-34	長方形		0.66	0.33		
23	K-34	長方形	0.88	0.43	0.10		
24	K-34	方形			0.35		
25	K-34	方形			0.34		
26	K-34	長方形	1.40	0.70	0.35		
27	L-34	方形		0.57	0.27		
28	L-34	方形	1.29		0.42		
29	L-34	長方形	2.10	0.68	0.10		
30	L-35	方形	1.13		0.10		
31	L-35	方形	1.26	1.04	0.15		
32	L-35	長方形	1.26	0.70	0.08		
33	L-35	長方形		0.80	0.19		
34	K-33	長方形	1.38	0.66	0.35		
35	K-33	長方形	1.22		0.10		
36	N-40	長方形	4.11	1.78	0.25		土師器片13
37	N-40	不整形	2.30	0.61	0.30		土師器片6
38	P-43	不整形			0.50		
39	N-39	長方形	1.42	0.80	0.14		須恵器片1
40	N-39	長方形	1.65	0.95	0.13	土師器片1	
41	N-39・N-40	長方形	1.40	0.83	0.18		
42	N-39・N-40	長方形		0.70	0.15		
43	N-40	長方形	1.87	0.81	0.30		
44	M-37	楕円形	1.54	0.52	0.20	褐色土	土師器片2
45	L-35・L-36	不整形	1.71	1.45	0.60		
46	L-35	不整形	2.75	1.75	0.50	土師器片23・須恵器片3・陶器片9・磁器片6・中世瓦7	
47	L-35	長方形	1.34	0.98	0.30	土師器片3・須恵器片2・陶器片1・中世瓦3	
49	L-35	不整形	1.85	0.70	0.48	土師器片1・須恵器片1・中世瓦1	
50	D-20	円形	0.80	0.65	0.10		
51	D-20	楕円形	1.55	0.88	0.30		

番号	グリッド	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
55	C-21	円形	0.59	0.52	0.08		
56	L-36	楕円形	2.40	0.84	0.35		
57	M-39	円形	1.26	1.22	0.40	暗茶褐色土	
58	M-39	円形	1.83	1.52	0.25	暗茶褐色土	
59	N-39	不整形	1.87	1.47	0.32	茶褐色土	
60	M-39・N-39	長方形	1.50	0.74	0.10	黒褐色土	
61	M-38	不整形	2.00	1.15	0.25	暗茶褐色土	
62	M-37・M-38	楕円形	1.52	0.54	0.15	暗茶褐色土	
64	N-40	円形	1.03	0.76	0.10	暗茶褐色土	
66	E-24	楕円形		2.10	0.22	黄褐色土	
67	E-22・E-23	楕円形	1.78	1.25	0.10	暗茶褐色土	
68	B-19・C-19	楕円形			0.65	暗茶褐色土	土師器片8
69	E-24	円形	0.76	0.69	0.20	黒褐色土	
70	E-22	隅丸方形	1.90	1.90	0.20	黒褐色土	土師器片2
75	F-26	楕円形	1.40		0.15	暗黄褐色土	土師器片2
83	P-47	不整形	1.51	1.06	0.19		
84	P-48	不整形	2.22	1.76	0.35		
85	U-64・U-65	隅丸方形	1.00	0.85	0.20		
86	U-64	隅丸方形	0.85	0.91	0.17		土師器片5
88	T-63	長方形	1.35		0.25		土師器片4
89	T-62	長方形	1.51	0.83	0.25		
90	T-62	長方形	1.45	1.02	0.27		土師器片1・須恵器片1
91	T-62	方形	1.25	1.09	0.15		
92	T-62	隅丸方形	1.32	1.04	0.20		
93	T-62	不整形	1.05	0.75	0.23		
94	T-62	方形	0.95	0.80	0.27		土師器片1・須恵器片1・古銭2・釘
95	T-62	不整形	1.78	1.52	0.35		
96	T-62	方形			0.48		
97	T-62	方形	1.31	1.28	0.37		土師器片14・須恵器片1
98	T-62	長方形		0.82	0.20		
99	T-62	方形	1.24	1.09	0.31		
100	T-62	方形	1.24	0.98	0.30		
101	T-62	方形			0.27		
102	T-62・T-63	円形	1.22	1.04	0.38		
103	T-62	方形	1.10	0.88	0.40		
104	T-62	方形	1.03	0.95	0.11		
105	T-62	長方形	0.81	0.58	0.25		
106	T-62	方形			0.07		
107	T-63	隅丸台形	1.28	1.25	0.31		
108	T-63	長方形	1.02	0.74	0.32		
109	T-63	不整形	0.90	0.68	0.25		
110	T-63	楕円形	0.90	0.70	0.08		
111	U-63	長方形	1.40	1.05	0.20		
112	S-63・T-63	方形	0.86		0.37		
113	T-62	長方形			0.22		古銭6
114	T-63	長方形	0.76	0.55	0.22		土師器片1
115	Q-58	円形	0.90		0.35		
116	Q-57	円形	1.03	0.98	0.28		
117	Q-57	円形	0.63	0.56	0.11		

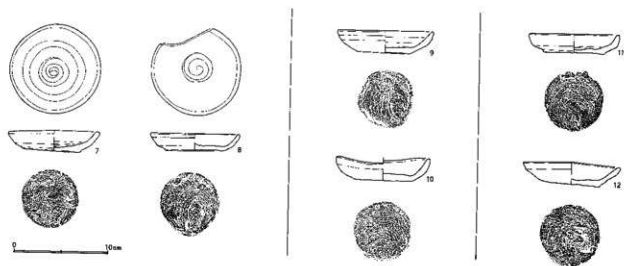
番号	グリッド	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
118	Q-57	円形		0.64	0.30		
119	Q-57	方形	1.30		0.22		
120	Q-56	円形	0.68	0.64	0.30		土師器片2
121	Q-56	円形	0.86	0.85	0.70		土師器片14・須恵器片1
122	Q-56	円形	0.58		0.48		土師器片5
123	Q-55	隅丸方形	1.56	1.47	0.40		土師器片136・須恵器片17
124	Q-56	円形	0.59	0.52	0.25		
125	Q-56	隅丸方形	0.77	0.73	0.42		
126	R-56	楕円形	0.88	0.71	0.18		土師器片3
127	R-56	長方形	1.76	1.09	0.12		土師器片4
128	R-56	楕円形	1.05	0.80	0.13		土師器片1
129	R-56	円形	0.59	0.52	0.17		土師器片2
130	Q-55	楕円形	0.73	0.56	0.23		土師器片4
131	Q-55	円形	0.81	0.76	0.54		
132	Q-55	不整形	2.20	1.76	0.26		土師器片101・須恵器片4
133	Q-55	不整形	1.03	0.96	0.42		土師器片13
134	Q-55	楕円形	0.79	0.63	0.50		
135	Q-54	楕円形	1.80	1.07	0.13		土師器片7・須恵器片4
136	Q-54	楕円形	0.71	0.45	0.11		土師器片3
137	Q-54	不整形	0.87	0.54	0.50		
138	P-54	不整形	0.79	0.52	0.27		
139	P-54	円形	0.74	0.65	0.30		土師器片15・須恵器片1
140	Q-54	円形	0.60	0.58	0.41		
141	R-59	不整形	1.96	1.65	0.26		
142	R-59	不整形	2.27	1.67	0.41		古銭5
143	Q-58	不整形	1.15	0.91	0.23		
144	Q-58	不整形	2.08	1.41	0.38		土師器片3
145	S-58	円形	0.80		0.31		
146	R-59	不整形	1.80	1.25	0.14		
147	R-59	楕円形	1.12	0.63	0.08		古銭2
148	S-59	楕円形	1.26	1.02	0.11		墓壇(人骨) 土師器片5・須恵器片1・古銭7
149	R-59	長方形	1.24	0.80	0.20		古銭8
150	R-58	不整形	0.96	0.73	0.10		墓壇(人骨) 古銭35
151	R-58	不整形	1.46	0.88	0.07		
152	S-59	隅丸方形	1.76	1.47	0.09		
153	N-41	方形			0.11		
154	Q-47	方形		1.45	1.56		墓壇
155	Q-47	方形	1.74	1.69	1.26		墓壇 古銭5・刀子・鏡
156	Q-47	長方形	1.20	0.78	0.92		墓壇 古銭1
157	Q-47	楕円形	1.20	0.61	0.24		墓壇(人骨) 古銭2
158	Q-47	円形	1.55	1.46	1.11		墓壇 土師器片57・須恵器片3・古銭1
159	Q-47	楕円形	1.12	0.72	0.40		墓壇(人骨) 古銭7・刀子・雄髻2・鉤り金具
160	O-41	方形	1.12	1.11	0.44		貯蔵用施設・四方に横穴
161	O-41	方形	1.58	1.23	0.48		貯蔵用施設・三方に横穴 須恵器片1・磁器片1・古銭5
162	O-41	方形	1.18	0.96	0.44		貯蔵用施設・三方に横穴
163	O-41	方形	0.95	0.67	0.28		貯蔵用施設・一方に横穴
164	O-40	方形	1.16	1.00	0.40		貯蔵用施設・三方に横穴 陶器片1
165	O-40	方形	0.86	0.83	0.44		貯蔵用施設・三方に横穴

SK 46



0 10cm

第139図 第154・157・159号土坑出土土遺物



土坑出土遺物 (第138・139図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	鉢	26.3	13.8	15.0		A	淡黄	90	第46号土坑 陶器
2	円筒形火鉢	26.7	22.4	23.8	WBR	B	黒褐	80	第46号土坑
3	鉢	(25.8)	(7.1)		BR	C	暗褐	5	第86号土坑
4	環	(12.1)	(3.25)	(6.4)	BR片	C	浅黄	40	第88号土坑
5	鉢				WBR	B	灰		第123号土坑
6	環	(13.9)	(5.0)		WB	A	黄灰	20	第131号土坑
7	かわらけ	9.3	2.3	6.2	WBR	B	にふい橙	100	第154号土坑
8	かわらけ	9.3	1.9	6.4	WBR	C	にふい橙	85	第154号土坑
9	かわらけ	9.9	2.4	5.5	WBR	B	にふい黄橙	98	第157号土坑
10	かわらけ	9.6	2.5	6.2	WBR	B	にふい橙	100	第157号土坑
11	かわらけ	9.4	19.5	6.4	BR	B	にふい橙	100	第159号土坑
12	かわらけ	10.2	2.1	6.2	WBR	B	にふい橙	100	第159号土坑

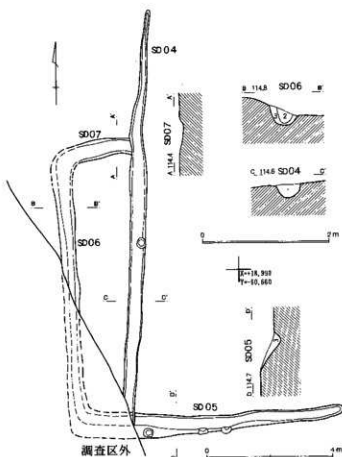
5. 溝跡

広木上宿遺跡では25条の溝跡が発見された(第01-21・23-26号溝跡)。そのうち第01・02・03・08・09・15・16・17・25・26号溝跡の10条は中世寺院に関連するもので、V章で報告する。また調査時に第22号溝跡としたものは、第07号掘立柱建物跡に付随するものである。

第04号溝跡 (第140図)

N-40・41グリッドに位置し、南端は調査区外である。幅0.56m、深さ0.22mを測る。遺物は土師器2片が出土している。時期は覆土の状況から近世に比定される。

第140図 第04・05・06・07号溝跡



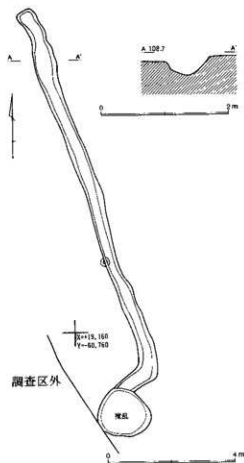
第04・05・06・07号溝跡

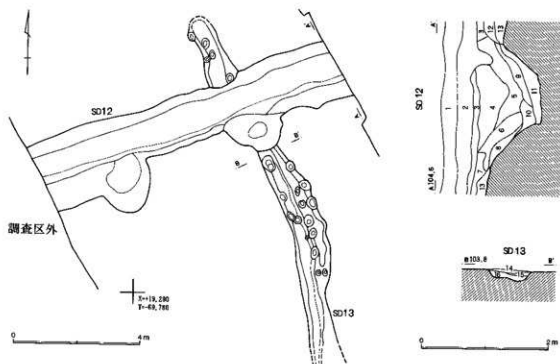
- 1 茶褐色土 砂質強 軟質 ローム粒子・液間A軽石少量
- 2 淡灰黄色土 粘性弱 ローム粒子多量
- 3 黄茶褐色土 粘性弱 ブロック混入 炭化物・焼土含まない

第05・06・07号溝跡 (第140図)

N-40・41・O-41グリッドに位置している。第05号溝跡と第06号溝跡が、交差する部分は調査区外である。また第06号溝跡と第07号溝跡が、交差する部分は第03・04・05・06号上坑と重複している。このような状況から明確ではないが、3条の溝跡が「コ」の字に巡る1条の溝跡である可能性が高い。さらに方向軸が一致することから、中世寺院関連遺構との関係も注目される。

第141図 第11号溝跡





第12・13号溝跡

- | | | | | |
|----------|------|------------|---------------|---------|
| 1 赤褐色土 | 現耕作土 | 砂質 | しまり欠 | 浅間A軽石多量 |
| 2 茶褐色土 | 砂質 | しまり欠 | Iに近似 | 浅間A少量 |
| 3 黒褐色土 | 砂質 | しまり欠 | 炭化物微量 | |
| 4 褐色土 | 砂質 | しまり欠 | 土器片・炭化物微量 | |
| 5 茶褐色土 | 砂質 | しまり欠 | ローム粒子・炭化物粒子少量 | |
| 6 黒褐色土 | 砂質 | しまり欠 | 炭化物粒子微量 | |
| 7 灰褐色粘質土 | 堅緻 | 茶褐色鉄分凝状に多量 | 灰色シルト層 | |

- | | | | |
|-----------|-------------|-----------|-----------|
| 8 黄褐色土 | 砂質 | しまり欠 | ローム粒子少量 |
| 9 褐色土 | 砂質 | しまり欠 | 炭化物粒子少量 |
| 10 黄褐色土 | やや堅緻 | ロームブロック多量 | |
| 11 黄褐色土 | やや堅緻 | 10層に近似 | ロームブロック少量 |
| 12 茶褐色土 | やや堅緻 | ローム粒子微量 | |
| 13 褐色土 | 堅緻 | ローム粒子少量 | |
| 14 灰色粘質土 | 極堅緻 | 茶褐色鉄分層状 | |
| 15 灰褐色粘質土 | 14に近似するが砂多量 | | |
| 16 黒褐色土 | 堅緻 | ローム粒子少量 | |

第05号溝跡は幅0.56m・深さ0.32m、第06号溝跡は幅0.56m・深さ0.32m、第07号溝跡は幅0.62m・深さ0.07mを測る。

いずれの溝跡も時期を判断できるほどの遺物は出土していないが、重複する第04号溝跡に切られていることから、近世以前のものである。

第10号溝跡 (第217図)

M-37・38グリッドに位置し、南端で第09号溝跡と重複している。幅0.98m、深さ0.43mを測る。時期を判断できるほどの遺物は出土していないが、重複する第09号溝跡よりも新しいことから、中世以降に比定される。

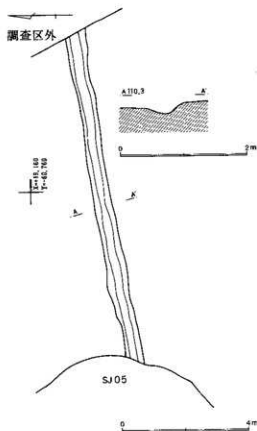
第11号溝跡 (第141図)

D-23・E-23・24グリッドに位置し、調査区際の南端は攪乱されている。E-24グリッドで、N-W方向に屈曲している。重複する第05・11住居跡よりも新しい。幅0.54m、深さ0.28mを測る。覆土は茶褐色土で、しまりがなく、ローム粒子を少量含んでいた。出土遺物はなく、時期は不明である。

第12号溝跡 (第142図)

B-19・C-19グリッドに位置し、重複する第13号溝跡よりも新しい。幅1.92m、深さ1.07mを測り、底面は平坦である。遺物は土師器71片・須恵器5片・陶器1片が出土している。

第143図 第14号溝跡



第13号溝跡 (第142図)

C-19・20グリッドに位置している。両端とも不明で、重複する第12号溝跡よりも古い。幅2.12m、深さ0.16mを測る。ビット20本が伴う。遺物は出土していない。

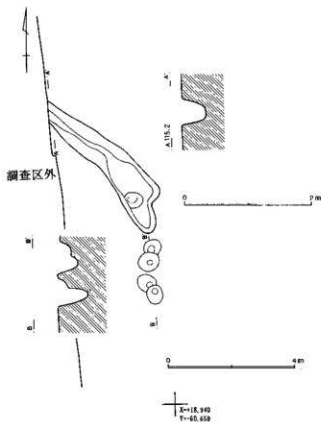
第14号溝跡 (第143図)

E-24・F-24グリッドに位置し、第05号住居跡・第66号土坑と重複している。幅0.54m、深さ0.14mを測る。遺物は土師器18片・須恵器5片が出土しているが、時期は不明である。

第18号溝跡 (第144図)

O-45グリッドに位置し、北側は調査区外である。南端には掘形が、連続するビット状に検出されている。幅0.98m、深さ0.37mを測る。遺物は出土していない。

第144図 第18号溝跡



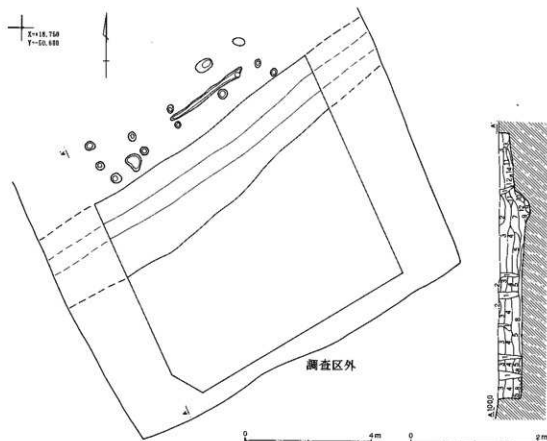
第19号溝跡 (第145図)

U-65グリッドに位置している。北壁は地形の傾斜を利用し、南壁は立ち上がり不明瞭である。幅4.05m、深さ0.48mを測る。重複している第42・43・46号住居跡よりも新しい。遺物は土師器18片・須恵器5片が出土しているが、時期は不明である。

第20号溝跡 (第146図)

T-64グリッドに位置し、方形に巡る溝跡である。重複する第41号住居跡よりも新しく、幅1.08m、深さ0.06mを測る。遺物は土師器44片・須恵器4片が出土しているが、時期は不明である。

第145図 第19号溝跡



第19号溝跡

- 1 暗灰褐色土
- 2 灰褐色土 砂質
- 3 灰褐色土 細礫まばら
- 4 暗灰褐色土 細礫まばら
- 5 暗灰褐色土 細礫多量 やや粘質
- 6 暗灰褐色土 細礫まばら 土器・炭
- 7 灰褐色土 細礫まばら

- 8 砂利層(地山)
- 9 暗灰褐色土 細礫
- 10 細礫のくすれ
- 11 暗灰褐色土 やや砂質
- 12 黒褐色土 やや粘質
- 13 淡灰色砂質地山
- 14 暗灰褐色土 やや粘質

第21号溝跡 (第147図)

T-61・62・63グリッドに位置し、第07号掘立柱建物跡、第01号井戸跡、第89・90号土坑と重複している。幅1.80m、深さ0.32mを測る。

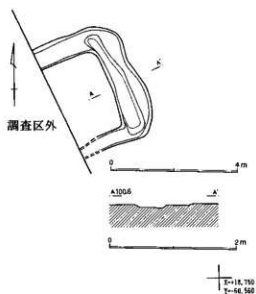
第01号井戸跡付近には、白色粘土とともに土器が集中している箇所があった。「水辺の祭祀」を想起させるが、玉類などの祭祀遺物は伴っていない。遺物は比較的多く、古墳時代後期から平安時代にかけての土師器・須恵器と、切子玉1点・不明鉄製品1点が出土

している。

第23号溝跡 (第148図)

Q-56・57グリッドに位置している。北端は攪乱され、南端は調査区外である。幅1.46m、深さ0.46mを測る。第55・57・59・60・61・63・64号住居跡、第119号土坑と重複し、新旧関係はどの遺構よりも新しい。遺物は土師器218片・須恵器57片が出土しているが、重複する遺構から流れ込んだものである。

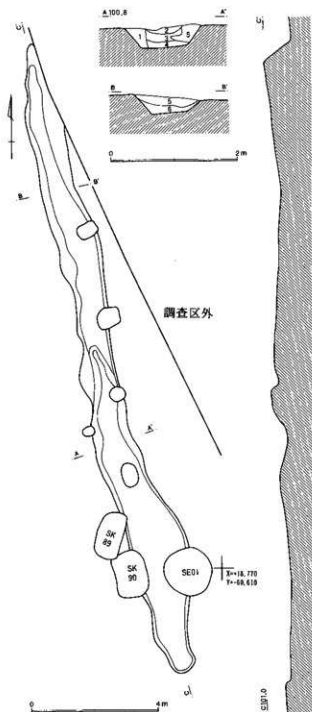
第146図 第20号溝跡



第21号溝跡

- 1 暗灰褐色土+地山ロームブロック
- 2 灰褐色土+ローム
- 3 灰褐色土ブロック+ローム
- 4 灰褐色土+ローム
- 5 暗灰褐色土+地山ロームブロック
- 6 暗褐色土 白色砂粒多量 焼土粒子混入
- 7 砂質ローム地山土の再堆積 暗褐色土まばら

第147図 第21号溝跡

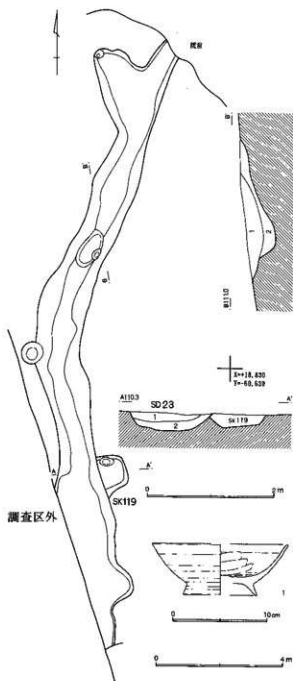


第24号溝跡 (第149図)

K-35・L-35グリッドに位置し、第46号土坑と重複している。幅1.74m、長さ10.24m、深さ0.68mを測る。

遺物は土師器45片・須恵器9片が出土しているが、時期は不明である。平面形態的には土坑と捉えることもできるが、調査時の所見を重視して溝跡として報告する。

第148図 第23号溝跡・出土遺物



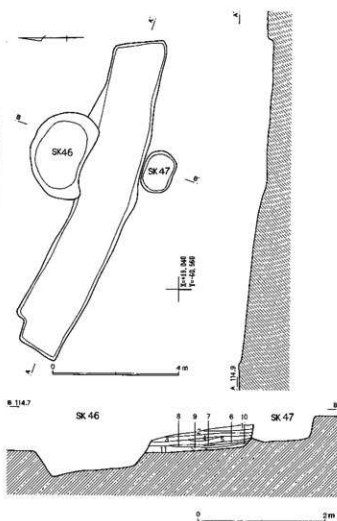
第23号溝跡

- 1 黒褐色土 白色粒子(浅間B)・ローム粒子少量
 2 黒褐色土 ローム粒子少量 炭化物粒子・焼土粒子微量

第23号溝跡出土遺物 (第148図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高台付碗	(14.1)	5.4	7.6	W片	A	にぶい黄褐	20	内面黒色処理

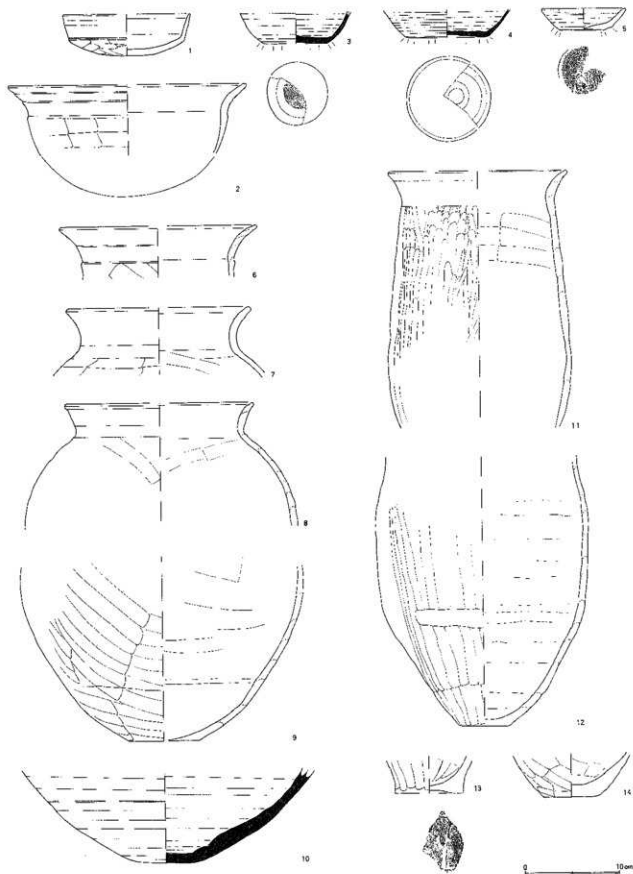
第149図 第24号溝跡



第24号溝跡

- 1 淡灰褐色土 浅間A軽石 ローム粒子混入
 2 淡灰褐色土 堅緻 粘質 浅間A軽石微量
 3 淡灰褐色土 硬緻 粘質 浅間A軽石多量
 4 淡灰褐色土 軟質 浅間A軽石
 5 淡灰褐色土 堅緻 浅間A軽石微量
 6 黄褐色土 粘性強 浅間A軽石微量
 7 灰色土層 硬緻 粘性強 浅間A軽石を含まない
 8 黄褐色土 粘性強 浅間A軽石を含まない
 9 淡灰褐色土 浅間A軽石・ローム粒子多量
 10 暗黒褐色土 軟質 浅間A軽石微量 炭化物をあまり含まない
 11 黄褐色土 粘性強 硬緻 浅間A軽石を含まない

第150図 第21号溝跡・出土遺物



第21号溝跡 (第150図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	13.6	4.4		BR	B	橙	60	
2	鉢	(24.9)	(7.4)		BR	B	褐	10	
3	坏		(3.3)	(6.5)	W針	B	灰灰	10	
4	坏		(3.3)	(2.9)	WBR	B	にぶい赤褐	10	
5	かわらけ	8.6	2.4	4.5	WBR	B	橙	60	
6	壺	(30.3)	(5.5)		WR片	C	黒褐	5	
7	甕	(19.0)	(7.4)		BR片	B	橙	5	
8	甕	(19.5)	(13.1)		WBR片	B	橙	10	
9	甕		18.4	(7.4)	WB	B	灰黄褐	20	
10	甕		(9.8)	(7.5)	WB片	B	灰	30	
11	甕	(18.6)	(27.0)		BR片	B	にぶい黄褐	45	
12	甕		(28.3)	(5.0)	WB片	B	暗褐	40	
13	甕		(3.9)	(7.0)	WBR	B	黒	5	
14	甕		(4.6)	5.9	WB片	B	赤褐	10	

6. その他の遺構と遺物

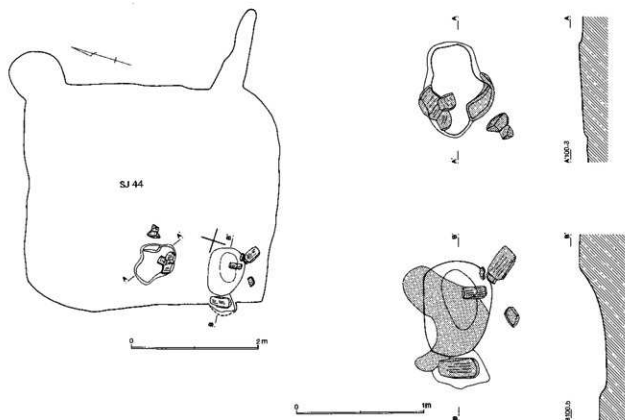
(1) 製鉄遺構

T-64・U-64グリッドに位置する第44号住居跡の埋没途中の窪みを利用した、製鉄遺構が検出されている。平面の観察では遺構は確認できず、第44号住居跡調査中に発見された(第151図)。

平面形態や構造については明確ではないが、被熱し
第151図 第01・02号製鉄遺構

た扁平な礫や焼土化した面が確認されている。図版87の楕円形や鉄滓、羽口の破片などが出土している。

時期は明確ではないが、第44号住居跡が完全に埋没する以前のものであることから、平安時代後半を降らないものと思われる。

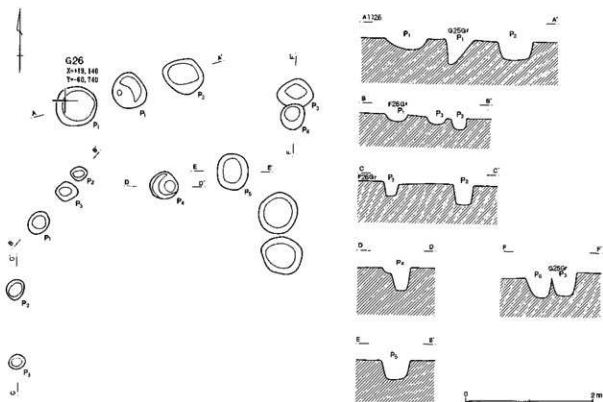


(2) ビット

広木上宿遺跡では、用途不明の多数の単独ビットが発見されている。区域が限定された調査であるため、

これらのビットについてはグリッドビットとして報告する。

第152図 G-25・26Gr・F-26Gr



G-25Gr (第152図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	隅丸台形	0.55	0.50	0.40	茶褐色土	Pit342
02	方形	0.58	0.55	0.28	茶褐色土	Pit341
03	方形	0.50	0.45	0.33	茶褐色土	Pit339

F-26Gr (第152図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.37	0.32	0.13		
02	円形	0.31	0.26	0.22		
03	円形	0.25	0.23	0.31		

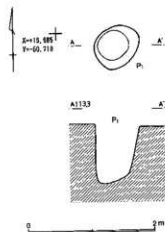
G-26Gr (第152図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.37	0.31	0.17	茶褐色土	Pit336
04	円形	0.45	0.42	0.36	暗茶褐色土	Pit347
05	楕円形	0.57	0.48	0.30	茶褐色土	Pit343

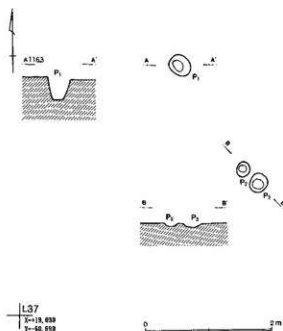
J-31Gr (第153図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.70	0.66	0.90	黒褐色土	Pit379

第153図 J-31Gr



第154図 L-36Gr



L-36Gr (第154図)

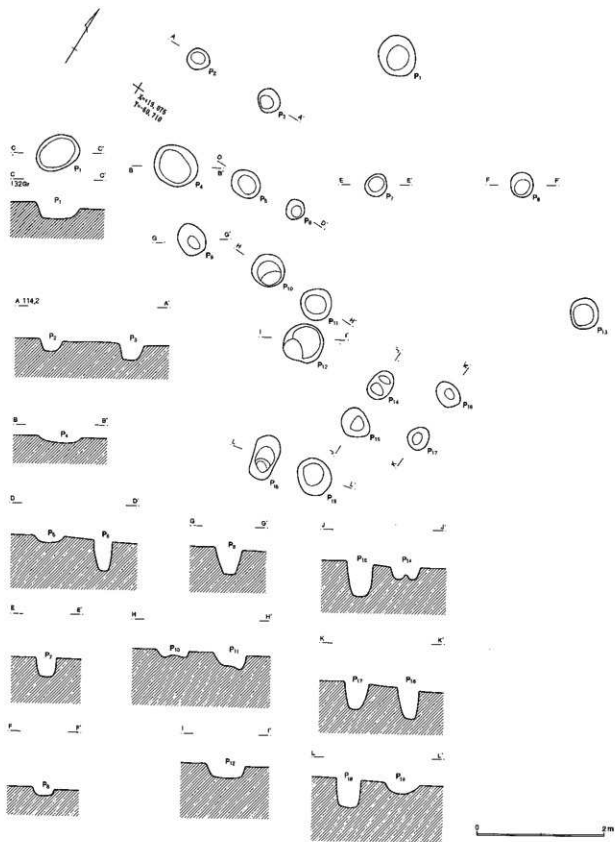
番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.36	0.30	0.33	暗茶褐色土	Pin318
02	方形	0.22	0.21	0.04	暗茶褐色土	柱眼 Pin314
03	方形	0.29	0.26	0.04	茶褐色土	Pin317

I-32Gr (第155図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	楕円形	0.71	0.54	0.22	暗茶褐色土	Pin386

J-32Gr (第155図)

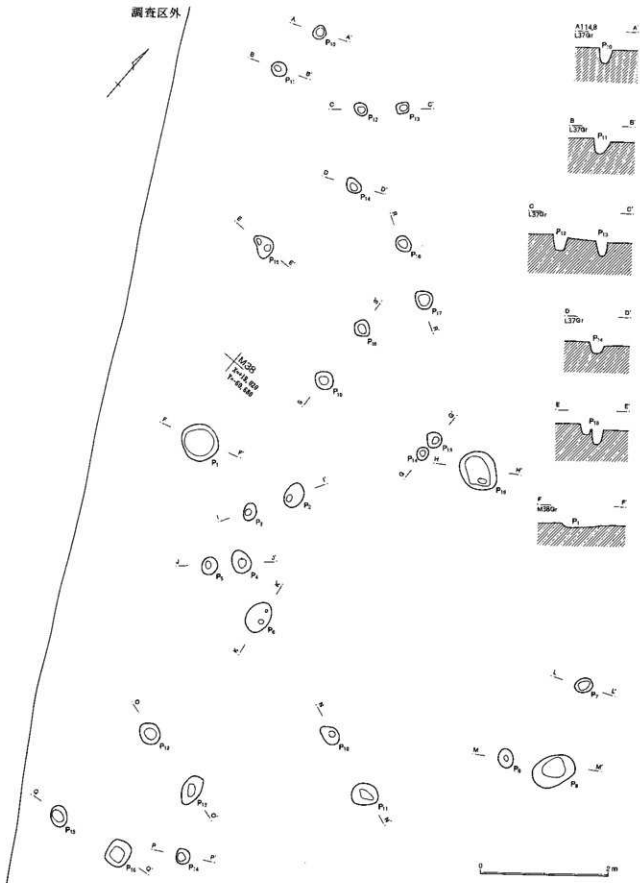
番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
02	円形	0.35	0.33	0.19	暗茶褐色土	Pin387
04	円形	0.72	0.64	0.11	暗茶褐色土	Pin384
05	円形	0.47	0.43	0.12	暗茶褐色土	Pin381
06	円形	0.30	0.30	0.46		
07	円形	0.35	0.35	0.30	黒褐色土	Pin374
08	円形	0.38	0.35	0.13	暗茶褐色土	Pin375
09	円形	0.50	0.45	0.41	暗茶褐色土	Pin385
11	円形	0.50	0.50	0.20	茶褐色土	Pin328
12	円形	0.63	0.60	0.20	茶褐色土	Pin327
14	楕円形	0.46	0.35	0.18	暗茶褐色土	Pin372
15	円形	0.50	0.43	0.50	黒褐色土	Pin369
16	円形	0.42	0.36	0.47	黒褐色土	土師器片1 Pin371
17	円形	0.38	0.33	0.42	黒褐色土	Pin370
18	楕円形	0.71	0.40	0.43	茶褐色土	Pin326
19	円形	0.57	0.56	0.15	暗茶褐色土	Pin368

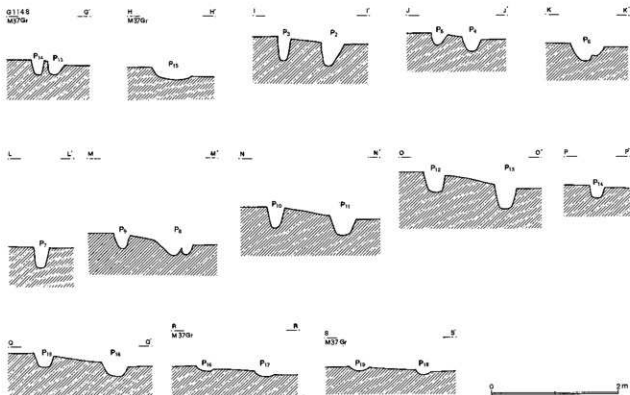


第156图 J-33 · 34Gr · K-32 · 33Gr



调查区外





J-33Gr (第156図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.22	0.21	0.09		Pit351
02	円形	0.20	0.21	0.20		Pit352
03	円形	0.40	0.35	0.16		Pit353
04	円形	0.23	0.23	0.05		Pit357
05	方形	0.27	0.27	0.16		Pit354
06	円形	0.25	0.23	0.18		Pit355
07	円形	0.31	0.18	0.08		Pit358
08	円形	0.20	0.20	0.14		Pit356
09	円形	0.30	0.24	0.20		Pit360
10	円形	0.24	0.22	0.15		Pit361
11	円形	0.28	0.26	0.22		Pit362
12	円形	0.32	0.28	0.08		Pit363
13	円形	0.21	0.19	0.33		Pit388

J-34Gr (第156図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.39	0.38	0.30		Pit364
02	円形	0.36	0.35	0.37		Pit365

K-32Gr (第156図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.36	0.35	0.25		Pit359

K-33Gr (第156図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.31	0.30	0.11		Pit367
02	円形	0.33	0.30	0.10		Pit366

L-37Gr (第157図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
10	円形	0.22	0.20	0.23	黒褐色土	Pi295
11	円形	0.24	0.23	0.22	黒褐色土	Pi296
12	円形	0.22	0.20	0.22	茶褐色土	Pi299
13	方形	0.20	0.17	0.21	暗茶褐色土	Pi291
14	円形	0.25	0.22	0.15	茶褐色土	Pi289
15	不整形	0.37	0.31	0.25	茶褐色土	Pi288

M-37Gr (第157図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
13	円形	0.26	0.25	0.19	茶褐色土	Pi206
14	円形	0.22	0.17	0.18		Pi207
15	円形	0.67	0.59	0.13		Pi208
16	円形	0.27	0.21	0.05		
17	円形	0.37	0.36	0.04		
18	円形	0.23	0.27	0.05		
19	円形	0.28	0.26	0.06		

M-38Gr (第157・158図)

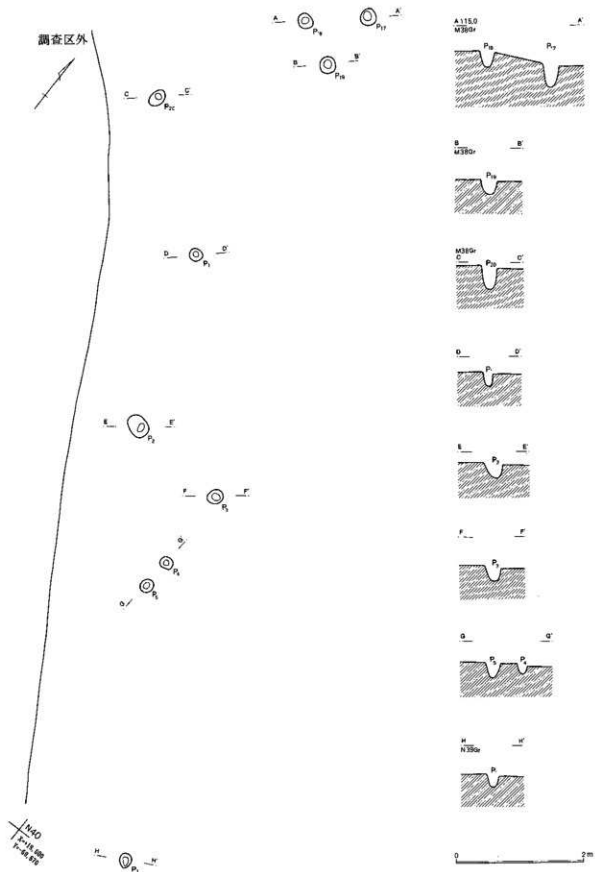
番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.60	0.59	0.05	暗茶褐色土	Pi287
02	円形	0.41	0.31	0.36	茶褐色土	Pi328
03	円形	0.28	0.20	0.36	暗茶褐色土	Pi286
04	円形	0.35	0.30	0.22	暗茶褐色土	Pi285
05	円形	0.28	0.26	0.18	茶褐色土	Pi284
06	楕円形	0.52	0.38	0.24	茶褐色土	Pi327
07	楕円形	0.28	0.23	0.31	茶褐色土	Pi283
08	楕円形	0.68	0.47	0.20	暗茶褐色土	Pi282
09	円形	0.29	0.25	0.22	茶褐色土	Pi281
10	円形	0.34	0.27	0.33	黒褐色土	柱瓦(茶褐色土) Pi280
11	円形	0.44	0.39	0.29	茶褐色土	柱瓦 Pi279
12	円形	0.36	0.33	0.29	暗茶褐色土	Pi278
13	楕円形	0.51	0.32	0.36	暗茶褐色土	Pi277
14	円形	0.24	0.23	0.18	茶褐色土	Pi274
15	円形	0.31	0.30	0.20	暗茶褐色土	Pi276
16	方形	0.43	0.38	0.20	暗茶褐色土	Pi275
17	円形	0.26	0.23	0.35	茶褐色土	Pi272
18	円形	0.24	0.24	0.25	暗茶褐色土	Pi273
19	円形	0.27	0.26	0.21	茶褐色土	Pi271
20	円形	0.29	0.22	0.36	黒褐色土	Pi270

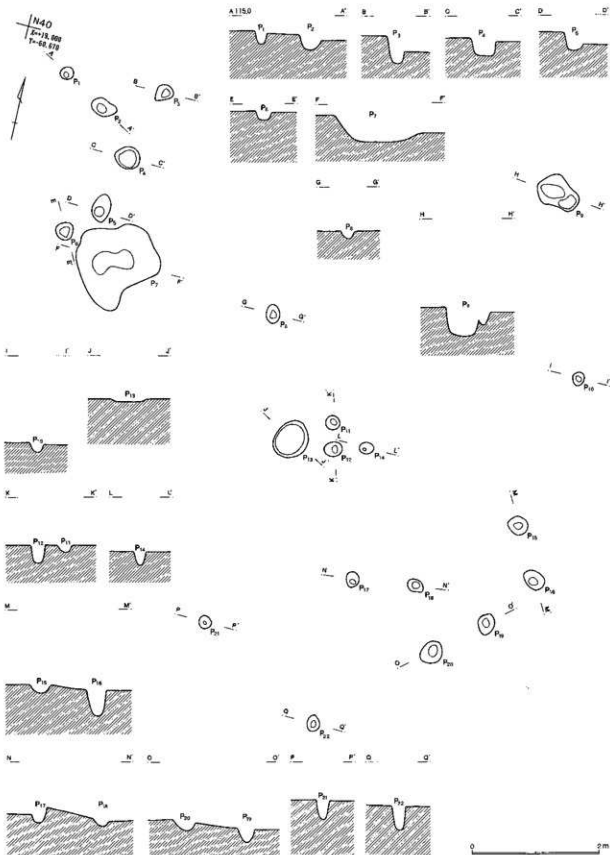
M-39Gr (第158図)

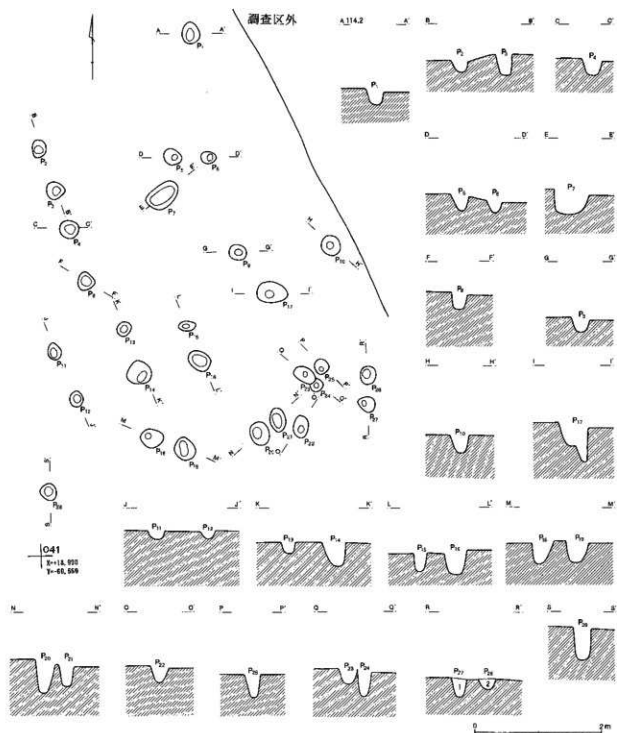
番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.21	0.20	0.21	茶褐色土	Pi269
02	楕円形	0.38	0.28	0.23	黒褐色土	土師器片 Pi268
03	円形	0.23	0.23	0.22	茶褐色土	Pi266
04	円形	0.20	0.19	0.14	茶褐色土	Pi265
05	円形	0.21	0.21	0.23	茶褐色土	Pi264

N-39Gr (第158図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.25	0.20	0.19	茶褐色土	Pi263







N-40Gr (第159図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.22	0.20	0.19	茶褐色土	Pit262
02	楕円形	0.39	0.26	0.20	黒褐色土	Pit250
03	円形	0.27	0.26	0.30	黒褐色土	Pit261
04	円形	0.41	0.37	0.25	茶褐色土	Pit259
05	方形	0.39	0.29	0.22	黒褐色土	Pit258
06	円形	0.30	0.27	0.12	茶褐色土	Pit257
07	不整形	1.42	1.36	0.32		Pit256
08	円形	0.31	0.22	0.13		
09	不整形	0.68	0.48	0.43		
10	円形	0.20	0.20	0.15		Pit203
11	円形	0.23	0.23	0.12	黒褐色土	Pit330
12	円形	0.27	0.24	0.29	茶褐色土	Pit331
13	円形	0.62	0.52	0.04	茶褐色土	Pit329
14	円形	0.21	0.18	0.21		
15	方形	0.29	0.28	0.15		Pit201
16	楕円形	0.35	0.26	0.39		Pit200
17	円形	0.24	0.21	0.19	黒褐色土	Pit335
18	円形	0.26	0.20	0.09	暗茶褐色土	Pit332
19	方形	0.29	0.29	0.21		Pit202
20	円形	0.37	0.31	0.14	茶褐色土	Pit334
21	円形	0.20	0.19	0.30		
22	円形	0.22	0.22	0.37		

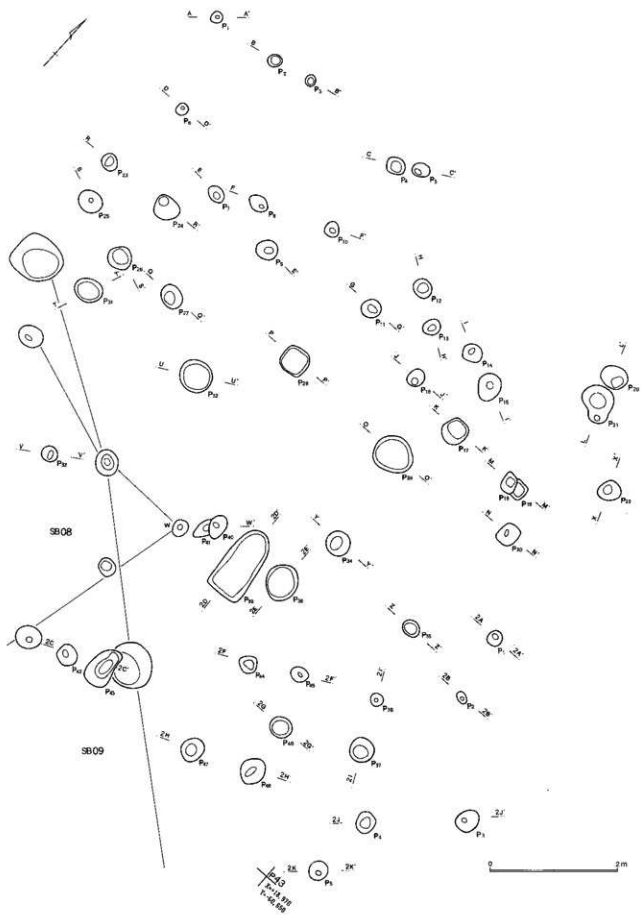
O-40Gr (第160図)

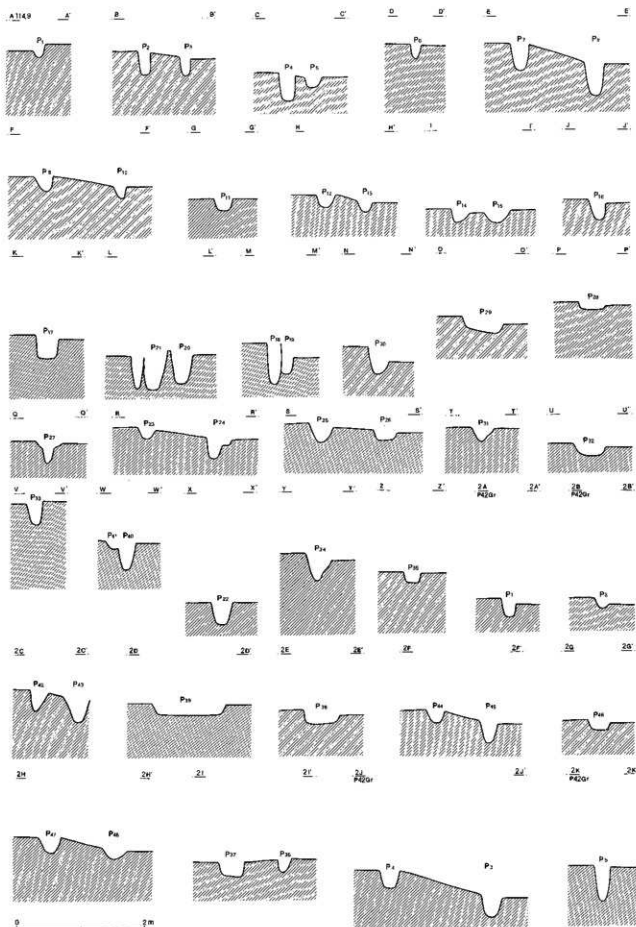
番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.34	0.29	0.23		
02	円形	0.27	0.22	0.18		Pit199
03	円形	0.29	0.27	0.33		Pit198
04	円形	0.30	0.30	0.23		Pit197
05	円形	0.28	0.26	0.22		Pit195
06	円形	0.25	0.21	0.17		Pit193
07	楕円形	0.57	0.33	0.35		Pit196
08	円形	0.27	0.25	0.25		Pit191
09	円形	0.27	0.23	0.20		Pit186
10	円形	0.32	0.32	0.29		Pit184
11	円形	0.26	0.21	0.14		Pit192
12	円形	0.24	0.21	0.12		Pit194
13	円形	0.23	0.22	0.17		Pit190
14	円形	0.37	0.36	0.39		Pit189
15	楕円形	0.29	0.17	0.30		Pit188
16	円形	0.35	0.30	0.34		Pit187
17	楕円形	0.49	0.35	0.53		Pit185
18	方形	0.31	0.30	0.35		土師器片1 Pit174
19	方形	0.35	0.30	0.32		Pit175
20	円形	0.36	0.32	0.47		Pit176
21	楕円形	0.39	0.26	0.31		Pit177
22	楕円形	0.35	0.25	0.26		Pit178
23	楕円形	0.35	0.23	0.24		Pit179
24	円形	0.21	0.21	0.41		Pit180
25	円形	0.24	0.22	0.36		Pit181
26	円形	0.29	0.25	0.16		Pit183
27	円形	0.25	0.23	0.29		Pit182
28	円形	0.27	0.27	0.51	黒褐色土	Pit163

O-42Gr (第161図)

番号	形状	長さ(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.19	0.19	0.18	茶褐色土	Pit122
02	円形	0.22	0.21	0.36	茶褐色土	Pit123
03	円形	0.19	0.18	0.28	茶褐色土	Pit124
04	円形	0.28	0.25	0.42	褐色土	Pit130
05	円形	0.28	0.22	0.16		Pit131
06	円形	0.20	0.17	0.22		Pit121
07	円形	0.31	0.23	0.41		
08	円形	0.28	0.26	0.25	茶褐色土	Pit125
09	円形	0.34	0.32	0.52		
10	円形	0.25	0.22	0.18	茶褐色土	Pit129
11	円形	0.31	0.29	0.20	褐色土	Pit132
12	円形	0.32	0.28	0.20	黒褐色土	Pit136
13	円形	0.27	0.27	0.15	黒褐色土	Pit135
14	円形	0.32	0.32	0.17	褐色土	Pit137
15	円形	0.44	0.38	0.19		Pit138
16	円形	0.31	0.26	0.29	茶褐色土	Pit134
17	方形	0.43	0.37	0.34		Pit139
18	方形	0.30	0.24	0.58		Pit142
19	方形	0.27	0.24	0.32	褐色土	Pit141
20	円形	0.42	0.35	0.49	茶褐色土	Pit144
21	不整形	0.61	0.50	0.60		Pit143
22	円形	0.36	0.30	0.35		
23	円形	0.30	0.25	0.16	褐色土	Pit119
24	円形	0.39	0.39	0.33	黄褐色土	Pit120
25	円形	0.40	0.35	0.27	茶褐色土	Pit118
26	円形	0.38	0.38	0.13	茶褐色土	Pit117
27	円形	0.40	0.32	0.36	褐色土	Pit126
28	方形	0.45	0.42	0.11	黄褐色土	Pit128
29	円形	0.65	0.59	0.19	黒褐色土	Pit133
30	方形	0.37	0.31	0.32	茶褐色土	Pit140
31	円形	0.45	0.38	0.21	黒褐色土	Pit116
32	円形	0.52	0.50	0.18	黒褐色土	柱痕 Pit127
33	円形	0.26	0.26	0.37	褐色土	Pit02
34	円形	0.40	0.39	0.37	茶褐色土	Pit12
35	円形	0.28	0.25	0.17		Pit15
36	円形	0.22	0.21	0.20	褐色土	Pit17
37	円形	0.40	0.39	0.24	褐色土	柱痕 Pit19
38	円形	0.59	0.52	0.19	褐色土	Pit13
39	楕円形	1.17	0.56	0.16		Pit11
40	楕円形	0.41	0.26	0.43	茶褐色土	Pit102
41	不整形		0.26	0.12	茶褐色土	Pit101
42	円形	0.33	0.32	0.31	褐色土	Pit104
43	不整形	0.66	0.40	0.35	茶褐色土	
44	円形	0.29	0.28	0.21		Pit76
45	円形	0.28	0.25	0.33		柱痕 Pit16
46	円形	0.34	0.33	0.14	茶褐色土	Pit18
47	方形	0.40	0.33	0.25	黒褐色土	Pit21
48	円形	0.45	0.38	0.16	黄褐色土	土師器片1 Pit20

第161图 O-42Gr · P-42Gr





P-42Gr (第161図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.26	0.23	0.25	黒褐色土	Pa115
02	円形	0.21	0.17	0.12	黒褐色土	Pa114
03	円形	0.39	0.33	0.32	黒褐色土	Pa21
04	円形	0.32	0.29	0.28	茶褐色土	Pa113
05	円形	0.32	0.29	0.55	黒色土	土師器片1 Pa112

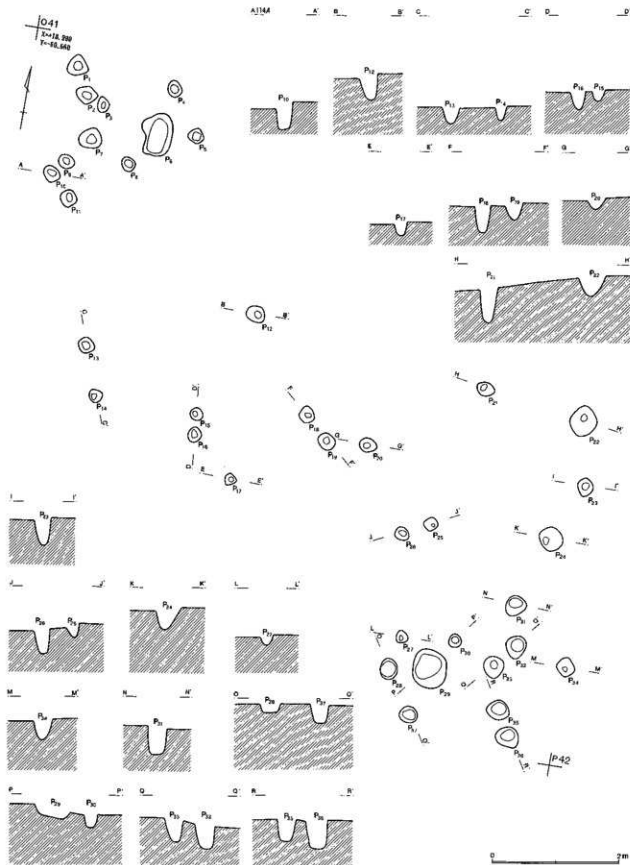
O-41Gr (第162図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.32	0.31			Pa153
02	方形	0.27	0.26			Pa152
03	円形	0.23	0.19			
04	円形	0.26	0.23		黒褐色土	Pa145
05	方形	0.23	0.22		褐色土	Pa146
06	楕円形	0.59	0.43		茶褐色土	Pa147
07	円形	0.37	0.33		褐色土	Pa149
08	円形	0.23	0.21			Pa148
09	円形	0.26	0.22			
10	円形	0.27	0.24	0.40		Pa173
11	方形	0.25	0.24			
12	方形	0.30	0.26	0.40		Pa172
13	方形	0.25	0.24	0.25	黒褐色土	Pa165
14	円形	0.20	0.20	0.23		Pa164
15	円形	0.20	0.18	0.17		Pa160
16	円形	0.24	0.21	0.28		Pa159
17	方形	0.21	0.18	0.20	茶褐色土	Pa161
18	方形	0.24	0.23	0.41		Pa171
19	円形	0.28	0.22	0.25		Pa158
20	方形	0.25	0.23	0.15		Pa157
21	方形	0.26	0.23	0.54		Pa170
22	方形	0.42	0.41	0.30		Pa169
23	方形	0.25	0.23	0.42		Pa168
24	円形	0.37	0.35	0.31		Pa167
25	方形	0.21	0.19	0.19		Pa155
26	円形	0.23	0.22	0.38		Pa156
27	円形	0.19	0.19	0.15		Pa154
28	円形	0.32	0.28	0.32		
29	円形	0.62	0.60	0.13		
30	円形	0.22	0.19	0.20		
31	円形	0.34	0.28	0.43		
32	円形	0.33	0.31	0.36		
33	円形	0.33	0.33	0.35		
34	方形	0.27	0.25	0.32	褐色土	Pa166
35	円形	0.32	0.31	0.35		
36	円形	0.36	0.33	0.44		
37	円形	0.27	0.27	0.29		

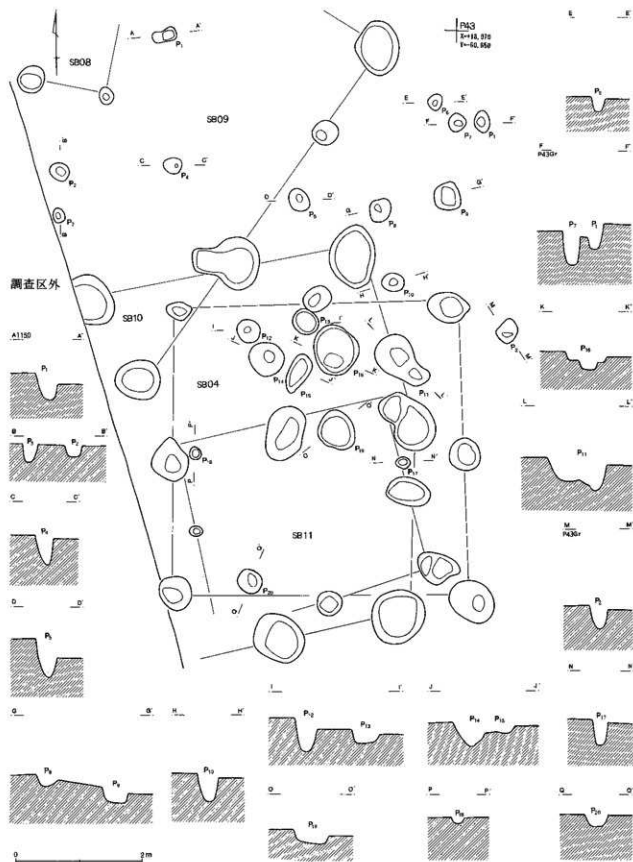
P-43Gr (第163図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.36	0.26	0.32	黄褐色土	Pa25
02	方形	0.36	0.30	0.55		Pa99

第162图 O-4Gr



第163图 O-43Gr · P-43Gr



O-43Gr (第163図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	不整形	0.37	0.20	0.32	褐色土	Pa106
02	円形	0.32	0.28	0.17	黄褐色土	Pa05
03	円形	0.24	0.20	0.18	褐色土	Pa06
04	円形	0.28	0.27	0.45		Pa071
05	円形	0.35	0.33	0.45	茶褐色土	Pa27
06	円形	0.26	0.21	0.22	褐色土	Pa23
07	円形	0.29	0.28	0.50	黒褐色土	Pa24
08	円形	0.36	0.33	0.15	黒褐色土	Pa36
09	円形	0.44	0.42	0.20	茶褐色土	Pa37
10	円形	0.35	0.30	0.43		Pa33
11	不整形	0.94	0.58	0.43	茶褐色土	土師器片5 Pa39・40
12	円形	0.37	0.36	0.44	茶褐色土	土師器片2・須恵器片3 Pa29
13	円形	0.42	0.40	0.20		Pa32
14	円形	0.55	0.53	0.29	黒褐色土	土師器片1 Pa30
15	楕円形	0.63	0.32	0.08	黄褐色土	Pa31
16	円形	0.74	0.74	0.23		Pa34
17	円形	0.23	0.20	0.38	茶褐色土	土師器片33・須恵器片5・陶器片1・磁器片1・中世瓦2・編物石1・縄文土器片4 Pa46
18	円形	0.20	0.18	0.09	茶褐色土	Pa108
19	円形	0.64	0.57	0.17	黄褐色土	Pa43
20	円形	0.40	0.36	0.20	茶褐色土	土師器片1 Pa49

O-44Gr (第164図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.41		0.32	茶褐色土	Pa110
02	円形	0.21	0.19	0.29	褐色土	Pa63
03	円形	0.51	0.42	0.35	黒褐色土	土師器片4 Pa61
04	円形	0.65	0.61	0.10	黄褐色土	Pa59
05	楕円形	0.58	0.44	0.22	褐色土	土師器片1 Pa56
06	円形	0.30	0.26	0.21		Pa111
07	不整形	0.39	0.31	0.23	黄褐色土	Pa57
08	円形	0.31	0.27	0.28	黄褐色土	土師器片1 Pa58
09	楕円形	0.43	0.37	0.15		Pa64
10	楕円形	0.36	0.27	0.10		Pa65
11	円形	0.42	0.41	0.41	黒褐色土	Pa09
12	方形	0.24	0.22	0.16	黒褐色土	Pa66

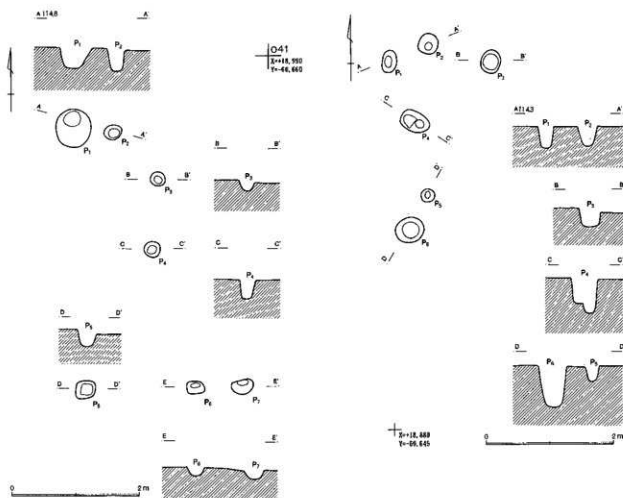
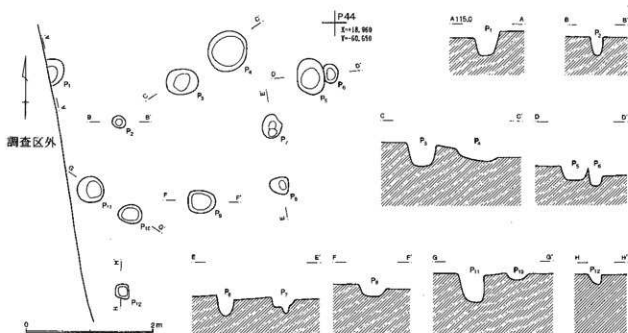
N-41Gr (第165図)

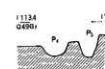
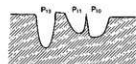
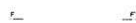
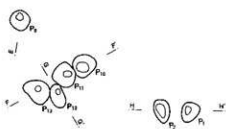
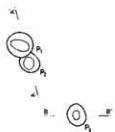
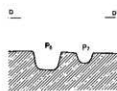
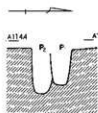
番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.60	0.57	0.34		
02	円形	0.26	0.25	0.33		
03	円形	0.22	0.22	0.15		
04	円形	0.25	0.25	0.30		
05	方形	0.29	0.27	0.23		
06	方形	0.29	0.19	0.14		
07	楕円形	0.35	0.24	0.13		

P-51Gr (第166図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	楕円形	0.36	0.22	0.35		
02	円形	0.32	0.30	0.33		
03	円形	0.35	0.32	0.26		
04	楕円形	0.44	0.31	0.53		
05	円形	0.22	0.19	0.23		
06	円形	0.46	0.39	0.64		

第164图 O-44Gr

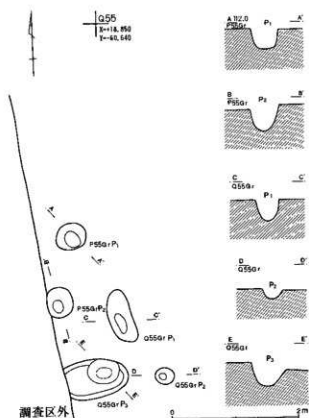




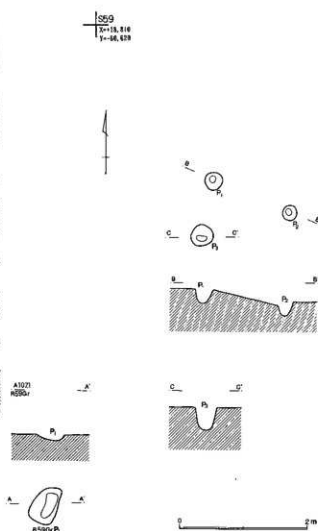
050
1111
886

0 2m

第169図 P-55Gr・Q-55Gr



第170図 R-59Gr・S-59Gr



Q-49Gr (第167図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	楕円形	0.33	0.27	0.28		
02	楕円形	0.36	0.24	0.21		
03	円形	0.34	0.34	0.33		
04	円形	0.44	0.36	0.19		
05	円形	0.69	0.68	0.32		

P-52Gr (第168図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.32	0.30	0.22		
02	円形	0.33		0.14		
03	楕円形	0.44	0.19	0.14		
04	円形	0.27	0.24	0.36		
05	方形	0.48	0.41	0.44		
06	円形	0.23	0.22	0.23		

R-59Gr (第170図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	不整形	0.64	0.42	0.09		

P-55Gr (第169図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.51	0.43	0.33		
02	円形	0.48	0.41	0.38		

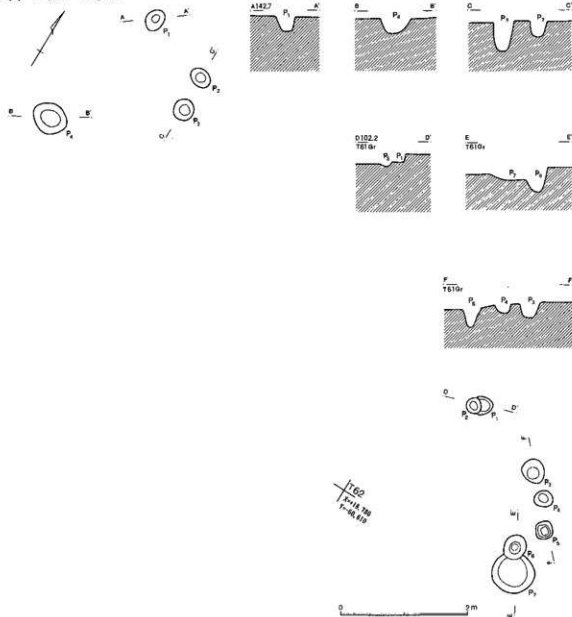
Q-55Gr (第169図)

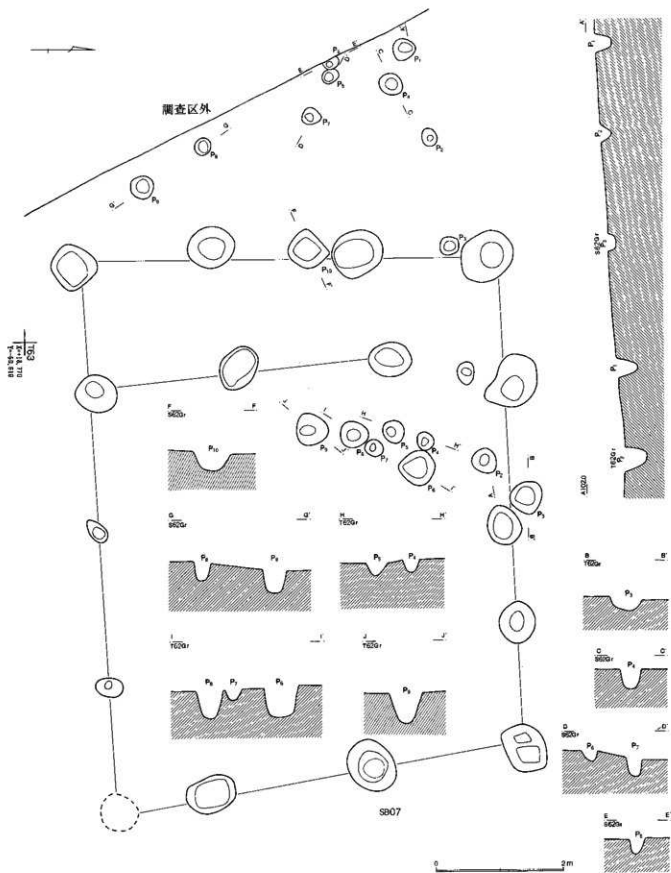
番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	楕円形	0.86	0.37	0.35		
02	円形	0.28	0.27	0.14		
03	楕円形	0.62	0.31	0.31		

S-59Gr (第170図)

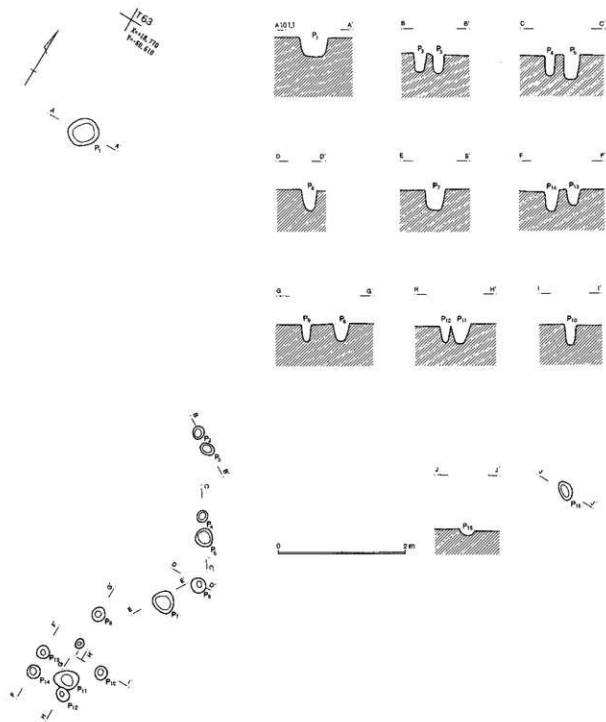
番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.28	0.27	0.21		
02	円形	0.26	0.21	0.19		
03	円形	0.33	0.32	0.35		

第171図 S-61Gr・T-61Gr





第173図 T-63Gr



S-61Gr (第171図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.35	0.29	0.25		
02	円形	0.34	0.29	0.25		
03	円形	0.35	0.32	0.46		
04	隅丸方形	0.52	0.48	0.24		

T-61Gr (第171図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.27		0.11		
02	円形	0.25	0.24	0.06		
03	円形	0.36	0.36	0.23		
04	円形	0.28	0.26	0.14		
05	方形	0.28	0.27	0.30		
06	円形	0.38	0.35	0.35		
07	円形	0.68	0.63	0.15		

S-62Gr (第172図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.35	0.34	0.26		
02	円形	0.27	0.25	0.19		
03	円形	0.30	0.28	0.12		
04	円形	0.36	0.34	0.31		
05	円形	0.26		0.23		
06	円形	0.27	0.22	0.16		
07	方形	0.27	0.26	0.27		
08	円形	0.27	0.26	0.28		
09	円形	0.38	0.36	0.36		
10	方形	0.57	0.52	0.29		

T-62Gr (第172図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	楕円形	0.36	0.27	0.32		
02	円形	0.40	0.37	0.33		
03	円形	0.52	0.48	0.18		
04	円形	0.28	0.27	0.21		
05	円形	0.36	0.34	0.21		
06	方形	0.53	0.52	0.49		
07	円形	0.28	0.26	0.17		
08	円形	0.44	0.43	0.43		
09	円形	0.50	0.50	0.50		

T-63Gr (第173図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.48	0.46	0.30		
02	円形	0.21	0.17	0.30		
03	円形	0.22	0.20	0.28		
04	円形	0.19	0.17	0.32		
05	円形	0.28	0.27	0.39		
06	円形	0.25	0.24	0.33		
07	円形	0.35	0.33	0.32		
08	円形	0.25	0.20	0.28		
09	円形	0.16	0.12	0.27		
10	円形	0.22	0.19	0.31		
11	円形	0.35	0.32	0.29		
12	円形	0.23	0.20	0.27		
13	円形	0.22	0.20	0.26		
14	円形	0.23	0.22	0.34		
15	楕円形	0.31	0.18	0.10		

第174図 O-43Gr・Pit17出土遺物



O-43Gr・Pit17出土遺物 (第174図)

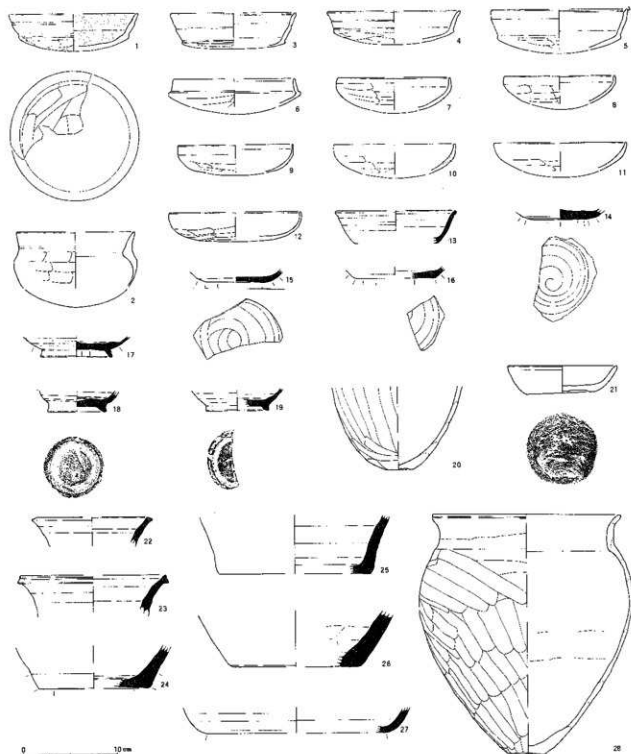
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	皿	(13.6)	(3.0)		W	A	灰白	5	施釉陶器

(3) グリッド出土遺物

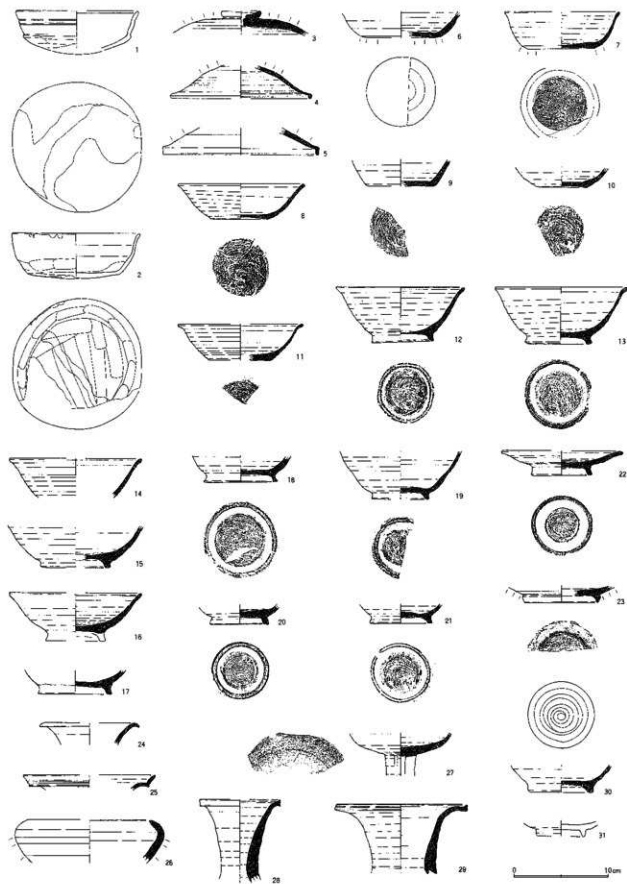
遺構が明確ではない遺物については、グリッド出土遺物として報告する(第178図)。

P・Q-46~49グリッド出土遺物は、調査時に第02号基壇状遺構として取上げた一括資料である。本来ならば、これらの遺物は第33~38号住居跡等に帰属するものと思われる(第175図)。

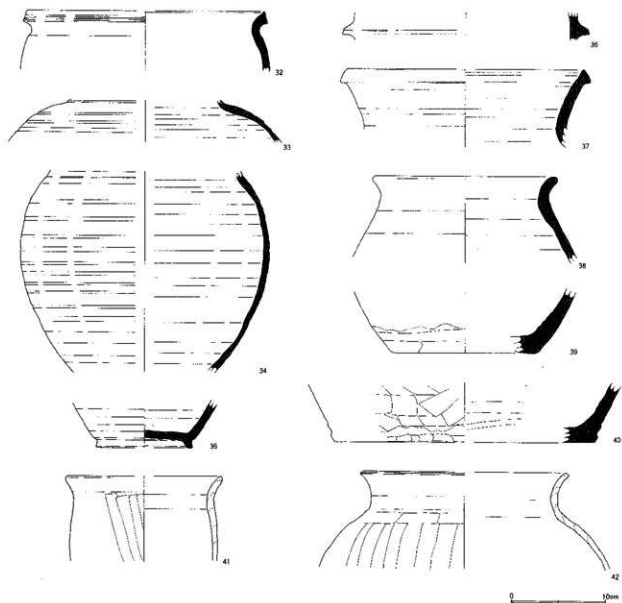
第175図 P・Q-46~49Gr 出土遺物



第176图 S~V-60~66Gr (I)



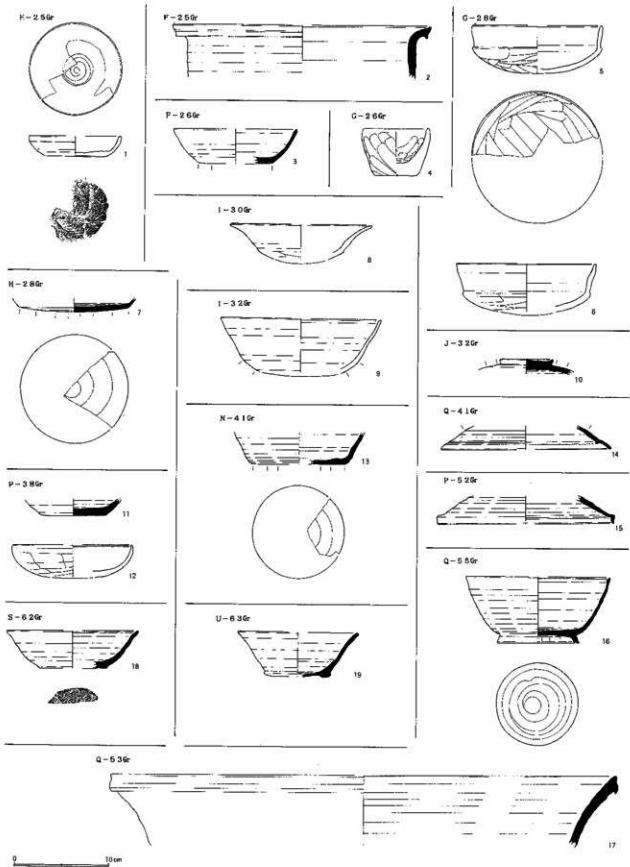
第177図 S-V-60~66Gr(2)



S-V-60~66グリッドは、斜面上方から流れ込んだ遺物包含層が遺構確認面の上のっていた。これらの遺物を一括した資料で、この範囲に所在する遺構や

斜面上方に所在する遺構に伴うものであろう（第176・177図）。

第178図 グリッド出土遺物



P・Q-46~49Gr 出土遺物 (第175図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	環	(13.5)	(3.9)		WB	B	にぶい橙	30	内面黒色処理	
2	碗	(12.3)	(5.9)		WR片	A	にぶい赤褐	10		
3	環	(13.2)	(3.6)		WB	B	橙	5		
4	環	(13.9)	(3.3)		WR	B	にぶい褐	20		
5	環	(14.2)	(4.3)		WBR	B	橙	10		
6	環	(12.8)	(2.9)		WR	B	にぶい赤褐	5		
7	環	(11.8)	(3.4)		WR	A	にぶい褐	20		
8	環	(11.7)	(2.9)		WR	A	にぶい褐	10		
9	環	(12.1)	(2.9)		WB	B	橙	10		
10	環	(12.7)	(3.2)		B片	B	にぶい褐	5		
11	環	(13.8)	(3.0)		B	B	にぶい橙	5		
12	環	(13.8)	(3.0)		B	B	橙	20		
13	環	(12.6)	(3.4)		W	A	灰白	5		
14	環			(1.1)	(6.4)	WBR片	B	灰	20	
15	環			(1.4)	(6.5)	W針	A	灰	20	南比企産
16	環			(1.2)	(8.3)	W針	B	灰	5	
17	高台付碗			(2.2)	(7.4)	W針	A	灰	10	南比企産
18	高台付碗			(2.2)	6.0	BR	C	橙	20	
19	高台付碗			(2.3)	(6.5)	WB	A	灰黄	10	
20	甕			(8.8)	(3.0)	WBR片	B	にぶい褐	30	内面風化による剥落
21	かわらけ	(11.5)	3.0	7.4	WBR片	C	橙	70		
22	長頸壺	(11.6)	(3.1)		WB	A	灰	5		
23	壺	(15.2)	(4.4)		WB	B	灰黄	5		
24	壺			(4.6)	(11.6)	WB	B	灰	5	
25	壺			(6.2)	(16.0)	WBR	B	灰	10	
26	壺			(5.9)	13.0	WB片	A	灰黄	5	
27	甕			(2.7)	(18.8)	WB	B	灰褐	5	
28	甕	(19.7)	(25.3)	(4.0)	WBR	B	褐	85		

S~V-60~66Gr 出土遺物 (第176・177図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(12.8)	(4.2)		BR	B	褐	20	
2	環	13.3	4.8	19.6	WB片	C	黒褐	40	内外面にタール状の付着物
3	蓋		(2.6)		W片	A	灰褐	80	
4	蓋	(14.6)	(3.5)		WB	B	黄灰	10	
5	蓋	(16.2)	(2.9)		WB	B	灰白	10	
6	環		(2.8)	(7.2)	WB片	A	黄灰	10	
7	環	(11.9)	(4.0)	(6.9)	WB	B	灰	40	
8	環	13.2	3.8	6.0	WBR片	C	明黄褐	90	土師質
9	環		(2.9)	(6.9)	W片	A	灰	20	
10	環		(2.1)	5.1	WR片	C	灰黄褐	40	
11	環	(13.1)	(3.8)	(6.8)	B片	B	灰	30	
12	碗	13.4	5.9	6.4	WBR	B	黄褐	95	
13	高台付碗	13.7	6.1	6.2	WB	B	黄灰	80	
14	環	(13.8)	(4.2)		BR	C	暗灰黄	10	土師質
15	高台付碗		(4.4)	(6.8)	WBR片	C	にぶい黄	30	土師質
16	高台付碗	(13.8)	(4.2)	(6.2)	WB	C	明黄褐	40	
17	高台付碗		(2.5)	7.8	WR片	C	橙	30	土師質
18	高台付碗		2.8	(7.8)	WB	A	灰	30	
19	高台付碗		(5.1)	(5.8)	WB片	B	黄灰	40	
20	高台付碗		(2.1)	(6.1)	WB	A	灰	10	
21	高台付碗		(2.0)	6.5	WB	A	灰	10	
22	高台付皿	(12.4)	2.7	6.0	WB	A	灰	40	

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
23	高台付甗		(1.8)	(7.6)	WB	A	灰白	5	
24	長頸壺	(9.3)	(2.3)		WB	A	灰	10	
25	甗	(13.8)	(1.6)		WB片	B	にょい黄	5	
26	無頸甗	(12.8)	(4.6)		WB	A	灰	10	
27	高坏		(4.6)		W	B	灰	20	
28	長頸壺	(8.4)	(8.7)		W	B	黄灰	15	
29	長頸壺	(13.7)	(7.3)		WB	A	灰	10	
30	高台付甗		(2.9)	6.4	BR	C	橙	20	
31	高台付甗		(1.6)	(4.8)	WR	A	灰白	20	灰釉
32	甗	(25.0)	(6.3)		WB	C	灰	5	内面土師質
33	甗		4.4		WB	B	黄褐	10	
34	甗		(21.2)		WB片	A	灰	30	
35	甗		(5.2)	(10.0)	WB	B	黄灰	20	
36	羽釜		(3.0)		W	B	灰	10	
37	甗	(24.8)	(8.2)		WB	A	灰黄	5	
38	甗	(19.2)	(9.2)		WR	C	にょい黄	10	土師質
39	甗		(6.8)	(14.8)	WB	B	灰	10	自然釉の付着
40	甗		(6.3)	(27.4)	WB片	B	灰	5	
41	小型甗	(16.2)	(8.8)		WBR	B	灰黄褐	10	
42	甗	(21.3)	(10.3)		WBR片	C	にょい黄褐	10	

グリッド出土遺物 (第178図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(9.6)	(2.2)	(6.6)	BR	B	にょい橙	50	E-25Gr
2	甗	(27.2)	(5.7)		W片	B	灰	5	F-25Gr
3	坏	(12.9)	(3.7)	(7.8)	W針	A	灰黄	35	F-26Gr
4	手捏土器		(4.7)	(4.5)	WBR	B	明黄褐	45	G-26Gr
5	坏	(13.5)	(5.1)		WBR	A	褐	40	G-28Gr
6	坏	(14.7)	(5.1)		WBR片	B	明褐	15	G-28Gr
7	坏		(1.5)	(11.4)	BR	B	灰黄	15	H-28Gr
8	甗	(14.6)	(3.7)		B	A	赤褐	5	I-30Gr
9	甗	(16.7)	(5.7)		WBR片	A	にょい黄褐	15	I-32Gr
10	甗		(1.6)	5.5	W	A	灰	15	J-32Gr
11	坏		(1.8)	(7.0)	WB	B	灰黄	20	P-38Gr 底面は同軸糸切り難しが風化により不明瞭
12	坏	(12.5)	(3.4)		BR	B	橙	10	P-38Gr
13	坏		(3.4)	(9.7)	W	B	黄灰	20	N-41Gr
14	甗	(17.8)	(2.5)		WB	B	灰	5	Q-41Gr
15	甗	(18.5)	(2.9)		W針	B	灰	5	P-52Gr
16	高台付甗	(15.2)	7.0	8.5	WB片	A	灰	50	Q-55Gr
17	甗	(5.36)	(7.5)		W片	B	暗灰	5	Q-53Gr
18	坏	(13.7)	(4.0)	(7.0)	WB片	B	灰	20	S-62Gr
19	高台付甗	(12.06)	(4.7)	(6.9)	BR	C	にょい黄橙	40	U-63Gr 土師質

(4) その他の遺物

石製品 (第179・180図)

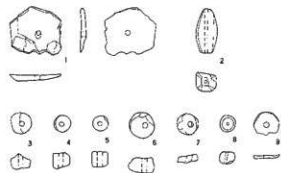
石製品は22点出土し、玉類や紡錘車・砥石・石臼がある。

玉類には剣形石製品・切子玉・丸玉・臼玉がある。

1は滑石製の剣形石製品で、剣先部を欠損している。

2は切子玉で、摩滅によって稜線は不明瞭である。材質は硬玉である。8は丸玉で、材質は滑石である。3

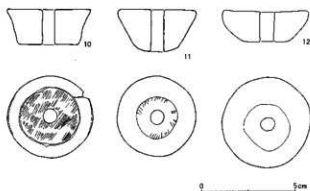
第179図 石製品(1)



～7・9は白玉で、滑石製である。

紡錘車は3点で(10～12)、いずれも第04号住居跡から出土している。滑石系の石材である。出土した紡錘車はこの3点のみで、土製のものは発見されていない。

13～21は砥石で、いずれも欠損している。



石製品 (第179・180図)

番号	種類	出土位置	大きさ (mm)	重さ (g)	材質	その他
1	剣形	第60・61・62号住居跡	25.0×27.5	3.76	滑石製	
2	切子玉	第21号溝跡	23.0×11.0	4.91	硬玉	
3	臼玉	第33号住居跡	(8.5)×10.5	1.23	滑石製	
4	臼玉	第53号住居跡	(8.0)×9.0	1.02	滑石製	
5	臼玉	第53号住居跡	(8.0)×8.5	0.87	滑石製	
6	臼玉	第76号住居跡	(8.0)×13.5	2.33	滑石製	
7	臼玉	第76号住居跡	(4.0)×10.5	0.82	滑石製	
8	丸玉	Q-49Gr	6.5×8.0	0.47	滑石製	
9	臼玉	表採	1.5×13.5	0.43	滑石製	
10	紡錘車	第04号住居跡	18.5×44.5・30.5	51.24	滑石系	
11	紡錘車	第04号住居跡	22.0×41.5・21.5	51.46	滑石系	
12	紡錘車	第04号住居跡	16.0×46.0・23.5	55.18	滑石系	
13	砥石	第51号住居跡	44.5×28.0	19.57		
14	砥石	第81号住居跡	70.0×29.5	41.51		
15	砥石	E-25Gr	64.5×28.0	42.75		
16	砥石	第51号住居跡	72.0×33.0	63.58		
17	砥石	第12号溝跡	72.0×44.5	134.15		
18	砥石	表採	75.5×24.0	32.63		
19	砥石	表採	51.0×31.5	49.59		
20	砥石	表採	45.0×29.5	62.18		
21	砥石	表採	67.0×29.0	67.91		



土 鍾 (第181・182図)

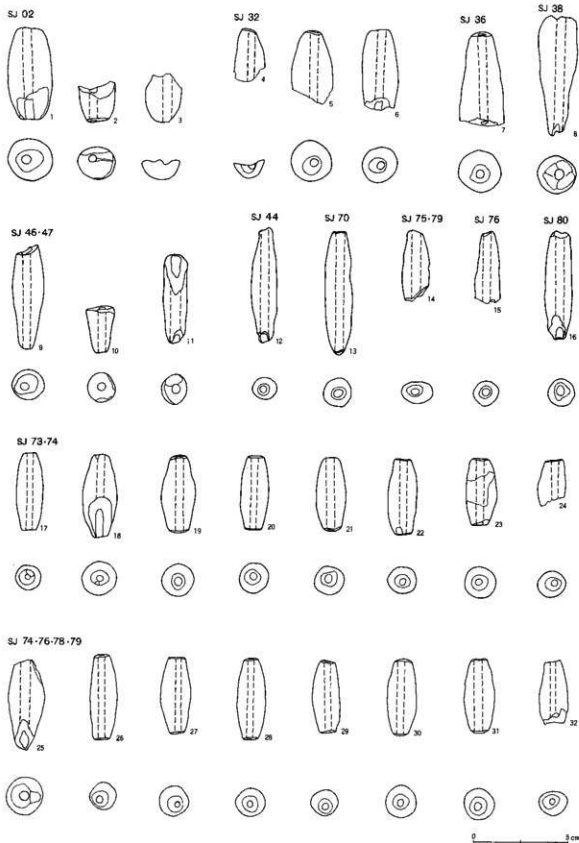
出土した土製品はすべて土鍾である。玉類や紡錘車等は発見されていない。

出土した土鍾の総数は46点である。焼成は比較的
良好で、胎土も精選されているものが多い。

土 鍾 (第181・182図)

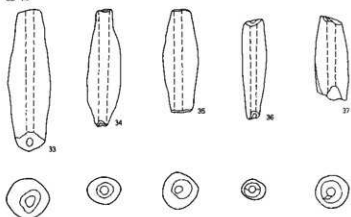
番号	種類	出土位置	長さ(mm)	最大径(mm)	重さ(g)	焼成	色 調	そ の 他
1	土 鍾	第02号住居跡	47.1	22.0	22.36	A	にぶい黄褐	
2	土 鍾	第02号住居跡	(21.2)	(19.6)	5.60	A	灰黄褐	
3	土 鍾	第02号住居跡	(24.3)	(19.5)	4.67	A	にぶい黄褐	
4	土 鍾	第32号住居跡	(27.4)	(14.9)	3.06	A	黒	カマド
5	土 鍾	第32号住居跡	(38.1)	21.5	14.58	A	黒褐	カマド
6	土 鍾	第32号住居跡	(41.4)	18.7	15.47	A	黒褐	
7	土 鍾	第36号住居跡	(48.1)	23.9	21.95	A	黒褐	
8	土 鍾	第38号住居跡	(61.7)	20.4	19.27	A	明赤褐	
9	土 鍾	第46・47号住居跡	(54.3)	16.3	13.12	A	明赤褐	
10	土 鍾	第46・47号住居跡	(23.0)	(15.0)	4.18	A	にぶい黄褐	
11	土 鍾	第46・47号住居跡	(46.2)	15.1	8.78	A	にぶい赤褐	
12	土 鍾	第44号住居跡	59.2	13.4	9.39	A	黒～にぶい褐	
13	土 鍾	第70号住居跡	64.1	15.5	13.96	A	明赤褐	
14	土 鍾	第75・79号住居跡	(36.9)	15.0	6.48	A	橙	
15	土 鍾	第78号住居跡	(37.3)	14.1	6.03	A	にぶい橙	
16	土 鍾	第80号住居跡	(56.2)	14.3	11.07	A	にぶい黄褐	
17	土 鍾	第73・74号住居跡	40.4	14.7	7.96	A	褐	
18	土 鍾	第73・74号住居跡	42.1	19.1	12.01	A	にぶい赤褐	
19	土 鍾	第73・74号住居跡	39.6	17.4	10.42	A	明赤褐	
20	土 鍾	第73・74号住居跡	38.4	14.4	8.68	A	にぶい赤褐～黒	
21	土 鍾	第73・74号住居跡	37.9	14.7	8.26	A	褐	
22	土 鍾	第73・74号住居跡	41.0	13.9	8.74	A	黒	
23	土 鍾	第73・74号住居跡	35.1	16.8	8.31	A	暗赤褐	
24	土 鍾	第73・74号住居跡	(25.0)	(14.9)	4.89	A	黒褐	
25	土 鍾	第74・76・78・79号住居跡	(47.6)	19.7	11.94	A	橙	
26	土 鍾	第74・76・78・79号住居跡	44.4	14.3	9.57	A	にぶい橙～黒	
27	土 鍾	第74・76・78・79号住居跡	40.1	15.2	9.07	A	にぶい褐～黒	
28	土 鍾	第74・76・78・79号住居跡	42.1	14.7	8.85	A	にぶい褐～黒	
29	土 鍾	第74・76・78・79号住居跡	36.9	14.5	7.96	A	にぶい橙～黒	
30	土 鍾	第74・76・78・79号住居跡	39.7	16.9	8.91	A	にぶい赤褐	
31	土 鍾	第74・76・78・79号住居跡	37.3	15.8	10.55	A	明赤褐	
32	土 鍾	第74・76・78・79号住居跡	(33.1)	15.2	7.12	A	灰褐	
33	土 鍾	第15号溝跡	(73.8)	22.1	29.82	A	にぶい橙	P-49・Q-49Gr
34	土 鍾	第15号溝跡	60.8	18.0	16.12	A	赤褐	P-43Gr
35	土 鍾	第15号溝跡	53.3	18.4	16.36	A	黒	P-46Gr
36	土 鍾	第15号溝跡	(51.5)	12.3	7.09	A	赤褐	P-43Gr
37	土 鍾	第15号溝跡	(44.5)	17.3	13.13	A	にぶい赤褐	P-49・Q-49Gr
38	土 鍾	第01号配石遺構	60.0	15.3	11.97	A	灰褐～にぶい褐	
39	土 鍾	S-V-60～66Gr	(57.9)	17.1	14.63	A	橙	
40	土 鍾	P-48Gr	(56.2)	19.8	17.78	A	灰褐	
41	土 鍾	U-63Gr	42.0	18.2	11.87	A	黒褐	
42	土 鍾	P-52Gr	(53.3)	18.2	12.43	A	橙	
43	土 鍾	P-48Gr	(37.8)	(20.8)	6.94	A	黒～にぶい褐	
44	土 鍾	P・Q-46～49Gr	(64.6)	20.4	16.12	A	にぶい黄褐	
45	土 鍾	P・Q-46～49Gr	(27.9)	(16.0)	5.50	A	にぶい褐	
46	土 鍾	P・Q-46～49Gr	(23.7)	(12.3)	2.74	A	灰黄褐	

第181圖 土鍾(1)

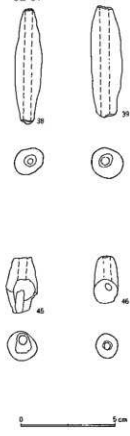


第182図 土器(2)

SD 15



SQ 01



鉄製品・木製品 (第183図)

鉄製品は総数86点が出土している。このうち図示したものは、刀子・鎌・柄鏡等20点である。図示し得なかったものは、釘類や不明鉄片である。釘は第04・44・51・69・70号住居跡、第97・154・155・159号土坑、第15号溝跡から出土している。ほとんどが断面方形で、幅5mm程度のものである。

1～13・17・18が鉄製品で、14～16・19・20は銅製である。

1～6・12が刀子で、12には木質が付着している。7は鉄鏝で、棘尾被開無端刀片刃蒔式と考えられる。

8～10は鎌である。8は切先部付近で、刃部は欠損している。9・10の柄装着部は、端部を折り曲げている。11はX線透視観察でも明確ではないが、直刀として復原した。17・18は大型の釘で、断面は方形である。13は不明鉄製品である。

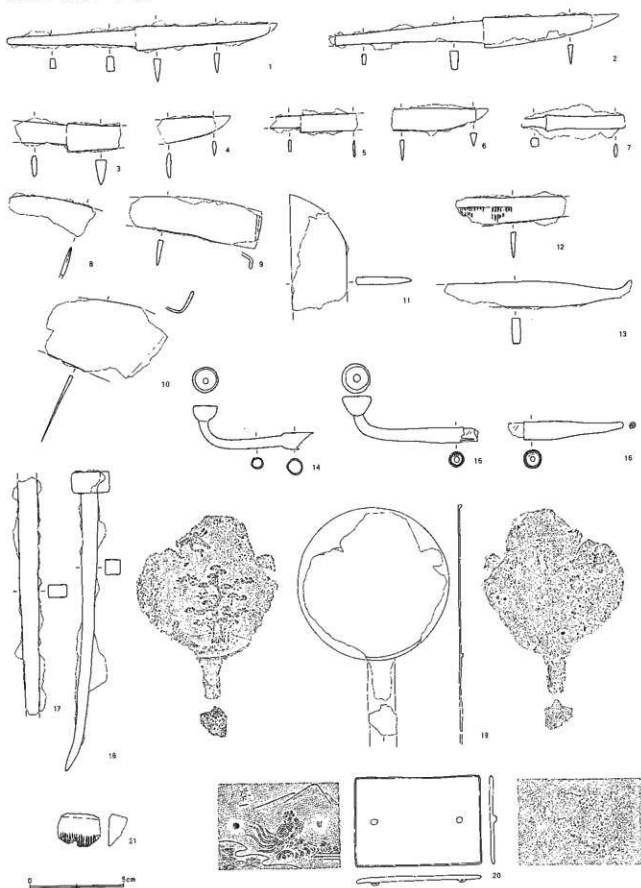
19は柄鏡で、源泉藤原光房の銘がある。背面には松・鶴・亀が描かれている。20は煙草入れの飾り金具で、山・亀・海が描かれ、天下一の銘がある。14・16は煙管である。

木製品は第03号土坑から出土した横櫛である。腐食が著しく、本来の大きさについてはわからない。

鉄製品・木製品 (第183図)

番号	種類	出土位置	大きさ (cm)	重さ (g)	その他	
1	刀	子	第15号住居跡	(14.4)×1.30	15.05	No.5
2	刀	子	第159号土坑	(14.5)×1.65	17.60	
3	刀	子	第51号住居跡	(5.6)×1.5	11.17	No.2
4	刀	子	第51号住居跡	(3.15)×1.3	4.12	
5	刀	子	第79号住居跡	(4.7)×0.95	5.62	
6	刀	子	S-62Gr	(4.5)×1.2	9.46	
7	鉄	鏝	第46・47号住居跡	(5.5)×0.85	17.97	
8	鎌		第01号溝跡	(4.55)×1.7	4.00	
9	鎌		T-63Gr	(7.05)×2.1	22.99	
10	鎌		第51号住居跡	(6.2)×3.9	29.35	
11	直	刀	P-48Gr	(5.1)×2.9	17.53	
12	刀	子	第155号土坑	(5.9)×1.45	5.65	
13	不	明	第21号溝跡	(9.95)×1.35	29.70	
14	煙	管	第06号土坑	(6.4)×1.3	5.01	No.12
15	煙	管	第159号土坑	(7.2)×1.55	6.45	
16	煙	管	第159号土坑	(6.15)×0.95	2.06	
17	釘		J-32Gr	(12.45)×1.05	34.57	
18	釘		第94号土坑	15.7×1.5	38.53	推定径8.05
19	鏡		第155号土坑	7.6×9.85	30.21	
20	飾り金具		第159号土坑	6.65×4.7	39.86	No.8
21	木	製	櫛	第03号土坑		

第183図 鉄製品・木製品



埴輪 (第184・185・186図)

埴輪片は、S-V-60~66グリッドから出土している。調査区内では埴輪を伴う遺構は確認されていない。

図示した内、65が形象埴輪片で、他はすべて円筒埴輪片である。これらの埴輪の胎土は、含有物の粒子の大きさと含有量から4つに分けられる。I類は「含有物の粒子が細かく、量も少ない」、II類は「含有物の粒子は細かいが、量も多い」、III類は「含有物の粒

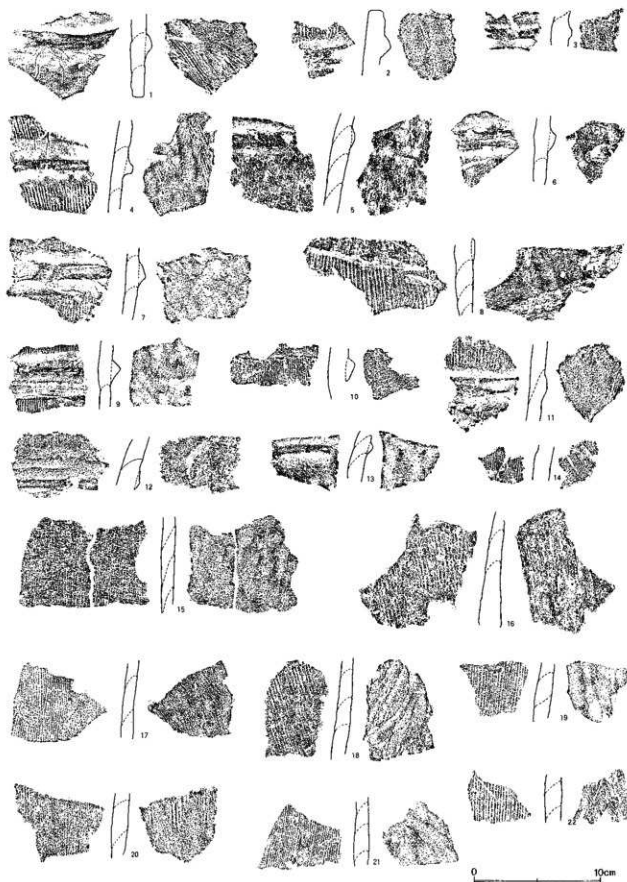
子は粗いが、量は少ない」、IV類は「含有物の粒子が粗く、量も多い」ものである。

いずれも外面調整はタカ状突帯貼り付け以前のタテハケで、タカ状突帯の断面形状が「三角形」・「M字形」の突出度の弱いものである。焼成は窯裏によるもので、透かし孔は円形である。底部調整はみられない。これらの特徴から、6世紀代のものである。

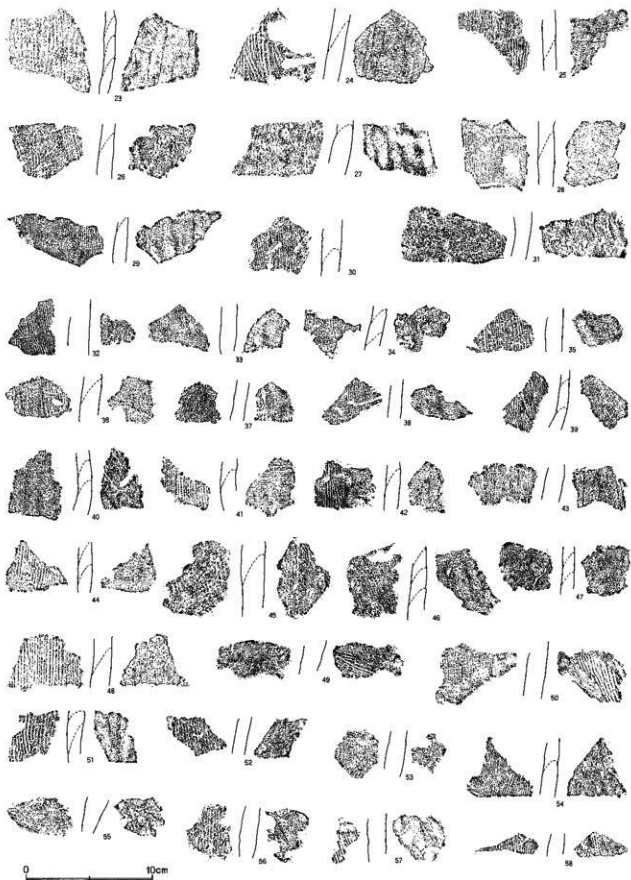
埴輪 (第184・185・186図)

番号	器種	出土位置	胎土	胎土タイプ	焼成	色調	外面調整	内面調整	スカシ孔	突帯	その他
1	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	II	C	赤褐	一次のみタテハケ	斜めハケ		円	台形
2	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	W片	IV	C	橙	一次のみタテハケ	ナデ		円	台形
3	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	II	B	橙	ナデ	ナデ			台形
4	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WR片	I	A	赤褐	一次のみタテハケ	斜めハケ			台形
5	円筒埴輪	第51号住居跡	WR	I	C	橙	ナデ	ナデ			台形
6	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	BR片	III	A	赤褐	一次のみタテハケ	ナデ			台形
7	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WR	I	A	赤褐	一次のみタテハケ	ナデ			台形
8	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WR	I	B	橙	一次のみタテハケ	ナデ			三角
9	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WBR片	II	B	橙	一次のみタテハケ	ナデ			三角
10	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB	I	B	橙	一次のみタテハケ	ナデ			三角
11	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	II	A	橙	一次のみタテハケ	タテナデ	円		M字形
12	円筒埴輪	T-63	B	II	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
13	円筒埴輪	第51号住居跡	BR片	IV	C	橙	ナデ	ナデ			台形
14	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	I	A	橙	一次のみタテハケ	斜めハケ			台形
15	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	W片	IV	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
16	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	W	III	C	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
17	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	I	A	赤褐	一次のみタテハケ	斜めナデ			台形
18	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WR片	I	A	赤褐	一次のみタテハケ	斜めナデ			台形
19	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WBR片	I	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
20	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	IV	A	橙	一次のみタテハケ	タテハケ 横ナデ			台形
21	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	I	B	橙	一次のみタテハケ	斜めナデ			台形
22	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	I	A	赤褐	一次のみタテハケ	ハケ	円		台形
23	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WR片	I	B	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
24	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	W片	I	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
25	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	II	B	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
26	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WR	I	A	明赤褐	一次のみタテハケ	ナデ			台形
27	円筒埴輪	第51号住居跡	WR	I	C	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
28	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	W片	I	B	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
29	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	II	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ	円		台形
30	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	II	B	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
31	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	W	I	C	橙	ナデ	ナデ			台形
32	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	II	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
33	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	I	A	橙	一次のみタテハケ	タテナデ			台形
34	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	W	I	C	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
35	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	II	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
36	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	IV	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
37	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	I	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
38	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	I	A	赤褐	一次のみタテハケ	ナデ			台形
39	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	I	B	橙	一次のみタテハケ	ナデ			台形
40	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	I	B	橙	一次のみタテハケ	斜めハケ			台形
41	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	II	A	橙	一次のみタテハケ	ヨコハケ			台形

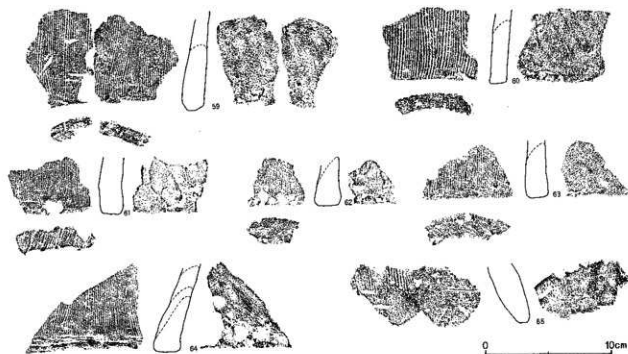
第184図 埴輪(I)



第185圖 埴輪(2)



第186図 埴輪(3)



番号	器種	出土位置	胎土	胎土タイプ	焼成	色調	外面調整	内面調整	スカシ孔	突起	その他
42	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	B片	IV	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
43	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	IV	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
44	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	II	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
45	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	W片	III	C	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
46	円筒埴輪	第51号住居跡	WBR片	IV	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
47	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WBR片	III	A	橙		ナデ			
48	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WBR片	II	C	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
49	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	IV	B	橙	一次のみタテハケ	斜めハケ			
50	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	IV	B	橙	一次のみタテハケ	斜めハケ			
51	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB	I	A	明赤褐色	一次のみタテハケ	ナデ			
52	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WR	I	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
53	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	W片	II	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
54	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	I	B	にょい赤褐色	一次のみタテハケ	ナデ			
55	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WR	I	A	橙		ナデ			
56	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	IV	C	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
57	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	III	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
58	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	I	B	橙	一次のみタテハケ	タテハケ			
59	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	II	B	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
60	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	II	A	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
61	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	W片	I	C	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
62	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	W片	I	B	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
63	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	I	B	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
64	円筒埴輪	S-V-61~66Gr	WB片	I	C	橙	一次のみタテハケ	ナデ			
65	形象埴輪	S-V-61~66Gr	WBR片	III	C	橙	一次のみタテハケ	ナデ			

古代瓦 (第187図)

S-V-60~66グリッドから古代の瓦片が出土している。調査区内では、これらの瓦を用いた建物跡は見されていない。

I~20が平瓦、21・22が丸瓦である。いずれも凹古代瓦 (第187図)

面には布目痕が認められ、凸面はタタキの後ナデが施されている。

焼成の違いによって3つのタイプに分類され、それぞれ色調が異なる。I類が橙色系、II類が灰白色系、III類が灰色系である。

番号	器種	出土位置	タイプ	胎土	焼成	色調	その他
1	平瓦	第51号住居跡	II	WBR片	A	灰	
2	平瓦	第51号住居跡	I	WBR	C	にふい橙	
3	丸瓦	S-V-61~66Gr	III	WB	B	灰	
4	平瓦	第19号跡跡	III	WB	B	灰黄	
5	平瓦	S-V-61~66Gr	III	WB	A	灰黄褐	
6	平瓦	S-V-61~66Gr	I	WBR	C	橙	
7	平瓦	第51号住居跡	I	WBR	C	にふい黄褐	
8	平瓦	第52号住居跡	III	WB	B	灰	
9	平瓦	第51号住居跡	II	WB	A	灰	
10	平瓦	S-V-61~66Gr	II	WB	A	灰	
11	平瓦	S-V-61~66Gr	I	WBR	C	にふい褐	
12	平瓦	S-V-61~66Gr	I	WBR	C	橙	
13	平瓦	第51号住居跡	III	WB	B	灰	
14	平瓦	S-V-61~66Gr	III	WBR	B	黄灰	
15	平瓦	S-V-61~66Gr	III	WB	B	灰黄	
16	平瓦	S-V-61~66Gr	III	WB	B	灰	
17	平瓦	第51号住居跡	I	WBR	C	橙	
18	平瓦	S-V-61~66Gr	III	WBR	C	灰黄	
19	平瓦	S-V-61~66Gr	I	WBR片	C	にふい橙	
20	平瓦	S-V-61~66Gr	I	WBR	B	にふい橙	
21	丸瓦	第51号住居跡	II	WB	A	灰	カマドB
22	丸瓦	S-V-61~66Gr	III	WB	B	灰黄	

古銭 (第188~197図)

古銭は、主に土坑から出土している。古銭には中世の中国銭と、江戸時代の寛永通寶がある。

寛永通寶の多くは、近世の墓塚の副葬品である。これらは布に包んで埋葬したものが多く、布が付着しているものや、また銭同士が付着し合っているものが多い。

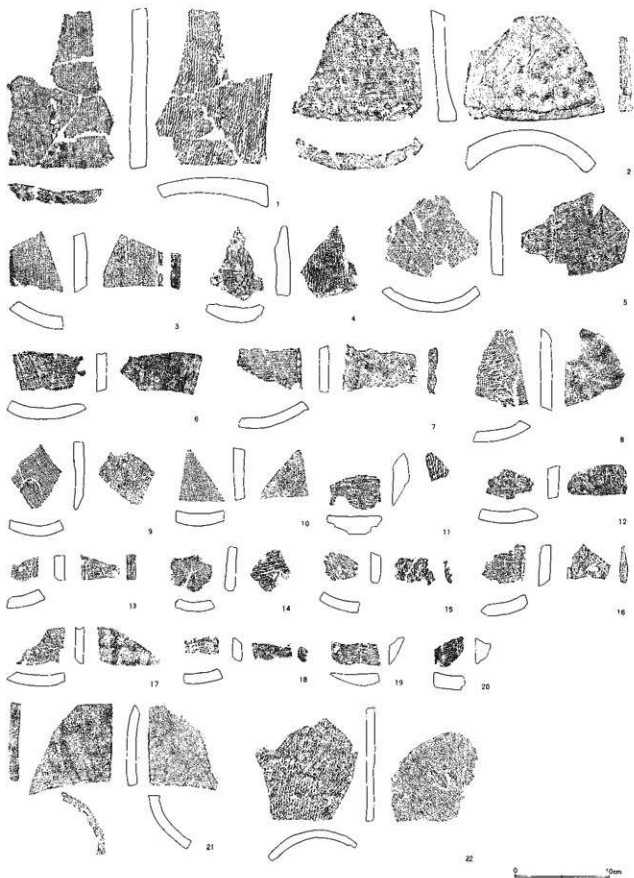
中国銭は、主に北宋銭と明銭である。北宋銭には太平通寶・咸平元寶・景德元寶・祥符通寶・天禧通寶・皇宋通寶・治平通寶・熙寧元寶・元豊通寶・元祐通

寶・政和通寶がある。明銭は永樂通寶で、他に唐銭の開元通寶がある。

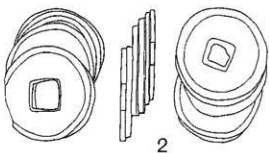
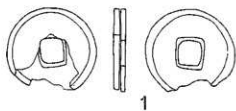
付着した古銭については、まずそのままの状態を実測図の作成と写真撮影を実施した。次に剝離作業を行った。剝離方法はカッターナイフの刃をタガネとして、敲打した。この方法で古銭そのものを損傷する恐れのあるものについては、剝離作業を見合せた。

拓影図の順序・表裏面は、付着していた状態を表す。

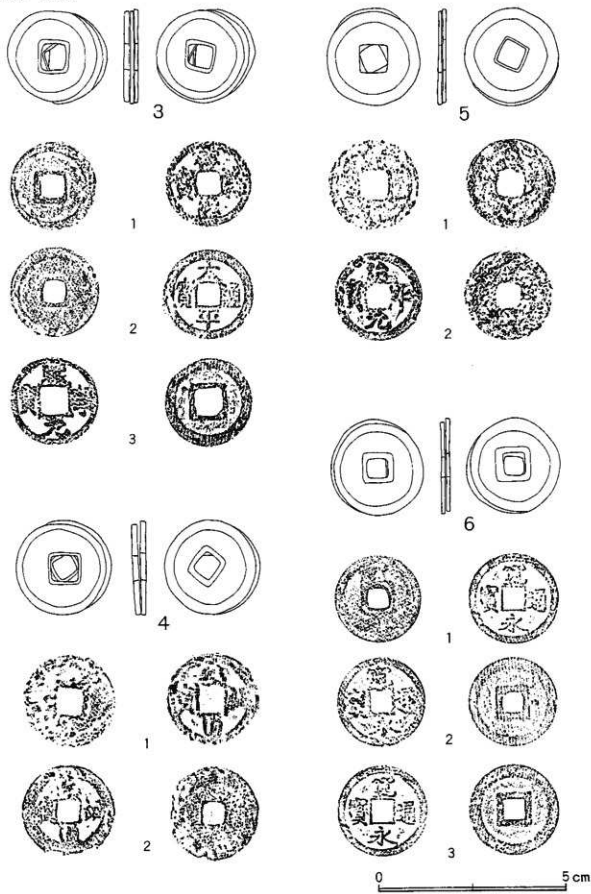
第187图 古代瓦



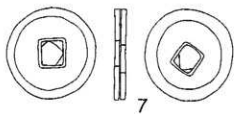
第188図 古銭(1)



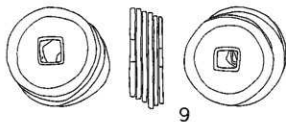
第189図 古銭(2)



第190阿 古銭(3)



7



9



1



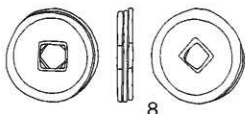
1



2



2



8



3



1



3



4



2



4



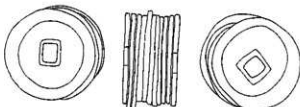
5



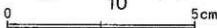
3

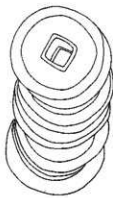
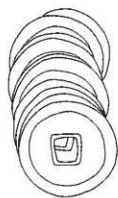


6



10





11



6



1



7



2



8



3



9



4



10



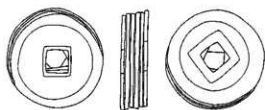
5



11



第192図 古銭(5)



12



1



7



2



8



3



4

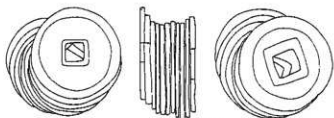


5



6





13



1



7



2



8



3



9



4



10



5



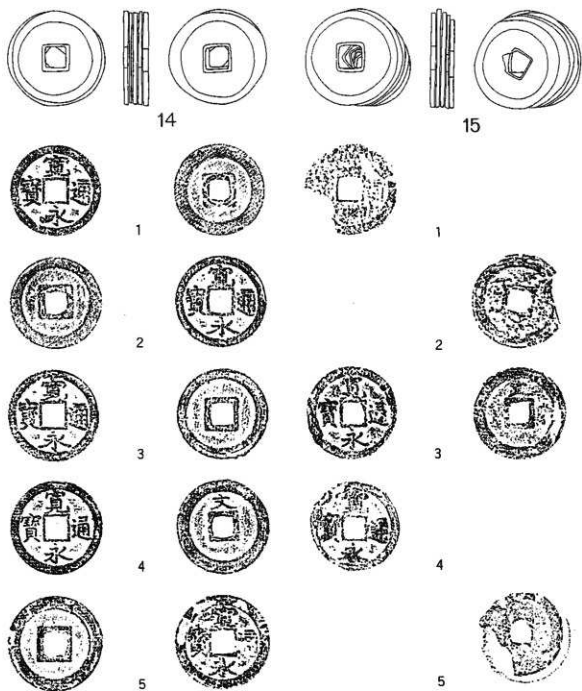
11



6



第194圖 古錢(7)



0 5 cm

第195図 古銭(8)



16



22



17



23



18



24



19



25



20



26



21





27



33



28



34



29



35



30



36



31



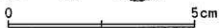
37



32



38





39



45



40



46



41



47



42



48



43



44



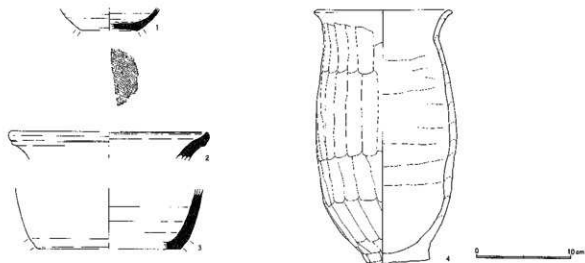
古錢 (第188~197回)

番号	出土遺跡	銭貨名	国名	王朝名	初鑄年	備考
1-1	第94号土坑	永樂通寶	中国	明	1408	紀地銭
1-2	第94号土坑	不明				
2-1	第113号土坑	開元通寶	中国	唐	845	
2-2	第113号土坑	治平元寶	中国	北宋	1064	
2-3	第113号土坑	不明				
2-4	第113号土坑	不明				
2-5	第113号土坑	永樂通寶	中国	明	1408	
2-6	第113号土坑	永樂通寶	中国	明	1408	
3-1	第142号土坑	祥符通寶	中国	北宋	1009	
3-2	第142号土坑	太平通寶	中国	北宋	976	
3-3	第142号土坑	開寧元寶	中国	北宋	1068	
4-1	第142号土坑	元祐通寶	中国	北宋	1086	
4-2	第142号土坑	元祐通寶	中国	北宋	1086	
5-1	第147号土坑	不明				
5-2	第147号土坑	治平元寶	中国	北宋	1064	
6-1	第148号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
6-2	第148号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
6-3	第148号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
7-1	第148号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
7-2	第148号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
8-1	第148号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
8-2	第148号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
8-3	第148号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
9-1	第149号土坑	(寛永通寶)				
9-2	第149号土坑	(寛永通寶)				
9-3	第149号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
9-4	第149号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
9-5	第149号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
9-6	第149号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
9-7	第149号土坑	(寛永通寶)				
10	第149号土坑	(寛永通寶)				布付普
11-1	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	一文銭
11-2	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
11-3	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
11-4	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
11-5	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
11-6	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
11-7	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
11-8	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
11-9	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
11-10	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
11-11	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
12-1	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	一文銭
12-2	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
12-3	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
12-4	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
12-5	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
12-6	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
12-7	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
12-8	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
13-1	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
13-2	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
13-3	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
13-4	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
13-5	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	

番号	出土遺構	銭貨名	国名	王朝名	初铸年	備考
13-6	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
13-7	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
13-8	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
13-9	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
13-10	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
13-11	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
14-1	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
14-2	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
14-3	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
14-4	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	一文銭
14-5	第150号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
15-1	第161号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
15-2	第161号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
15-3	第161号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	一文銭
15-4	第161号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
15-5	第161号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
16	第03号土坑	開元通寶	中国	唐	621	
17	第03号土坑	咸平元寶	中国	北宋	998	
18	P-45Gr	咸平元寶	中国	北宋	998	
19	第03号土坑	景德元寶	中国	北宋	1004	
20	第09号溝跡	天禧通寶	中国	北宋	1017	
21	P-Q-46~49Gr	皇宋通寶	中国	北宋	1038	
22	第03号土坑	治平元寶	中国	北宋	1064	
23	第03号土坑	元豊通寶	中国	北宋	1078	私铸銭
24	第03号土坑	元祐通寶	中国	北宋	1086	
25	S-V-60~66Gr	政和通寶	中国	北宋	1111	
26	第15号溝跡	永樂通寶	中国	明	1408	
27	第155号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	一文銭
28	第155号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	一文銭
29	第159号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	一文銭
30	第159号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	一文銭
31	第03号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
32	第153号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
33	第155号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
34	第156号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
35	第159号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
36	第159号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
37	第159号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
38	第159号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
39	第159号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
40	第158号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
41	第157号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
42	第157号土坑	寛永通寶	日本	明正	1636	
43	P-Q-46~49Gr	寛永通寶	日本	明正	1636	
44	P-Q-46~49Gr	寛永通寶	日本	明正	1636	
45	P-Q-46~49Gr	寛永通寶	日本	明正	1636	
46	E-25Gr	寛永通寶	日本	明正	1636	
47	第155号土坑	不明				
48	第15号溝跡	不明				

表採遺物

第198図 表採遺物



表採遺物 (第198図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏		(2.4)	(5.9)	WB片	B	灰白	30	
2	甕	(20.6)	(3.0)		WB	B	灰	5	
3	甕	(6.3)	(15.0)		WB	A	灰	5	
4	甕	14.1	26.5	6.6	WBR片	B	橙	85	

V 中世寺院関連の遺構と遺物

1. 遺構と遺物

中世寺院に関連する遺構として、基壇状遺構・掘立柱建物跡・溝跡・土坑等がある。基壇状遺構・掘立柱建物跡は溝跡によって区画され、方向軸揃えて配置されている(第199図)。

第48号土坑からは、金属製の小型宝塔と小型未開敷蓮華が漆箱に納められた状態で出土している。

(1) 基壇状遺構

第01号基壇状遺構(第200図)

M-39・N-39・40グリッドに位置する。斜面部に土を盛り上げて、平坦面を造成した遺構である。平坦面には寺院建物が建立されていたものと考えられる。

周辺の地形図から判断すると、平坦面は方形を呈している。東西約28m、南北約48mの規模で、調査区には北東コーナー部がかかっていた。既に崩壊がすすみ、斜面下方の稜線は明確ではない。裾部は第08号溝跡にカットされている。

断面による盛土の観察では、調査区内のほとんどが崩壊部のため、版築のような衝き固めたような様子を看取することはできなかった。第1・2層が埴作土で、第14～16層が日表土の自然堆積層である。第14層には天仁元年(1108)に浅間山の噴火にともなって噴出された、浅間B軽石がブロック状に確認された。このことから、第01号基壇状遺構は、12世紀初頭以降に造成されたことが判明した。

調査区境界際に段を持ち、下方には幅3mほどのフラットな面が広がっている。この段が元米から設置されていたものなのかどうかは判断できなかった。上段

の平坦面には焼土と炭化物が分布する地点が認められる。下段には第01号配石遺構とした、偏平な礫が人為的に配されていた箇所がある(第201図)。ここからは焙烙の鍋が出土している。

遺物は中世の瓦や占銭が出土している。また第01号基壇状遺構の東側斜面下方に存在する第04号住居跡には、中世の三巴文軒丸瓦・唐草文軒平瓦やかかわりが流れ込んでいる。

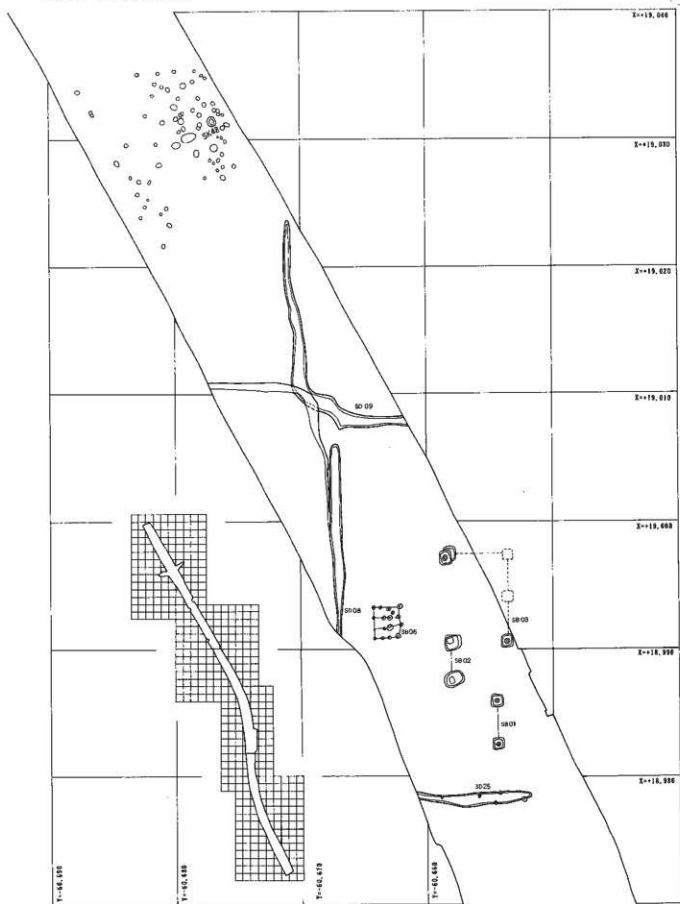
第02号基壇状遺構

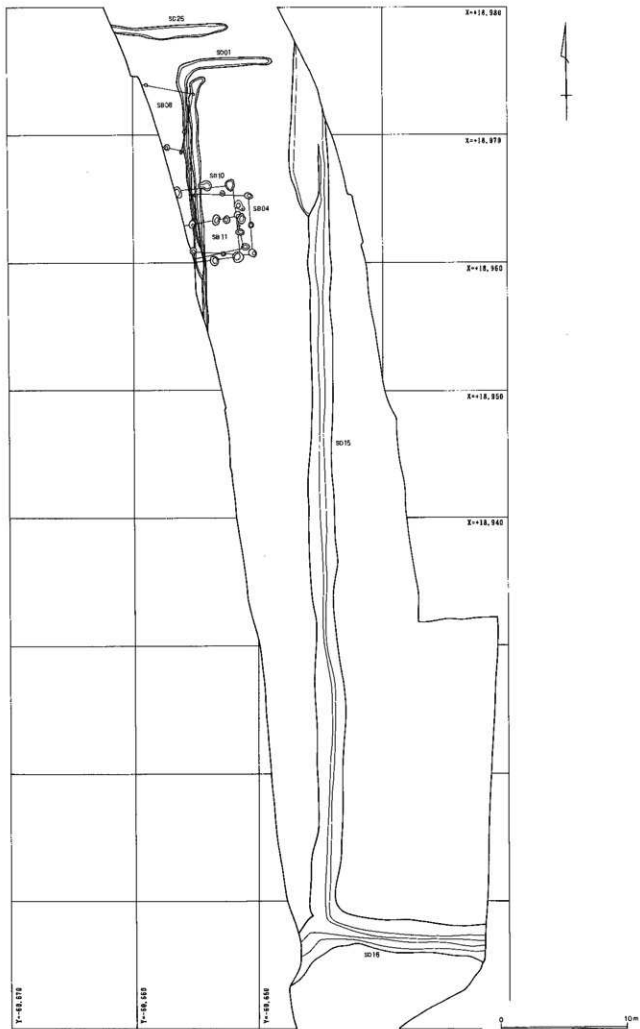
調査前の状況では、P・Q-46～49グリッド付近が方形の高まりとなっており、基壇状遺構の存在を予想した。調査は、現地表面から人力によって注意深く掘り下げた。

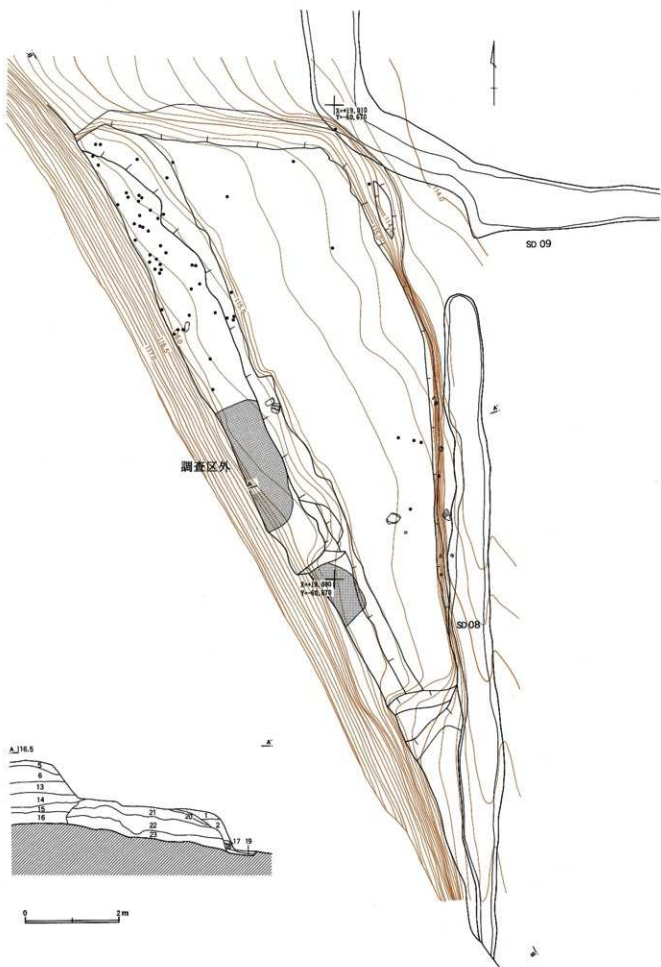
その結果、人為的に形成された平坦面や、寺院に関連する建物跡などは発見されなかった。断面観察でも、版築した状況や、人為的に盛土を行ったような形跡を確認することはできなかった。また中世寺院との関連が予想される第15号溝跡が、南北に貫いていた。このような状況から、後世の開墾に伴う地形の変更と判断された。

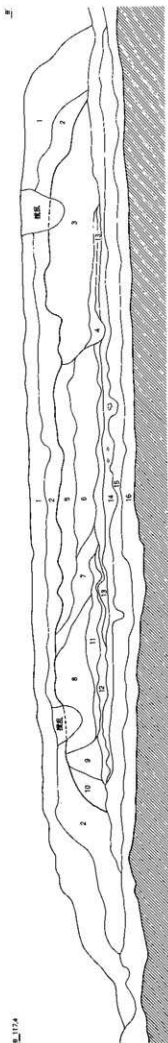
P-S-49～60グリッドにかけては、現地表面が階段状に南へ傾斜していた。この部分にも基壇状遺構の存在を予想し、トレンチ調査による断面観察を実施した。しかし、この地点も第02号基壇状遺構とした地点と同様であった。版築した状況や、人為的に盛土を行ったような形跡を確認することはできず、後世の開墾に伴う地形の変更と判断した。

第199圖 中世寺院関連遺構





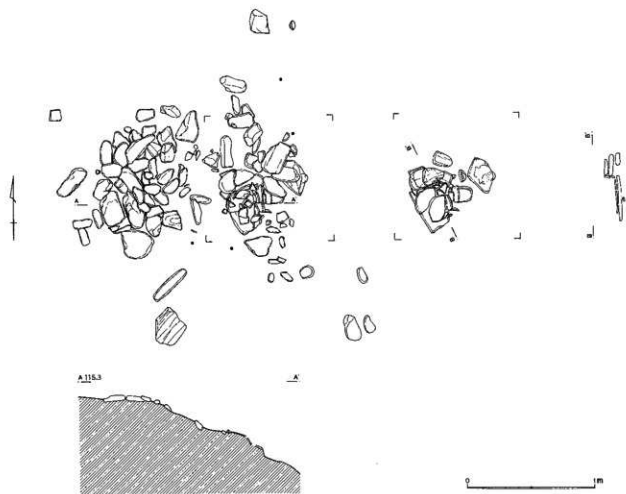




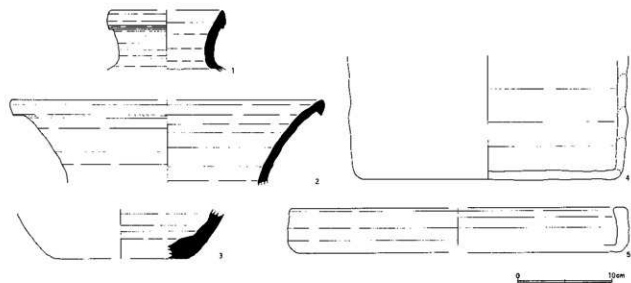
第01号基層状遺構

- | | |
|----------|--|
| 1 茶褐色土 | 現耕作上 砂質 堅緻 しまり欠 草根・腐植土混入 浅間A多量混入 浅間A・炭化物少量 |
| 2 茶褐色土 | 砂質 しまり欠 浅間A少量 ローム粒子・炭化物微量 |
| 3 黄褐色土 | しまり良好 ローム粒子・ロームブロックと黒褐色土の混入層 衝き固めた様子は見られない |
| 4 黄褐色土 | しまり欠 ローム粒子・ロームブロック(径20~50mm)と黒褐色土の混入層 |
| 5 黄茶褐色土 | 砂質 しまり欠 茶褐色上にローム粒子多量 |
| 6 黄褐色土 | 砂質 しまり欠 ローム粒子・ロームブロック(径20~50mm)多量 |
| 7 赤灰色粘質土 | 堅緻 黒灰色鉄分少量含む粘質土を主体 ロームブロック(径5~10mm)少量 |
| 8 黄褐色土 | やや堅緻 版築とは思われない ロームブロック(径20~80mm)主体 |
| 9 茶褐色土 | しまり欠 少量のロームブロック混入 |
| 10 黄褐色土 | 8層に近似(9層によって分断されたものかと推定される) |
| 11 濃茶褐色土 | しまり欠 ローム粒多量 焼土粒子・炭化物粒子・白色粘土粒子少量 |
| 12 黄褐色土 | ロームブロック(径50~100mm)主体 黒褐色土混入 焼土粒子・炭化物粒子少量 |
| 13 黒褐色土 | 砂質 しまり欠 ローム粒子・ロームブロック・焼土・炭化物(材に近いものまで存在する)多量 炭化物はあまりまとまる部分は見られないが下層寄りに若干多い |
| 14 黒色土 | 旧表土 砂質 ややしまり良好 浅間Bをブロック状に混入 微細炭化物少量 |
| 15 濃茶褐色土 | 砂質 しまり良好 上部に少量の14層混入 ローム粒子・微細炭化物少量 |
| 16 茶褐色土 | 造構覆土 旧表土下 砂質 やや堅緻 炭化物・白色ガミス少量 |
| 17 茶褐色土 | SD08覆土 しまり欠 ローム粒子多量 |
| 18 褐色土 | SD08覆土 砂質 しまり欠 ローム粒子少量 |
| 19 褐色土 | SD08覆土 粘性弱 ロームブロック少量 |
| 20 黒褐色土 | 砂質 しまり欠 炭化物多量 ローム粒子少量 |
| 21 黒褐色土 | 旧表土 砂質 ローム粒子少量 |
| 22 茶褐色土 | やや堅緻 ローム粒子・ロームブロック多量 |
| 23 褐色土 | ロームへの漸移層 砂質 しまり欠 ロームブロック多量 |

第201図 第01号配石遺構



第202図 第01号基壇状遺構出土遺物



第01号基壇状遺構出土遺物（第202図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	小型壺	(11.7)	(6.3)		W	B	灰	5	
2	壺	(32.8)	(8.9)		WR	B	オリーブ黒	5	
3	甕		(5.2)	(14.0)	WB	B	灰オリーブ	5	
4	鍋		(13.0)	27.0	WBR	B	に濃い黄橙	60	焙烙
5	内耳鍋	(35.3)	(4.7)		WB	B	灰黄	10	焙烙

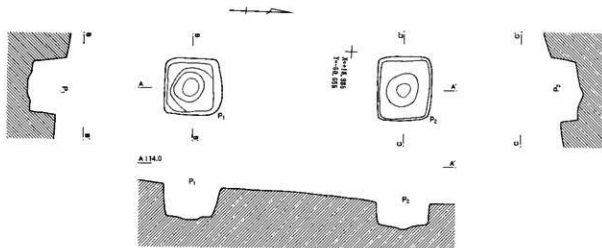
(2) 掘立柱建物跡

中世と思われる掘立柱建物跡は8棟で、N-P-40～43グリッド付近に集中している。いずれの遺構も軸方向を描えて、配置されている。第01・02・03・06号掘立柱建物跡は、近接して存在している。また第04・10・11・08号掘立柱建物跡については、寺院を区画す

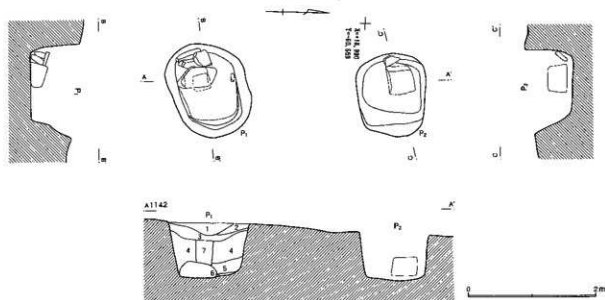
ると考えられる溝跡と重複しており、明確には寺院関連遺構といえない。

第01号掘立柱建物跡 (第203図)

2本柱の掘立柱建物跡で、O-41グリッドに位置し



第204図 第02号掘立柱建物跡



第02号掘立柱建物跡

- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 黒色土 SK01層土 | 5 濃茶褐色土 掘形埋土 堅緻 ロームブロック(径20mm前後)少量 |
| 2 黄茶褐色土 流入土(軟質) ロームブロック(径10～40mm)少量 | 6 黄茶褐色土 掘形埋土 堅緻 4層に近直 |
| 3 茶褐色土 流入土(軟質) ロームブロック(径5～15mm)少量 | 7 濃茶褐色土 柱底(板敷貫) ロームブロック(径5～20mm)極少量 |
| 4 黄茶褐色土 掘形埋土 堅緻 ロームブロック(径10～50mm)多量 | |

ていた。柱間の距離は3.36mで、方位はN-2°-Wを測る。

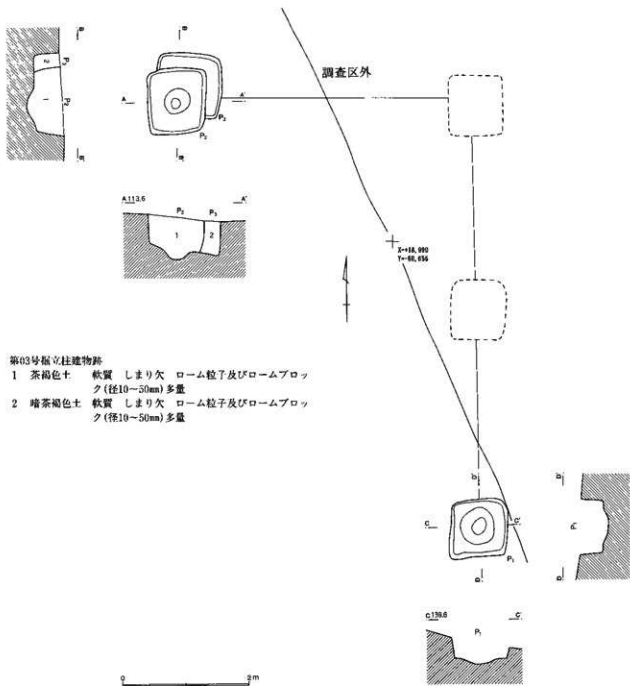
Pit1は平面方形で、規模は南北0.92m、東西0.89m、深さ0.56mである。Pit2は東西が長い平面長方形で、南北0.86m、東西1.02m、深さ0.43mの規模である。Pit1・Pit2ともに底面中央部が凹形に窪んでおり、柱

痕と確認された。底面の標高はほぼ一致している。

柱穴の状況から掘立柱建物跡と報告するが、建物の構造については不明である。

出土遺物は無く、土師器1片・須恵器1片が流れ込んでいた。時期は明確ではないが、軸方向の一致から、中世と判断した。

第205図 第03号掘立柱建物跡



第03号掘立柱建物跡

- 1 茶褐色土 軟質 しまり欠 ローム粒子及びロームブロック(径10~50mm)多量
- 2 暗茶褐色土 軟質 しまり欠 ローム粒子及びロームブロック(径10~50mm)多量

第02号掘立柱建物跡 (第204図)

第01号掘立柱建物跡と同様、2本柱の掘立柱建物跡である。O-41グリッドに位置し、柱間の距離は3.04mである。方位はN-1'-Wを測る。Pit 1は、第01号土坑に切られていた。

Pit 1は平面隅丸方形で、南北1.23m、東西1.48m、深さ0.97mである。覆土断面の観察では、柱痕を明確に確認することができた。掘形の埋土は丁寧に削ぎ固められていた。Pit 2も平面隅丸方形で、南北1.11m、東西1.31m、深さ0.78mである。

Pit 1・Pit 2とも柱を支える根石として、底面に大型方形の礎が設置されていた。礎上面の標高は、ほぼ一致している。また柱痕の平面形態は方形で、角材が使用されていたことが推定された。

第01号掘立柱建物跡と同様、柱穴の状況から掘立柱建物跡と報告するが、建物構造については不明である。

出土遺物は無く、土師器7片が混入していた。時期を明確にし難いが、軸方向の一致から、中世と判断した。

第03号掘立柱建物跡 (第205図)

O-40グリッドに位置していた。ピットの状況が第01号掘立柱建物跡と酷似していたことから、掘立柱建物跡として報告する。発掘時はPit 1とPit 2・Pit 3は別の遺構として調査したが、第01・02号掘立柱建物跡の柱間の距離と方位の一致から、1間×2間の「L」字形に並ぶ柱穴列の配置を想定したが、建物構造は不明である。規模は南北6.65m、東西4.80mと推定され、主軸方位はN-1'-Eを測る。

Pit 2はPit 3より新しく、建替えが行われている。Pit 2は平面方形で、南北1.05m、東西0.93m、深さ0.67mである。Pit 3も平面方形で、南北0.98m、東西1.02m、深さ0.54mである。Pit 1も平面方形で、南北0.91m、東西0.91m、深さ0.44mを測る。Pit 1・Pit 2ともに底面中央部に柱痕が確認され、標高もほぼ一致している。

出土遺物は、流れ込んだ土師器3片を除いて皆無で

あった。時期は、軸方向の一致から中世に比定した。

第06号掘立柱建物跡 (第206図)

3間×3間の小型の総柱掘立柱建物跡で、N-40グリッドに位置していた。側柱列はごく浅い溝によって、連結されている。傾斜する確認面から、溝は全周していた可能性もある。柱穴はほぼ直線的に並んでいるが、東辺は著しく乱れている。

北辺2.04m、東辺2.45m、南辺1.82m、西辺2.47mの規模で、主軸方位はN-1'-Wを測る。柱穴は平面形態は、円形を基本としている。柱間の距離は0.53-0.95mである。

柱穴底面の標高は統一性に欠け、しっかりとした掘り込みを持つものと、浅いものがある。両者の配置には規則性は認められず、北西コーナーのPit 1、南西コーナーのPit 10、東辺のPit 5・Pit 6と、中央部西側のPit 13・Pit 16が特に浅い。

出土遺物は皆無である。軸方向の一致と柱穴の乱れた配列状況から、中世の遺構と判断した。

第04号掘立柱建物跡 (第207図)

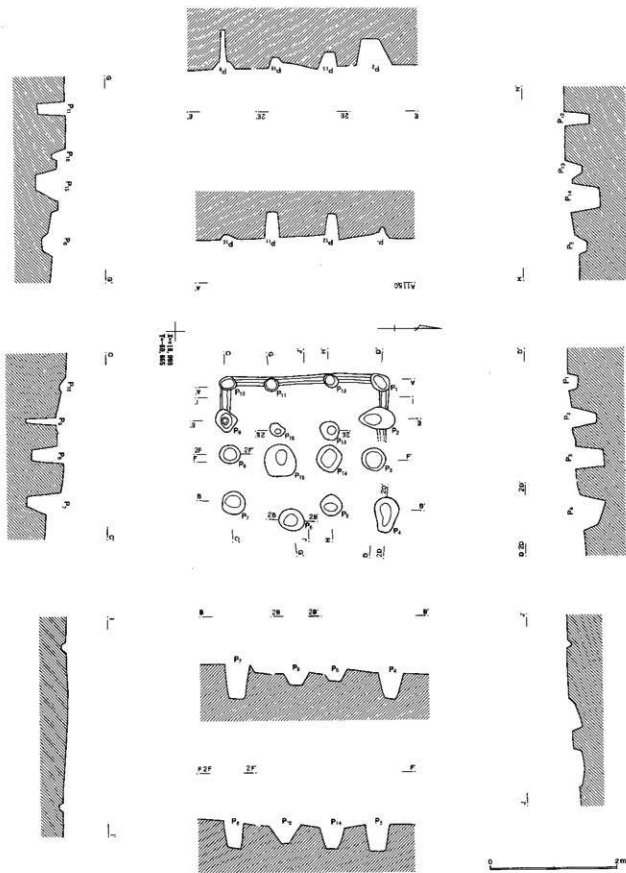
2間×2間の側柱掘立柱建物跡で、西から東へ傾斜するO-43・P-43グリッドに位置していた。第01号溝跡、第10・11号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

規模は北辺4.43m、東辺4.64m、南辺4.81m、西辺4.56mで、主軸方位はN-2'-Eを測る。柱間の距離は2.11-2.45mである。

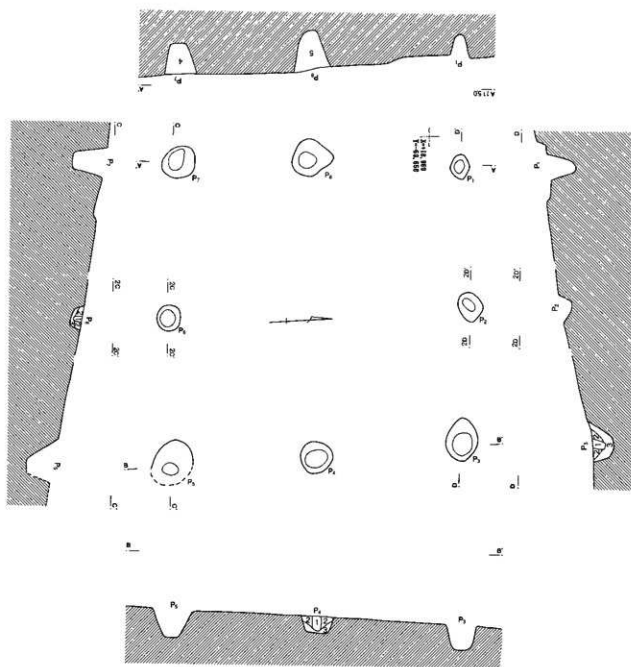
柱穴の掘り込みの深さには、深いものと浅いものに分けられ、その配置には規則性が認められる。北辺・東辺・南辺では、中央に位置する柱穴が浅い。北辺・南辺の底面の標高は、東の柱穴ほど低くなる。これは斜面地に構築された掘立柱建物跡のため、斜面下方の柱をより深く埋め込んだためである。

出土遺物には土師器36片・須恵器8片があるが、流れ込みと思われる。1は須恵器の甕で、推定底径15.0cm、残存高9.8cmである。胎土には白色粒子と片岩

第206圖 第06号掘立柱建物跡



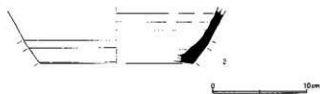
第207图 第04号孤立柱建物跡・出土遺物



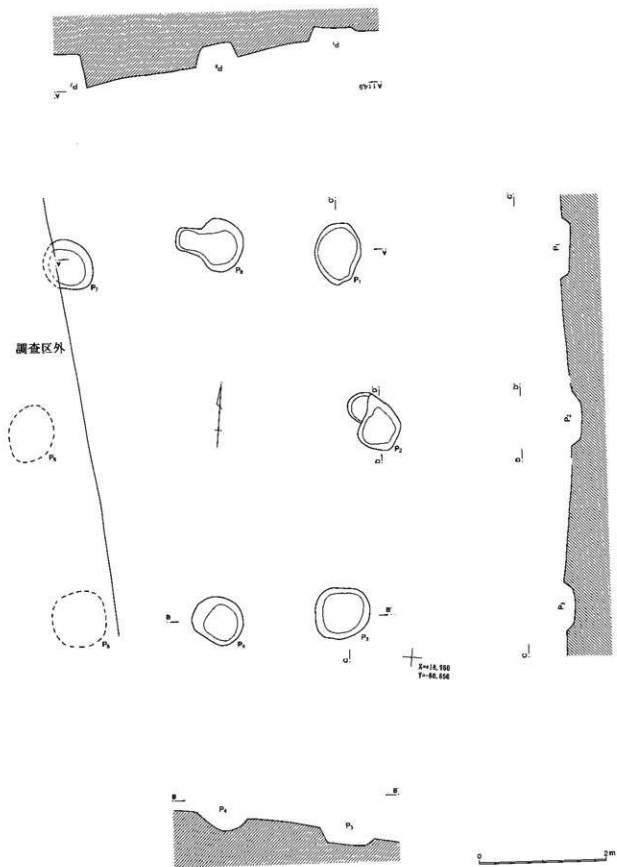
第04号孤立柱建物跡

- 1 黑褐色土 柱痕 炭化物少量
2 茶褐色土 環形 砂質 ローム粒子少量

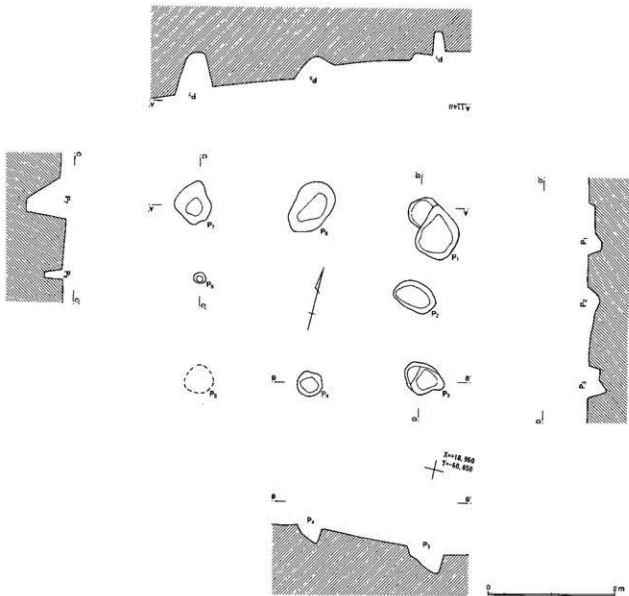
- 3 黄褐色土 扇形 堅硬 □—△主体
4 褐色土 Pit7覆土 砂質 やや堅硬 □—△粒子・炭化物少量
5 褐色土 Pit8覆土 砂質 やや堅硬 □—△粒子・炭化物少量



第208图 第10号孤立柱建物跡



第209図 第11号掘立柱建物跡



が含まれ、焼成は良好である。色調は灰色で、残存率は5%程度である。2も須恵器の甕で、推定底径16.3cm、残存高5.9cmである。胎土には黒色粒子が含まれ、焼成は良好である。色調は灰色で、残存率は5%程度である。

時期は軸方向の一致から、中世に比定される。

第10号掘立柱建物跡 (第208図)

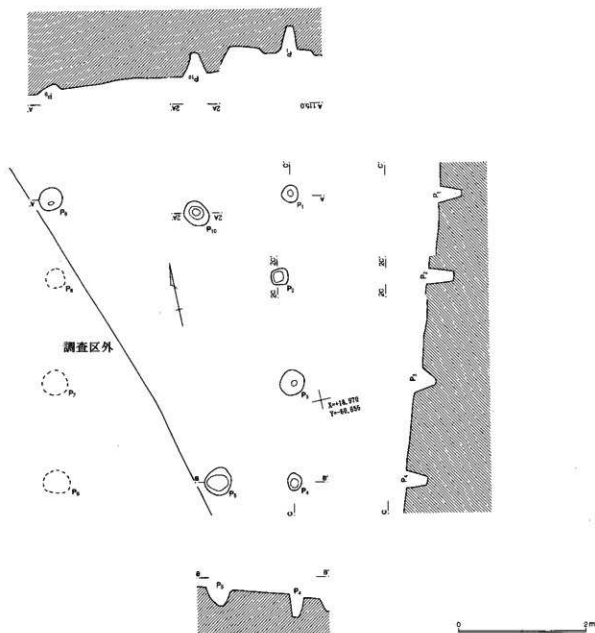
調査時には掘立柱建物跡として認識していなかったもので、2間×2間の側柱建物跡と推定される。西から東に傾斜する、O-43・P-43グリッドに位置して

いる。

北辺4.28m、東辺5.70mで、主軸方位はN-4°-Wを測る。柱間の距離は2.02-2.50mで、各辺とも中央に位置する柱穴が外側に張り出す。底面の標高は第04号掘立柱建物跡と同様に、斜面を意識したものである。柱穴の覆土は褐色土で、炭化物・ローム粒子を少量含む。

出土遺物には土師器31片・須恵器2片・鉄片1があるが、流れ込みと考えられる。時期は軸方向の一致から中世に比定される。

第210図 第08号掘立柱建物跡



第11号掘立柱建物跡 (第209図)

調査時には掘立柱建物跡として認識していなかったもので、2間×2間の側柱建物跡と推定される。西から東に傾斜する、O-43・P-43グリッドに位置している。

北辺3.51m、東辺2.73m、南辺は推定で3.51m、西辺も推定で2.76mで、主軸方位はN-13°-Wを測る。柱間の距離は南北辺が長く、東西辺は短い。底面の標

高は第04号掘立柱建物跡と同様に、斜面を意識したものである。また西辺中央の柱穴は他と比べて、きわめて小さい。柱穴の覆土は黒褐色土で、炭化物・焼土粒子を少量含んでいる。

出土遺物には土師器92片・須恵器9片・鉄片1があるが、流れ込みと考えられる。時期は軸方向の一致から、中世に比定される。

第08号掘立柱建物跡（第210図）

調査時には掘立柱建物跡として認識していなかったもので、2間×2間の側柱建物跡と推定される。南西から北東へ緩やかに傾斜する、O-42・43グリッドに位置している。第09号掘立柱建物跡と重複している。

北辺3.76m、東辺4.51mで、主軸方位はN-11°-Eを測る。柱間の距離は1.25~2.35mである。底面の

標高は第04号掘立柱建物跡と同様に、斜面を意識したものである。柱穴の覆土は茶褐色土を主体とし、ローム粒子・炭化物が少量含まれている。

出土遺物には土師器5片があるが、流れ込んだ物と考えられる。時期は、軸方法の一致から中世に比定される。

(3) 溝跡

中世寺院との関連が予想される溝跡は、第01・02・03・08・09・15・16・17・25・26号溝跡の10条である。いずれの溝跡も年代は明確ではない。しかし、中世寺院関連の基壇状遺構や独立柱建物跡と方向を合致させており、これらの溝跡を中世寺院関連遺構として報告する。

第01号溝跡 (第211図)

P-42グリッドからO-42・43・44グリッドに位置している。O-42グリッドでN-E方向にほぼ直角に曲り、南端は第17号溝跡に切られている。第04・10・11号独立柱建物跡とも重複しているが、新旧関係は不明である。

幅0.98m、深さ0.33mを測る。遺物は土師器110片・須恵器10片が出土している。

第17号溝跡 (第211図)

第01号溝跡と平行する溝跡である。O-42・43・44グリッドに位置し、南端は調査区外である。

幅0.62m、深さ0.33mを測る。出土遺物はない。

第02号溝跡 (第212・213図)

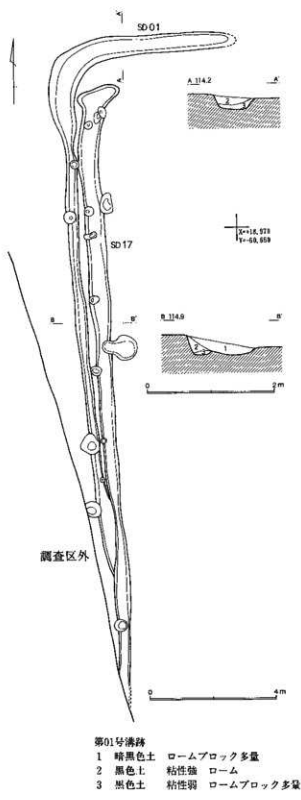
第15・26号溝跡と平行する溝跡である。幅0.63m、深さ0.09mの規模で、幅が狭く、浅い。P-42~46グリッドに位置し、第01・30・31号住居跡と重複している。北端は不明瞭で、南端は第31号住居跡を貫いて調査区外に達している。

第26号溝跡 (第212・213図)

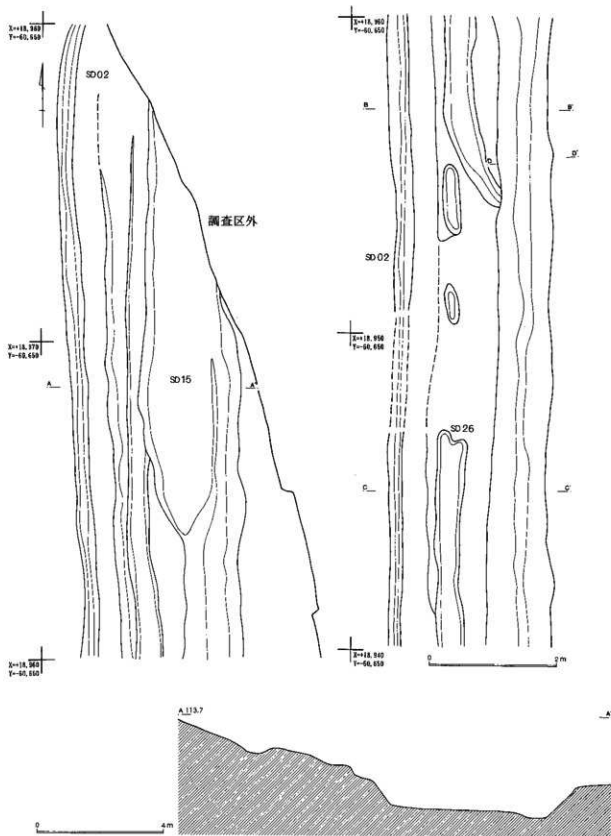
第02・15号溝跡と平行する溝跡で、P-42~46・Q-46グリッドに位置している。P-44グリッドで二股に分かれる。一方は緩やかにカーブして、第15号溝跡と重複する。もう一方はそのまま第15号溝跡と平行し、P-46グリッドでN-E方向にほぼ直角に曲る。P-46グリッドで第15号溝跡と交差し、また第30号住居

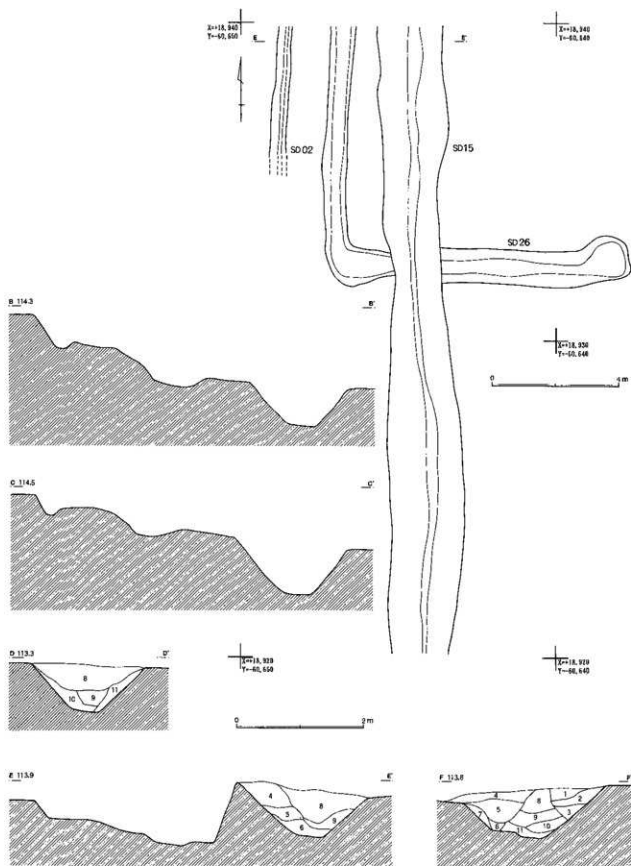
跡とも重複しているが、第26号溝跡が最も新しい遺構である。

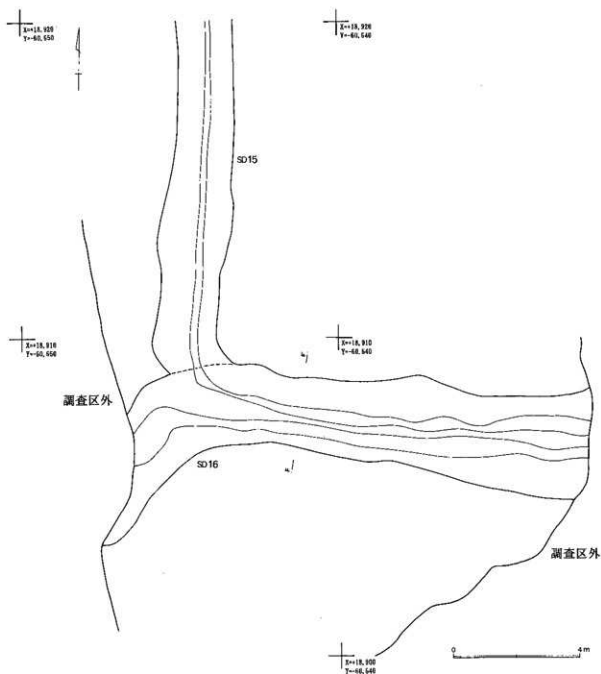
第211図 第01・17号溝跡



第212图 第02·15·16·26号清淤(1)



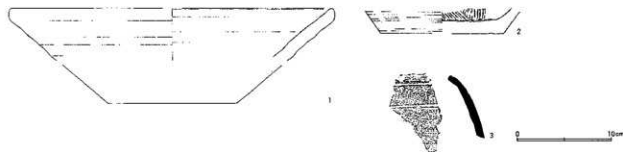




第15号溝跡

- | | | | | |
|--------|--------------|---------|---------------|-----------------|
| 1 暗褐色土 | 浅間A多量 | 7 黒褐色土 | しまり良好 粘性あり | ローム粒子多量 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒子少量 | 8 暗灰褐色土 | ローム粒子・浅間A多量 | |
| 3 黒褐色土 | ロームをブロック状に含む | 9 暗灰褐色土 | ローム粒子・褐色土粒子少量 | |
| 4 暗褐色土 | 浅間A少量 | 10 暗褐色土 | しまり良好 粘性強い | ローム粒子少量 褐色土粒子多量 |
| 5 暗褐色土 | しまり良好 粘性弱 | 11 暗褐色土 | しまり良好 粘性あり | ローム粒子多量 |
| 6 暗褐色土 | しまり良好 粘性あり | | | |

第215図 第15号溝跡出土遺物



第15号溝跡出土遺物 (第215図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	鉢	(33.8)	(5.5)		WB	C	褐	5	P-47~49Gr
2	握り鉢		(2.7)	(12.9)	B	B	暗赤褐	5	P-49・Q-49Gr・常滑
3	皿				W片	B	褐		P-46Gr

幅0.78m、深さ0.28mを測り、遺物は出土していない。

第02・26号溝跡は中世関連遺構と方向を一致させているが、積極的に中世のものとは断定できない。むしろ中世以降の段階の耕作に伴う溝跡と捉えた方が妥当かもしれない。

第15号溝跡 (第212・213・214図)

P-42~49・Q-49グリッドに位置している。P-49グリッドでN-E方向にほぼ直角に曲り、Q-49グリッドで調査区外にいたる。P-49・Q-49グリッドでは、第16号溝跡と重複している。新旧関係は第16号溝跡の方が新しい。ほかに重複する第33・35・36・37号住居跡、第84号土坑は、第15号溝跡が切っている。

幅1.80m、深さ0.95mの菜研堀で、底面の高さはP-49グリッドのコーナーが頂点となる。

遺物には土師器片・須恵器片があるが、いずれも周辺の住居跡から流れ込んだものである。時期を特定できる遺物は出土していないが、方向の一致と断面形態から中世と考えられる。

第16号溝跡 (第214図)

西から東に傾斜する P-49・Q-49グリッドに位置

し、重複する第15号溝跡と平行している。幅2.62m、深さ0.62mを測る菜研堀で、底面は地形と同様に西から東へ傾斜している。両端とも調査区外である。西側の調査区際ではカーブを画き、この部分で第15号溝跡と同じく、N-W方向に直角に曲る可能性が高い。

遺物は住居跡から流れ込んだ、土師器片や須恵器片が出土している。時期は明確ではないが、方向の一致から中世と捉えられる。

第03号溝跡 (第216図)

N-42・O-42グリッドに位置し、第25号溝跡と平行している。

西側が調査区外、東側は攪乱されている。幅0.34m、深さ0.11mを測る。覆土上層には浅間A軽石が堆積していた。

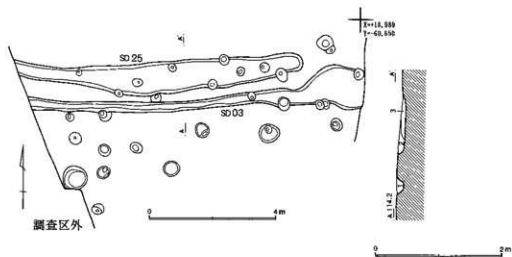
遺物は、流れ込んだ土師器40片が出土している。

第25号溝跡 (第216図)

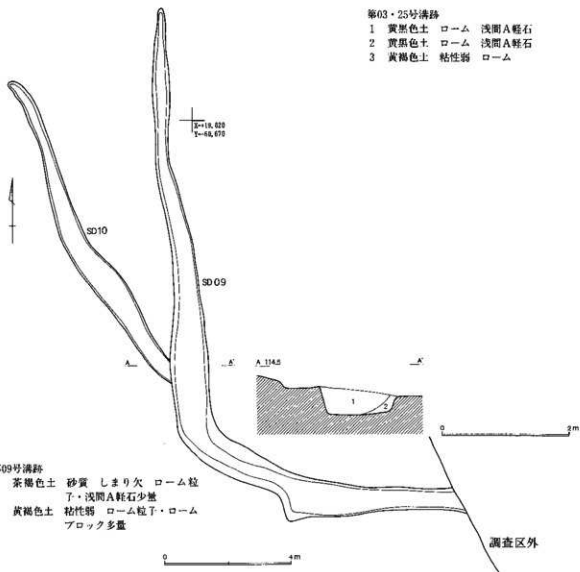
N-42・O-42グリッドに位置し、西端は調査区外である。幅0.98m、深さ0.11mを測る。遺物は出土していない。

第03・25号溝跡の間隙には、多くのピットが掘り込まれている。これらのピットと溝跡の関係については、不明である。

第216図 第03・25号溝跡



第217図 第09・10号溝跡



第03・25号溝跡

- | | | | |
|---|------|-----|-------|
| 1 | 黄黑色土 | ローム | 浅間A軽石 |
| 2 | 黄黑色土 | ローム | 浅間A軽石 |
| 3 | 黄褐色土 | 粘性弱 | ローム |

第09号溝跡

- | | | | | |
|---|------|-----|-------|-----------|
| 1 | 茶褐色土 | 砂質 | しまり欠 | ローム粒 |
| | | | | 子・浅間A軽石少量 |
| 2 | 黄褐色土 | 粘性弱 | ローム粒子 | ローム |
| | | | | ブロック多量 |

第08号溝跡 (第200図)

N-39・40グリッドに位置する第01号基壇状遺構と重複する溝跡である。新旧関係は断面の観察から、第08号溝跡の方が新しい。しかし、第01号基壇状遺構裾部に沿って位置していることから、基壇状遺構の盛土終了後に、裾部を整形し、かつ方形に区画するために掘られた溝跡と捉えている。

幅1.32m、深さ0.20mを測る。遺物は流れ込んだ土師器2片が出土している。

第09号溝跡 (第217図)

M-37~39・N-39グリッドに位置している。M-38~N-39グリッドにかけてN-E方向にはほぼ直角に曲り、第01号基壇状遺構のコーナーと点对称の位置にある。方位の一致と位置関係から、中世寺院を区画していた溝跡と考えられる。

重複する遺構との新旧関係は、第03・04号住居跡よりも新しく、第10号溝跡よりも古い。幅1.22m、深さ0.28mを測る。

遺物は中世の瓦片・古銭の他に、土師器16片・須恵器4片・陶器10片が出土している。

(4) 遺物

中世寺院に関連する遺物として、かわらけ・青磁片・四耳壺片・瓦・板碑・宝篋印塔・五輪塔がある。これらの遺物と中世寺院との関連は明らかではないが、寺院の存続年代を知る手がかりにはなる。

中世の遺物として古銭が出土しているが、これについては第IV章で報告する。またかわらけについては第04号住居跡出土遺物として報告し、青磁片・四耳壺片については図示し得なかった(図版83)。

鬼瓦(第218図)

鬼瓦は8点出土している。1は下端部、2は眼縁部、3は眼球部、4～7は牙部の破片である。8は不明である。

いずれも表面が灰色系で、内部が淡黄色・灰白色系のものである。

中世瓦(第219・220・221・222図)

瓦は軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦が出土している。出上した遺構は主に第01号基壇状遺構と第04号住居跡である。

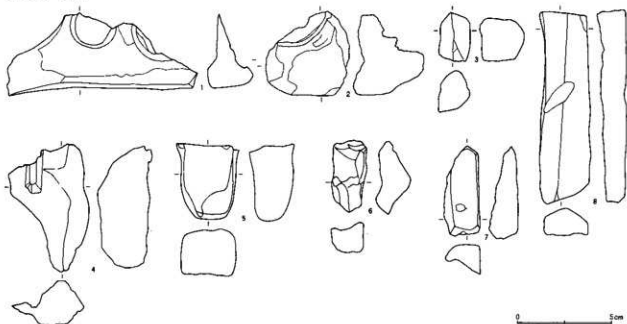
出上した瓦は色調・焼成・胎土の違いから、10タイプに分類することができる。Iタイプは表面が灰色系で、内部が淡黄色・灰白色系のもの、IIタイプは灰白色系の硬質な焼成のもの、IIIタイプはにぶい赤褐色系の硬質な焼成のもの、IVタイプはにぶい赤褐色系の軟質な焼成のもの、Vタイプは灰黄色系の硬質な焼成で、表面がザラついているもの、VIタイプは灰黄色系の硬質な焼成で、表面がなめらかなもの、VIIタイプは表面がオリーブ黒系、内部が灰色系の硬質な焼成のもの、VIIIタイプはにぶい赤褐色系のきわめて硬質な焼成のもの、IXタイプは灰白色系のやや軟質な焼成のもの、Xタイプは灰色系の須臾器のような焼成のものに分けられる。鬼瓦はIタイプに含まれる。

1～10は軒丸瓦である。文様は右回りの三巴文で、尾部が長い。珠文は小粒で、間隔は均等で、密に配されている。

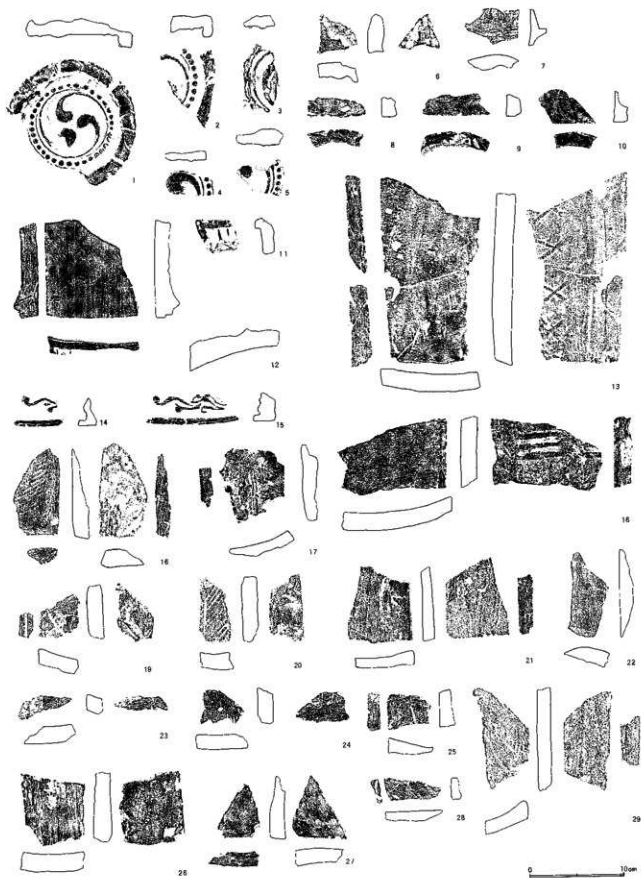
11・12・14・15は軒平瓦である。いずれも凸面の広端縁を斜めに切り落として瓦当部になる粘土を接合した、瓦当貼り付け技法によるものである。文様は11・12が下向きで幅狭の劍頭文、14・15が唐草文である。

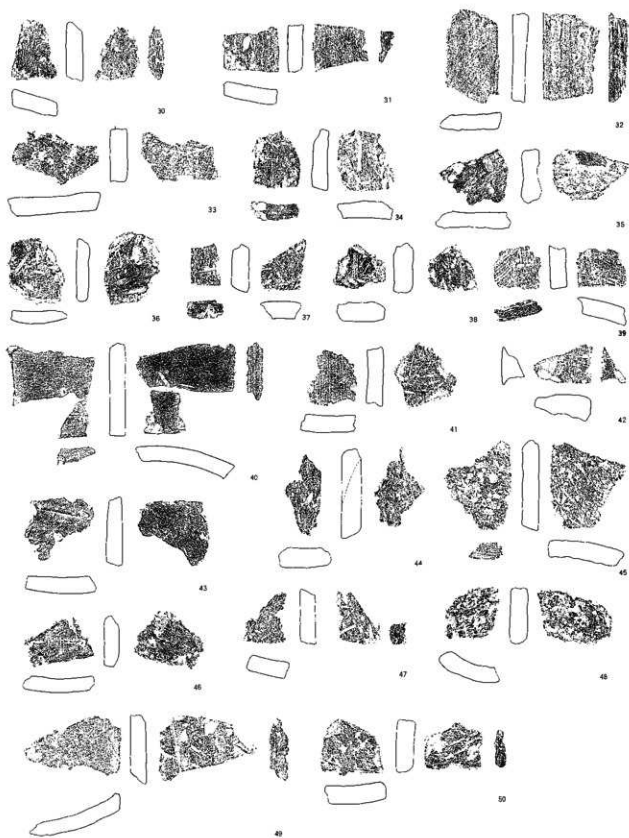
13・18は平瓦で、13の凸面には菱形格子目様の、18の凸面には平行線の浅い叩きが施されている。

第218図 鬼瓦



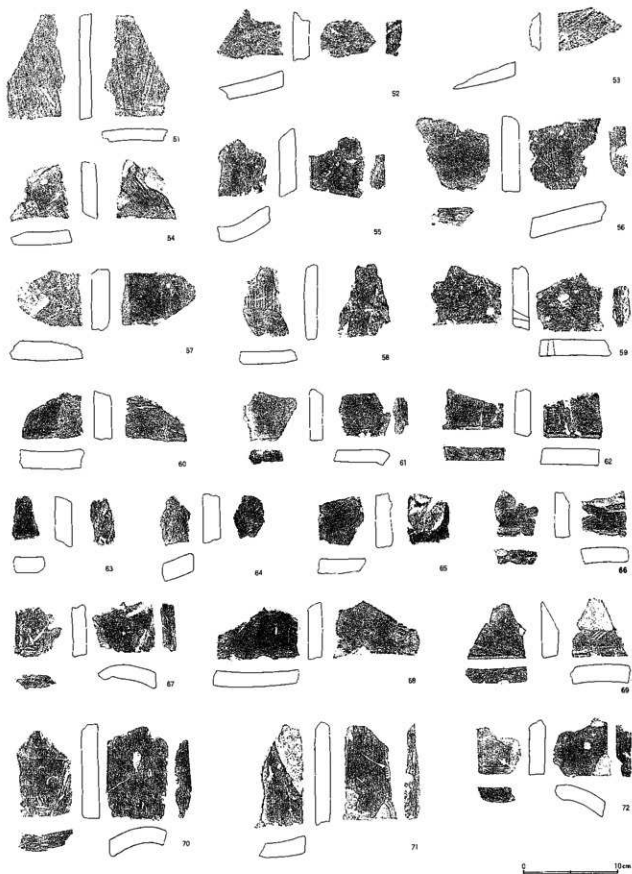
第219图 中世瓦(1)



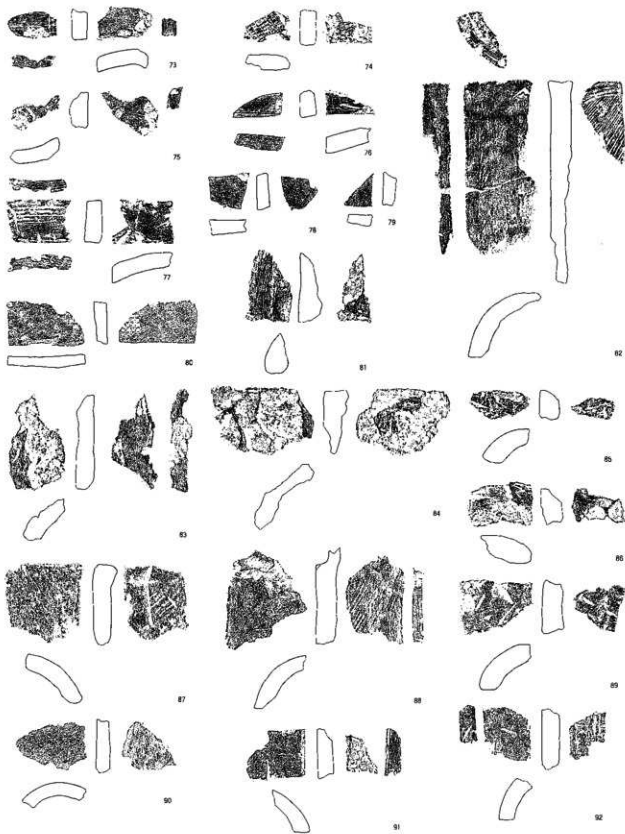


0 10 cm

第221図 中世瓦(3)



第222图 中世瓦(4)



0 10cm

番号	器種	出土位置	タイプ	胎土	焼成	色調	その他
1	軒丸瓦	第04号住居跡	I	WB	B	浅黄	三巴文
2	軒丸瓦	第04号住居跡	I	W	B	灰黄	三巴文
3	軒丸瓦	第01号基壇状遺構	IV	BR	C	にふい黄橙	三巴文
4	軒丸瓦	第04号住居跡	I	BR	B	浅黄	三巴文
5	軒丸瓦	第04号住居跡	I	WB	B	灰黄	三巴文
6	軒丸瓦	第04号住居跡	I	B	B	灰白	
7	軒丸瓦	第04号住居跡	I	B	B	灰	
8	軒丸瓦	第04号住居跡	I	BR	B	灰黄	
9	軒丸瓦	第09号溝跡	I	BR	B	灰	
10	軒丸瓦	第04号住居跡	I	BR	B	灰	
11	軒平瓦	表採	IX	WB	B	灰黄	福刺下向き剣頭文 瓦当貼り付け技法
12	軒平瓦	表採	Ⅷ	W	A	褐	福刺下向き剣頭文 瓦当貼り付け技法
13	平瓦	第04号住居跡	II	BR	B	浅黄	凸面に離れ砂
14	軒平瓦	第04号住居跡	I	BR	B	暗灰黄	均整唐平文 瓦当貼り付け技法
15	軒平瓦	第04号住居跡	I	BR	B	灰黄	均整唐草文 瓦当貼り付け技法
16	平瓦	第04号住居跡	I	B片	B	黄灰	
17	平瓦	第04号住居跡	I	WB	B	灰黄	
18	平瓦	第04号住居跡	IV	WBR	C	橙	「三」の字印 凸面離れ砂
19	平瓦	表採	I	BR	B	灰黄	
20	平瓦	第46号土坑	I	BR	B	灰黄	凸面離れ砂
21	平瓦	第04号住居跡	I	B	B	黄灰	
22	丸瓦	第04号住居跡	I	B	B	灰	
23	平瓦	P・Q-46~49Gr	I	W	B	灰	
24	平瓦	P・Q-46~49Gr	I	WB	B	暗灰黄	凸面離れ砂
25	平瓦	第01号基壇状遺構	I	WB	B	灰黄	
26	平瓦	第10号溝跡	II	B	B	灰白	凸面離れ砂
27	平瓦	第01号配水遺構	II	WB	B	にふい黄橙	
28	平瓦	第07号溝跡	II	BR	C	灰黄	
29	平瓦	第01号溝跡	II	WB	B	灰黄	凸面離れ砂
30	平瓦	第47号土坑	II	WB	B	灰黄	
31	平瓦	第15号溝跡 P~42Gr	II	WBR	B	灰黄褐	凸面離れ砂
32	平瓦	第1号溝跡	II	WER	C	にふい黄橙	凹凸面に離れ砂
33	平瓦	第46号土坑	II	B	B	灰黄	凸面離れ砂
34	平瓦	第02号溝跡 P-42Gr	II	WB	B	灰黄	凸面離れ砂
35	平瓦	第46号土坑	II	WB片	C	にふい黄	離れ砂
36	平瓦	P・Q-46~49Gr	II	B	B	灰黄	
37	平瓦	第49号土坑	II	B	B	灰黄	凸面離れ砂
38	平瓦	第46号土坑	II	WB	B	にふい黄	凸面離れ砂
39	平瓦	第46号土坑	II	WB	B	灰黄	凸面離れ砂
40	平瓦	P・Q-46~49Gr	III	WBR	B	赤褐	
41	平瓦	P-46Gr	III	BR	C	にふい赤褐	
42	軒平瓦	P・Q-46~49Gr	III	WB	C	橙	凸面離れ砂
43	平瓦	第01号基壇状遺構	III	WBR	C	にふい赤褐	凸面離れ砂
44	平瓦	第15号溝跡	IV	WB	C	にふい橙	凸面離れ砂
45	平瓦	第47号土坑	IV	WBR	C	にふい黄橙	凸面離れ砂
46	平瓦	第46号土坑	IV	BR	C	にふい黄橙	凸面離れ砂
47	平瓦	第01号独立柱建物跡	IV	BR	B	にふい橙	SB01-Pin01
48	平瓦	第46号土坑	IV	BR片	C	にふい橙	
49	平瓦	第15号溝跡 P-49・Q-49Gr	IV	WBR片	C	橙	凸面離れ砂
50	平瓦	第47号土坑	IV	WB	C	にふい橙	凸面離れ砂

番号	器種	出土位置	タイプ	胎土	焼成	色調	その他
51	平瓦	第01号土坑	V	WBR	B	灰	凸面離れ砂・凹面砂粒子(離れ砂的)
52	平瓦	第10号溝跡	V	WB	B	灰	凸面離れ砂
53	平瓦	P・Q-46~49Gr	V	WB	B	黄灰	凸面離れ砂
54	平瓦	P・Q-46~49Gr	VI	WB	B	にょい黄	
55	平瓦	P・Q-46~49Gr	VI	WBR	A	灰黄	
56	平瓦	P・Q-46~49Gr	VI	BR	B	にょい黄	
57	平瓦	第15号溝跡	VI	WBR	B	黄褐	
58	平瓦	表探	VI	WB	B	灰黄	
59	平瓦	第15号溝跡 P-49・Q-49Gr	VI	B	B	にょい黄	
60	平瓦	P・Q-46~49Gr	VI	WBR	B	灰黄	凸面離れ砂
61	平瓦	P・Q-46~49Gr	VII	WB	A	灰	
62	平瓦	P・Q-46~49Gr	VII	WB	B	にょい黄	
63	平瓦	第15号溝跡 P-49・Q-49Gr	VII	B	B	灰黄	凸面離れ砂
64	平瓦	第15号溝跡 P-46Gr	VII	W	A	灰黄	
65	平瓦	第15号溝跡 P-49・Q-49Gr	VII	WBR	B	にょい黄	
66	平瓦	P・Q-46~49Gr	VII	B	A	灰	
67	平瓦	P・Q-46~49Gr	VII	WBR	B	灰黄	
68	平瓦	P・Q-46~49Gr	VII	BR	B	灰黄	
69	平瓦	第15号溝跡 P-49・Q-49Gr	VII	WB	A	灰黄	
70	平瓦	P・Q-46~49Gr	VII	WB	B	灰黄	
71	平瓦	P・Q-46~49Gr	VII	WBR	B	灰	
72	平瓦	第15号溝跡 P-49・Q-49Gr	VII	WB	A	灰黄	
73	平瓦	P・Q-46~49Gr	VII	W	B	灰黄	
74	平瓦	P・Q-46~49Gr	VII	WB片	B	黄灰	
75	平瓦	表探	VII	BR	B	灰	
76	平瓦	P・Q-46~49Gr	VII	BR	A	灰黄	
77	不明	第15号溝跡 P-46Gr	VII	WB	B	灰黄	
78	平瓦	P・Q-46~49Gr	VII	WB	A	灰	
79	平瓦	第07号溝跡	VIII	BR	A	にょい黄褐	
80	平瓦	第01号基壇状遺構	X	B	B	灰黄	
81	丸瓦	第04号住居跡	I	BR	B	灰	
82	丸瓦	第04号住居跡	I	WBR片	B	黄灰	凸面離れ砂
83	丸瓦	第04号住居跡	I	BR	B	灰	
84	丸瓦	第04号住居跡	I	BR	B	浅黄	
85	平瓦	表探	I	WB片	B	灰白	凸面離れ
86	丸瓦	第04号住居跡	I	BR	B	黄灰	
87	丸瓦	P・Q-46~49Gr	IV	WBR	C	にょい橙	
88	丸瓦	第01号基壇状遺構	IV	WBR	C	にょい橙	凸面離れ砂
89	丸瓦	第01号基壇状遺構	IV	B片	C	橙	凸面離れ砂
90	丸瓦	P・Q-46~49Gr	III	WBR	C	橙	
91	丸瓦	P・Q-46~49Gr	VII	BR	B	灰	
92	丸瓦	表探	VII	WB	A	黄灰	

石塔類 (第223~229図)

石塔類は宝篋印塔1点、五輪塔23点が出土している。宝篋印塔はQ-48グリッド、五輪塔はR-60・61・S-60・61グリッドにかかる崖部周辺から出土している。いずれの遺物も原位置をとどめていない。

1は宝篋印塔の相輪部で、九輪の中段で欠損している。一石から九輪・請花・伏鉢を成形したものである。請花・伏鉢の文様は、立体的に、かつ規則的に刻まれている。石材は安山岩である。形態的な特徴から、14世紀後半以降のものである。

2~24が五輪塔で、地輪部、水輪部、火輪部、空・風輪部がある。部位は揃っているものの、組合わせについては不明である。

2は地輪部である。正面中央には梵字が刻まれ、黒墨による月輪が認められる。梵字の両脇には銘が刻まれ、黒墨も塗られている。ただし、右側の範囲は不明瞭で、図示していない。銘は右が「清□逆修」、左が「明德□□」と読める。明德年間は、南北朝が合体さ

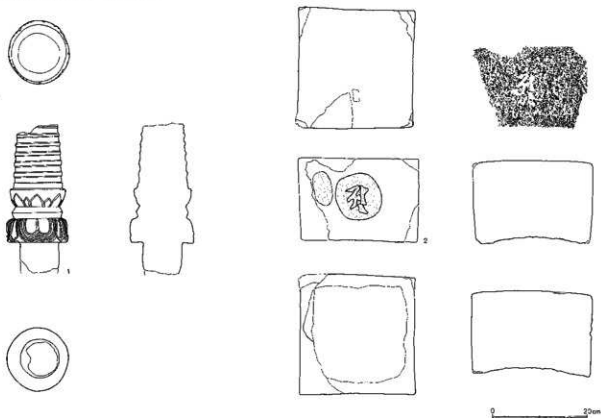
れた1390~94年にあたる。明德は北朝の元号である。上面には、長方形の刻みが見られる。石材は角閃石安山岩である。

3~9は水輪部である。4~7の4点には正面中央に梵字が刻まれている。7は正面部に黒墨が塗られている。8には奉納孔が穿たれている。9の上面には刻みが認められる。石材は3が安山岩、4~8が角閃石安山岩、9が砂岩である。形態的には、角閃石安山岩製よりも砂岩製の方が新しい様相を示している。

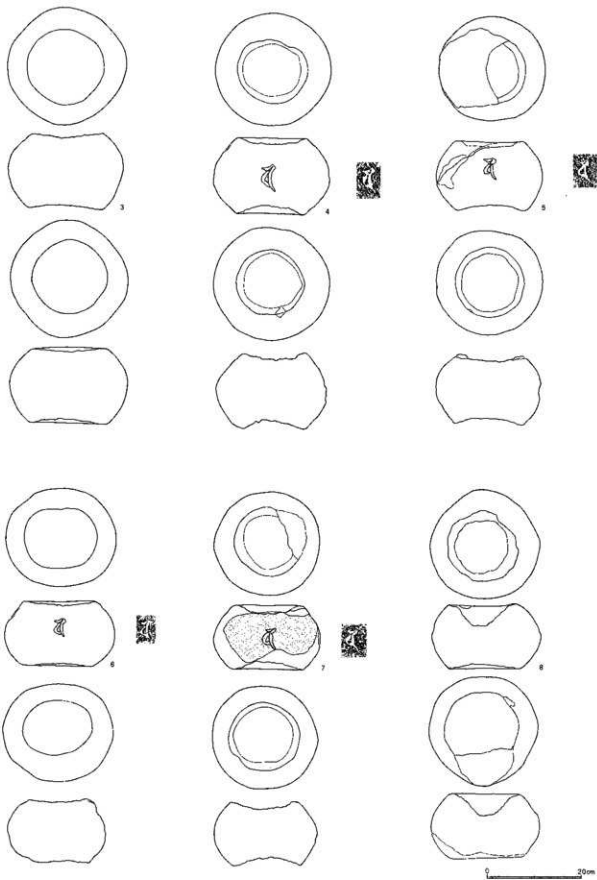
10~15は火輪部である。いずれも正面中央部に梵字が刻まれ、12・15には黒墨による月輪が認められる。石材はいずれも角閃石安山岩である。

16~24は空・風輪部である。宝珠先端部が欠損しているものが多い。いずれも一石から成形し、くびれ部には工具痕が明瞭に残っている。正面には空・風輪ともに梵字が刻まれ、16・22には黒墨による月輪が認められる。17・23・24のくびれ部正面には刻みが見られる。21は異質なもので、梵字の代りに平行する3枚の

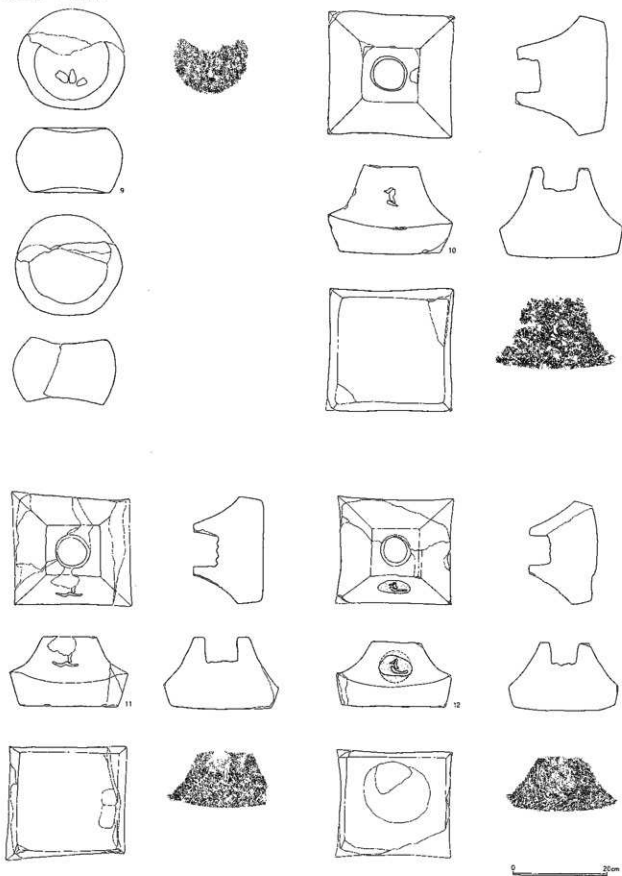
第223図 宝篋印塔・五輪塔(1)



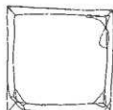
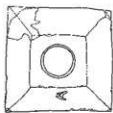
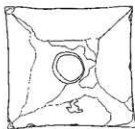
第224図 五輪塔(2)



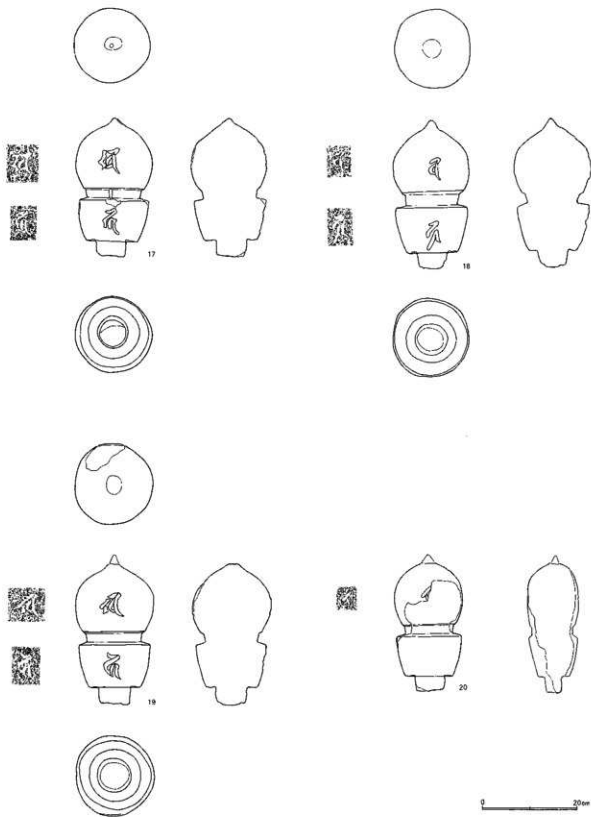
第225図 五輪塔(3)

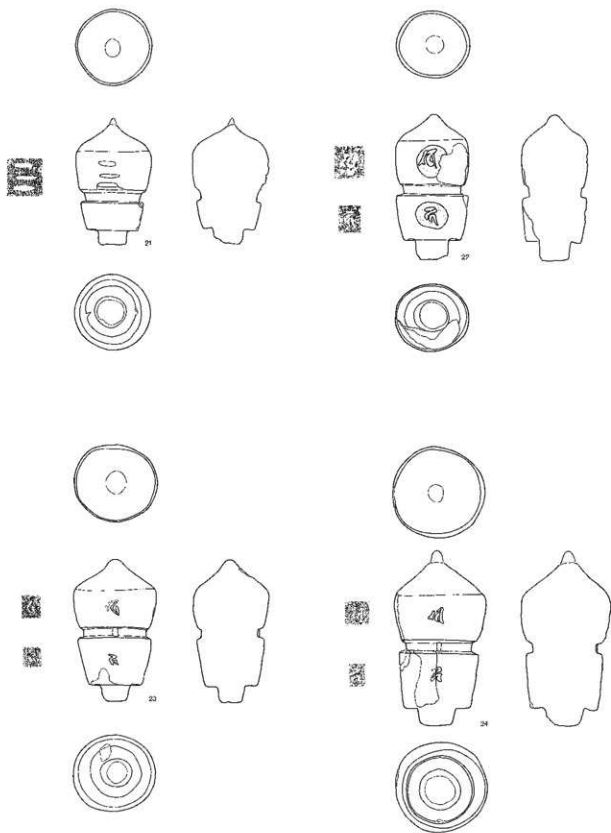


第226图 五輪塔(4)



第227図 五輪塔(5)





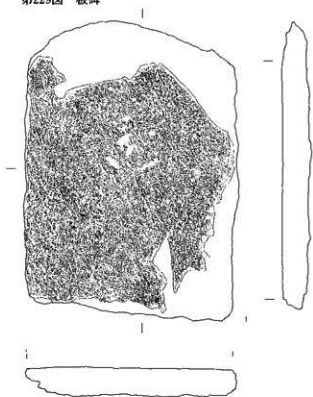
沈線が刻まれている。石材は安山岩で、他のものとは異なる。16～20・22が角閃石安山岩製で、23・24は砂岩製である。水輪部と同様に、形態的には角閃石安山岩製よりも砂岩製の方が新しい様相を示している。

これらの五輪塔では、材質の違いによる新古が認められる。また同一材質の中にも、形態的な変遷を見ることができる。時期は、概ね14世紀後半から15世紀代に比定できる。

板碑 (第229図)

出土した板碑は1点のみである。上端・下方部を欠損し、梵字部周辺のみが残存している。しかし風化が著しく、梵字も不明瞭である。石材は緑泥片岩である。

第229図 板碑



不明土製品 (第230図)

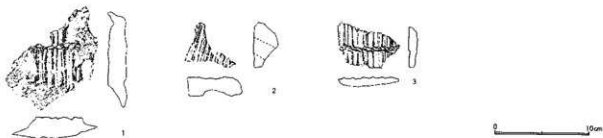
第01号基壇状遺構の周辺から、不明土製品が3点出土している。

表面には圧痕が認められ、円孔が穿たれている。圧痕は裂いた籐様のものを、細い縄で葎簀状に編んだものである。

色調は明褐色で、焼成はきわめて良い。胎土は精選され、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子を微量に含んでいる。

いずれも小破片であり、全体の形状や用途などについては不明である。

第230図 不明土製品



2. 小型宝塔・小型未開敷蓮華の出土状況

5基の小型宝塔と5本の小型未開敷蓮華は、第48号土坑から漆箱に納められた状態で出土した。

周辺のピット群 (第231図)

第48号土坑は、中世寺院関連遺構が集中する区域の北辺に位置している。周囲には、この土坑を囲むように多数のピットが発見されている。

これらのピットの規模は、比較的小さいものである。覆土は、暗茶褐色土系のものが多い。出土遺物はなく、時期を確定する資料に欠ける。

規模や覆土の特徴に着目してこれらのピットを観察しても、その配置に規則性を捉えることは難しい。このような状況から、第48号土坑との関連が予想されるものの、建物跡や欄列等の建造物が存在した可能性はきわめて低い。

第48号土坑 (第232図)

第48号土坑はM-36グリッドに位置し、南西から北東へ下る斜面部に所在している。平面形態は楕円形で、長軸を南北に向けている。規模は、長径0.90m、短径0.70m、深さ0.10mである。壁の立上がりか不明瞭な、レンズ状の掘形である。覆土は茶褐色土で、少量のローム粒子を含んでいた。埋没状況については、薄い堆積層の断面観察のみでは、人為的に埋め戻されたものなのか、自然に堆積したものなのか、明確に捉えることはできなかった。

第48号土坑の中央部には、長方形の範囲にまとまった漆膜が発見された。漆膜の出土状況から、箱状の遺物が推定された。漆膜の長辺は土坑の長軸とほぼ平行し、東辺・西辺が反り上がって、「U」字形に弧を描いていた。漆膜の調査結果についてはV-4で報告するが、当初の推定どおり、長方体の箱を復元することができた。

小型宝塔・小型未開敷蓮華の出土状況 (第232・233図)

漆箱の東辺に沿うように、金銅製小型宝塔が出土している。また漆膜が散乱している北東隅では、漆膜の上面から折損した鉄製小型宝塔の相輪部が見つかった。

金銅製小型宝塔は、扉面を上方に向けた横倒しの状態であった。相輪部を南西に向け、高さは漆膜の上面の高さとはほぼ一致している。

鉄製小型宝塔の相輪部は、鉄銹に覆われた状態で、X線透過観察でも部立を想定することは難しかった。

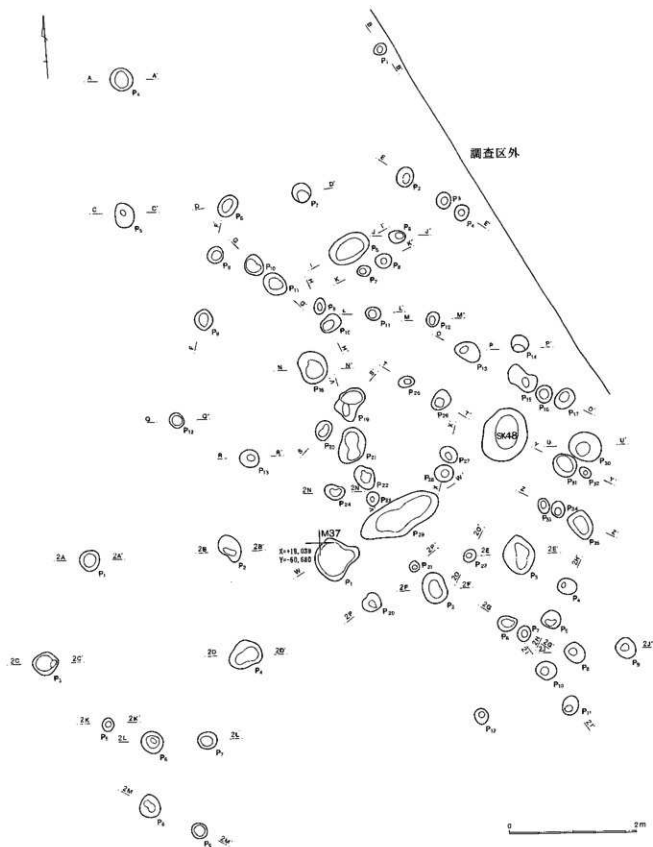
金銅製小型宝塔と鉄製小型宝塔の相輪部を除く、4基の小型宝塔と5本の小型未開敷蓮華は、いずれも漆膜の下から発見されている。このような出土状況から、小型宝塔と小型未開敷蓮華を納めた漆箱が、土坑の中に埋められていたものと推測できる。また、漆箱の外から出土している金銅製小型宝塔も、本来は漆箱の中に納められていたものと考えられる。

漆膜の下から出土した小型宝塔・小型未開敷蓮華は、主に漆膜の範囲の北東側にまとまった状態で発見されている。いずれも埋没中の土圧の影響で、腐朽した漆箱の膜の下へ押し出されたものと想定される。また北東側に集中しているのは、北東方向へ傾斜する地形の影響による可能性もある。

出土レベルに着目すると、比較的重いものが深く、軽いものが浅いという傾向を看取できる。これは土圧によるものと考えられる。また、銀・金銅製の小型未開敷蓮華が比較的離れた位置から出土していることから、重量の軽いものが土圧によって平面方向へも移動させられた可能性もある。

いずれにしても、本来の原位置は保っておらず、漆箱に納められた時点の状態を復元することはきわめて困難である。

第231図 第48号土抗周辺のビット群



L-36Gr (第231図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
04	円形	0.36	0.36	0.09	茶褐色土	Pr226
05	円形	0.38	0.31	0.15	茶褐色土	Pr225
06	円形	0.36	0.28	0.33		Pr216
07	円形	0.31	0.30	0.19		Pr220
08	円形	0.27	0.24	0.18		Pr217
09	方形	0.29	0.28	0.16	暗茶褐色土	Pr221
10	円形	0.32	0.29	0.24		Pr218
11	円形	0.40	0.37	0.57		Pr219
12	方形	0.23	0.21	0.05	暗茶褐色土	Pr316
13	円形	0.30	0.28	0.32	暗茶褐色土	Pr315

M-36Gr (第231図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.22	0.19	0.14		Pr222
02	円形	0.30	0.26	0.20		Pr223
03	円形	0.25	0.23	0.18		Pr224
04	円形	0.26	0.23	0.18		Pr225
05	楕円形	0.26	0.23	0.18		
06	隅丸方形	0.22	0.20	0.26		Pr226
07	円形	0.20	0.17	0.20		Pr228
08	円形	0.25	0.23	0.25		Pr227
09	楕円形	0.23	0.18	0.09	暗茶褐色土	Pr223
10	楕円形	0.34	0.22	0.24		Pr229
11	円形	0.24	0.23	0.09		Pr230
12	円形	0.24	0.21	0.25		Pr231
13	楕円形	0.41	0.28	0.25		Pr236
14	円形	0.29	0.26	0.31		Pr232
15	不整形	0.48	0.24	0.29		Pr233
16	円形	0.27	0.25	0.16		Pr234
17	円形	0.34	0.28	0.45		Pr235
18	不整形	0.49	0.43	0.34		Pr221
19	不整形	0.48	0.35	0.05		Pr239
20	楕円形	0.31	0.26	0.13		Pr240
21	不整形	0.54	0.39	0.49		Pr241
22	楕円形	0.40	0.30	0.37		Pr242
23	円形	0.22	0.21	0.06	暗茶褐色土	Pr320
24	不整形	0.33	0.21	0.19	暗茶褐色土	Pr319
25	円形	0.23	0.18	0.29		Pr238
26	隅丸方形	0.33	0.25	0.27		Pr237
27	円形	0.29	0.24	0.16		Pr243
28	円形	0.30	0.26	0.05		Pr244
29	楕円形	1.34	0.54	0.26		Pr248
30	円形	0.49	0.48	0.27		Pr245
31	円形	0.39	0.36	0.15		Pr246
32	楕円形	0.21	0.15	0.14		Pr247
33	楕円形	0.25	0.18	0.16		Pr249
34	楕円形	0.27	0.20	0.13		Pr250
35	長方形	0.45	0.32	0.29		Pr251

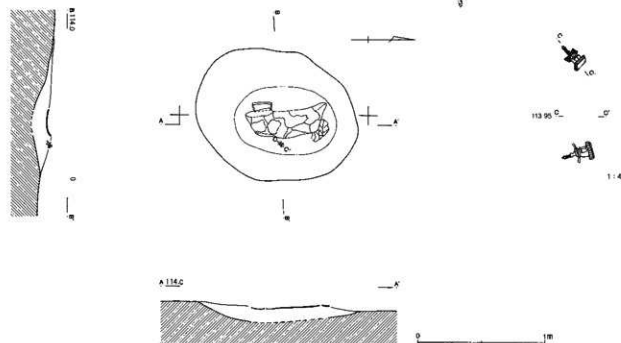
L-37Gr (第231図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	円形	0.34	0.33	0.09	黒褐色土	Pit312
02	不整形	0.43	0.28	0.18		Pit314
03	方形	0.36	0.35	0.20	黒褐色土	Pit311
04	不整形	0.54	0.38	0.10	暗茶褐色土	Pit303
05	円形	0.19	0.19	0.13	茶褐色土	Pit310
06	円形	0.34	0.34	0.31	茶褐色土	Pit309
07	円形	0.30	0.25	0.16	茶褐色土	Pit304
08	円形	0.34	0.33	0.24	茶褐色土	Pit308
09	円形	0.26	0.25	0.03	茶褐色土	Pit307

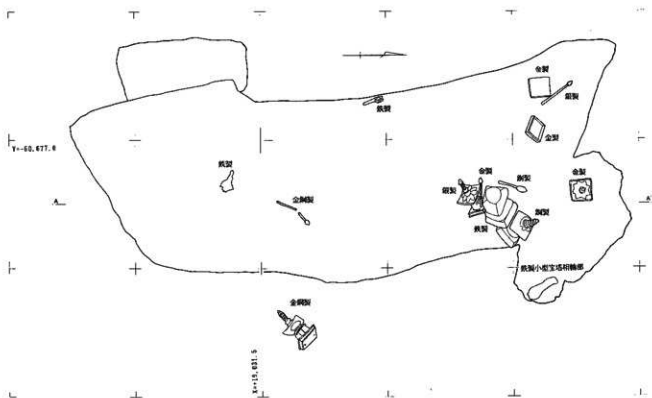
M-37Gr (第231図)

番号	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	覆土	出土遺物・その他
01	不整形	0.71	0.67	0.13	暗茶褐色土	Pit252
02	楕円形	0.49	0.37	0.38	暗茶褐色土	Pit302
03	方形	0.51	0.49	0.30	茶褐色土	Pit301
04	円形	0.28	0.25	0.22	茶褐色土	Pit299
05	円形	0.30	0.29	0.35	暗茶褐色土	Pit297
06	円形	0.28	0.27	0.10	黒褐色土	Pit300
07	円形	0.23	0.21	0.09	茶褐色土	Pit298
08	円形	0.34	0.28	0.41	黒褐色土	Pit295
09	円形	0.33	0.29	0.39	黒褐色土	Pit296
11	円形	0.30	0.27	0.26	黒褐色土	Pit293
20	不整形	0.31	0.28	0.23		Pit253
21	円形	0.16	0.16	0.15		Pit254
22	円形	0.21	0.18	0.10		Pit255

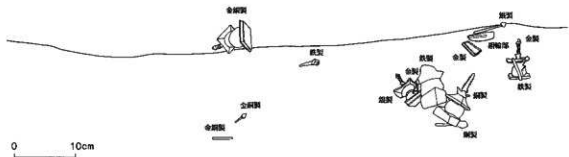
第232図 第48号土坑



第233図 小型宝塔・小型未開敷蓮華出土状況



A113-35



金製小型宝塔は、基壇部の側板と底板がはずれた状態で出土している。ほぼ直立した状態で、鉄製小型未開敷蓮華が付着していた。また扉1枚が分離して、鉄製小型宝塔の鏝中から発見されている。

鉄製小型宝塔の鏝の影響によって、銀製小型宝塔と銅製小型宝塔が鉄製小型宝塔に付着した状態で出土している。いずれも基壇部付近が付着し、鉄製小型宝塔を銀製小型宝塔と銅製小型宝塔が挟み込んでいる。ま

た銀製小型宝塔と鉄製小型宝塔の間から金製小型未開敷蓮華が、鉄製小型宝塔のやや下方からは銅製小型未開敷蓮華が検出されている。

銀製小型未開敷蓮華は、唯一、漆膜に挟まった状態で出土している。金銅製小型未開敷蓮華は、中央部で2片に折れていた。鉄製小型未開敷蓮華も2片に折れ、花柄部が金製小型宝塔に付着した状態で出土している。

3. 小型宝塔等の取り上げと保存処理

(1) 経緯

第48号土坑から金銅製小型宝塔とともに出土した漆箱は、全く形状をとどめることなく、漆膜のみが層状に重なっている状態であった。このような状態にある漆膜の詳細な調査や原形復元、漆膜の保存管理などは、現場では不可能と思われた。そこで、周辺の上とともに現状のまま取り上げ、保存処理の過程で精査を行うことになった。

保存処理は、次のような手順で行った。

- ①漆箱の現場取り上げ
 - ②漆箱の内部調査
 - ③漆膜の取り上げ
 - ④小型宝塔類の取り上げ
 - ⑤小型宝塔類の保存処理
- 以下その概要を報告する。

(2) 漆箱の現場取り上げ

第48号土坑は斜面地であって、長辺90cm、短辺70cmの楕円形で、深さは約10cmである。

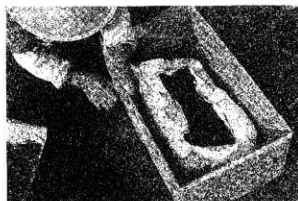
漆箱は、そのまま中央から出土している。漆膜は、約40cm×20cmの方形の範囲内に散乱しており、木胎部は既に腐朽し、漆膜だけが層状に重なっていた。土坑の堆積土は黒褐色の軟質土である。

取り上げに際しては、まず、漆膜の散乱する範囲のみを柱状に残し、それ以外の遺構堆積土を掘り除いた(第234図)。また、漆膜下部の堆積土が軟弱なため、アクリル樹脂溶液(バラロイド B72 10%キシレン溶液)を用いて漆膜とともに固定した。その後、周囲のみを発泡ウレタン(大日本インキ製ハイブックス RP96, SP1225)で覆い、下部にプラスチックプレート挿入して遺構から切り離れた。さらに、プラスチックプレートの下に角材を渡して底上げし、下部及

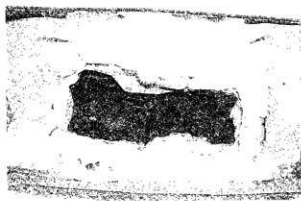
第234図 漆箱出土状況



第235図 漆箱の取り上げ



第236図 取り上げ後の漆箱



第237図 漆箱内部(X線写真横断から)



び周囲に再度発泡ウレタンを流し込んで全体を包み込んだ(第235・236図)。これにより、層状に重なった漆膜及びそれに伴う遺構堆積土が、出土時のまま保護され、移動可能となった。

なお、取り上げ後の土坑底部には、遺物は確認されなかった。

(3) 漆箱の内部調査

漆箱の内部調査は、漆箱の形状崩壊の状況と、内容物の確認のため、X線透過撮影によって行った。漆箱は、取り上げた状態のままで、真上方向及び横方向から内部観察ができるようにX線を照射した。今回のX線透過撮影等の条件は、次のとおりである。

使用装置	ソフテックス M-150W	
管電圧	90~150kvp	
管電流	2 mA	
照射時間	1分	
照射距離	80cm	
フィルム	フジ I X 100	
現像	フジ レンドール	20℃ 5分
	フジ レンフィックス	20℃ 8分

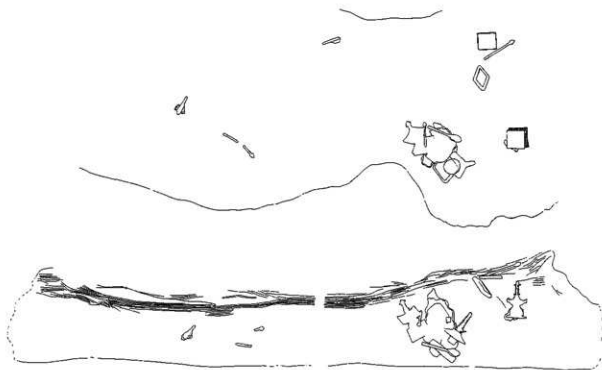
調査の結果、漆膜の重なり状況が、ほぼ確認できた。また、新たに漆箱の内容物と考えられる小型宝塔4基と未開の蓮華を表現したような特異な形状の製品(以下小型未開蓮華)を5点確認した。

漆膜は、表面から約2cm(X線フィルム上で計測)ほどの深さの範囲内に層状に重なり、漆箱の形状は、完全に失われていた(第237・238図)。ただ、中央部が陥没したような状況が看取されることから、木胎部の腐朽に伴って箱の空間部へ漆膜が落ち込んだことを想定することが可能である。

また、新たに発見された小型宝塔などの製品のほとんどは、層状に重なる漆膜の下に確認され、漆箱に完全に納まった状態ではないことが分かった(第238図)。したがって、漆箱埋没段階では、漆箱の下にもなんらかの空隙があって、箱の腐朽に伴い、上からの土圧によって内容物が箱外(下側)へ押し出された可能性がある。

内部調査によって確認された小型宝塔などの製品は、漆膜の散乱範囲の右隅(現場では北側)に集中して確認された。小型宝塔の形状は、先に出土した金銅製小

第238図 漆箱内部状況(X線写真から作図)



型宝塔に類似するもの2基と、それより大型で、形状も異なるものが2基である。その中には、部位が分離しているものや、宝塔同士が互いに付着している可能性のあるものが存在することを確認した。

(4) 塗膜の取り上げ

X線による内部調査で、塗膜のほとんどが表面から約2cmの深さで層状に重なっていることがわかった。このような状況からは、どの塗膜が箱のどの部分に相当するかは非常に分かりにくくなっているはずである。そこで、取り上げにあたっては、塗膜の重なり順や位置を真上からの写真撮影によって詳細に記録した。

取り上げ方法は、便宜的に上から第1層、第2層という具合に呼称し、一層ずつ取り上げた。

取り上げに係る作業方法は、まず、不用ななどを竹箒や筆を使って落し、薄い和紙(雁皮紙)を塗膜に貼り付け(小麦粉糊)、乾くのを待って取り上げた(第239・240図)。取り上げた塗膜は、洗浄してガラス板に挟み込んで保管した(第241図)。

この方法で取り上げた塗膜は、第1層から第5層までである。

第6層及び第7層は、折損した塗膜が不規則に散乱した状態であったため、可能な限り番号を付し、位置を記録して取り上げた。6層と7層の塗膜の保管は、密閉容器に水分を含ませたガーゼを敷き、そこへ保管した。

(5) 小型宝塔及び小型未開敷蓮華の取り上げ

金銅製小型宝塔は、既に現場で漆箱と同時に箱外から出土している。また、鉄製小型宝塔の相輪部も、塗膜の上から発見され、現場で取り上げられている。

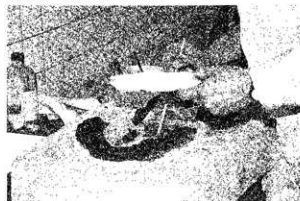
X線による内部調査で確認された小型宝塔及び小型未開敷蓮華は、銀製の小型未開敷蓮華を除き、層状に重なる塗膜下の土中に存在し、塗膜の取り上げ後に取り出した。取り上げ方法は、X線写真を参考にして、竹箒等で土を取り除いていく方法を取り、特別な方法は用いていない。

銀製小型未開敷蓮華は、塗膜第7層調査時に、塗膜に挟まれた状態で出土した。保存状態は良好であるが、表面がやや黒色を呈していた。

金製小型宝塔は、基壇の一部と扉が一枚外れて出土した。扉は、鉄製小型宝塔の銹中に取り込まれていることが、X線による内部調査で確認されている。

銀製、銅製、鉄製小型宝塔は、鉄銹によって互いに付着して出土した。金製及び銅製の小型未開敷蓮華は、そのごく近い位置から出土した。

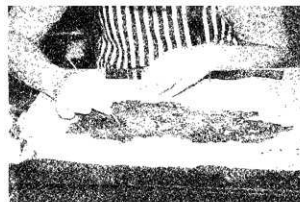
第239図 塗膜取り上げ作業



第240図 和紙による裏打ち



第241図 塗膜の洗浄



金銅製小型未開敷蓮華及び鉄製小型未開敷蓮華の一部は、漆膜散乱範囲下部のほぼ中央から出土した。

(6) 小型宝塔及び小型未開敷蓮華の保存処理

今回出土した漆箱に関連する資料は、小型宝塔5基と小型未開敷蓮華5本である。5基の小型宝塔は、それぞれ材質が異なり、金製、銀製、銅製、金銅製、鉄製である。また、小型未開敷蓮華も同様な材質構成を成し、小型宝塔と材質ごとに対となる。

材質についての分析は、東京国立文化財研究所の御協力により、蛍光X線分析によって行われた。その詳細は、付編で報告している。

構造調査は、東京国立文化財研究所において、γ線による透過撮影を実施したほかは、専ら埼玉県立埋蔵文化財センター設置のX線照射装置で、複数の方向から透過撮影を実施した。構造についての詳細は、V-5で報告している。

各資料の保存処理(第242図)は、実測図作成、科学分析、写真撮影、構造調査などの前、あるいは並行して実施したため、出土時の状況をなるべく変えることなく、応急的な保存処理に止めた。したがって、クリーニング作業を主にし、合成樹脂を用いる場合には、取り外しの容易な樹脂(バラロイドB72)を用いた。処理後は、アクリル製のケース内に乾燥剤と共に保管した。

以下、各資料の保存処理について報告する。

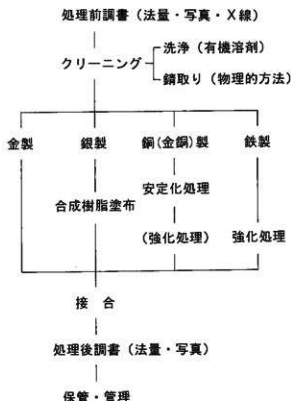
金製小型宝塔(第243～245図)

基壇部底板、側板及び扉一枚が分離して出土した。本体部には、鉄製の小型未開敷蓮華の一部が付着し、その腐食による鉄錆が塔身を中心に付着していた。分離した扉一枚は、鉄製小型宝塔の錆中に取り込まれていることが、X線写真で確認された。

材質は、金が約90%、銀が約10%の組成で、鍍金ではなく金製である。

保存処理は、まず、本体に付着した鉄製小型未開敷蓮華を取り外し、それに伴う鉄錆を除去した。鉄錆の

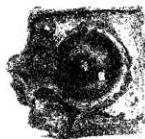
第242図 保存処理工程



第243図 金製小型宝塔(処理前)



第244図 金製小型宝塔本体底部



除去には、キシレンで洗浄しながら、竹串などで弾き飛ばすように除去した。分離して出土した部位は、キシレンで洗浄したのみで、付着した上や汚れを除去できた。また、鉄製小型宝塔の鏽中にある扉については、X線写真をみながら、その部分を切り出し、小型グラインダー（モニター C250）やカッターナイフを用いて実体顕微鏡下で取り出した。

合成樹脂による強化処理は行っていない。

分離した部位の接合は、細部観察の結果、鉄や銅付けの形跡が無いことから、はめ込んで、外から若干押さえることで接合した。そのため、接着剤は一切使用していない。扉についても、軸部をほぞ穴に指し込む構造であったため、それに従った。

銀製小型宝塔（第246～248図）

基壇下部が鉄製小型宝塔の基壇上面と塔身部に強固に付着して出土した。付着部分のX線写真では、鉄製小型宝塔の地金付近まで達して付着していることが観察された。また、基壇下部には鉄鏽が厚く付着していた。宝塔自体の保存状態は良好で、折損箇所無く、表面の黒色化も全く見られなかった。

蛍光X線分析の結果では、銀が約95%を占めることが分かった。

出土時の応急処理としては、出土直後から合成樹脂（パラロイド B72キシレン溶液）を塗布し、表面に樹脂被膜をつくり、表面の黒色化を防ぐようにした。

鉄製小型宝塔からの分離作業は、小型グラインダーに微小なダイヤモンドバー（モニター Z501, Z437）を取付け、鉄製小型宝塔側を局部的に切削して分離した。作業は、X線写真をみながら実体顕微鏡下で行った。

分離後の基壇下部には、まだ鉄鏽が厚く強固に付着していたため、実体顕微鏡下で、グラインダー、カッターナイフ、竹串などを用いて慎重に除去した。洗浄には、キシレンを使用し、洗浄後は、パラロイド B72キシレン溶液を塗布した。

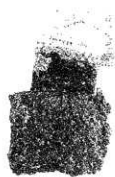
第245図 鉄鏽中の金製小型宝塔扉



第246図 銅・鉄・銀製小型宝塔（X線写真）



第247図 銀・鉄製小型宝塔付着部



第248図 銀・鉄製小型宝塔（X線写真上から）



銅製小型宝塔 (第249・250図)

鉄製小型宝塔に付着して出土した。鉄製小型宝塔との付着部及びその周辺には、鉄錆が付着し、塔身部及び基壇部の約3分の2は、茶褐色を呈していた。完形ではあるが、笠部と塔身部の接合部（ほぞ差し）が若干浮いており、全体として傾いた状態である。

蛍光X線分析の結果では、銅が約97%を占め、純銅に近い。

鉄製小型宝塔からの分離は、付着部の土や鉄錆を除去することで、比較的容易に分離することができた。本体に付着した鉄錆は、分離後、カッターナイフや竹串などで極力除去した。洗浄にはエチルアルコールを用いた。

また、安定化処理として、ベンゾトリアゾール2%エチルアルコール溶液中に常圧下で約24時間浸し込んだ後乾燥した。

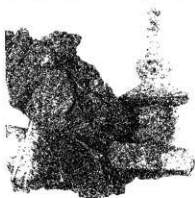
合成樹脂の含浸は行っていない。

金銅製小型宝塔 (第251・252図)

漆箱外から相輪部を折損して出土した。基壇部と塔身部及び屋蓋部と塔身部の接合部にずれが生じているため、各部の方向が一定していない。全体に素地の銅から発生する錆に覆われ、部分的に鍍金が観察できるに過ぎない。実体顕微鏡による細部の観察では、蒔花と伏鉢、扉、長押は、銀色を呈していた。蛍光X線分析からも、これらの部分からは他部に比して銀が多く検出されており、これらの部分が銀鍍あるいは銀鍍金である可能性が高い。

扉を開いての塔身内部の観察では、塔身内面にも鍍金されていることが分かった。また、厚さ2.8mm程の円柱形をした木片が発見された。木片の一方の面には、金箔あるいは金泥が施された痕跡が認められ、部分的に金が残存していた。おそらく、塔身部と基壇部の接合部に製作段階で組み込まれたものが収縮して外れているものと思われる。本来は、宝塔内陣の床の機能をなし、扉を開いた時に見える面のみに金を施したものと考えられる。

第249図 銅製小型宝塔 (処理前)



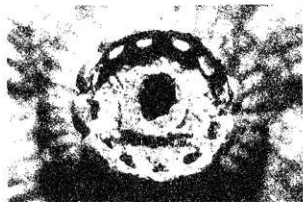
第250図 銅製小型宝塔鉄錆付着部



第251図 金銅製小型宝塔 (処理前)



第252図 金銅製小型宝塔相輪折損部



保存処理は、表面に付着した土や汚れを除去し、銅錆は、物理的方法で若干除去した。化学的方法による積極的な錆の除去は、現段階では行っていない。洗浄はエチルアルコールを用いた。

銅素地の安定化処理及び合成樹脂含浸による強化処理は、内部に存在する木片をも考慮し、現段階では行っていない。

相輪部の接合は、セルロース系接着剤（セメダインC）で行った。

鉄製小型宝塔（第253図）

陶器に銀製及び銅製小型宝塔が付着して出土した。腐食は著しく、赤褐色の錆が全体を覆い、外観からは宝塔の形状は不明瞭であった。本来の形状は、X線写真によってかろうじて把握できるに過ぎないが、地金は比較的よく残存しており、基壇部、塔身部、笠部は確認できる。また、漆箱出土段階で、漆膜上面から相輪部が出土しており、宝塔の形態を持つものであることが判明した。

内部構造は不明で、幾つかの部位を組み合わせて作成されたものか、容器の機能を持つものかなどの点は分かっていない。

成分分析は行っていない。

洗浄は、エチルアルコールを用い、不用な錆は、ニッパーや竹串、エアブレイシブで除去した。

強化処理は、パラロイド B72の10%キシレン溶液を薄土含浸した。

金製小型未開敷蓮華（第254図）

銀製小型宝塔と鉄製小型宝塔の間から出土した。茎部には、鉄製小型宝塔からのものと思われる鉄錆が付着していた。

付着した土や汚れ、鉄錆は、エチルアルコールでの洗浄と同時に竹串等で除去した。

第253図 鉄製小型宝塔切削部



第254図 金・銅製小型未開敷蓮華出土状況



第255図 銀製小型未開敷蓮華出土状況



第256図 金銅製小型未開敷蓮華出土状況



銀製小型未開敷蓮華 (第255図)

漆膜散乱範囲の端、第7B層の漆膜片に挟まれた状態で出土した。銀製小型宝塔と成分組成はほぼ一致するが、表面が若干黒色化していた。

表面に付着した土や汚れは、キシレンでの洗浄と同時に竹串等で除去した。また、表面の酸化を防ぐため、パラロイド B72キシレン溶液を塗布し、樹脂被膜をつくった。

銅製小型未開敷蓮華 (第254図)

鉄製小型宝塔のやや下から出土した。全体を鉄錆の影響から、黒褐色を呈していた。蕾部の形りは浅く、黒褐色の錆層を除去すると、形りが不明瞭になることが予想されたため、クリーニングは土や汚れの除去のみに止めた。

安定化処理は、ベンゾトリアゾール2%エチルアルコール溶液中に常圧下で約2時間浸し込み、その後乾燥した。

金銅製小型未開敷蓮華 (第256図)

漆膜散乱範囲下部のほぼ中央から2片に折損して出土した。全体を素地の銅からの錆が覆い、特に蕾部が顕著であった。銅地の状態は、良好とは言えず、鍍金

層の剥落が危惧された。

土、汚れ、銅錆の除去は、エチルアルコールでの洗浄と同時に物理的方法で行った。

安定化処理は、ベンゾトリアゾール2%エチルアルコール溶液中に常圧で約2時間浸し込み、乾燥した。また、鍍金層の剥落防止と素地の強化のため、パラロイド B72の10%キシレン溶液を含浸した。

2片の接合は、接合面が少ないため、接合後の強度を考慮しエポキシ系接着剤(セメダインハイスーパー)で行った。

鉄製小型未開敷蓮華

蕾部が漆膜散乱範囲下部のほぼ中央から、茎部が金製小型宝塔の塔身部に付着して出土した。本来は、蓮の蕾の表現があったものと思われるが、腐食のため観察できない。保存状態は悪く、脆弱であった。

クリーニングは、主にエアブレイシブを使用して不用な錆を除去した。

強化処理は、パラロイド B72の10%キシレン溶液を減圧下で含浸した。

接合は、エポキシ系接着剤(セメダインハイスーパー)で行った。

保存処理資料一覧

名 称	高さ(全長) (cm)	処理前重量 (g)	処理後重量 (g)	使用薬剤		
				洗 浄	安定化処理	強化処理
金製小型宝塔	3.46	12.18	11.41	キシレン	—	—
銀製小型宝塔	3.69	12.42	11.85	キシレン	—	(パラロイド B72)
銅製小型宝塔	4.46	17.94	17.63	エチルアルコール	BTA2%	—
金銅製小型宝塔	3.60	12.60	12.60	エチルアルコール	—	—
鉄製小型宝塔	4.44	54.02	54.02	エチルアルコール	—	パラロイド B72
金製小型未開敷蓮華	3.07	1.13	1.13	エチルアルコール	—	—
銀製小型未開敷蓮華	3.75	0.79	1.27	キシレン	—	—
銅製小型未開敷蓮華	3.56	3.01	3.03	エチルアルコール	BTA2%	—
金銅製小型未開敷蓮華	3.16	0.44	0.44	エチルアルコール	BTA2%	パラロイド B72
鉄製小型未開敷蓮華	3.70	1.04	1.27	エチルアルコール	—	パラロイド B72

4. 漆箱の調査

(1) 調査の概要

漆膜は、層状に重なった状態で、約40cm×20cmのほぼ方形の範囲内にまとまって出土した。木胎部は、腐朽して無くなっているため、塗漆層と漆下地及び木胎部の木質が薄く残存して一層分の漆膜になっている。漆膜のほとんどは、折損して不定形を成し、箱の原形をとどめる状態ではない。

なお、発泡ウレタンによる取り上げ範囲は、約45cm×20cmの中央部に挟まれた長方形の範囲である。

調査は、上から一層ずつ取り上げ、層ごとに出土位置を記録した。層名は、上から便宜的に、第1層、第2層という具合に層名称を付けて取り上げた。現場調査時に、最上部あるいは周辺に散乱していた漆膜小片は、上層散乱漆膜として一括して扱った。

分層して取り上げた漆膜は、第1層から第7層である。第1層から第5層までは、分層が比較的容易で、ある程度の面積を有する。第6層及び第7層は、小断片の不規則な集合で、可能な限り番号を付けて取り上げた。第6層と第7層の分層の根拠は、比較的面积が大きく、塗漆面を上にして出土した断片を第6層とし、それより下層を全て第7層とした。第7層漆膜の塗漆面の向きは、上下混在である。また、第7層は、漆膜

の出土位置によって、A～Dの区分けを行って取り上げた。

取り上げた漆膜は、微小片（面積にして約1cm以下）を除いて、方眼紙に写し、面積を計測した。実測図は、第1層から第5層までの平面図、上層散乱漆膜及び第6層、第7層は、漆箱の原形推定に有効と思われる漆膜のみ図示した。また、木質が残存する漆膜が多く、布着せの有無は、外からの目視では判断できないことから、X線透過写真（25～30kvp, 2mA, 2mm）を撮影し、布着せの有無とその範囲を判断した。

なお、漆膜の漆の塗られた面を塗漆面、漆下地あるいは木質が残存する面を木質面と呼称する。

(2) 各層の調査

上層散乱漆膜（第257図1～12）

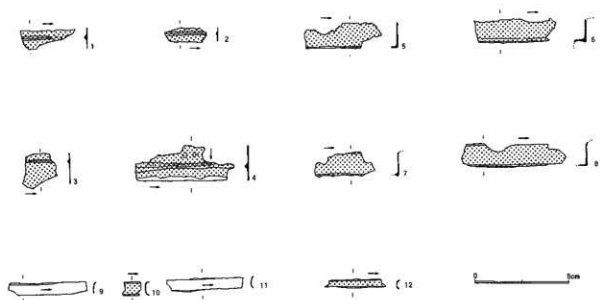
最上層を覆っていた小断片及び現場で取り上げられた小断片の一括である。漆箱原形推定に有用な漆膜は、12片である。

1～4（木質面図示）は、木質面側に断面三角形または半円形の突出部を筋状に有する。突出部の高さ、幅は一定していない。板面調整のための漆コクソ（木

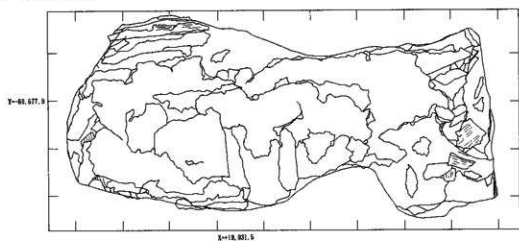
漆膜層別一覧表

層番号	出土区	出土時の塗漆面	破片数	総面積(㎡)	備考
上層散乱	—	上下混在	325	430.68	現場出土時散乱漆膜一括
1	—	下	1	63.07	
2	—	上	1	87.62	
3	—	下	1	158.36	
4	—	上	1	426.43	
5	—	下	1	421.13	箱原形復元に有効
6	—	上	16	414.70	箱細部の特徴を示す漆膜あり
7	7A	上下混在	375	1470.49	箱細部の特徴を示す漆膜あり
	7B	上下混在	98	356.15	宝塔集中個所上部漆膜
	7C	上下混在	42	163.58	立った状態で出土
	7D	上下混在	162	132.23	宝塔取り出し時に取り上げ
合	計		1023	4124.44	約1cm以下の漆膜は除く

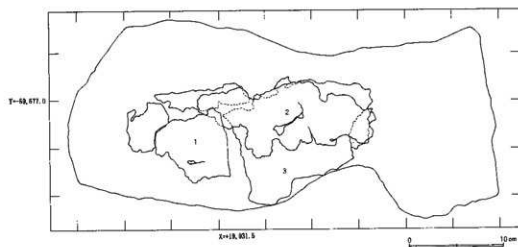
第257図 上層散乱漆膜



第258図 漆膜出土状況



第259図 第1～3層出土状況



層、刻字)と思われる。塗漆面は平滑で、膜厚は概ね0.5mm前後であり、布着せがある。

5～8(塗漆面図示)は、塗漆側にはほぼ直角に折れる部分を持ち、断面形は段状となる。箱身の立ち上がり部に相当する漆膜と考えられる。膜厚は0.5mm前後で、布着せがある。

9～12(塗漆面図示)は、長方形の小断片で、長辺両端部が僅かに木質面側に折れる。おそらく、箱身または蓋の先端部に相当すると思われ、箱板の厚みを判断するのに有用で、10が5mm、12が4mmである。布着せは、10及び12のみに確認され、その他は、漆下地と共に剝落している。本来は、あった可能性が高い。

第1層～第3層(第259図・第260図1～3)

第1層から第3層は、漆箱取り上げ範囲のほぼ中央から重なって出土した。

第1層(第260図1)は、木質面を上にして出土し、埋没後あるいは出土後に位置を移動した可能性がある。塗漆面積は63.07cm²である。木質は若干残存するが、布着せが目視で観察でき、全面に施されている。膜厚

は0.7mm前後である。

第2層(第260図2)は、塗漆面を上にして出土し、塗漆面積は、87.62cm²である。布着せは、全面に認められる。膜厚は0.8mm前後である。

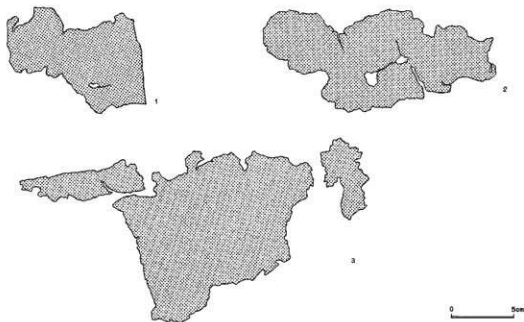
第3層(第260図3)は、木質面を上にして出土し、同時に取り上げた小断片を含めた塗漆面積は、158.36cm²である。布着せは、全面に認められ、膜厚は0.8mm前後である。

第4層・第5層(第261・262図)

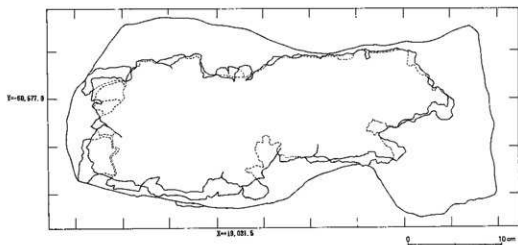
第4層及び第5層は、出土塗漆中最も面積が大きく遺存状態が良好な漆膜である。出土状態は、第4層が塗漆面を上向き、第5層が塗漆面を下向きにして出土し、互いに木質面を合わせた状態である。大きさ、形状もほぼ一致することから、この2片により箱板一枚分を構成していたものと思われる。漆箱取り上げ範囲の左側(現場では南)で状態がよく、右側(現場では北側)は、かなり破損している。

第4層(第262図1)は、最大長38.5cm、最大幅16.4cmで、塗漆面積は、426.43cm²である。布着せは、全面に認められ、膜厚は0.8mm前後である。

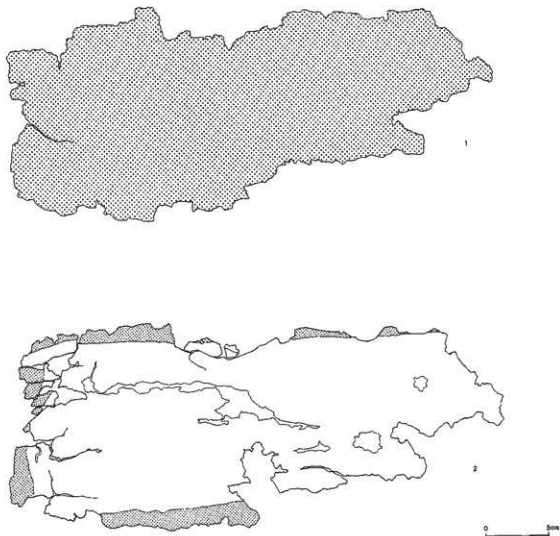
第260図 第1～3層漆膜



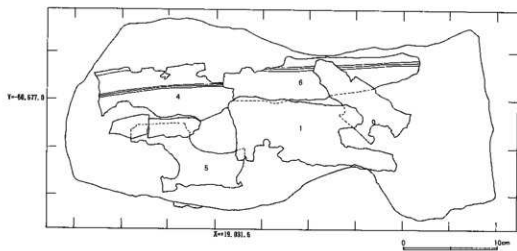
第261图 第4・5層出土状況



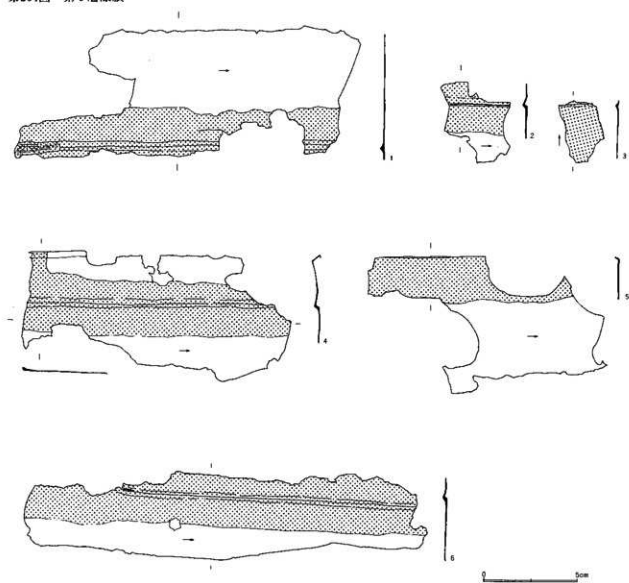
第262图 第4・5層漆膜



第263图 第6層出土狀況



第264图 第6層漆膜



第5層(第262図2)は、最大長39.0cm、最大幅16.0cmで、塗漆面積は、421.13cm²である。布着せは、縁辺部だけに認められ、長辺両端部と短辺のうちの一辺に幅10～18mm程で確認できる。

第6層(第263・264図)

第6層は、第5層の直下から出土し、塗漆面が上向きの一層である。折損した漆膜の不規則な重なりで、平面の板(甲板または底板)以外に側面の板からの漆膜も混在している可能性がある。断片数は、16片で、そのうち図示したものは、6片である(第264図1～6)。

1(木質面図示)は、木質面側に幅4.3mm、高さ2.4mmの断面三角形の突出部を筋状に有し、漆コクソと思われる。布着せは、帯状に認められる。塗漆面は平滑で、膜厚は0.5mm前後である。残存する木質の木目は、漆コクソの方向に対して平行である。

2(塗漆面図示)は、塗漆面側に僅かな段差が直線的に認められ、木質面側も、それにならって段状となる。布着せは、帯状に施されていると思われる。4～6(塗漆面図示)も同様なタイプの漆膜である。残存する木質の木目方向は、段が延びる方向に対して平行である。そのうち4については、長辺端部が木質面側に鍵状に折れる部分があり、布着せもその部分は変形的である。また、左短辺の端部が塗漆面側に僅かに立ち上がって折損している。

3(塗漆面図示)は、残存する木質の木目に直行する方向に僅かな稜線が認められる。あるいは、4の短辺端部にみられる部分に共通するものかもしれない。

2から6の膜厚は、概ね0.5mm前後であるが、布着せの無い部分は、やや薄い。

第7層(第265～268図)

第7層は、第6層の下から出土した漆膜一括である。小断片の不規則な集合で、漆箱取り上げ範囲全体に散乱しているが、左側(現場では南)がより密である。塗漆面の出土時の向きも上下混在で一定していない。第6層と同様、箱の平面をなす板(甲板または底板)

からの漆膜と側板からの漆膜が混在しているものと思われる。なお、漆箱取り上げ範囲左上隅(現場では南西)に立った状態で確認された漆膜の一層も第7層とした。

第7層漆膜の重なりや上下関係を正確に判断するのは困難で、その出土位置によって便宜的に7A～7Dという範囲に区切って取り上げた。7A層は、漆膜が最も密に分布する左側から中央にかけて出土した漆膜の一層である。7B層は、取り上げ範囲の右側、すなわち宝塔類が多く内在する箇所を覆う漆膜の一層である。7C層は、取り上げ範囲の左上隅に立った状態で出土した漆膜の一層である。7D層は、宝塔類の取り出し時に下部の土中から出土した漆膜の一括である。第7層全体の総断片数(面積1cm²以下除く)は、677片である。このうちで図示した漆膜は、29片(第267図1・2、第268図1～27)である。図示した主要な漆膜のみの出土位置をみると、漆箱取り上げ範囲の縁辺部に多く出土している(第266図)。

7A層(第267図・第268図1～17)

7A層は、漆箱取り上げ範囲の左側(現場では南)から中央にかけて出土した漆膜の一層で、総断片数は375片である。そのうち図示したものは、19片である。

第267図の1・2は、7A層のうち比較的面積の大きい漆膜である。

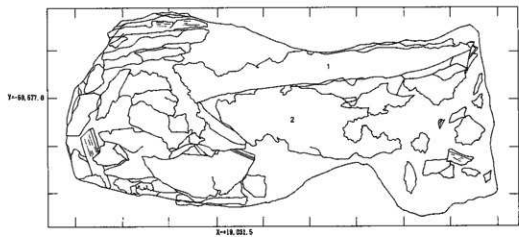
1(塗漆面図示)は、7A層で最も上から出土し、塗漆面は、下向きである。塗漆面積は、86.81cm²で、布着せは端部に若干認められる。膜厚は、0.5mm前後である。

2(塗漆面図示)は、塗漆面を下にして出土し、塗漆面積は、135.22cm²である。長辺の端部が僅かに立ち上がり、その部分で折損する。端部手前が僅かに盛り上がるが、おそらく変形であろう。布着せは、帯状である。膜厚は、0.5mm前後である。

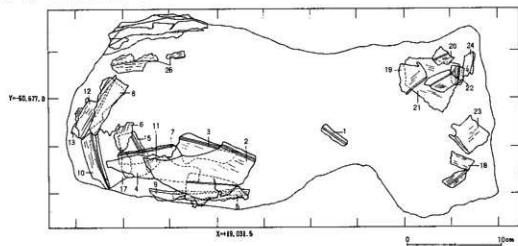
その他の7A層は、第268図の1～17である。

1(塗漆面図示)は、塗漆面に筋状の段を有するタイプである。布着せがあり、残存する木質の木目方向

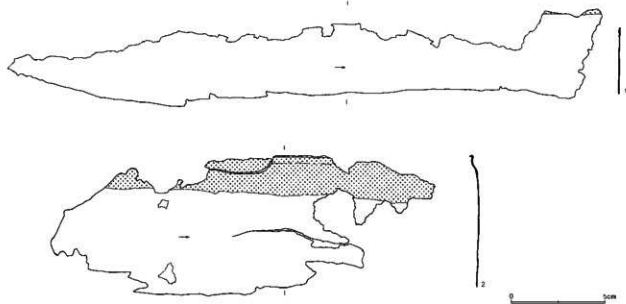
第265図 第7層出土状況

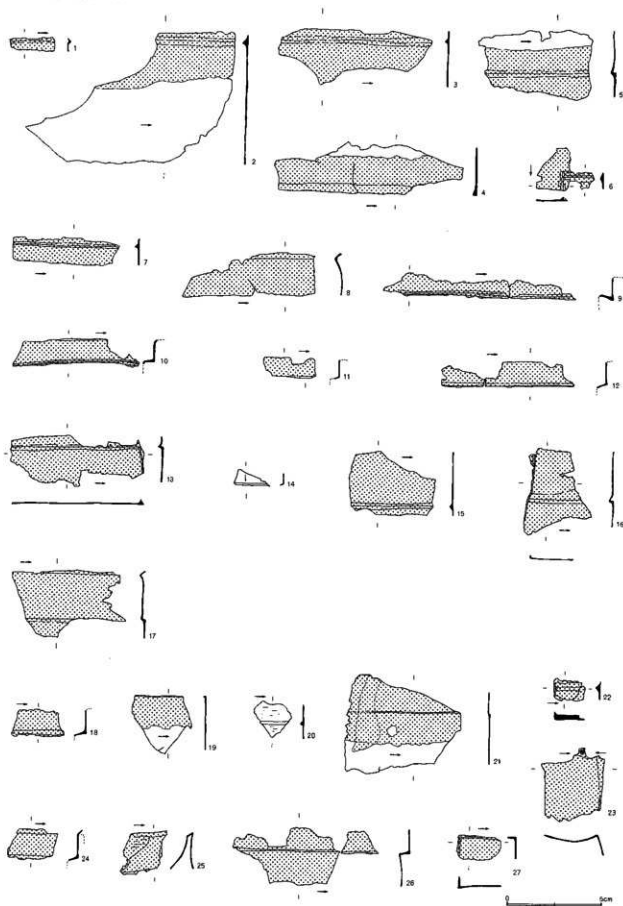


第266図 第7層主要漆膜出土状況



第267図 第7層漆膜(1)





は、段の延びる方向に対して平行である。膜厚は0.4mmである。

2-4 (木質面図示) は、木質面側に断面三角形の漆コクソを有するタイプで、布着せは、帯状と思われる。7と15 (木質面図示) も同様なタイプの漆膜である。残存する木質の木目方向は、いずれも漆コクソの方向に対して平行である。膜厚は、概ね0.5~0.6mmである。

5、13、16、17 (塗漆面図示) は、1と同様、塗漆面に段を筋状に有するタイプで、布着せが認められる。残存する木質の木目方向は、段の延びる方向に対して平行であるが、13及び16は、木目に直行する方向にも僅かな立ち上がりが認められる。また、17は、端部が木質面側へ折れ、第6層の例(第264図4)と共通するものである。膜厚は、0.4~0.7mmの範囲である。

6 (木質面図示) は、木質面側に断面三角形の漆コクソをもち、2のようなタイプに属するが、漆コクソが二方向に認められる例である。膜厚は、0.6mmである。

8 (塗漆面図示) は、端部が木質面側へ折れ、布着せがある。17のようなタイプの一部分である可能性がある。膜厚は、0.5mmである。

9~12 (塗漆面図示) は、上層散乱漆膜にある例(第257図5~8)と同類であり、箱身の立ち上がり部に相当すると思われる。布着せは、いずれの漆膜にも認められる。膜厚は、0.4~0.8mmである。

14 (塗漆面図示) は、塗漆面側に折れる部分をもつ小片で、布着せは無い。残存する木質の木目方向は、折線に対して直行である。

7B層 (第268図18~24)

7B層は、漆箱取り上げ範囲の右隅(現場では北)から出土した漆膜で、断片数は、98片である。そのうち図示したものは、7片である。

18と24 (塗漆面図示) は、箱身の立ち上がり部に相当する漆膜で、布着せがある。膜厚は、共に0.6mm

である。

19と21 (塗漆面図示) は、塗漆面側に筋状に段を有するタイプである。19は、その段の部分で折損したものとと思われる。21は、その段部が明瞭ではなく、途中で平滑となる。布着せは、両者とも認められるが、21では、布の継ぎ目と考えられる部分がある。膜厚は、0.4~0.6mmである。

20と22 (木質面図示) は、漆コクソを有するタイプであるが、22はしっかりと断面三角形であるのに対し、20は断面半円形で、非常に小さい。布着せは、22に認められ、20には無い。膜厚は、共に0.6mmである。

23 (塗漆面図示) は、端部が木質面側にはほぼ直角に大きく折れる。残存する木質の木目方向は、折線に対して直行方向であり、箱板の木取りを考えると、箱身または蓋の側板外面の接合部(コーナー部)に相当する漆膜である可能性が高い。布着せがあり、膜厚は0.6mmである。

7C層 (第268図25-26)

7C層の断片数は、42片で、そのうち図示したのは、25及び26 (塗漆面図示) の2片である。

25は、変形してはいるものの、上層散乱漆膜の例(第257図9~12)と同類と考えられ、箱板の厚さを推定するのに有用である。これから推測する板厚は、約4mmである。布着せがあり、膜厚は0.6mmである。

26は、箱身の立ち上がり部に相当し、布着せがある。膜厚は0.6mmである。

7D層 (第268図27)

7D層の断片数は、162片あるが、いずれも小片で、図示したものは27 (塗漆面図示) の1片のみである。27は、二辺に塗漆面側への立ち上がりがあり、箱板三枚の接合部分と思われる。塗漆面側へ立ち上がりをもつことから、箱身内面の隅かまたは蓋内面の隅と考えられる。布着せは全面にあり、膜厚は0.6mmである。

漆膜観察表

層	挿入番号	取り上げ番号	出土時の 漆面の向き	塗漆面積 (cm ²)	膜 厚 (mm)	布着せ	備 考
上層散乱	257-1	0-3	—	1.89	0.4	○	
	-2	0-4	—	1.41	0.4	○	
	-3	0-6	—	2.27	0.5	○	
	-4	0-2	—	6.98	0.5	○	
	-5	0-1	—	4.01	0.6	○	
	-6	0-7	—	3.84	0.4~0.6	○	立ち上り部
	-7	0-8	—	2.60	0.5	○	立ち上り部
	-8	0-9	—	5.21	0.5	○	立ち上り部
	-9	0-11	—	2.34	0.3	—	
	-10	0-10	—	0.60	0.5	○	
	-11	0-5	—	2.02	0.3	—	
	-12	0-12	—	1.08	0.5	○	
1	260-1	1	下向き	63.07	0.7	○	
2	260-2	2	上向き	87.62	0.8	○	
3	260-3	3	下向き	158.36	0.8	○	
4	262-1	4	上向き	426.43	0.7	○	平面規模推定に有用 全面布着せ
5	262-2	5	下向き	421.13	0.4~0.8	○	平面規模推定に有用 筋布着せ
6	264-1	6-1	上向き	80.94	0.4~0.6	○	筋布着せ
	-2	6-8	上向き	10.26	0.6	○	筋布着せ
	-3	6-12	上向き	5.24	0.5	○	
	-4	6-4	上向き	65.76	0.4~0.6	○	筋布着せ
	-5	6-13	上向き	43.33	0.5	○	筋布着せ
	-6	6-7	上向き	74.33	0.2~0.6	○	筋布着せ
7A	267-1	7A-1	下向き	86.81	0.5	○	筋布着せ
	-2	7A-3	下向き	135.22	0.4~0.5	○	筋布着せ
	268-1	7A-23	上向き	2.06	0.4	○	
	-2	7A-77	下向き	43.21	0.6	○	筋布着せ
	-3	7A-91	下向き	15.00	0.5~0.6	○	
	-4	7A-95	上向き	20.54	0.5	○	筋布着せ
	-5	7A-100	上向き	18.44	0.4~0.7	○	筋布着せ
	-6	7A-113	下向き	5.15	0.6	○	
	-7	7A-107	上向き	7.12	0.6	○	
	-8	7A-126	上向き	12.85	0.5	○	
	-9	7A-129	下向き	8.77	0.6~0.8	○	立ち上り部
	-10	7A-132	下向き	21.80	0.6	○	立ち上り部
	-11	7A-140	下向き	2.51	0.5	○	立ち上り部
	-12	7A-142	下向き	11.31	0.4~0.6	○	立ち上り部
	-13	7A-143	下向き	12.91	0.6	○	
	-14	7A-147	下向き	1.25	0.4	○	
	-15	7A-148	下向き	11.99	0.6~0.8	○	
-16	7A-151	上向き	9.85	0.5	○		
-17	7A-152	上向き	13.86	0.5~0.6	○		
7B	-18	7B-7	下向き	3.35	0.6	○	立ち上り部
	-19	7B-17	下向き	6.38	0.5	○	筋布着せ
	-20	7B-21	下向き	1.81	0.6	—	
	-21	7B-22	下向き	20.46	0.4~0.6	○	筋布着せ
	-22	7B-55	下向き	2.64	0.6	○	
	-23	7B-57	下向き	11.22	0.6	○	
	-24	7B-70	下向き	26.47	0.6	○	立ち上り部
	7C	-25	7C-1	上向き	6.49	0.6	○
-26	7C-2	下向き	14.08	0.6	○	立ち上り部	
7D	-27	7D-1	—	2.61	0.6	○	箱内面隅部

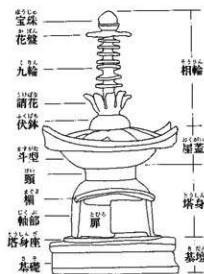
5. 小型宝塔

第48号土坑から出土した5基の小型宝塔は、それぞれ金・銀・金銅・銅・鉄の異なる金属で製作されている。形態的には金・銀・金銅製小型宝塔と、銅・鉄製小型宝塔に分けることができるが、いずれも基壇・塔身・屋蓋・相輪の4部から構成される、宝塔の形式をとっている。

小型宝塔の各部位の名称は、第269図に示すとおりである。ただし、屋蓋部の各部品と扉の上方に渡された庇状の部品については、適当な呼称を見いだすことができなかつたため、暫定的な呼称を用いている。

第275図に構造復原図を示したが、この図はγ線・X線透過観察から、模式的に復原したものである。そのため、計測不能な箇所や器厚等については、実物とは異なっている。この図から、小型宝塔の製作工程を読みとることができ、各部品の成形→形金などの調整→組立ての順で行われている。

第269図 小型宝塔部分名称図

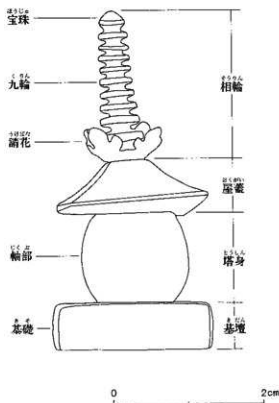


金製小型宝塔 (第270図・第275図1)

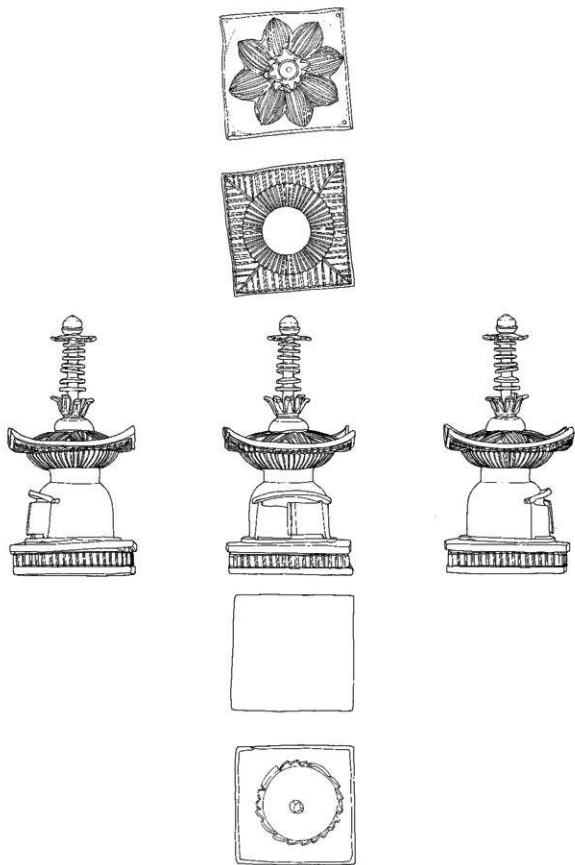
金製小型宝塔は、総高3.46cm、重量11.41gである。蛍光X線による定量分析の結果、材質は金89%に対して、銀11%と微量の銅が含まれている。合金の割合は、単純計算では21.4金に相当する。

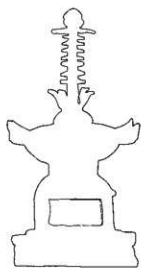
相輪部は、宝珠・花盤・九輪・請花・伏鉢によって構成されている。通常の塔には伏鉢の下に莖蓋が設置されているが、本品は省略されている。

宝珠は中位やや下方で段を持ち、大きさの異なる半球形を2つ合わせたような形状である。五輪塔の空・風輪部を連想させることから、下部を請花もしくは宝珠座と呼称することも検討したが、一括して宝珠として報告する。段部の表現は、鋤取って形を出す鋤彫りによって彫金されている。先端部は鉄銹の影響によって明瞭ではないが、本来は突出していたものと思われる。



第270图 金製小型宝塔

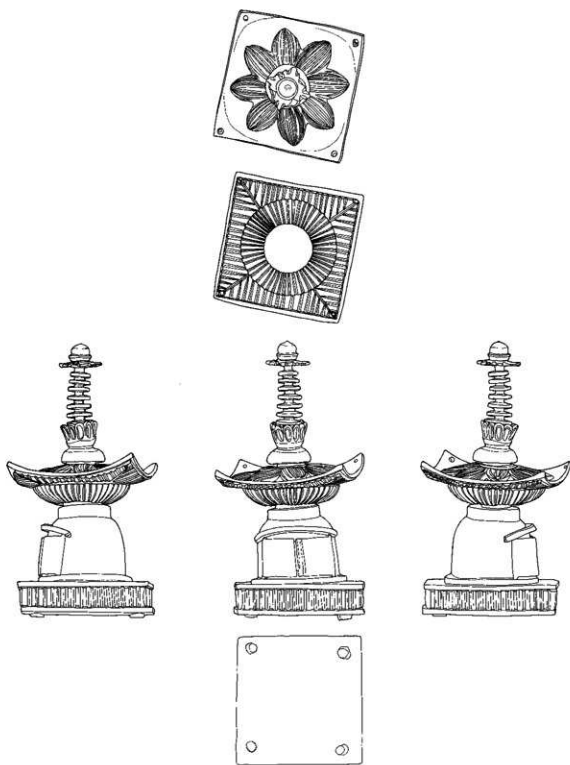


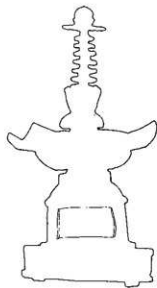


111



第271图 銀製小型宝塔

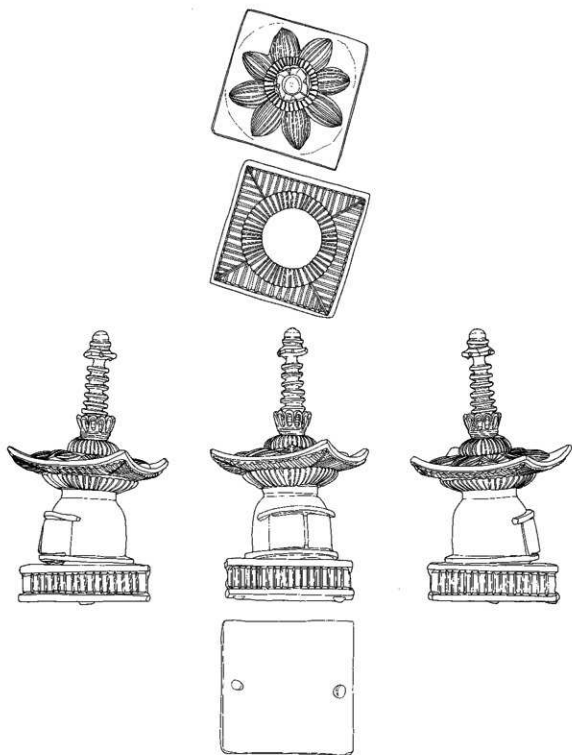


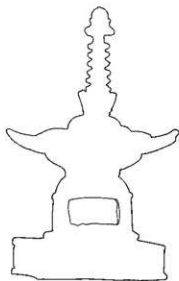


171

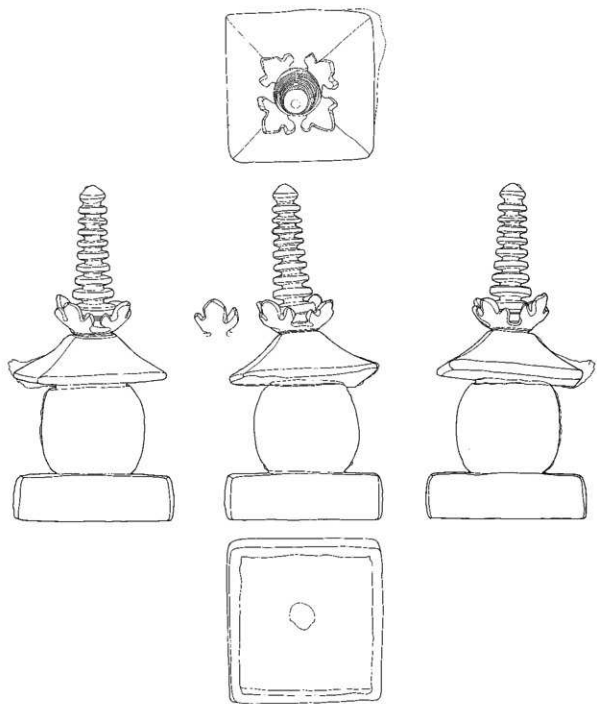


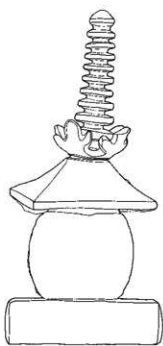
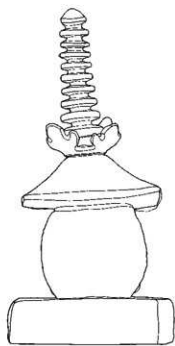
第272图 金銅製小型宝塔





第273图 铜製小型宝塔

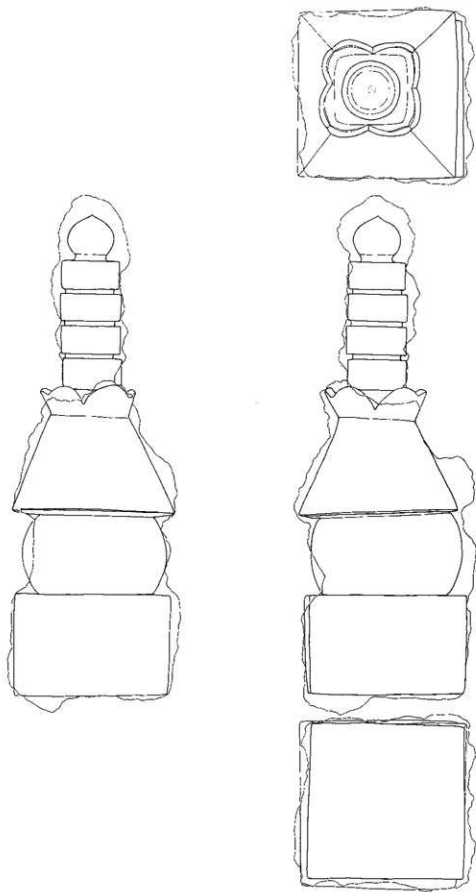




111



第274図 鉄製小型宝塔



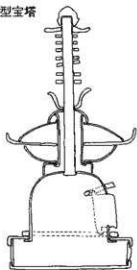


111

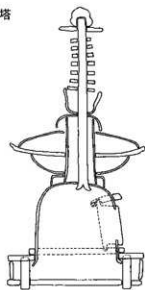


第275圖 小型宝塔構造復原圖

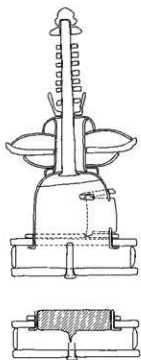
金製小型宝塔



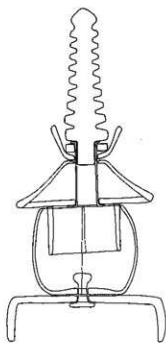
銀製小型宝塔



金銅製小型宝塔



銅製小型宝塔



0 2cm

花盤は、花冠を平坦に表現したものである。4単位の花弁によって構成され、各単位の花弁は中央が大きく、両端には小さなものを配している。1枚の方形板から製作され、方形板のコーナーを各単位中央の花弁の頂部として、彫金によってそれぞれの花弁がかたどられている。

九輪は7枚の輪によって構成されている。個々に製作した円環状の部品を、相輪の軸に接合させている。装飾は施されていない。埋没中の土丘によって、ズレが生じている。

請花は、8枚の花弁からなる花冠を表現したものである。一枚板から成形した、鍛造部品である。技法的には、一枚の金属板から打ち出して立体的な形を作る鑄起技法である。各花弁は、彫金によって表現されている。

伏鉢は半球形で、一枚板から鑄起技法によって成形されている。彫金などによる装飾は認められない。

相輪部の組立方法は、基本的には各部位の部品が、これら貫く相輪の軸に接合されている。いずれの部品にも、相輪の軸を通すための孔が中央に穿たれている。また相輪の軸は屋蓋部・塔身部をも貫いて、塔身軸部の頂部に絡繰られて固定されている。

宝珠と九輪は相輪の軸に接合されており、恐らくは鍍付によるものと思われる。しかし花盤・請花・伏鉢の固定方法は不明確で、鍍付による方法と、部品を相輪の軸に噛み合わせる等の方法が考えられる。また伏鉢は、屋蓋部上面の蓮華を抑え込むような状態になっている。

屋蓋部は、表面的には3つの部品から構成されている。暫定的に、上から屋蓋上面の蓮華・屋蓋・斗型と呼称する。

屋蓋上面の蓮華は8弁の開敷（花開いた）蓮華を象り、装飾を目的としたものと考えられる。このような例は建造物には知られていない。一枚板から鑄起技法によって立体的に成形され、毛彫りによって、花卉の脈を表現した筋状の加飾が施される。毛彫りのタグネの方向は、いずれも中央から外方へ向っている。

屋蓋は、方形の一枚板から加工されたものである。四辺は上方へ、ほぼ直角に折り曲げられている。この成形は、各頂点に接合の痕跡が認められないことから、鑄起技法によるものである。このように屋蓋の四辺を折り曲げているのは、金製小型宝塔のみである。この相違は材質の違いによるものと考えられ、四辺を折り曲げることによって強度を高めたものと想像される。

屋蓋の四隅は、緩やかに上方に反り上げられている。上面には加飾は施されていない。下面には毛彫りによって、垂木が表現されている。毛彫りは、各辺から垂直方向に、外側から内側へ向って行われている。間隔はほぼ均一である。各コーナー付近では、対角線上で直角に交わって止まっている。最終的には対角線にも、内側から外側へ向かって、毛彫りが施されている。毛彫りによる彫金が施された後、四隅には円孔が穿たれている。このことから、本来は宝鐸が吊り下がっていた可能性があるが、宝鐸や関係する部品は発見されていない。また他の金工品の宝塔に見られるような、宝鎖に關係する部品はおろか、花盤にも吊したような痕跡すら認められない。

斗型は半球形で、鑄起技法によって一枚板から成形されている。外面には毛彫りによって、放射状の装飾が施されている。

屋蓋部には相輪の軸が貫いているが、さらにこの軸を被うように円筒管がある。屋蓋部の組立では、各部品がこの円筒管を挟み込むように固定されている。この円筒管の成形は、金属板を折り曲げたり、接合したりして立体的な形を作る、板金技法によるものである。

円筒管の上方は広がりながら伏鉢まで達しているが、円筒管と伏鉢・屋蓋上面の蓮華との接合方法は明確ではない。円筒管の下端は頸に差込み、先端部を折り曲げる絡繰り留めによって、頸上板に固定している。

塔身部は頸・軸・塔身座と楯・扉によって構成され、勾欄（欄干）は通っていない。

頸部は扁平な円柱形で、瓶詰の蓋のような形状である。上面中央には、屋蓋部の円筒管を通すための円孔が穿たれている。鑄起技法によって成形されたもので、

装飾はいっさい施されていない。頸部は鍍付によって、塔身軸部に接合されている。

塔身軸部は釣り鐘状のもので、内部は空洞である。鉤起技法によって成形されている。塔身座はリング状のもので、軸部を巡っている。

塔身部の組立てには絡繰り留めが行われ、塔身軸部の下端部を基礎板上に差込んで、先端を外方へ折り曲げて固定されている。絡繰り方は、タガネの先端で、細かく折り曲げながら全周させている。さらに塔身座を軸部裡に接合させることによって、基礎板上を挟み込み、固定強度を高めている。

欄は扉の上方に渡された、庇状のものである。半輪状の板状部品で、両端の内側には爪状の突起がある。この突起を塔身軸部に差し込み、絡繰って固定している。鍍付による接合は行われていないようである。

扉は親音扉で、2枚の板材が用いられている。形状は、方形板のそれぞれ片側の上下に小突起をもつ。この突起を欄と塔身座に差し込み、開閉可能な扉を形成している。扉口は軸部を長方形に切込んでおり、塔身部に「物」を入れる機能を備えさせている。

基壇部は1段の基礎で構成されている。部品は、上板・側板・底板の3点からなる。上板・底板はほぼ正方形の一枚板で、鉤起技法によって四辺が垂直に折り曲げられている。上板の中央には、塔身軸部を通すための円孔が穿たれている。側板は一枚の細長い板材から、板金技法によって成形したもので、端部は鍍付け等の方法によって接合されている。外面には毛彫りによる加飾が施されている。

基壇部は、上板と底板が側板を抑え込むように組み立てる。固定方法については、上板・側板・底板がすべて分離した状態で出土していることから明確ではないが、鉤留め技法は用いられていない。鍍付による接合も考えられるが、金の柔軟性を利用して、外方から圧力をかけて微妙に変形させただけで、固定する方法が取られているようである。

銀製小型宝塔 (第271図・第275図2)

銀製小型宝塔は、総高3.69cm、重量11.85gである。

蛍光X線による定量分析の結果、銀95%に対して、銅4%と微量の金・鉛が含まれている。材質は、ほぼ純銀に近いものである。

屋蓋部は右回り方向に若干のズレを生じており、また相輪の軸も変形している。

各部位の構成や組立方法については、金製小型宝塔と基本的には同様である。しかしその一方では、請花・屋蓋の形状や、基壇部の組立技法、絡繰り技法等に相違が認められる。

請花は、一枚板から鉤起技法によって成形されたものである。花冠は、透かし彫りによって8枚の花弁を象った、王冠状のものである。花弁の表現には透かし彫り技法が用いられ、金製小型宝塔とは異なっている。

屋蓋は方形の一枚板から成形し、四隅は緩やかに反り上がっている。四隅には円孔が穿たれ、毛彫りによって垂木も表現されている。また毛彫りの順子やタガネの方向も、基本的には金製小型宝塔と同様である。しかし銀製小型宝塔には、金製小型宝塔のように四辺を上方に折り曲げるような細工は認められない。

基壇部の組立てには、鉤留めが行われている。底板から4本の釘を打ち込んで、固定する方法がとられている。

相輪の軸は下端を縦方向に2つに割広げたのみで塔身軸部へ絡繰られているが、金製小型宝塔ではこの部分をさらに丁寧に叩いて、完全に塔身軸部へ密着させている。

塔身軸部と基壇部上板の絡繰りは、塔身軸部下端を若干外方に折り曲げて簡略に固定しているが、金製小型宝塔では細かい単位で丹念に折り曲げて、しっかりと密着させている。

屋蓋部内部の円筒管は、裾部を広げて頸部に固定しているが、金製小型宝塔では、先端を丹念に折り曲げてしっかりと固定している。

このように、相輪の軸、塔身の軸部、屋蓋内部の円筒管の固定方法は、基本的には金製小型宝塔と同様である。しかし銀製小型宝塔は簡略に行われ、はずれない程度の固定を目的とした作業に留まっている。

金銅製小型宝塔 (第272図・第275図3)

金銅製小型宝塔は、素地の銅に金鍍金が施されたものである。表面は銅錆が覆い、部分的に金鍍金が観察できる。総高3.60cm、重量12.60gである。

金・銀製小型宝塔と同様に基壇部底面に焦点をあてた蛍光X線による定量分析の結果、銅88%に対して、金10%と微量の銀・鉛・砒素・錫・アンチモンが測定された。分析結果から、銅を素地として、金鍍金が施された製品といえる。

数値には表れていないが、同様の方法による定性分析では水銀が検出され、金アマルガム鍍金法(水銀鍍金法)によって金鍍金が行われていることが判明した。また金鍍金は、内面にも丁寧に施されており、このことから、製作過程は、各部品の成形・調整→金鍍金→組立ての順で行われている。

実体顕微鏡による観察では、請花・楯・扉が銀色をしていることが確認されている。そこで、これらの部位の材質を明確にすることを目的として、請花・楯にも焦点をあてて、蛍光X線による定量分析を実施した。検出された金属元素は同じであるが、扉部では銅71%に対して、金6%、銀22%、請花部では銅70%に対して、金18%、銀11%が検出された。基壇部底面の測定値よりも銀の含有率が高く、実体顕微鏡による観察結果と合致する。

ただし、蛍光X線による分析だけでは、これらの部位の材質が銀か、もしくは銀鍍金によるものなのかは判断できない。いずれにしても、「色」に着目するならば、金銅製小型宝塔は金色と銀色が混合し、金製とも銀製とも異なった色合いである。しかし、銀色が混入するものを金銅製品と呼称することに躊躇を覚えるものの、金銅製小型未開敷蓮華との関連もあり、本書では金銅製小型宝塔と報告する。

金銅製小型宝塔は、基壇部と塔身部、屋蓋部と塔身部にズレが生じており、各部の方向は一定していない。

各部位の構成や、成形技法、組立方法は、基本的には金・銀製小型宝塔と同様である。

形態的には、請花が銀製小型宝塔ときわめてよく似

ている。

技法的には、相輪の軸と塔身軸部、塔身軸部と基壇部の絡繰り方が、金製小型宝塔のように丁寧にされている。一方、屋蓋内部の円筒管の固定方法は銀製小型宝塔と同様に、単に固定を目的とした程度の作業に留まっている。

さらに、金・銀製小型宝塔のいずれとも相違する点もあげられる。

伏鉢は半球形の鍍金部品であるが、金・銀製小型宝塔に比べて大きく、また毛彫りによって、放射状の加飾が施されている。タグネの方向は中央から外方へ向かい、間隔もほぼ一定である。

基壇部は、銀製小型宝塔と同じく鉄留めで固定している。しかし同じ技法であっても、銀製小型宝塔が4本であったのに対し、金銅製小型宝塔は2本の鉄で固定されている。

塔身軸部は、金・銀製小型宝塔では、一枚板から鑄起技法によって釣り鐘状の形状が成形されている。金銅製小型宝塔はX線透過観察によって釣り鐘状の肩部付近で接合痕が認められることから、2枚の板から上部の腕形と下部の円筒形の2つの部品を加工し、これを接合している。腕形の部品は鑄起技法、円筒部品は板金技法によって成形されているものと考えられるが、X線透過観察では円筒部品の縦方向の接合痕は認められていない。

金銅製小型宝塔の塔身内部には、片面のみに金が付着している、円板状の木片が存在している。金の付着方法については不明であるが、金泥もしくは金箔と考えられる。この木片の片面に金が付着していることから、この面を上方に向け、コルク栓のように塔身軸部に差し込んで、塔の床を表現したものと考えられる。ただし、木片は収縮しているために、塔身軸部下端径とは一致しない。

このように、形態的には酷似する金・銀・金銅製小型宝塔においても、細かい点に注目すると、それぞれ独自の技法や調整が認められる。

銅製小型宝塔（第273図・第275図4）

銅製小型宝塔は、総高4.46cm、重量17.63gである。蛍光X線による定量分析の結果、銅97%に対して、鉛2%と微量の金・銀・硫素・錫・アンチモンが検出されている。分析結果から、材質はほぼ純銅に近いものである。

形態は、金・銀・金銅製小型宝塔とはきわめて異なる。基壇部・塔身部・屋蓋部が、五輪塔の地輪・水輪・火輪とよく似ている。しかし五輪塔の空・風輪に相当する部分は、金・銀・金銅製小型宝塔と同様に相輪を配している。このように形態は異なるものの、基壇・塔身・屋蓋・相輪の4部からなる、宝塔形式をとっている。

銅製小型宝塔は、水晶製五輪塔形舍利容器のように、基壇部・塔身部と屋蓋部・相輪部に分離できる、^{部分}差し形式のものである。塔身部は空洞で、中にもを入れる機能を有している。

相輪部は宝珠・九輪・請花によって構成され、花盤・伏鉢・露盤は省略されている。

宝珠・九輪・相輪の軸は、一体の部品である。

請花は方形一枚板から、鋸起技法によって立体的に成形されている。花冠は4単位の花弁から構成され、各単位は中央が大きく、両脇には小さな花弁の3枚からなる。方形板の角を、各単位中央の花弁の頂点として整形されている。

屋蓋部は2つの部品から成形されている。鋸起技法によって、一枚板を四角錐に打ち出したものに、方形の底板を接合させている。さらに底板には、一枚板を板金技法によって筒状に丸めた納差し部の中子を接合させている。板金技法による中子の接合痕は、X線透過によって容易に観察できる。

相輪部と屋蓋部の組立ては、請花から屋蓋部底板まで円筒管が貫き、両端を外方に折り曲げて請花と屋蓋部を絡繰っている。さらに請花の固定には、円環状の部品を用いている。円筒管の上端は、この円環状部品に絡繰っている。相輪部はこの円筒管に軸を差し込み、相輪部と屋蓋部を一体としている。

塔身部は一枚板から鍛造したもので、球形に成形し、端部は接合されている。X線透過観察では、接合痕は明瞭である。基壇部も、一枚板から鋸起技法によって成形されている。塔身部底面と基壇部上面を貫くように、鋸状の部品を差し込み、両端を絡繰って繋ぎ合わせている。

鉄製小型宝塔（第274図）

鉄製小型宝塔は、腐食の進行が著しく、鉄錆に覆われている。X線透過観察によっても、形態は明確には映し出されていない。また相輪部が所損し、これを屋蓋部に接合することも難しい。そのため、第274図はこのような状況から復元実測したものである。推定総高6.97cm、推定重量57.95gである。

材質は蛍光X線による定性分析の結果、鉄であることが判明している。ただし、この分析のみでは、鑄造品か鍛造品かを判断することはできない。まだこれ以上の分析を実施していないが、鑄造品の可能性が高い。

形態的には、銅製小型宝塔とよく似たものである。鉄錆に覆われているため、製作技法などの細かい点については明かではない。製作は、形態的に一体の鑄造品を成形することが困難であることから、他の小型宝塔と同様に各部位を別々に成形し、これを組み立てたものと考えられる。

また、X線透過観察によると、他の小型宝塔と異なり、塔身部は空洞になっていないようである。

小型宝塔と未開数蓮華の材質については、付欄に分析の結果を報告している。このうち、金銅製品については、分析報告の数値と本稿の数値が異なっている。

分析報告では金・銀を鍍金に由来するものと判断して、この2元素を除いた金属元素の含有率を表している。一方、本稿では蛍光X線定量分析の測定値をそのまま用い、数値に対する判断を避けた。そのため、異なる金属含有率が表記されている。

6. 小型未開敷蓮華

小型未開敷蓮華は、蕾を付けた蓮茎を表現したものである。

これは僧が合掌するときに手に扶んで用いる「持蓮華」（長さ20cm前後）という僧具によく似ていることから、発見当初は「小型持蓮華状金属製品」と仮称した製品である。その後、「広木上宿遺跡出土宝塔検討委員会」において名称の検討を行った結果、「小型未開敷蓮華」と呼称することとなった。未開敷とは、蕾の状態をいう。

形態的には、小型宝塔の形態に対応するように、金・銀・金銅製小型未開敷蓮華がよく似ているのに対して、銅製小型未開敷蓮華は著しく異なっている。鉄製小型未開敷蓮華は腐食がきわめて進行しており、本来の形状についても明確とはいえない。

金製小型未開敷蓮華（第276図1）

金製小型未開敷蓮華は全長3.07cm、重量1.13gである。蛍光X線による定量分析の結果、材質は金88%に対して、銀10%、銅2%が検出されている。

マツチ棒状の頭部に蓮華の蕾をかたどったもので、地を鋳とるようにより一段彫り下げて文様を浮きたたせる錫彫りによって、立体的に表現されている。蕾の花弁は3段構成で、各段には花弁を3枚ずつ配している。萼部も錫彫りによって、突帯状に表現されている。茎部にはいっさい加飾はみられない。

銀製小型未開敷蓮華（第276図2）

銀製小型未開敷蓮華は全長3.07cm、重量1.27gである。蛍光X線による定量分析の結果、材質は銀95%に対して、金2%、銅3%と微量の鉛が検出されている。

形態や大きさ、彫金技法などは、金製小型未開敷蓮華に酷似している。

金銅製小型未開敷蓮華（第276図3）

金銅製小型未開敷蓮華は全長3.16cm、重量0.44gである。蛍光X線による定量分析の結果、材質は銅

77%に対して、金21%、銀1%と微量の鉛・砒素・錫・アンチモンが検出されている。データには表れていないが、金銅製小型宝塔と同様、銅の素地に金アマルガム鍍金が行われている。

形態や大きさ、彫金技法は、金製小型宝塔に酷似している。金鍍金は彫金終了後に施されている。

銅製小型未開敷蓮華（第276図4）

銅製小型未開敷蓮華は全長3.56cm、重量3.03gである。蛍光X線による定量分析の結果、材質は銅90%に対して、1～3%ほどの金・銀・鉛・砒素と微量の錫・アンチモンが検出されている。

金製小型未開敷蓮華と同様、マツチ棒状の頭部に、蓮華の蕾をかたどったものである。金・銀・金銅製の小型未開敷蓮華と比べると、ひときわ大きなものである。

蕾部は錫彫りによって、立体的に整形されている。蕾の花弁は4段構成で、各段に4枚の花弁を配している。また花弁1枚1枚には、毛彫りによって脈も表現されている。

萼部は錫彫りによって、突帯状に表現されている。茎部には加飾は認められない。茎端部が広がる形態は、金・銀・金銅製小型未開敷蓮華とは異なる。

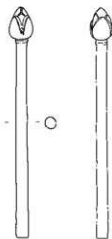
鉄製小型未開敷蓮華（第276図5）

鉄製小型未開敷蓮華は腐食がきわめて著しく、蕾部の表現などを観察することはできない。全長3.75cm、重量1.27gである。材質は鉄で、鉄製小型宝塔と同様に、鋳造品か鍛造品かは判断できない。

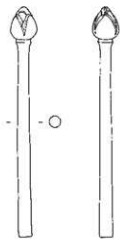
漆膜下から棒状鉄片が出土している。この鉄片の径は、鉄製小型未開敷蓮華の花柄部の径とほぼ同じである。接合する可能性もあり、検討の必要がある。本報告は、現状の鉄製小型未開敷蓮華についてのみ行った。

第276圖 小型未開敷蓮華

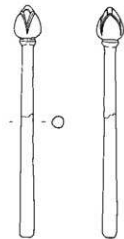
金製小型未開敷蓮華



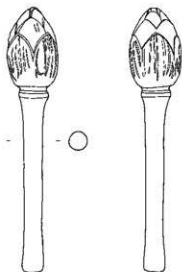
銀製小型未開敷蓮華



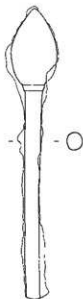
金銅製小型未開敷蓮華



銅製小型未開敷蓮華



鉄製小型未開敷蓮華



0 2cm

VI 広木上宿遺跡出土宝塔検討委員会報告

1. 趣旨

広木上宿遺跡から漆箱に納められた状態で、小型宝塔5基と小型未開敷蓮華5本が発見された。これらは、いずれも金・銀・金銅・銅・鉄という異なる金属によって製作されたものである。全国的にも類例をみない資料であり、用途・性格や製作目的など不明なところが多い。

そこで、考古をはじめ美術工芸・金工品等の専門の方々に、遺跡及び遺物の年代や性格などについて指導を受けるため、「広木上宿遺跡出土宝塔検討委員会」を設置した。

2. 開催日程

第1回検討委員会 平成7年5月25日

第2回検討委員会 平成7年12月7日

3. 検討事項・内容

(1) 第1回検討委員会

第1回検討委員会では事務局から資料を提示し、これに基づいて検討を行った。

資料の提示は、以下の順で行った。

- ①小型宝塔及び小型未開敷蓮華の出土状況
 - ②漆箱について
 - ③小型宝塔及び小型未開敷蓮華について
 - ④小型宝塔及び小型未開敷蓮華の材質分析について
- なお、提示資料は次のとおりである。
- ・小型宝塔及び小型未開敷蓮華の概要
 - ・中世寺院関連遺構全測図
 - ・第48号土坑図（出土遺構）
 - ・漆膜一箱端部参照図
 - ・小型宝塔及び小型未開敷蓮華実測図
 - ・材質分析データ
 - ・関連遺物
 - ・小型宝塔及び小型未開敷蓮華写真

上記の資料を基に、第1回検討委員会では、次のよ

うな意見が出された。

出土状況について

- ・出土状態から、埋納されたものと考えられる。
- ・仏舍利埋納であるとすれば、土中深く埋納するはずである。しかし第48号土坑の状況からは、意識的な埋納は考えがたい。
- ・鎮壇具であれば、五穀・七宝が伴っている。
- ・小型宝塔等を箱に納める場合、通常は何らかの布に包むか、袋に入れるなどしていたはずである。

漆箱について

- ・小型宝塔・小型未開敷蓮華にくらべ、漆箱は必要以上に大きい。
- ・漆箱の大きさや形状から、経箱と考えられる。
- ・本来は、経箱には宝塔類を入れることはなく、また入れる必要すらない。そこで、二次的な納置といえるだろう。
- ・経典などの残痕の存在如何では、小型宝塔・小型未開敷蓮華をはじめ漆箱・第48号土坑等の性格もわかるだろう。

技法について

- ・金製小型宝塔の塔身軸部と基壇部の絡繰り留めは、タガネで打つ古いやり方である。
 - ・金銅製小型宝塔は内面にも金鍍金が施されていることから、鍍金終了後に、組み立てている。
 - ・鉄製小型宝塔の成形は、鋳造である可能性が高い。
- #### 形状・大きさについて
- ・銅製小型宝塔は、有頭五輪塔に類例が求められるかも知れない。
 - ・金工品に類似する資料はないが、経典や絵巻等に類例を求めることができるのではないかと。
 - ・ミニチュア製品と考えられる。
 - ・密教法具の旅置具のような、移動用の法具とも考えられる。
 - ・小型未開敷蓮華は、携帯用の小型持蓮華の可能性もある。

製作年代について

- ・小型宝塔の形態から、製作年代を考えることが妥当である。
- ・屋蓋上面の八葉蓮弁も、製作年代を知る手がかりとなる。
- ・全体的な形態に古い型式が残り、鎌倉時代の特徴が随所に見られる。
- ・基壇部の安定感は、鎌倉時代の特徴といえる。
- ・銀・金銅製小型宝塔の蒔花に施されている透かし彫り技法は、南北朝期に多く見られる。

小型宝塔の用途について

- ・小型宝塔は舍利塔・舍利容器と考えられる。
- ・金銅製小型宝塔の塔身内部の床の存在から、舍利が入っていた可能性がある。
- ・小型宝塔の大きさから、榎を舍利とした榎塔の可能性も考えられる。

小型未開敷蓮華について

- ・形態がよく似た時宗法具の持蓮華と結び付けると理解が困難となる。
- ・小型宝塔内部に舍利納置の施設を製作することが困難なため、舍利の代用として小型未開敷蓮華を用いた可能性もある。これは蓮華形舍利容器（奈良唐招提寺・奈良東大寺）の存在や、法華経でも蓮華が法舍利とされていることから傍証できる。
- ・小型宝塔と対比すると、小型未開敷蓮華は大きすぎる。
- ・奈良東大和西人寺の鉄製宝塔納置五穀舍利容器のように、瓶の蓋として存在していたのではないか。
- ・木製の持蓮華は、中世以降に存在している。

5種類の材質の意義について

- ・仏舍利信仰の多様性を反映させている。
- ・大和西人寺の鉄製宝塔納置五穀舍利容器等との関連も考えられる。
- ・大和西大寺の鉄製宝塔納置五穀舍利容器のように、色を変えることに意味を持っていたのではないか。また五穀舍利容器のうち1つだけ大きいことから、

広木上宿遺跡例の場合、鉄製小型宝塔を中心に考えることも必要なのではないか。

- ・五穀を舍利とした榎塔で、五基の小型宝塔と対応させたのではないか。
- ・五行思想との関連が考えられる。
- ・釈迦の四重棺（金・銀・銅・鉄製）との関連から、金・銀・銅・鉄製の小型宝塔を製作したのではないか。これは金銅製と銅製の2基を一括して、1基の銅製小型宝塔として捉えるものである。その理由として、鉄では金・銀・金銅製と同形態の小型宝塔の製作が困難なため、銅で鉄製に形態を似せた小型宝塔を製作することによって形態差をぼやかし、結果的に5基となったものと考えている。
- ・セット関係について、検討すべきである。
ア：小型宝塔・小型未開敷蓮華のすべてを単品として捉える。

イ：小型宝塔5基と、小型未開敷蓮華5本をそれぞれセットとして捉える。

ウ：形態の異なる金・銀・金銅製と、銅・鉄製の2つのセットとして捉える。

エ：小型宝塔5基と小型未開敷蓮華5本を一括して捉える。

(2) 第2回検討委員会

第2回検討委員会では、追加資料として次の資料を提示した。

- ・小型宝塔部分名称図案
- ・小型宝塔構造復原図
- ・小型宝塔類別資料

これらの第1回及び第2回検討委員会の提示資料に基づいて、検討を行った。検討された事項及び内容は、以下のとおりである。

名称について

各製品の名称は、「…製小型宝塔」、「…製小型未開敷蓮華」と呼称することに決定した。

小型宝塔の各部分名称については、第269図に示すとおりである。ただし、屋蓋部の各部分と扉の上に渡された庇状の部分については、適当な呼称を見いだす

ことができなかった。

製作技術について

製作技法は、金工品で一般に用いられているもので、特殊な技術はみられない。

ア) 小型宝塔

- ・各部品をそれぞれ別に製作し、これを組み立てたものである。
- ・立体的な部品は鍛金によって成形され、鋳起技法、板金技法が用いられている。
- ・彫金技法として、毛彫り・透かし彫りが行われている。
- ・接合は、主に鑲付によるものと考えられる。
- ・固定は、主に絡繰り留めによるもので、銀・金銅製の基壇部には鉄留めが行われている。

イ) 小型未開敷蓮華

- ・蕾部と萼部は、肉彫りによって表現されている。
- 銅製には、さらに毛彫りも施されている。

製作年代について

製作年代については、次のようなさまざまな意見が出された。いずれも年代を決定するには、明確な根拠とはならない。形態的な特徴や技法・類例は、平安時代末以降から南北朝時代以前にかけて見られるものである。

ア) 類例

- ・金工品・木工品の中には、類例は見あたらない。
- ・屋蓋上面の蓮華は、平安時代末の広島県厳島神社蔵の平家納経や兵庫県太山寺蔵の法華経の軸端(軸首)の頂にあしらわれた文様に、類例が求められる。
- ・平安時代末の厳島神社蔵の平家納経等の法華経見返し絵に描かれた宝塔と、金・銀・金銅製小型宝塔が似ている。
- ・形態的には、鎌倉時代の大阪府大蔵寺蔵の大般若経紙背印塔(絵画)と、金・銀・金銅製小型宝塔がきわめてよく似ている。
- ・鎌倉時代の滋賀県聖衆來迎寺蔵の十二天像(絵画)のうち毘沙門天が持する宝塔の屋蓋上面に

蓮華が表現されている。

- ・銅製小型宝塔の類例として、鎌倉時代の水晶製宝塔や銅柄があげられる。

イ) 形態的な特徴

- ・屋蓋が彫らみを持ちながら先端部がすぼまるタイプは、平安時代末～鎌倉時代に出現する。
- ・頸や基壇の形態には、鎌倉時代の特徴が見られる。
- ・さまざまな金属を用いる金工品は、室町時代までは降らず、また平安時代までは通らない。
- ・板碑のキリクが、南北朝期に細高化することと関連させて、小型宝塔の形態的安定感から製作年代はこの時期までは降らない。
- ・形態の異なる、金・銀・金銅製小型宝塔と、銅・鉄製小型宝塔では年代が異なる可能性がある。形状や水晶製舍利塔などの関連から、銅・鉄製が先行するのではないか。

ウ) 時代的な背景

- ・小型製品は、平安貴族に好まれていた。

性格等について

出土状況の検討と、用途や思想的背景などについて意見を求めた。

ア) 出土状況について

- ・塔心礎とは考えられず、またその必要もない。
- ・舍利埋納ならば、特別な施設を設けて納めるはずである。
- ・中世以降には、地鎮・鎮壇の際に、宝器を平地に置く例が多い。
- ・漆製の経筒は山形県で1例あり、また高野山奥の院でも知られている。

イ) 用途について

- ・個々の小型宝塔の用途は、舍利塔もしくは舍利容器である。しかし、セットとして捉えた場合の用途については不明である。
- ・5本の小型未開敷蓮華のうち、金・銀・銅・鉄製は經典に示されているように、舍利と関連する。

ウ) 思想的背景等について

- ・小型宝塔・小型未開敷蓮華の製作には、密教との

関連が考えられる。

- ・五行思想との関連も考えられる。
- ・セット関係については、一括してセットとして捉える考えと、これに疑問を抱く考えも出された。

4. 総括

本委員会で検討した資料は、全国に類を見ないものであり、まず各製品及び部分名称について検討をする必要があった。

検討の結果、「小型宝塔」、「小型未開敷蓮華」とい

う呼称が決定した。また各部分の呼称については、第269図に示すとおりである。さらに金工技術についても、指導を受けた。

本書に用いた製品や各部分の名称及び技法については、検討委員会の結果を反映させたものである。

製作年代については本資料の類例がきわめて乏しく、また性格等の問題についてはさまざまな意見が提示されたものの、いずれも確定的な見解を見いだすには至らなかった。これらの問題については、今後の課題として残された。

VII 結 語

1. 小型宝塔・小型未開敷蓮華の出土状況について

中世寺院跡と第48号土坑について

5基の小型宝塔と5本の小型未開敷蓮華は、漆箱に納められた状態で、第48号土坑から出土している。この土坑は、中世の寺院跡関連遺構の分布域北端に位置している。

中世の寺院跡については、盛土によって造成された基壇状遺構や、関連が予想される建物跡などが計画的に配置され、また関連遺構分布域から中世の瓦片が集中的に発見されていることから、寺院跡の存在を予想した。

この寺院跡の復原は、範囲が限られた発掘調査による情報という制約から、きわめて困難な作業である。周辺部の方形平坦面の分布から、寺院跡を想定することも可能ではある。しかしながら、寺域の広がりか想定された階段状に下る南側斜面部の調査では、寺院が建立された痕跡を認めることはできなかった。発掘調査を経ない周辺部の観察に頼ることは、方法的に安易で、また確証も得られない。このような状況から、発見された寺院跡の復原には至っていない。

新編武蔵風土記稿巻之二三六那賀郡之二や、調査区に隣接する常福寺の寺伝によると、広木上宿遺跡が立地している「トネ山」頂部に弘紀山電華院と号する伽藍が造営され、寺中には宝山寺福性坊と称する塔頭があったとされており、注目される。しかしながら、この寺院と発掘調査によって発見された寺院跡との関連については、定かでない。

小型宝塔・小型未開敷蓮華を出土した第48号土坑は、壁の立ち上がりがきわめて弱い、浅い窪み状の土坑である。調査の所見では、室や棚などの施設が設けられたような痕跡も、確認されていない。また覆土の堆積状況については、人為的な埋め戻しなのか、自然堆積なのか、断面観察では明確にできなかった。遺物は、漆箱に納められた小型宝塔・小型未開敷蓮華のほ

かに、いっさい出土していない。

このような土坑から発見された小型宝塔・小型未開敷蓮華の出土状況については、多くの疑問が残されている。この解明の如何によって、小型宝塔・小型未開敷蓮華の性格も定義づけられ、きわめて重要な問題である。

仏舎利埋納との関連について

小型宝塔・小型未開敷蓮華は、単なる金工製品ではない。塔・蓮華という形から、明らかに、仏教関連の遺物として認識されるべきものである。仏教における仏塔の意義が仏舎利の奉安・供養であることから、小型宝塔と仏舎利との関連が、おのずから予想されてくる。

仏教は日本に伝来後、直ちに受容され、日本の文化に多大な影響をおよぼしてきた。伝来した仏教(文化)は日本独自の变化を遂げ、この動きは、仏教文化草創段階といえる飛鳥・白鳳文化期には既に萌芽し、一例として、伽藍配置の変遷にあらわれている。

美術史上、伽藍配置は飛鳥寺式→四天王寺式→法隆寺式→薬師寺式→東大寺式→大安寺式という変遷をたどるとされている。飛鳥寺式は高句麗、四天王寺式は百濟・新羅に類例を求めることができ、これらの伽藍の中心には、仏舎利を納める塔が配置されている。一方、法隆寺式以降の伽藍配置は大陸や朝鮮半島には類例がなく、日本独自に発達したものとされている。この段階から、塔は伽藍の中心からそれはじめ、塔と食堂の並立、やがて食堂中心の配置へと変遷していく。このような伽藍配置の変化によって、仏舎利を納める塔の存在意義が希薄となり、さらに仏舎利の奉納方法までも変化させていった。

飛鳥・白鳳期には既に、日本独自の变化が芽生えているとはいえ、仏舎利は造塔に不可欠なものであった。

心礎・心柱・相輪などの塔の一部に、必ず奉籠されていた。日本書紀によると、日本における最初の仏塔とされる大野丘北塔が敏達天皇14年(585)に造立され、仏舍利は柱頭に奉籠されたと記されている。また飛鳥・白鳳期を代表する法興寺(飛鳥寺)や四天王寺・法隆寺・倭山田寺・本薬師寺などの諸塔では、ことごとく塔心礎に仏舍利が埋納されている。このように、塔心礎への埋納が、この時期の仏舍利奉籠の通制であったと考えられている。舍利容器は、瑠璃製の瓶・壺を中核容器として、金・銀・銅・石製の外容器を、小さいものから順に組入れていく入れ子状の重ね容器である。これに、珠玉などが埋納されている。

しかしながら、飛鳥・白鳳期の塔心礎への仏舍利埋納の通制はすぐに崩れ、伽藍配置の変化として如実にあらわれてくる。奈良時代には既に、塔心礎へ仏舍利孔を穿つ事例がほとんどみられなくなり、平安時代になると文獻に散見される程度となる。さらに、鎌倉時代には石塔内への納入例に限られ、石塔の軸部に奉籠し、舍利容器として水晶製五輪塔形舍利容器が多用されている。

このように、奈良時代以降には塔心礎への仏舍利埋納が衰え、これに代わって、仏舍利を塔・堂内に安置する傾向が顕著になってくる。これは塔を中心とした伽藍配置から、金堂を中心した伽藍配置へと変化し、塔の意義が希薄となってきたことにも起因している。しかし、単に伽藍配置の変化によって仏舍利の塔・堂内安置の方向へ進んでいったわけではなく、むしろ仏舍利のものに対する認識の変化が、大きく作用している。

仏舍利には、釈尊の遺骨を身舍利(肉舍利)と称するとともに、釈尊が説いた精神的なもの集積である經典を法舍利と称して、身舍利と同等視して信仰する考え方がある。伝来・伝世された身舍利には自ずと限度があり、奈良時代にはこれに代わって、法舍利信仰が流行してくる。例えば、天平年間(710-720)に諸国に建立された国分寺七重塔には、「金光明最勝王經」が安置されている。

さらに奈良時代後半には、唐からの米僧鑑真や、空海をはじめとする入唐求法僧らによって、多くの仏舍利がもたらされている。

このような法舍利信仰の盛行や、唐請来仏舎利の流布は、仏舎利安置の方法にも転機をもたらした。当初は百済や新羅から贈られたわずかな仏舎利を、造塔に不可欠なものとして、塔心礎へ埋納していた。これが法舍利信仰の盛行や唐請来仏舎利の流布によって、塔心礎へ密封すべきものから、直接礼拝すべき対象へと変貌し、仏殿内に安置されることとなった。これに伴って、舍利容器そのものも礼拝に適した新たな形式へ変容し、開放的で、視覚的効果の高いものが考案されるに至ってきた。

その典型が、舍利塔である。舍利塔は建造物としての塔をミニチュア化し、内部に仏舎利を奉安したものである。仏塔は仏舎利を納置するために起立されたものであるから、仏殿内に安置する舍利容器に仏塔をそのままかたどったことは、本旨に適した形式であるといえる。

舍利塔には、宝塔形・瑠璃塔形・五輪塔形・宝篋印塔形などの形態がある。またミニチュア化した舍利塔も、内部に舍利容器を納置する舍利塔と、塔そのものが仏舎利奉籠の直接容器となる塔形舍利容器に区別される。

さらに舍利容器にも五輪塔形・火焰宝珠形・連台形等のさまざまな形態が出現し、またこれらを納める舍利殿(舍利厨子)も考案された。

仏舎利の納置方法は、このような変遷をたどっている。

小型宝塔が仏舎利の奉籠を目的としたものならば、大きさや形態から舍利塔・舍利容器と考えられる。この場合、塔・堂内に安置されるのが通制で、土中に埋もれていたこと自体が大きな問題となってくる。もし仮に、塔心礎などへの仏舎利埋納を目的としたならば、埋納槽のような施設を伴うか、少なくとも充分な深さを持つ埋納坑を掘り込んでいるべきものと想定される。また小型宝塔・小型未開敷蓮華にふさわしい、専用の

入れ物に納められていたものと推測されるが、納められていた漆箱は、経箱と考えられる専用の容器ではない。さらに副納品も伴うものと考えられるが、これに相当するような遺物もまったく発見されていない。これらの点から、第48号土坑には仏舍利埋納という性格は考え難い。

地鎮・鎮壇儀式との関連について

次に第48号土坑の性格として考えられるのは、寺院建立に際して行われる、地鎮・鎮壇の儀式との関連である。

地鎮とは、堂塔伽藍建立時の、壇を築く前に地形を鎮めるために地天を本尊として執り行う儀式である。一方、鎮壇とは、壇を築いて堂を建てた後、土壇を鎮めるために地天を本尊として執り行う儀式である。地鎮・鎮壇の儀式をそれぞれ執り行うのが本義であり、地鎮を略して地鎮・鎮壇の儀式を一度に兼修するのが略儀とされている。これらの儀式の際に埋納されるのが、鎮壇具である。

『陀羅尼集経』には作壇法が説かれ、中央に小孔を穿ち、七宝・五穀を埋納する鎮壇法を窺うことができる。ここでは小孔を穿つ位置の決め方や、七宝・五穀の埋納方法まで、詳細に記述されている。なお、七宝は金・銀・真珠・珊瑚・琥珀・水晶・硝璃、五穀は大麥・小麦・稻穀・小豆・胡麻とされている。

地鎮・鎮壇儀式が最も盛んに行われていたのは奈良時代で、興福寺金堂・元興寺塔跡・薬師寺西塔・東大寺金堂（大仏殿）・法華寺金堂跡・横井廃寺塔跡等が知られている。金・銀・玉類などの七宝と、壺・鉢・盤などの供養法具のほか、銭貨・刀剣・甲冑・鏡等が埋納されている。

その後、密教の隆盛とともに密教修法が加わり、奈良時代以来の鎮壇儀式・鎮壇具の内容は大きく変わってくる。また白密・東密それぞれに独自の鎮壇法を展開させていった。この典型例としては、仁和寺金堂や興福寺菩提院大御堂があげられる。

密教修法が加わった地鎮儀式は、金銅の賢瓶に五宝を入れ、蓋をし、五色の糸で結ぶ。これを壇の中心に

埋め、さらに四方には五色玉を埋める。五穀の第二桶を甘露法味真言を加持し、沃いて諸地主を供養するとされている。

一方、鎮壇儀式は、堂を建てた後に、輪宝八枚、樞八本を壇の八方に埋め、輪宝の中央に樞の元をさして立てる。八方天の真言を誦して埋め、これに五穀の粥二桶を沃ぐとされている。

また地鎮・鎮壇を兼修する場合には、金銅の瓶を壇の中央に、輪宝・樞を八方に埋め、玉は埋めないとされている。

小型宝塔・小型未開敷蓮華を出土した第48号土坑の周囲には、多数のピットが存在している。これらのピット群は建物跡等の存在を予想させるもので、あたかも地鎮・鎮壇儀式に対応するかのようである。しかし発掘調査の所見では、建造物の存在を認知するには至らなかった。

図面や覆土の特徴からも復原を試みたが、建物跡の存在には否定的にならざるを得ない結果であった。誤解を避けるために図示していないが、3パターンの建造物を想定するにはした。しかし、いずれの建造物も一直線上にピットが並ぶものではなく、六角形や台形にピット列が展開するものである。また、いずれの復原案も、調査区外にピットの存在を予想せざるを得ないものである。ピットの規模も、中世寺院跡との関連が予想される掘立柱建物跡の柱穴とは比較にならないほど小さい。さらに、調査区ならびに周辺地形の観察からは、第01号基壇状遺構のような平坦面を造成した痕跡も看取することができない。このような状況から、周囲のピット群を建物跡や柵列跡として認知することはきわめて難しい。

第48号土坑からは、鎮壇具として伴うべき、七宝・五穀や瓶などはいっさい出土していない。

以上の点から、第48号土坑を地鎮・鎮壇儀式の痕跡と考えることも、また小型宝塔・小型未開敷蓮華を鎮壇具とみることも難しい。

経塚との関連について

第48号土坑の性格については、経塚との関連も考

えられる。小型宝塔・小型未開敷蓮華が納められていた漆箱は、経箱の可能性がきわめて高いものである。また小型宝塔・小型未開敷蓮華だけを納入するには、必要以上に大きな箱でもある。そのため、経塚との関連については、とりわけ注目される。

経塚は経典を未来永劫に残すため、これを書写・供養し、地中に埋納して小さな塚としたものである。経塚は法思想と弥勒信仰が深く関連し、法思想における危機感から、弥勒出生の世まで経典を伝え残すことを本来の目的としている。ここには弥勒出生にあたり埋納した経典が地より湧き出すという前提があり、法華経「見宝塔品」にみられる地中より宝塔が出現する構想が根底にあるとされている。

経塚は、主に山頂や見晴らしのきく丘陵や、古い寺社境域などに営まれている。築造方法は一定していないが、基本的には、まず地山を掘り下げて小穴を穿ち、中に何枚かの板石で石室を設ける。経巻を経筒に納め、それを特製の外容器や甕に入れて、石室に安置する。その周囲には鏡・楡扇・刀子・銭貨・玉類・仏像などの奉養副納品や、合子・六器・花瓶・火打具などの供養具を納置する。それに、小さな封土を施している。

経塚は、永延3年(989)の覚修『修善講式』に記載された経典埋納が中興とされている。遺構・遺物としては、吉野金峰山経塚から発見された、藤原道長が営んだものが最古で、経筒に寛弘4年(1007)銘がある。経塚は12世紀代に盛行し、以後、次第に衰退していく。その後、14世紀頃から回國聖の納経と結びついた経筒の奉納が始まり、16世紀に最盛期を迎えている。

経典は、材質から紙本経・瓦経・銅板経・滑石経・一石経・貝殻経等に分類される。経典の種類は、法華経八卷本を主体とし、これに無量義経・観音賢経(開結)を付したものが大部分である。

経容器は、経巻を直接納めた経筒と、この経筒を保護するための間接容器の外筒・外容器に分類される。経筒の形状には筒形と箱形があり、銅・鉄・陶磁・石・木・竹製がある。外容器は陶製品がほとんどで、

まれに石製品がある。陶製品には経筒を保護するための間接容器として製作されたものと、甕や壺等の日常生活品を転用したものである。

経塚において、まず木製の経筒が注目される。これは、直接容器である経筒の、さらに内筒として用いられている。京都府花背別所1号経塚(12世紀)、和歌山県高野山興之院経塚(永久元年・1113)、福岡県四王寺山7号経塚(12世紀)などで知られている。なかでも高野山興之院経塚では、漆塗木製経筒が納められていた。

次に、宝塔形の経筒にも興味がかかれる。愛媛県奈良山経塚から出土した鉄宝塔(12世紀末)や京都府鞍馬寺経塚から出土した銅製宝塔(12世紀)と鉄製宝塔(12世紀)があげられる。ただしこれらについては、近年、経筒とすることを否定する史料や伝承が見いだされており、再考を要する。

経塚と比較した場合、木製の経筒と漆箱、宝塔形経筒と小型宝塔とを関連づけることも可能ではある。漆塗りの経筒に経典を入れ、経筒の代替として小型宝塔をも箱の中に納めて、これを埋納したとも考えられないこともない。しかし、第48号土坑は埋納坑として、積極的に考え難いものである。経典の残痕や奉養副納品・供養具などの経塚に関連する遺物や、封土を築いたような痕跡もみられない。また、木製の箱を経筒の代用とし、しかも直接埋納する例は知られていない。さらに、塔形経筒が否定された場合、小型宝塔と経塚との関係をどのように理解するのかという問題も発生してくる。

今後の方向性

発掘調査の状況からは、第48号土坑が小型宝塔・小型未開敷蓮華の埋納を目的とした土坑として、積極的に考え難い。その一方で、小型宝塔・小型未開敷蓮華が漆箱に納められていた状態から、何らかの儀礼に伴うものと予想される。そこで、仏舎利埋納、地鎮・鎮壇儀式に伴う鎮壇具、経塚が想定されたが、そのいずれとも合致しない。もし仮に、そのいずれかに適合するとしても、きわめて特異な例となってしまう。

ここで発想を変えて、儀礼に伴うものとする先入観を除き、別の何らかの理由によって上中に埋めていたことも考えておく必要がある。しかしながら、小型宝塔・小型未開敷蓮華は金・銀の純度が高く、また金工技術を駆使した、きわめて貴重な宝器と考えられる。このような宝器を漆箱に納めた状態で、永久的にはもちろん、一時的にせよ、直接土中に埋めておくことは想像を絶する行為である。相当重大な要因がなければ、ありえない行為である。またその要因が解明されない限り、納得できない。

発掘調査による限られた情報からは、「漆箱に納められた小型宝塔・小型未開敷蓮華が浅い土坑から出土した」という事実に対して、適格な理解は得られていない。今後の仏舎利埋納、地鎮具、経塚等の新資料の発見や、またこのほかの仏教儀礼はもちろんのこと、他宗教・民俗儀礼等にも関連する要素を見いだして、解明していく必要がある。ただし、限定された発掘情報であることを常に念頭に置きつつ、慎重に検討を行うことが肝要である。

2. 小型宝塔と小型未開敷蓮華の製作年代について

第01号基壇状遺構の年代について

金・銀・金銅・銅・鉄というそれぞれ材質の異なる5基の小型宝塔と5本の小型未開敷蓮華は、全国的にも類をみない資料である。さらに、伴出遺物も皆無であり、その製作年代の推定はきわめて困難である。

しかしながら、小型宝塔・小型未開敷蓮華を出土した第48号土坑は、中世の寺院跡の分布域に位置していることから、この寺院跡に関連する遺構の一つと考えられる。そのため第48号土坑の時期が、寺院跡の年代と大きな隔たりをもつとは考え難い。そこで、中世寺院跡に関連する遺構や遺物の年代を、まず求めておく必要がある。

中世の寺院跡との関連が考えられる遺構のなかで、第01号基壇状遺構は上限年代を知ることができる。この遺構は、立地する斜面部に盛土をして、寺院建造物を建立するための平坦面を造成したものである。この遺構の堆積状況を把握するため断面観察を行ったところ、盛土下に旧地表層を確認することができた。この旧地表最上層には、天仁元年(1108)の浅間山の噴火に伴う火山灰(浅間B)の堆積が、部分的にはあるか認められた。このことから第01号基壇状遺構は、浅間B火山灰降下後の1108年以降に造成されたものといえる。

中世瓦の年代について

中世の遺物のなかで、最も多く出土しているものは瓦である(第218~222図)。これらの瓦片の多くは、中世の寺院跡との関連が考えられる遺構群の分布域から出土している。なかでも、第01号基壇状遺構の周辺から、集中的に検出されている。しかしながら、瓦と遺構との関係は明確ではなく、第01号基壇状遺構に伴うことが想像されるにすぎない

出土した瓦片の多くは、表面が灰色で、内部が淡黄色・灰白色をした特徴的なものである。これらの瓦片のなかで年代を推定できる資料として、剣頭文・唐草文が施された軒平瓦と、三巴文の軒丸瓦がある。しか

しいずれも破片資料であり、数もきわめて少ない。また伴件する他の遺物も明確ではないことから、的確な年代を求めることは難しい。

剣頭文軒平瓦には、陽刻下向きの剣頭文が施され、瓦当貼り付け技法によって製作されている。剣頭文軒平瓦は、他の瓦片と色調や焼成が異なっている。

唐草文軒平瓦も瓦当貼り付け技法によって製作されている。表面が灰色、内部が淡黄色・灰白色をした、出土瓦の主体的なものである。破片資料のため、全体の文様構成は定かではないが、均整唐草文と思われる。中心飾りは不明で、図様は認められない。各文様のカーブは緩やかで、頭部の括れは明瞭である。

三巴文軒丸瓦は比較的径の小さなもので、周縁の幅はさほど広くはない。巴の頭部は大きくはなく、尾部との括れは不明瞭である。尾部は長く伸び、およそ半周するほどである。殊文の粒は小さく、隙間なく配されている。

近年、中世遺跡の発掘の増加とともに、中世寺院跡の発見も相次いでいる。これに伴って、出土した中世瓦についての研究が活発に行われつつある。関東地方においては、幕府が開かれた鎌倉地域を中心として、各地域ごとにその成果が発表されてきている。

鎌倉地域は歴史的な環境を背景に、その遺物量豊富を抜いていることから、中世瓦研究も他地域をリードする立場にある。なかでも編年研究については、原廣志や小林康幸らによって、文献資料とも対応させながら、積極的に取り組まれている(原1986・小林1989・1992)。彼らの示した編年案は、関東地方の各地域の研究に多大な影響をもたらしている。

埼玉県内においても同様に中世瓦の資料が増加し、諸々の論考がなされてきている。なかでも、石川安司は比企地方を中心とした資料を整理し、これと県内他地域の資料と比較・検討を行い、埼玉県内の中世瓦の編年案も提案されている(石川1994)。

石川の編年は、軒平瓦の変遷過程を中心に把握して

いる。年代の推定には、兎玉郡美里町水殿瓦窯跡・兎玉郡兎玉町般若寺の資料を年代が確定できる資料としてあげ、またいわゆる「掛かりの瓦」にも着目している。さらに畿内や、鎌倉を中心とした東国諸地域の動向とも比較している。

I期には、陰刻下向きの軒平瓦と非剣頭文系の八事裏山系瓦をあて、実年代を13世紀前半に比定している。

II期は、陰刻下向き剣頭文から陽刻下向き剣頭文への変移に着目している。非剣頭文系としては連珠文瓦をあげ、実年代を13世紀中葉に比定している。

III期は、剣頭文の向きが下向きから上向きへと変移し、さらにこれらが重複する時期と考えている。実年代は13世紀後半～14世紀後半に比定し、その期間はI・II期に比べてきわめて長い。下向きの剣頭文の最終段階を14世紀前半頃とする一方で、上向きの初現を14世紀初頭をさかのぼるものと想定している。

IV期は、中心飾りをもつ均整唐草文が主流となる時期とし、14世紀末以降にあてている。また比企地方では、「掛かりの瓦」が導入されている。

軒丸瓦については、13世紀前半の八葉複弁蓮華文以降は変化に乏しい三巴文が主流となっているため、その一般的な変化をまとめている。時期の推移とともに、巴の頭部は大きくなり、尾部との括れがはっきりとしてくる。殊文は、粒の大きなものから小粒化し、再び大型化するとし、また周縁の幅は広くなるものが新しいという傾向を把握している。

この編年研究から広木上宿遺跡出土瓦の年代を求めると、まず軒平瓦に下向き剣頭文が存在することから、大雑把には13世紀後半から14世紀代にあてはまるものといえよう。さらに三巴文軒丸瓦の巴頭部と尾部の括れの不明瞭さや小粒な殊文、上向きの剣頭文軒平瓦が含まれていないことから、14世紀代のなかでもそれほど新しくはならないものと推測される。ただし石川編年では、均整唐草文の軒平瓦を14世紀後半以降に位置づけており、軒丸瓦の年代観とは相違する。

均整唐草文軒平瓦については、石川編年と周辺地域

の年代観とは約半世紀のズレを生じている。例えば、園池を伴う中世寺院跡を調査した群馬県藤岡市白石大御堂遺跡から出土した中世瓦のうち、B類瓦とされる一群は広木上宿遺跡出土の中世瓦と近似した特徴が認められる。軒平瓦は均整唐草文が施され、顎折り曲げ・瓦当貼り付け技法によって成形されている。軒丸瓦は三巴文で、尾部が長く、殊文も密に配されている。時期は14世紀代と考えられている（綿貫編1991）。また法界寺跡・智光寺跡などの発掘資料を中心に研究が進められている栃木県足利市の編年でも、III期とした軒平瓦に均整唐草文が現れる時期を、14世紀代を中心に考えている（足立・斎藤1993）。

このように周辺地域では石川の編年とは相違し、均整唐草文が配される軒平瓦の時期が、14世紀代と把握されている。また県内資料では、広木上宿遺跡出土の均整唐草文と同文もしくは類似した文様はみられず、むしろ白石大御堂遺跡B類瓦に酷似している。さらに13世紀前半には本庄市大久保山遺跡で八事裏山系の唐草文が発見されていることから、唐草文の出現を著しく遅らせる必要性は強くは感じられない。

そこで、広木上宿遺跡出土の中世瓦の年代は、ほぼ14世紀前半代頃に求められ、また古い感がある剣頭文軒平瓦は、さかのぼっても13世紀後葉を越えない時期と思われる。

小型宝塔・小型未開敷蓮華の類似資料

小型宝塔は、きわめて特異な形態をしている。

金・銀・金銅製小型宝塔の屋蓋部上面には開敷蓮華が飾られ、宝塔本来の方形四柱式の屋蓋とは著しく異なっている。一方、銅・鉄製小型宝塔は五輪塔の地輪・水輪・火輪と同形態の基壇・塔身・屋蓋の頂部に、相輪部を付したものである。

そのため、これらと類似する資料はきわめて少ない。このような状況において、製作年代を判断することはきわめて困難である。

さて、金・銀・金銅製小型宝塔は屋蓋部が特異なもので、これに酷似する資料は、金工品ではもちろん、木工品・石造品・絵画においても、まったく認められ

ていない。しかしながら、屋蓋部以外の箇所は宝塔本来の形態を踏襲したものであり、ここに着目するならば、金工品や絵画のなかいくつかの類例をあげることができる。

まず、金工品としては、法隆寺献納宝物中の金銅宝塔や山形県・報恩寺金銅宝塔、奈良県・個人蔵の金銅宝塔があげられる。

法隆寺献納宝物金銅宝塔は、舍利塔として奈良県法隆寺に所伝したもので、総高68.0cmを測る。基壇下の木製台座裏面には、保延四年(1138)の墨書銘がある。紀年銘品としては最古の遺品で、製作年代は平安時代後期とされている。

報恩寺金銅宝塔は、総高22.0cm、基壇一辺長9.0cmの室町時代の遺品とされている。相輪部の伏鉢が略されるなどの特徴があげられる。塔身部の形態や、屋蓋隅の反り上がりなどが、金・銀・金銅製小型宝塔と近似する資料である。

奈良・個人蔵の金銅宝塔は、透かし彫りによって塔身部に唐草文が施され、内部の水晶宝珠形舍利容器が透視できるようになっている。基壇には安定感があり、塔身座部には蓮華座が配されている。屋蓋部は特異なもので、花笠宝塔の範疇で考えられるものと思われる。総高40.6cmで、鎌倉時代の作と考えられている。

次に絵画資料のなかでは、法華経経巻の見返絵などに描かれた宝塔が注目される。

広島県嚴島神社蔵の紺紙金字法華経丙本巻第四見返絵(12世紀)、福島県松山寺蔵の紺紙金字法華経巻第四見返絵(12世紀)、愛媛県大仏神社蔵の紺紙金字法華経巻第四見返絵(12世紀半ば頃)に描かれている宝塔が類例としてあげられる。基壇・塔身の形状には安定感があり、屋蓋は膨らみをもつ。全体的なシルエットが、金・銀・金銅製小型宝塔との類似性を想起させる。

基壇・塔身の形状が金・銀・金銅製小型宝塔に類似する資料として、京都府常徳寺蔵の紺紙金字法華経巻第四見返絵・巻第五見返絵(12世紀)に描かれた宝塔があげられる。これらの経巻の見返絵は通例の図様

とは相違し、一箇中に複数の経巻の意図が展開しているため、巻第四見返絵には2基の宝塔が描かれている。屋蓋は嚴島神社等とは異なり、方台形をしているため、全体の形状は異なるが、基壇・塔身の形状はきわめてよく似ているものである。

法華経見返絵の以外の絵画資料としては、法華経金字宝塔曼荼羅図や法華経絵巻、大阪府大蔵寺蔵(旧満願寺蔵)の大概若経紙背印塔があげられる。

大阪府妙法寺蔵の法華経金字宝塔曼荼羅図巻第七葉王品第二三に描かれた宝塔は、塔身軸部の肩部の張りか強いもので、若干棟相を異にするものである。しかし3基の宝塔が並び建つ構図は、金・銀・金銅製小型宝塔の存在と共通するもので、興味深い。金字宝塔曼荼羅は、文字塔を中心にしてその周囲に經典各品の大意を描きめぐらし、造塔、写経および経解説の三功德業を兼行するものとして製作されたものである。

法華経絵巻は経文を和訳した詞書とその内容を図絵して巻物に仕立てたものである。現在鎌倉時代中頃の残欠本三巻が富士記念館、香雪美術館、京都国立博物館(上野家旧蔵)に分蔵されている。このうち香雪美術館に所蔵されている法華経絵巻に描かれた起塔図の部分には宝塔が並び建っており、妙法寺蔵法華経金字宝塔曼荼羅図と同様に注目される資料である。ただしこれは、巻第六神力品第廿一に相当する、「経巻のあるところ、たとえ林中、樹下、僧房であつても塔を建てて供養すべき」ことを説く経意を描いたもので、単純に宝塔が並び建っている構図とは異なる。

大蔵寺蔵の大概若経紙背印塔は基壇の代わりに蓮台を設けたものである。全体的な形態は、金・銀・金銅製小型宝塔ときわめてよく似ている。相輪部請花の形状は金製小型宝塔のものに類似し、また鸞盤も略されている。感覚的には、金・銀・金銅製小型宝塔と最も近似した資料と感じられる。年代については、天永3年(1112)・永久2年(1114)・永久3年(1115)等の書写の奥書があるものの、部分的な特徴からはこの頃までさかのぼらせることに疑問が出されている。また文永(1264~75)・正和(1312~17)頃の修復路も

あり、この頃に散佚に備えて塔印を押したものと推測されている。印塔高は13.5cmを測る。

このように金・銀・金銅製小型宝塔は、平安時代後期から鎌倉時代の法華経絵等に描かれている形態を踏襲している。特に、安定感の高い基壇部の形状や側面部の表現は、金・銀・金銅製小型宝塔とさきわめてよく似ている。著名な金工品のなかには、このような基壇はなぜか見られず、注目される点でもある。その一方で、平安時代の法華経見返絵に描かれた宝塔の基壇上面には格子模様が表示されているが、金・銀・金銅製小型宝塔にはこのような意匠はいっさい認められない。

この他に、毘沙門天像が手に捧げ持つ宝塔も注目される。ただし、毘沙門天を描いた絵画に類例が認められるのみで、仏像として有名な毘沙門天像が手に持つ宝塔には見あたらない。もし仮に、類例があったとしても、仏像の持物は後に取替えられたりする例があることから、時期を類推する資料としては慎重さを要する。

滋賀県聖衆来迎寺が所蔵する十二天像（絹本着色・十二軸）の毘沙門天（13世紀）が手に持つ宝塔には、屋蓋の上面に花卉が表現されている。これは金・銀・金銅製小型宝塔の屋蓋上面のとの関連が想起され、きわめて興味深い構図である。

一方、銅・鉄製小型宝塔と同様に、五輪塔様の基壇・塔身・屋蓋に相輪が付された構成をとるものは、何例か認められている。

小型品としては、個人蔵の水晶宝塔（鎌倉時代）がある。これは、ことごとく五輪塔形を呈している水晶製の塔のなかで、唯一宝塔形をかたどったものである。この水晶宝塔は総高20.4cmで、水晶製のものとしてきわめて大型のものである。相輪部は露盤・伏鉢・諸花・九輪・諸花・宝珠からなり、宝塔本来の相輪構成を踏襲している。塔身部は有頸で、銅製小型宝塔や他の水晶製五輪塔とは異なっている。

また石造塔にも類似する構成を持つものがあり、越前宝塔や国東宝塔、上毛（赤城型）宝塔と分類されるものがあげられる。ただし、越前宝塔・国東宝塔では

塔身座部に蓮華座が配され、上毛宝塔は有頸のものである。

金工品としては、錫杖頭にモチーフされた宝塔のなかにも、同構成の塔がみられる。一例として、嘉元2年（1304）銘のある銅鑄製錫杖頭（個人蔵）があげられる。中央の塔形が銅製小型宝塔と同構成のもので、両脇に瓶、頂部には五輪塔が配されている。同様のモチーフをとるものとして、奈良県長谷寺藏例（鎌倉時代）や平安時代の個人蔵例などがある。また中央に通常の宝塔、両脇に瓶、頂部には五輪塔が配され、瓶の蓋には花卉が表現された未開敷蓮華がかたどられている錫杖頭（東京国立博物館所蔵・13世紀代）は、小型宝塔・小型未開敷蓮華との関連から興味かひかれる。

例にあげた錫杖頭の宝塔は、杖から一直線上に輪の中央を貫くように配されているため、相輪部がきわめて高いアンバランスなものである。また頂部には五輪塔が配されていることから、相輪を立てた塔の製作を主眼に置いたものと考えられるよりも、むしろ図形構成に起因するものとして考えた方が妥当なのではないだろうか。さもなくば、形態が異なる塔を配した説明がつかず、頂部にも相輪を立てた塔が表現されているべきである。

小型未開敷蓮華については、蕾をつけた蓮茎を表現したものあるかゆえに、年代の推移に伴って、形状が変移するものではない。そのため、形態から製作年代を推測することは、不可能に近い。

小型未開敷蓮華と形状が同じものに、持蓮華という僧具がある。これは時宗の法要・合掌礼拝の際に、掌中におさめ、中指と中指の間に挟んで用いるものである。普通は一木から彫出され、これに漆を塗布して仕上げられるものである。遺品は少なく、静岡県西光寺（室町時代）・山形県仏向寺・群馬県関名寺・奈良県唐招提寺（江戸時代）で知られている程度である。

また持蓮華とよく似た未開敷蓮華が、仏像の胎内に納入されている例がある。そのひとつは、京都府大念寺阿弥陀如来像に納められていたもので、木製漆箔のものである。朱書銘によって、仁治元年（1240）

に浄土宗西山派の開祖証空が納めたものと記されている。ほかには、山梨県科願寺の他阿上人真教座像（鎌倉時代末）にも納入例がある。

さらに未開敷の蓮華は観音菩薩像の持物としてもみられる。蓮華の花弁の色は、青・紅・白・黄の四種と、さらに漢訳に紫もある。

これに関連するものとして、奈良県西大寺蔵の鉄宝塔納置五狀舍利容器がある。これは未開敷蓮華を挿す華瓶形をしたもので、青・赤・白・黄・黒の五色に彩られたものである。形態こそは異なるが、小型未開敷蓮華と同様にすべての色合いが異なり、数も一致するもので、注目される資料である。納置した鉄宝塔には、弘安6年（1283）年の銘がある。

宝塔の変遷について

このように類似資料がきわめて貧困な現状において、小型宝塔・小型未開敷蓮華の製作年代を明確にすることはできない。しかし、小型宝塔の形状から、ある程度の幅をもった期間を抑えられないこともない。

宝塔の造立は、平安時代後半から鎌倉時代に最も栄え、室町時代以降に次第に衰えていった傾向が窺取されている。この盛衰に伴って、形状にも時間的変遷が窺われるものとされている（石田1969）。

塔身頸部には有頸のもの、無頸のものがあり、全体的には有頸が多く、無頸は少ない。年代的には、有頸が平安時代後半から鎌倉・室町時代を通じて存在するが、無頸は鎌倉時代以降に限られるものとされている。また頸部に勾欄（欄干）を廻すものと、廻さないものがあり、全体的には平安時代後半の宝塔には廻すものが少なく、鎌倉から室町時代にかけてのものに多いとされている。

入口部は設けるものと設けないものがあり、入口部を設けたものには四方に開いたものと正面だけのものがあるが、これらには時代的な区別はない。入り口部の形には長方形のものと、室町時代以降に流行したアーチ形・剣先形のものがある。

屋蓋は方形四脚式のもので年代的な変遷は少ないが、唐破風式にムクレをもたしたものは、室町時代以降の

流行とされている。

基壇は平面正方形、側面長方形のものである。基壇上面は、無文を基本とする。側面には、無文のもの、周りに枠を取ったもの、周りに枠を取って内に香様をあらわしたもの、中東を造りだして二枳形をあらわしたもの、二枳形のそれぞれに香様をあらわしたもの、中東を二本にして三枳形にしたもの、三枳の各々に香様を入れたもの等がある。香様を加えたものは鎌倉時代のものに多く、枳形だけのものは室町時代のものに多く、無文のものは各時代に通じて見られるとされている。

このような宝塔の変遷を要約すると、初期には覆鉢塔の造制を伝えた有頸中高饅頭に方蓋・相輪を載せたものから、平安時代後半には塔身を高くするものがあられ、鎌倉時代になると無頸のものや基壇に香様を飾るものが見られる。さらに南北朝時代には勾欄を廻したものが多くなり、室町時代になると塔身の入口をアーチ形・剣先形に開くものがあらわれてくる。

さて、小型宝塔の各要素を宝塔の変遷過程にあてはめると、入口部の形状や勾欄が廻らない点などに、平安時代後半から鎌倉時代の様相が見られる。また安定感のある形態や、基壇と塔身の絡繰り方などに、鎌倉時代の特徴が認められている。さらに、屋蓋上面に飾られた開敷蓮華は、兵庫県太山寺蔵の法華経軸端（軸首）の頂にあしらわれた文様（12世紀）に類似する。そして、さまざまな金属を用いた金工品は、室町時代までは降らず、かといって、平安時代まではさかのぼらないとされている。

その一方で、屋蓋の表現が室町時代の報恩寺金銅宝塔と酷似し、また銀・金銅製小型宝塔の雨花に施された透彫りが、南北朝時代に流行する技法とされている。

年代決定の手法としては、新しい要素をもってその年代を位置づけるのが妥当なのかも知れない。しかし、各要素の年代観測・流行の盛期をとらえたもので、初現から終焉までの変遷や時間的な推移までは明確には把握されていない。年代が与えられている遺品のなかに

も、より新しい要素が認められる例も少なくはない。そのため、新しい要素のみに着目して年代を決定することには、大きな危険が伴うものである。そのため、小型宝塔は古い要素を色濃く残しながら、新しい要素も取り入れているものであり、これを特徴の一つとして理解しておきたい。

小型宝塔・小型未開敷蓮華の製作年代について

第01号基壇状遺構の上層年代と中世瓦の年代は、発見された寺院跡の存続年代を知る手がかりとなり、少なくとも、12世紀から14世紀前半頃には存続していたことが推測される。この年代は小型宝塔・小型未開敷蓮華を出土した第48号土坑の年代を示すものではないが、これと大きな隔りをもつ時期とは考え難い。また第48号土坑の年代は、小型宝塔・小型未開敷蓮華の埋納年代を示すもので、製作年代を示すものではない。仏教遺物である性格上、伝世された可能性が高く、埋納年代と製作年代が必ずしも一致している必要はない。しかし製作年代は、第48号土坑の年代を降することはあり得ない。

金工品や絵画の類似資料や宝塔の年代的推移から、小型宝塔は平安時代末から鎌倉・南北朝時代にかかる頃に製作された可能性がある。この時期と、寺院の存続年代や、ここから推測される第48号土坑の年代には大差がみられない。そのため、小型宝塔の製作年代は、これと併行するか、もしくは大きく逸脱しない時

期と考えることができる。また現状においては、これを否定する根拠もなく、妥当性が高いものと思われる。

小型未開敷蓮華の製作年代も、小型宝塔と伴出し、対応する5種類の同材質の金属から製作され、さらに数量も一致していることから、小型宝塔と同時、もしくはきわめて近い時期が考えられる。

小型宝塔・小型未開敷蓮華が埋められていた漆箱については、既に木質部を失った漆膜の状態のため、形態や大きさの復原すらも困難であり、ましてや製作年代を推定することは至難の技である。たとえ漆箱の年代を知ることができたとしても、この年代は埋納年代の上限を示すものにすぎない。

以上のように、小型宝塔・小型未開敷蓮華が平安時代後半以降から室町時代にかかる頃に製作された可能性が推測された。現状においては、このような時間幅のある年代観しか示すことができない。状況証拠として第48号土坑や漆箱の製作年代から、製作年代を類推することも必要ではある。しかし小型宝塔・小型未開敷蓮華の製作年代がこれらの年代と一致している確証もなく、また伝世などの条件を考えると、一致していない可能性が高い。今後、製作年代を明確にしておくためには、類似資料の増加につとめるとともに、新資料の発見に期待し、さらには金工技術的な追求も加味される必要がある。

3. 小型宝塔・小型未開敷蓮華の性格等について

セット関係

さて、小型宝塔・小型未開敷蓮華の性格等について考えていく前に、小型宝塔・小型未開敷蓮華・漆箱・第48号土坑という、それぞれの関係について整理しておかなければならない。これらの関係のとりえ方次第によっては、その方向性が異なってくるのが予想されるからである。

まず5基の小型宝塔と5本の小型未開敷蓮華の関係については、

A：小型宝塔・小型未開敷蓮華を、それぞれ単品として把握する

B：小型宝塔5基と小型未開敷蓮華5本を、すべて1セットとして把握する

という、セット関係がまず想起される。

次に、小型宝塔と小型未開敷蓮華をそれぞれ別のセットとしてとらえ、さらに金・銀・金銅製と銅・鉄製が形態的に分類できることも加味すると、

C：小型宝塔5基の1セットと小型未開敷蓮華5本の1セットとして把握する

D：小型宝塔5基の1セットと、金・銀・金銅製小型未開敷蓮華3本と、銅・鉄製小型未開敷蓮華2本の2セットとして把握する

E：金・銀・金銅製小型宝塔3基と銅・鉄製小型宝塔2基の2セットと、小型未開敷蓮華5本の1セットとして把握する

F：金・銀・金銅製小型宝塔3基と銅・鉄製小型宝塔2基の2セットと、金・銀・金銅製小型未開敷蓮華3本と銅・鉄製小型未開敷蓮華2本の2セットとして把握する

という、セット関係も考えられる。

ここで、「5基の小型宝塔と5本の小型未開敷蓮華が漆箱に納められた状態で第48号土坑から発見されている」という事実関係とこれらのセット関係を比較検討すると、5基の小型宝塔と5本の小型未開敷蓮華のすべてを、一括してセットとして把握することが最

も妥当な判断といえる。

小型宝塔・小型未開敷蓮華を一括セットとして把握する考え方は、材質や製作技法からも傍証される。まず定量分析による元素濃度の割合は、きわめて近似する値が得られており、同材質の小型宝塔と小型未開敷蓮華が同時に製作されたことを示唆している。さらに、金・銀・金銅製については、小型宝塔の形態や製作技法の酷似に対応して、小型未開敷蓮華も形態や製作技法が酷似し、小型宝塔と小型未開敷蓮華の同時製作を暗示している。

このように、それぞれ金・銀・金銅・銅・鉄の異なる金属で製作された5基の小型宝塔と5本の小型未開敷蓮華には、個体数・材質に対応関係を認めることができる。これは小型宝塔・小型未開敷蓮華の大きな特徴の一つである。金・銀・金銅・銅・鉄に加えて、仏教関連の遺品からは水晶・錫・木等の材質の存在も考えられないこともない。しかしこれらの残欠などはいっさい発見されておらず、当初から金・銀・金銅・銅・鉄の5種類の材質以外は存在していなかったものといえよう。

また小型宝塔・小型未開敷蓮華と漆箱の関係については、専用の入れ物ではなく、経箱と推定される漆箱に二次的に納められていたことから、この箱に納めることを前提に小型宝塔・小型未開敷蓮華は製作されていない。

さらに出土状況については、的確な解釈が得られておらず、埋納を前提に小型宝塔・小型未開敷蓮華を製作したものかどうかは判断できない。

小型化

小型宝塔・小型未開敷蓮華は、きわめて小さなものである。しかし、この点のみに着目して、ミニチュア製品と即断することは危険である。参考例としては、奈良県興福寺金堂鎮壇具があげられる。比較的小さな宝物で構成され、興味がひかれる。ただし、これを鎮壇具として埋納するがために小型化させたものとする

意見と、本来の用途が異なるものであるという小型化を否定する意見とにわかれていた。

小型品としては、密教法具のなかに旅壇具というものがある。修法に必要な最小限の法具一式を小型につくり、壇箱に納めて携行の便を図った壇具一式である。修法に際しては、壇箱の天板に配置し、修法壇とする。高知県金剛頂寺に平安時代後期のものが伝存する。この旅壇具と小型宝塔・小型未開敷蓮華は、直接には結びつかないが、小型化に着目するならば、小型宝塔・小型未開敷蓮華を移動用の仏具としてみることも可能ではある。

小型宝塔・小型未開敷蓮華の用途

小型宝塔の用途としては、仏塔が仏舎利の奉安・供養を目的に起立されたものであることから、まず仏舎利との関連が想起される。

鉄製小型宝塔を除く、金・銀・金銅・銅製の4基の小型宝塔は、塔身軸部が空洞になっている。金・銀・金銅製小型宝塔には開閉可能な扉が設けられ、塔身軸部には長方形の扉口が切り込まれている。銅製小型宝塔は塔身部と屋蓋部を納差して積み重ねる形式のものである。このように、これら4基の小型宝塔には、塔身部にも物を入れる機能が備わっている。そこで舎利容器を安置する舎利塔や、仏舎利を直接納める塔形舎利容器という用途が考えられる。

寺院に伝存する舎利塔は、かなり大きなものが多い。例えば、奈良県西大寺の金銅宝塔（文永7年=1270銘）は総高91.0cmで、蓮台火焰宝珠形舎利容器（総高21.4cm）が安置されている。同じく西大寺の鉄宝塔（弘安6年=1283銘）は総高172.7cmとかなり大型のもので、内部には上方に火焰宝珠を飾る蓮台形舎利容器を蔵した警鋼製の五瓶が奉安されている。このように、舎利塔は内部に莊厳性が追求された舎利容器を納めるために、大型品が製作されている。

このような舎利塔と比較すると、小型宝塔はたいへん小さなものである。また塔内部に奉安されていた舎利容器や、これに関連する遺物も皆無である。そのため小型宝塔の用途として、舎利容器を安置する舎利塔

とは考え難い。

次に現存する小型塔形品の用途は、舎利容器もしくはこれにきわめて近い存在のものである。

小型の塔形舎利容器は、水晶製の五輪塔形舎利容器がほとんどである。この水晶五輪塔形舎利容器は透視性の高い水晶を素材として、内部に奉納した仏舎利を確認できるよう配慮されている。これは礼拝対象の仏舎利への親近感を深め、分粒・相承される仏舎利の存在を明確にすることも意図している。通常、水晶五輪塔形舎利容器は、塔形の外容器（舎利塔）や宮殿をかたどった舎利殿（舎利厨子）に納められて、仏殿内に安置されている。構造的には、水輪・火輪を納差して積み重ねるもので、空洞になっている水輪に仏舎利を奉納するものが多い。この構造は、銅製小型宝塔も同様である。

小型の金属製塔としては、広島県光明坊蔵の金銅有頭五輪塔（総高6.45cm）、奈良県大和般若寺十三重石塔納置舎利具の金銅五輪塔などがある。光明坊の有頭五輪塔は五輪塔形の火輪部を塔身に見たて、これを瓶形（有頭壺形）としたものである。塔身内部には、円筒形舎利容器を蔵している。この有頭五輪塔は、既成の塔である宝塔や宝瓶塔に五輪思想が組み入れられて五輪塔形式の完成をみるに至ったことを示唆する例でもある。

その他の小塔として、泥塔・椶塔・分骨小塔もあげられる。

泥塔は、『仏説造塔延命功德経』をもとに密教修法が加味された「泥塔供作法」ののちとして製作された、陶製素焼きの小塔である。平安時代末から鎌倉時代に最盛期を迎えている。塔形は、白鳳時代には伏鉢塔式・段塔式、奈良・平安時代には層塔式、平安時代後半には宝塔式、鎌倉時代には五輪塔式・宝篋印塔式、室町時代以降は泥板キリク字塔というように、製作年代による変遷が看取されている。

椶塔は『一切如来心秘密全身舎利宝篋印陀羅尼経』を思想的典拠として、木製の小型宝篋印塔に宝篋印陀羅尼の刷本と椶を納めている。椶（米粒）は仏舎利を

象徴するものとして用いられている。この米粒を仏舍利とする発想を拡大解釈し、五穀も仏舍利に見たて、これを5基の小型宝塔と対応させる考え方も出されている。「五穀塔」とも言うべき案であるが、親塔と小型宝塔とでは根本的な塔形が異なっており、積極的に支持し得ない。

分骨小塔は、亡者の遺骨を仏舍利に準じて木製の小塔に納め、これを日本各地の霊場に安置する分骨方法である。塔形は五輪塔を主体に、宝篋印塔・宝塔・多宝塔・層塔等がみられる。この風習は鎌倉時代中期頃から流行し、室町時代にその最盛期を迎えている。

このような小型塔の性格から、小型宝塔の用途を舍利容器と考えるのが、最も蓋然性が高いようである。ただし、舍利容器ならば当然納められていたはずの仏舍利は、発見されていない。

小型宝塔の用途を舍利容器とする考え方は、あくまでも個々の小型宝塔の用途についてのみにあてはまることである。小型宝塔5基のセットとしての用途については、材質や形態が異なることや、鉄製小型宝塔には物を入れる機能が認められないことなど、解決すべき問題が残っている。

次に、小型未開敷蓮華の用途であるが、形態が類似する時宗僧具の特蓮華や仏像胎内納入品の未開敷蓮華、仏像持物と関連づけてしまうと、理解が困難となる。そのため、これらとは切り放して、用途・性格等について考えていく必要がある。

仏教において、仏・菩薩の座す蓮華座は、荘厳具の一つとして欠かせないものである。また舍利容器や舍利塔の請座として、蓮華座を用いた例も数知れない。これに対して、蓮華そのものが舍利容器の体裁を備えた形式として、蓮華形舍利容器がある。遺品としては京都府宇治浮島十三重石塔（弘安9年・1286発願）奉籠蓮華形舍利容器、福岡県福岡市美術館蔵の金銅宝塔納置舍利容器、奈良県唐招提寺「大聖竹林寺」銘舍利容器、奈良県東大寺浄土堂金銅三角五輪塔納置舍利容器、西人寺金銅透形舍利塔納置塔鉢奉籠舍利容器等が代表例である。いずれも分造積み上げ式の金銅製で

ある。これらの蓮華形舍利容器から、仏舍利と蓮華の関連に注目し、蓮華を舍利に見たてる考えも出されている。

これと関連して、小型宝塔は小型であるがゆえに、塔身内部に仏舍利を納めるための設備を細工することが困難であり、また鉄製小型宝塔の塔身内部に物を入れる機能が認められないことから、仏舍利を小型未開敷蓮華に代用させた可能性も想起されている。しかしこの考え方に対して、小型未開敷蓮華が塔身内部に安置できない大きさであることから、反対する意見もある。

そこで注目されるのは、西大寺鉄宝塔納置五瓶舍利容器である。これは大小五瓶からなるもので、未開敷蓮華を挿す華瓶形をしている。肩部で上下二区に分かれ、火焔宝珠形と蓮華形の折衷形式の金銅舍利容器が納められている。この五瓶には白・黄・赤・青・黒の紐がまかれ、蓮華も彩られている。個数とそれぞれ異なる色合いをみせている共通点から、小型未開敷蓮華の理解には欠かせない資料である。またこれと同様の資料として、山口県浄土寺金銅三角五輪塔安置舍利容器の蓋には、未開敷の蓮華が彫られている。さらに錫杖頂のなかに、モチーフされた瓶の蓋に未開敷蓮華が表現されているものもある。

このような瓶の蓋に未開敷蓮華が彫されたものとの関連から、やはり小型未開敷蓮華と仏舍利の関係が想起されてくる。ただし、小型未開敷蓮華の基部は長く、瓶に関する遺物は発見されていない。恐らくは、もともと存在していないのであろう。そこで、想像をたくましくすると、小型未開敷蓮華の基部を瓶に見たて、西大寺鉄宝塔納置五瓶舍利容器に類似するものを表現していた可能性も考えられるのではないだろうか。

以上のように、小型宝塔と小型未開敷蓮華の用途については、依然として不明のままである。これは類例の認められない資料であると同時に、出土状況についても的確な解釈を得られていないことにも起因している。今後、出土状況に関わる儀礼の解明とともに、塔と蓮華およびこれらの関係について、より深く追求し

ていく必要がある。

思想的背景

小型宝塔・小型未開敷蓮華については、いくつかの思想的背景が想起される。

小型宝塔・小型未開敷蓮華は金・銀・金銅・銅・鉄という、すべて異なる材質によって製作されている。伝存する金属製の宝塔は金銅製が主体で、これに鉄製などがみられる。すべて材質を違える小型宝塔・小型未開敷蓮華はきわめて特異な例であり、大きな特徴でもある。

まず、このように異なる材質を用いることから、茶毘に付される前の釈迦の棺が想起される。この棺は、金・銀・銅・鉄でしつらえられた四重棺であったと説かれている。さらに、仏塔の内部や塔基に奉安されている舍利容器も想起される。通制では二重・三重の入れ子状容器で、仏舎利の直接容器を瑠璃(ガラス)や水晶や黄金でつくり、これを銀・銅・石製の外容器で順次被覆するという厳重な保護手段をとっている。これは釈迦の四重棺と共通する発想である。仏舎利が釈迦の遺骨であり、これを納める舍利容器はいわば骨蔵器ともいえるもので、さらに仏舎利を釈尊のものとして信仰することからも理解できる。このような釈迦の四重棺や仏塔奉安の舍利容器との関連は、小型宝塔・小型未開敷蓮華の用途として仏舎利との関連が考えられることから想起させられる。

小型宝塔・小型未開敷蓮華は釈迦の四重棺にならって、異なる材質によって製作されたものとも考えることもできる。あくまでも金・銀・銅・鉄の4種類の材質にこだわるならば、銅を素材として、金・銀製と酷似した金銅製品と、鉄製に酷似した銅製品を製作し、結果的に5基の小型宝塔と5本の小型未開敷蓮華を製作することとなったというような解釈を必要とする。この根底には、材質的な差異から、鉄によって金・銀と酷似した製品を製作することが困難なため、異なる形態のものを製作せざるを得なかった。そこで銅を素材として、金・銀製に酷似させた金銅製品と鉄製に酷似させた銅製品の2つを製作し、形態的な差異をごまか

したもとのする想像が前提となる。しかしながら、この解釈には多くの疑問がつきまとう。まず鉄を素材として、金・銀と酷似した製品を製作できないことを証明しなければならない。また常識的には、鉄を素材としては製作できないにしろ、多少でも形態を似せる工夫が認められるべきであるが、これに反して全く異なる形態のものを製作している。さらに銅を素材として2形態のものを製作したという発想ならば、金・銀製に酷似させた製品に金鍍金を施すと同時に、意図的に銀色に発色させた箇所も存在し、なぜ金・銀・銅製品とは異なる個性を主張させたのかといった疑問も出てくる。このような疑問が解決されなければ、釈迦の四重棺にならったという解釈を肯定することはできない。

次に、5基の小型宝塔・5本の小型未開敷蓮華の数から、五行思想との関連が想起される。五行思想とは、木・火・土・金・水の五行を万物組成の元素と考え、宇宙間のはことごとく五行の変化により生ずるとする説である。さらに、宇宙間における森羅万象を陰と陽の關係に置き換えてとらえようとする二元論が加わり、この陰陽が互いに交感・交合して、万物は生成化育・榮枯盛衰を繰り返すという陰陽五行説につながっている。日本には6世紀頃に伝わり、社会生活を束縛する俗信となっていった。

このような思想は、「地・水・火・風」の四大元素とそれらを入れる宇宙の器としての「空」という函式の宇宙像をあらわし、密教曼陀羅や五輪塔として具現化されている。五行元素は、色彩・方位・季節・時間・惑星・十干・十二支・内臓・精神にいたるまでではめられている。この影響が看取できる代表例として、西大寺鉄宝塔納置五瓶があげられる。

五行思想と、5基の小型宝塔・5本の小型未開敷蓮華との関係について解明していくことはきわめて難しい。しかしながら、この思想が日本仏教にも取り入れられている社会的背景から、小型宝塔・小型未開敷蓮華の製作やこれを用いた儀礼に、その影響を想定することは許容されよう。その一方で、五行思想の影響を受けながら、小型宝塔が五輪塔形式ではなく、あくま

でも宝塔形式をとっていることは、注目される特徴である。

さらに小型宝塔・小型未開敷蓮華は經典や宗派による影響も受けていたことが、当然のことながら、想像される。

発掘調査によって発見された寺院跡の宗派については明確ではないが、丘陵斜面部に建立された立地条件や、トネ山頂の寺院が再建されたという伝承が残る常福寺が新義真言宗智山派であることから、密教系の寺院であったとも考えられないこともない。

日本の密教には、大日経と金剛頂経を根本聖典とする真言宗（東密）と、法華経を所依の經典とする天台宗（台密）があり、さらにそれぞれがいくつかの派に分かれている。空海が密教經典ともに、宝塔様式をも再度精来したものとされ、密教と宝塔には深い関連がある。また密教経説では、宝塔を大日如來の三昧耶形であるとしている。三昧耶形とは仏の本誓の標識という意味で、この塔形が大日如來そのものであるとするものである。そのため、平安時代以降の密教の隆盛に伴って、宝塔の建立が増加した。

数多い經典のなかで、法華経が宝塔と最も深いかかわりをもつ。妙法蓮華経巻第四見宝塔品第十一によると、多宝如來を象徴する宝塔が地中より涌出し、法華経の真实性を証明し、さらに教えを説く釈迦仏とその教えの絶対性をあらわしたものとされている。この二仏並座を具現化したものが、多宝塔とされている。法華経巻第四見返絵に宝塔が描かれているのは、この経説を表現したためである。またこの経説に従って、

Ⅶ-1・2・3において取り上げた資料については、以下の文献に掲載されている。これ以外にも掲載文献は多数認められるが、ここでは参考文献としたものを主体とした。

奈良原山跡出土鉄宝塔

岡崎誠治監修 1982 『仏具大事典』P.69 44図

鞍馬寺経塚出土銅宝塔

岡崎誠治監修 1982 『仏具大事典』P.69 43図

法華経を根本經典とした天台宗では、宝塔が盛んに建立されている。

法華経は宝塔のみならず、蓮華とも関係の深い經典である。法華経の梵文原典の題名を直訳すると、「正しい教えの白蓮」となる（坂本・岩本1962）。白蓮は清らかさと美しさをあらわすと同時に、根が泥に埋もれながらも、それに染まらぬ美しく、清浄なる花を咲かせる姿を経説にたとえたとされている（鎌田1994）。このように法華経の経説を紐解くと、小型宝塔・小型未開敷蓮華のセットは、まさに法華経の教えを具現化した姿とする錯覚を覚えさせる。

このように、小型宝塔・小型未開敷蓮華には、材質の違いから釈迦の四重箱や仏塔埋納舍利容器、「5」という数から五行思想、宝塔形式から密教や法華経とのかかわりなど、いくつかの思想的背景が想起される。また小型宝塔・小型未開敷蓮華の製作の背景には、これらの思想のほかにも当然考えられるであろう。ただし、これらの思想と、小型宝塔・小型未開敷蓮華の関連については、なにごと一つ解明された訳ではない。けれども、これらの思想なども関連していたことは想像に難くない。

以上のよう、小型宝塔・小型未開敷蓮華については、出土状況の解釈や製作年代の究明、用途や思想的背景等、数多くの不明な点が依然として残されている。ここでは想定される事柄を列挙したが、現状においては、いずれも推測の域を脱するほどの理解には達していない。これらを布石として、今後の研究のきっかけとなることを願うと同時に、検討すべき課題が一刻も早く、解明されることを期待する。

岡 秀夫 1990 『経塚とその遺物』【日本の美術】第292号
P.23 第30図

鞍馬寺経塚出土鉄宝塔

岡 秀夫 1990 『経塚とその遺物』【日本の美術】第292号
P.23 第31図

法隆寺献納宝物・金剛宝塔

石田茂作 1969 『日本佛塔 図版』第173図

- 石田茂作編 1972 『塔一塔婆・スツーパー』『日本の美術』
第77号 P.43 第69回
- 岡崎謙治監修 1982 『仏具大事典』P.23 181回
- 河田 貞 1989 『仏舍利と経の荘嚴』『日本の美術』
第280号 P.36 第51回
- 報恩寺・金銅宝塔
石田茂作 1969 『日本佛塔 図版』第183回
- 個人藏・金銅宝塔
河田 貞 1989 『仏舍利と経の荘嚴』『日本の美術』
第280号 P.42 第59回
- 巖島神社・紺紙金字法華経内本卷第四見返絵
奈良国立博物館 1979 『法華経の美術』P.146
- 松山寺・紺紙金字法華経卷第四見返絵
奈良国立博物館 1979 『法華経の美術』P.158
- 大山祇神社・紺紙金字法華経卷第四見返絵
奈良国立博物館 1979 『法華経の美術』P.160
- 常徳寺・紺紙金字法華経卷第四見返絵
奈良国立博物館 1979 『法華経の美術』P.162
- 常徳寺・紺紙金字法華経卷第四見返絵
奈良国立博物館 1979 『法華経の美術』P.162
- 妙法寺・法華経金字宝塔曼荼羅図巻第七
有賀祥隆 1988 『法華経絵』『日本の美術』第269号
P.40 第55回
- 香雪美術館・法華経絵巻
有賀祥隆 1988 『法華経絵』『日本の美術』第269号
P.40 第55回
- 大藏寺・大般若経紙背印塔
石田茂作 1969 『日本佛塔 図版』第243回
- 石田茂作編 1972 『塔一塔婆・スツーパー』『日本の美術』
第77号 P.89 第240回
- 聚楽米迦寺・十二天像
東京国立博物館他編 1986 『北都山と天宮の美術』
P.47・147
- 個人藏・水晶宝塔
河田 貞 1989 『仏舍利と経の荘嚴』『日本の美術』
第280号 P.45 第65回
- 西光寺・持蓮華
蔵田 蔵 1967 『仏具』『日本の美術』第16号 P.83
第151回
- 岡崎謙治監修 1982 『仏具大事典』P.231 58回
- 大念寺・阿弥陀如来立像胎内納入未開敷蓮華
栃木県立博物館 1990 『中世への旅一聖と俗の間で』P.9
- 称願寺・他向上人真教座像胎内納入未開敷蓮華
鈴木規夫 1989 『供養具と僧具』『日本の美術』第283号
P.74 第142回
- 西大寺・鉄宝塔納置管銅製五瓶舍利容器
河田 貞 1989 『仏舍利と経の荘嚴』『日本の美術』
第280号 P.5 第8回
- 岡崎謙治監修 1982 『仏具大事典』P.30 住19
- 天山寺・法華経軸
岡崎謙治監修 1982 『仏具大事典』P.51 7回
- 河田 貞 1989 『仏舍利と経の荘嚴』『日本の美術』
第280号 P.14 第23回
- 興福寺・金堂鎮壇具
蔵田 蔵 1967 『仏具』『日本の美術』第16号 P.4 第5回
- 金剛頂寺・旅壇具
蔵田 蔵 1967 『仏具』『日本の美術』第16号 P.79
第144回
- 飯田宗彦 1989 『密教法具』『日本の美術』第282号 P.16
第22回
- 西大寺・金銅宝塔
岡崎謙治監修 1982 『仏具大事典』P.25 23回
- 河田 貞 1989 『仏舍利と経の荘嚴』『日本の美術』
第280号 P.5 第7回
- 西人寺・金銅宝塔納置臺台火焰宝珠形舍利容器
河田 貞 1989 『仏舍利と経の荘嚴』『日本の美術』
第280号 P.41 第57回
- 西人寺・鉄宝塔
石田茂作編 1972 『塔一塔婆・スツーパー』『日本の美術』
第77号 P.46 第79回
- 岡崎謙治監修 1982 『仏具大事典』P.25 24回
- 河田 貞 1989 『仏舍利と経の荘嚴』『日本の美術』
第280号 P.41 第56回
- 光明坊・金銅有頸五輪塔
石田茂作編 1972 『塔一塔婆・スツーパー』『日本の美術』
第77号 P.45 第75回
- 岡崎謙治監修 1982 『仏具大事典』P.27 26回
- 河田 貞 1989 『仏舍利と経の荘嚴』『日本の美術』

第280号 P.7 第11図

大和般若寺・十三重石塔納置舍利具

河田 貞 1989 「仏舍利と経の荘嚴」『日本の美術』

第280号 P.47 第71図

宇治浮島・十三重石塔奉籠蓮華形舍利容器

岡崎謙治監修 1982 『仏具大事典』P.25 28図

河田 貞 1989 「仏舍利と経の荘嚴」『日本の美術』

第280号 P.47 第70図

福岡市美術館・金銅宝塔納置舍利容器

河田 貞 1989 「仏舍利と経の荘嚴」『日本の美術』

第280号 P.42 第58図

唐招提寺・「大願竹林寺」銘舍利容器

河田 貞 1989 「仏舍利と経の荘嚴」『日本の美術』

第280号 P.51 第81図

東大寺淨土堂・金銅三角五輪塔納置舍利容器

河田 貞 1989 「仏舍利と経の荘嚴」『日本の美術』

第280号 P.51 第80図

西大寺・金銅透形舍利塔納置塔鉢奉籠舍利容器

河田 貞 1989 「仏舍利と経の荘嚴」『日本の美術』

第280号 P.51 第79図

淨土寺・金銅三角五輪塔安置舍利容器

河田 貞 1989 「仏舍利と経の荘嚴」『日本の美術』

第280号 P.44 第64図

4. 漆箱について

第48号土坑から出土した漆箱は、木胎部が腐朽して無くなって出土したため、漆膜のみが層状に重なった状態であった。その後のX線透過撮影では、内容物は箱外に押し出され、箱の蓋及び側板等の漆膜は、小断片に折損し、入り乱れて重なっていることが確認された。したがって、各層と漆箱本来の板面（蓋内外面、底板内外面、側板内外面）との対応関係は、不明である。

漆膜取り上げ作業においては、上から層毎に出土位置等を記録しているが、出土状態から漆箱本来の形状を直接判断することは不可能な状態であった。

したがってここでは、出土した漆膜の中から、漆箱本来の形状及び構造等を推測し得る漆膜を抽出し、詳細に観察することによって得られる情報を整理し、今後の漆箱復元のための基礎としたい。

(1) 出土状況

出土漆膜各層の概要については、既に本文中で記しているが、再度補足的にまとめておく。

出土した漆箱の木胎部は腐朽して無くなっているため、塗漆層、下地および木質が薄く残存して一層分の漆膜を構成している。布着せは、下地にその痕跡をとどめている。

黒漆塗り、蒔絵等の加飾は施されず、墨書等も確認できなかった。漆の塗装工程等の詳細は、付録で述べられている。

漆膜の取り上げは、上層から順に番号を付して取り上げた。第1層から第5層までは、各々一層ずつ取り上げているが、第6層及び第7層は、小断片に折損して出土しているため、出土位置を記録して取り上げた。また、発掘現場において、上部及び周辺に散乱して出土した小断片は、上層散乱漆膜として一括した。

出土漆膜で最も広い面積を有するのは、第4層及び第5層であり、その上層第1層から第3層は、各々が漆箱の平面規模に対応するだけの面積を有していたとは考えにくい。したがって、第1層から第3層の漆膜

の重なり関係は、漆箱の平面形を構成する板の枚数に直接結びつくものではないと思われる。

なお、取り上げ作業中に、覆輪、紐金具、鉄釘等の箱に伴う金属製品は確認されなかった。

(2) 漆膜の分類と相当部位

折損して断片となっている漆膜の中から、漆箱本来の形状及び構造を推測し得る漆膜を抽出し、その断面形によりa～eの5類に分類した（第277・278図）。したがって第1層から第5層のような漆膜の断面形に特徴のないものに関しては、分類から除いた。

分類した漆膜は、すべて上層散乱漆膜及び第6層、第7層に含まれていたものである（第264・267・268図）。

第277・278図中に付した番号は、取り上げ番号であり、層番号と取り上げ順から構成した番号である。また上層散乱漆膜は0層として扱っている。

a類（第277図）

断面形が段となる漆膜の一群である。上層散乱漆膜及び第7層に含まれていた。第7層では、漆箱取り上げ範囲の縁辺部に沿って出土している（第266図）。箱身の立ち上り部の漆膜と考えられる。立ち上りの高さは11mm、蓋が乗る部分の幅は5mmである。布着せは、すべてに認められる。

b類（第277図）

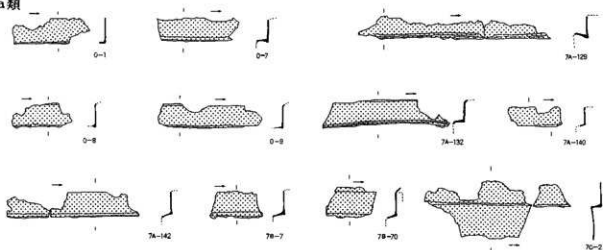
両端部が木質面側に折れ、折れ部を二つ持つ漆膜の一群である。上層散乱漆膜及び第7層に含まれていた。箱身立ち上り部の先端、あるいは蓋の縁の先端部に相当する漆膜と考えられる。これにより、箱板の厚さが推定可能で、0-10が約5mm、0-12及び7C-1が約4mmである。0-11及び0-5は、折れ部の稜線が不明瞭である。

布着せは、0-10と7C-1に認められ、他には認められない。おそらく下地と共に剥落したのと考えられる。

箱身の蓋が乗る部分の幅は、a類により5mmとなる

第277図 漆膜の分類(1)

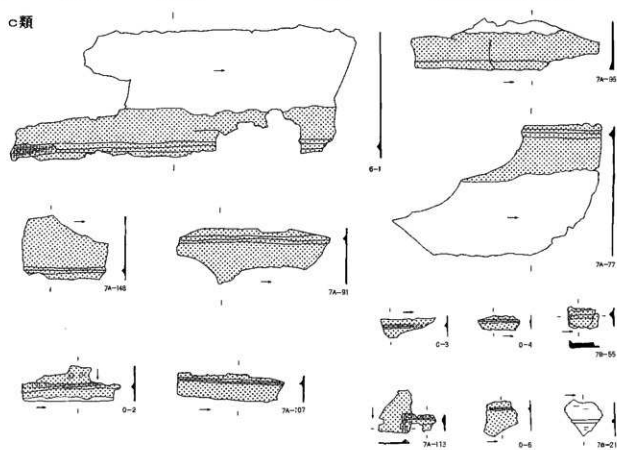
a類



b類

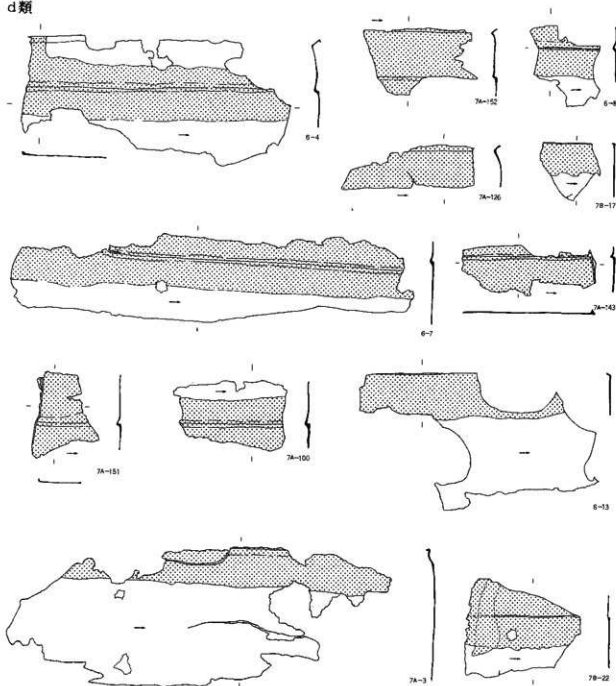


c類

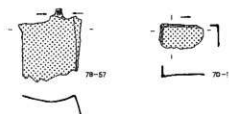


第278図 漆膜の分類(2)

d類



e類



から、蓋の側板の厚さはそれに準じて5mm前後と考えられる。したがって、0-10は、蓋の先端部に相当する可能性が高い。蓋以外に、b類のような漆膜の断片が生じ得る部分は、箱身の立ち上りの突端部であるから、0-12はその部分に相当し、立ち上がり部の板厚は、4mm前後となろう。

c類 (第277図)

木質面側に断面三角形または半円形の漆コクソを有し、塗漆面が平滑な塗膜の一群である。

上層散乱塗膜、第6層、第7層に含まれていた。

漆コクソの寸法は、断面が三角形のものは、幅1.9~4.8mm、高さ1.1~2.4mmであり、半円形を呈するものは、幅1.7mm~2.0mm、高さ1.4mm前後である。

布着せは、漆コクソを中心におき、その左右15mm~20mmの範囲に施した筋布着せと考えられる。ただ、7B-21には、布着せが無い。

6-1、7A-77、91、95、107、148、7B-55の漆コクソは、残存する木質の軸方向に直線的にみられ、おそらく板材の軸方向に沿った木割れに対して、コクソ彫りした後に施されたものと思われる。一方、0-2、3、4、6、7A-113、7B-21の漆コクソのように断面半円形のものや小規模なものは、木割れの他、板表面のなんらかの乱れを調整するためのものとして捉えることが可能であろう。

d類 (第278図)

塗漆面に僅かな段を筋状に有する塗膜の一群である。すべて第6層及び第7層に含まれ、塗漆面を上にして出土したものが多く(塗膜層別一覽表)。

6-4と7A-152は、長辺端部が、木質面側に折れる部分がある。特に6-4では、木質面側に二度折れ、その折線間の幅は4mmである。7A-126及び152は、折れ部から4mmの位置で折損している。また、折れ部から筋までの長さは、6-4、7A-152共に約25mmである。7B-22は、筋状の段が途中で無くなる。

布着せは、c類同様、段部を中心に左右15mm~20mmの幅で施されている。

d類の漆膜は、断面形が段状になることからみて、

二枚の板の矧ぎ合わせ部に生じた僅かな段差(木胎の段差)の痕跡である可能性がある。その部分には、漆コクソをせず、布着せを施しただけであったため、段差が塗漆面にも表れたものと考えられる。7B-22は、その段差が次第に無くなる部分である。

d類は、6-4や7A-152から、箱身立ち上り部の先端から側板内面にかけての部位に相当する可能性があるが、筋状の段差の性格等が不明なため判断は避ける。

e類 (第278図)

a~d類以外の断面形に特徴を有する塗膜を一括してe類とした。7B-57、7D-1が本類に含まれる。

7B-57は、木質面側にほぼ直角に折れる部分を有する。残存する木質の木目は折線に対して直行であるから、箱身あるいは蓋の側板外面の矧目部(コーナー)であると思われる。

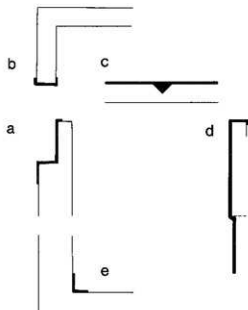
7D-1は、端部が塗漆面側に折れる部分を二方向に持ち、箱身あるいは蓋内面の隅部の特徴をよく示している。

以上の二例には、布着せがある。

(3) 漆箱の構造

塗膜の分類によるa類から、箱身には立ち上り部が

第279図 各類相当部位



あることは明白であるから、合口造りの形式をもつ箱であることが分かる。

漆箱の立ち上り部の製作方法は、いくつか知られるが、本例は金属製の覆輪を装着した彫跡は無く、覆輪自体も出上していないことから、木胎から造り出していることが分かる。立ち上り部を木胎から造り出す方法には、一枚の側板から削り出す方法や、幅の異なる別板を側板に添えて廻す方法などがある（中里1990）が、本例の場合、製作方法を直接判断できる材料は無い。

立ち上りの寸法は、対応する a 類の漆膜から、立ち上りの高さが11mm、幅は4mmである。また、蓋の乗る部位の幅は5mmであるから、蓋側板の厚さは、それに準じて5mm前後となろう。

漆膜分類の d 類にみられる塗漆面側の段差は、板の矧目部に生じた段差であると思われるが、それが意図的に施されたものか、あるいは漆コクソ等の省略から生じた単なる段差であるかは判断できない。仮に意図的に施されたとすれば、箱の構造や機能に係わる重要な漆膜となるが、7B-22のように段差が途中で無くなる例もあり、意図的としては不自然である。

(4) 漆コクソと布着せ

漆コクソは、上層散乱漆膜及び第6層、第7層の漆

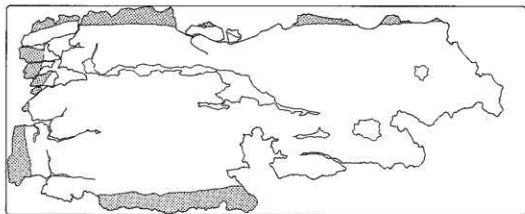
膜にその痕跡が認められる。上層散乱漆膜は、漆箱崩壊段階や出土時に各層から散乱していると考えられ、箱本来のどの板面からの断片であるかは判断し得ない。

漆コクソは、c 類の漆膜のうち、しっかりとしたコクソ彫りを行っている漆膜（第277図 6-1、7A-77・91・107・148・7B-55）では、幅が約3mm～5mm、深さは2mm程度である。その他の漆コクソを含め、その規模は一定しているわけではないので、木割れや板面の乱れに応じた処置として施したものと思われる。漆コクソの施された箱板の箇所は不明であるが、漆コクソの断面形状やその規模に数種類あることから、数ヶ所に行われたと考えられる。

布着せは、板全面に着せる部分と筋で着せる部分（筋布着せ）とがある。全面の布着せは、第1層から第4層までで、第5層以下は筋布着せとなる。漆箱が仮に正位で埋没していたとすれば、蓋の甲面が全面布着せの可能性が高い。筋布着せは、立ち上り部、板の矧目部、漆コクソ部に施されている。

筋布着せに用いられた布の幅は、約30mm～40mm程度である。着せ布の布目は、部分的に乱れが生じているものの、全面に着せる部分、筋布着せの部分共に10mm×10mmの範囲内に縦糸と横糸が14×13本程度（各漆膜の平均）である。

第280図 漆膜平面形の推定線



0 5mm

(5) 漆箱の平面形態

漆箱平面の寸法を推定するのに有用と思われる漆膜は、第4層及び第5層である(第262図1・2)。

第4層及び第5層は、共に面積が大きく、遺存状態良好であり、出土状況ならびに形状の一致から、この二層によって箱平面の板(甲板または底板)一枚分を構成していたものと考えられる。

第4層、第5層とも布着せが認められるが、第4層が全面に認められるのに対し、第5層は、縁辺部のみ認められ、いわゆる筋布着せが施されている。筋布着せは、板の刎目部(箱のコーナー部など)や漆コクソの部分などに施されることが一般的である。したがって、第5層のように縁辺部に残る布着せによって、漆箱の平面寸法の推定がある程度可能である。

第5層の布着せの残存幅は、15~20mmである。外周の折損は、箱の縁の部分で起こると考えられ、布着せの残存幅を考慮すると、着せ布の端から約20mmほどの位置に箱の縁がくると考えられる。第6層や第7層の筋布着せが認められる漆膜においても、漆コクソや筋状の段差を中心に左右15~20mmの範囲で布着せが施されているため、本例に使用された着せ布の幅は、約30~40mmではほぼ統一されていたとみてよい。

これらのことから、推定される漆箱の平面寸法は、長辺約415mm、短辺約165mmとなる(第280図)。

また、e類に分類した二例から、箱の隅の形態は、ほぼ直角に折れ、丸隅にならない。したがって、胴張りの形態は考えにくい。

(6) まとめ

今回の漆膜の観察によって得られた所見をまとめると次のようになる。

- ① 加飾の無い黒漆塗りの箱で、金属製の覆輪や紐金具は装着されていないと思われる。
- ② 合口造りで、立ち上り部は覆輪を装着せず、木柄

から造り出している。

- ③ 漆コクソは、木割れ等に対して数ヶ所に施されている。
- ④ 布着せは、板全面に着せる部分と筋布着せの部分とがある。筋布着せは、刎目部、立ち上り部、漆コクソ部に施され、布の幅は、約30mm~40mmである。
- ⑤ 平面形態は、長辺約415mm、短辺約165mmで、丸隅にならない。したがって胴張りの形態も考えにくい。

また、不明な点をまとめると次のようになる。

- A 箱の形態には、箱内側で二段になるもの(懸子を持つ)や重箱形式の箱もあるが、それを特徴付ける部分の漆膜が無い。
- I 箱の高さは、押し潰された状態で出土しているので、出土状況からは判断できない。蓋を含めた箱の高さは、出土漆膜の総塗漆面積(4124.44cm²)と平面規模から算出可能(重箱形式等を考慮しない)である(注1)が、欠失した漆膜もあると思われるので、誤差は非常に大きい。
- U 漆膜分類のd類にみられる段差は、意図的に為されたものか不明である。
- E 小型宝塔を納めるために作製されたものか、あるいは他の箱の転用か不明である。

漆膜の調査から以上のことが明らかになったが、不明点、問題点も多く、今後の技法調査や類型調査によって検討を重ねていきたい。

(注1) 漆箱の蓋を含めた高さは、漆膜塗漆面の総面積と平面規模(415×165mm)から約59.7mmとなる。この数値から塗漆面が重複する立ち上りの高さ(11mm)を減ずると約48.7mmとなる。

参考・引用文献

- 飛鳥資料館 1989 『仏舍利埋納』飛鳥資料館図録第21冊 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館
- 足立佳代・斎藤和行 1993 「足利における中世瓦の様相」『播磨考古』第12号
- 有賀要延 1993 『仏教法具図鑑』国書刊行会
- 有賀村隆 1988 「法華経絵」『日本の美術』第269号 至文堂
- 石川安司 1994 「埼玉の中世瓦(1)―比企地方を中心に―」『埼玉県北西部地域（比企都市）考古資料集』③ 埼玉県比企都市考古学談話会
- 石川安司 1995 「比企地方の中世瓦(1)―都幾川中流域を中心として―」『比企丘陵』創刊号 比企丘陵文化研究会
- 石田向豊 1984 「仏像の持物」『新版仏教考古学講座』第4巻 仏像 雄山閣出版
- 石田茂作 1969 『日本佛塔』講談社
- 石田茂作編 1972 「塔・塔婆・スツーパー」『日本の美術』第77号 至文堂
- 磯崎 一・中村倉司 1980 「ミコ神社前遺跡、一本松古墳」埼玉県遺跡調査会報告第39集
- 稲垣晋也 1984 「遺物」『新版仏教考古学講座』第1巻 総説 雄山閣出版
- 猪川和子 1986 「四天王像」『日本の美術』第240号 至文堂
- 梅沢大久夫 1981 「慈光寺出土瓦について」『研究紀要』第3号 埼玉県立歴史資料館
- 大滝幹大 1991 「金工」『日本の美術』第305号 至文堂
- 岡崎謙治監修 1982 『仏具大事典』鎌倉新書
- 太田博之他 1991 『本庄遺跡群発掘調査報告書V―公卿塚古墳―』本庄市埋蔵文化財調査報告第19集
- 岡本孝男 1987 『向原遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第5集
- 岡本孝男他 1983 『白久・柳町・森浦・向田・向・東宮平・栗・栗山』美里町遺跡発掘調査報告書第1集
- 小沢福平 1960 「こぶ・谷戸祭祀遺跡発掘調査報告書」美里村教育委員会
- 鎌田茂雄 1994 『法華経を読む』講談社学術文庫
- 河田 貞 1989 「仏舍利と鉢の荘厳」『日本の美術』第280号 至文堂
- 金谷克己 1957 「武蔵児玉郡美里村川輪発見の埴輪壺」『上代文化』第27輯
- 紀野一義 1982 『法華経』を読む』講談社現代新書
- 木下密彦 1984 「小塚」『新版仏教考古学講座』第3巻 塔・塔婆 雄山閣出版
- 隈昭志・桑原憲彰 1977 「浜の館―阿蘇大宮司思館跡―」熊本県文化財調査報告書第21集
- 藏田 歳 1967 「仏具」『日本の美術』第16号 至文堂
- 藏田 歳 1971 「経巻」『仏教考古学講座』第1巻 墳墓・経塚 雄山閣出版
- 児玉高校 1961 『児玉町八幡山埴輪埴埴発掘報告書』埼玉県立児玉高等学校
- 後藤守一 1934 「埴輪窯跡址の発掘調査」『ドルメン』第3巻第4号
- 小林謙一・佐川正敏 1989 「平安時代～近世の軒丸瓦―法隆寺出土瓦の調査速報2―」『伊弉留我』法隆寺昭和資料館調査概報 法隆寺昭和資料館編纂所
- 小林康幸 1989 「関東地方における中世瓦の様相―中世都市鎌倉と周辺地域にみる系譜性を中心として―」『神奈川考古』第25号
- 小林康幸 1992 「鎌倉永福寺出土瓦の諸問題」『立正考古』31号
- 小淵良樹他 1980 『広木大町古墳群』埼玉県遺跡調査会報告第40集
- 駒宮史朗他 1987 「東国における古式須恵器をめぐる諸問題」第8回三県シンポジウム資料 北武蔵古代文化研究所・群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所

- 埼玉県 1980 『新編埼玉県史』資料編1 原始 旧石器・縄文
- 埼玉県 1982 『新編埼玉県史』資料編2 原始・古代 弥生・古墳
- 埼玉県 1984 『新編埼玉県史』資料編3 古代1 奈良・平安
- 埼玉県 1987 『新編埼玉県史』通史編1 原始・古代
- 埼玉県史編さん室 1982 『埼玉県古代寺院調査報告書』埼玉県史編さん室
- 埼玉県史編さん室 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室
- 埼玉県立歴史資料館 1992 『天上へ向かうかたち—さまざまな塔—』比叡歴史のむら 第1回特別企画展図録
- 飯田宗彦 1989 『密教法具』『日本の美術』第282号 至文堂
- 坂本和俊 1980 『神明ヶ谷戸遺跡』『第12回遺跡発掘調査報告会』発表要旨
- 坂本幸男・岩本裕 1962 『法華経(上)』岩波書店
- 坂本幸男・岩本裕 1964 『法華経(中)』岩波書店
- 坂本幸男・岩本裕 1967 『法華経(下)』岩波書店
- 佐々木幹雄他 1980 『宍勝寺北裏遺跡』宍勝寺北裏遺跡調査会
- 佐藤忠雄 1979 『後懐沢遺跡群(石塚A・B遺跡)の調査』『第12回遺跡発掘調査報告会』発表要旨
- 佐藤忠雄・斎藤国夫 1978 『後懐沢遺跡群の調査』同部町教育委員会
- 塩野 博 1973 『聖天塚古墳』『日本考古学年報』24
- 菅谷浩之 1970 『壱形土器を出土した公卿塚について』『埼玉研究』第19号
- 菅谷浩之 1974 『古墳消滅の過程 付・長塚聖天塚出土の石製刀子』『埼玉考古』第12号
- 菅谷浩之 1984 『北武蔵における古式古墳の成立—児玉地方からみた北武蔵の古式古墳—』児玉町史資料調査報告 古代第1集 児玉町教育委員会・児玉町史編纂委員会
- 菅谷浩之・駒宮史朗 1973 『児玉町・美里村生野山古墳群発掘調査概要』『第6回遺跡発掘調査報告会』発表要旨
- 菅谷浩之・坂本和俊 1975 『美里村長板型天塚古墳の調査』『第8回遺跡発掘調査報告会』発表要旨
- 菅谷浩之・森森健一 1975 『広木大町古墳群発掘調査概報』美里村教育委員会
- 菅谷浩之他 1976 『宮下・樋之口遺跡発掘調査概報』美里村教育委員会
- 菅谷浩之他 1978 『日の暮遺跡』美里村教育委員会
- 菅谷浩之・岡本幸男 1980 『一木簡出土—武蔵新倉館』美里村教育委員会
- 鈴木規夫 1989 『供養具と僧具』『日本の美術』第283号 至文堂
- 岡 秀夫 1984 『経塚地名総覧』考古学ライブラリー24 ニュー・サイエンス社
- 岡 秀夫 1985 『経塚』考古学ライブラリー33 ニュー・サイエンス社
- 岡 秀夫 1990 『経塚とその遺物』『日本の美術』第292号 至文堂
- 高井錦三郎 1980 『常陸・下野の中世瓦葺見』『茨城県史研究』第43号 茨城県史編集委員会
- 谷井彪・宮崎由利江 1979 『畑中遺跡』美里村畑中遺跡調査会
- 東京国立博物館他編 1986 『比叡山と天台の美術』朝日新聞社
- 栃木県立博物館 1990 『中世への統一—一期と俗の間で—』第33回企画展図録
- 永井久美男編 1994 『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』兵庫埋蔵品調査会
- 中里壽克 1990 『中尊寺金色堂と平安時代漆芸技法の研究』至文堂
- 長瀬康彦 1992 『後山王遺跡—B・D地点—』美里町遺跡調査会報告書 第1集
- 長瀬康彦 1991 『山石古墳群・羽黒山古墳群』美里町遺跡発掘調査報告書第7集
- 中野政樹 1984 『鎮壇具』『新版仏教考古学講座』第2巻 寺院 雄山閣出版

- 中村倉司 1979 『宇佐久保遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第38集
- 中村倉司 1979 『白石城』埼玉県遺跡調査会報告書第36集
- 奈良国立博物館 1979 『法華経の美術』
- 奈良国立博物館 1982 『仏教「土」の美—室内荘嚴の粋をみつめて—』
- 森原三雄・畑大介・楊原功一編 1989 『権現堂遺跡』増穂町教育委員会
- 畑 大介 1986 『泥塔の用途をめぐる一、二の視点について』『山梨考古学論集』Ⅰ 山梨県考古学協会
- 畑 大介 1989 『偏平形泥塔について』『山梨考古学論集』Ⅱ 山梨県考古学協会
- 原 康志 1986 『鎌倉における瓦の様相』『佛教藝術』第164号
- 福田誠他 1994 『永福寺跡—平成5年度—』鎌倉市教育委員会
- 保坂三郎 1984 『経塚概論』『新版仏教考古学講座』第6巻 経典・経塚 雄山閣出版
- 細田勝他 1984 『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集
- 本庄高校考古学部 1975 『児玉郡及び周辺地域における前方後円墳の研究』『いぶき』8・9合併号埼玉県立本庄高等学校考古学部
- 本庄高校考古学部 1981 『新発見の埴輪窯跡』『いぶき』第12号 埼玉県立本庄高等学校考古学部
- 本庄市 1976 『本庄市史』資料編
- 増田逸朗他 1977 『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集
- 増田逸朗他 1993 『古墳時代の祭祀—祭祀関連の遺跡と遺物—』第2回東日本埋蔵文化財研究会資料 東日本埋蔵文化財研究会
- 松浦正昭 1992 『尾沙門天像』『日本の美術』第315号 至文堂
- 松田政基他 1993 『三村山極楽寺跡遺跡群—確認調査報告書—』つくば市教育委員会
- 丸山隆一 1990 『国指定史跡 水殿瓦窯跡試掘調査報告』美里町遺跡発掘調査報告書第6集
- 密教辞典編纂会 1994 『密教大辞典』縮刷版第7刷 法藏館
- 美里町 1986 『美里町史』通史編
- 三森正士 1984 『僧具』『新版仏教考古学講座』第5巻 仏具 雄山閣出版
- 三宅敏之 1984 『経塚の遺物』『新版仏教考古学講座』第6巻 経典・経塚 雄山閣出版
- 三宅敏之 1984 『遺跡と遺構』『新版仏教考古学講座』第6巻 経典・経塚 雄山閣出版
- 望月薫弘 1984 『遺跡』『新版仏教考古学講座』第1巻 総説 雄山閣出版
- 矢島泰介 1971 『経塚』『仏教考古学講座』第1巻 墳墓・経塚編 雄山閣出版
- 柳田敏司 1963 『本庄市公御塚と石製模造品』『埼玉考古』復刊第1号
- 柳田敏司 1964 『埼玉県児玉郡生野山将軍塚古墳発掘調査概報』『上代文化』第34輯
- 山本暉久・服部実喜・谷口肇 1988 『金沢文庫遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告19
- 横川好富他 1980 『甘粕山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集
- 渡辺 一他 1983 『白石城Ⅱ』美里町遺跡発掘調査報告書第2集
- 結貫悦次郎編 1991 『白石大御堂遺跡』関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第8集・助野馬埋蔵文化財調査事業団調査報告第122集

遺構新旧対照表

報告番号	発掘番号	報告番号	発掘番号	報告番号	発掘番号	
第01号住居跡	第01号住居跡	第51号住居跡	第51号住居跡	SB04—Pit05	Pit50 Pit68 Pit69 第05号掘立柱建物跡	
第02号住居跡	第02号住居跡	第52号住居跡	第52号住居跡	SB04—Pit06		
第03号住居跡	第03号住居跡	第53号住居跡	第53号住居跡	SB04—Pit07		
第04号住居跡	第04号住居跡	第54号住居跡	第54号住居跡	SB04—Pit08		
第05号住居跡	第05号住居跡	第55号住居跡	第55号住居跡	第05号掘立柱建物跡		
第06号住居跡	第06号住居跡	第56号住居跡	第56号住居跡	SB05—Pit01		
第07号住居跡	第07号住居跡	第57号住居跡	第57号住居跡	SB05—Pit02		
第08号住居跡	第08号住居跡	第58号住居跡	第58号住居跡	SB05—Pit03		
第09号住居跡	第09号住居跡	第59号住居跡	第59号住居跡	SB05—Pit04		
第10号住居跡	第10号住居跡	第60号住居跡	第60号住居跡	SB05—Pit05		
第11号住居跡	第11号住居跡	第61号住居跡	第61号住居跡	SB05—Pit06		
第12号住居跡	第12号住居跡	第62号住居跡	第62号住居跡	SB05—Pit07		
第13号住居跡	第13号住居跡	第63号住居跡	第63号住居跡	SB05—Pit08		
第14号住居跡	第14号住居跡	第64号住居跡	第64号住居跡	SB05—Pit09		
第15号住居跡	第15号住居跡	第65号住居跡	第65号住居跡	SB05—Pit10		
第16号住居跡	第16号住居跡	第66号住居跡	第66号住居跡	SB05—Pit11		
第17号住居跡	第17号住居跡	第67号住居跡	第67号住居跡	SB05—Pit12		
第18号住居跡	第18号住居跡	第68号住居跡	第68号住居跡	SB05—Pit13		
第19号住居跡	第19号住居跡	第69号住居跡	第69号住居跡	SB05—Pit14		
第20号住居跡	第20号住居跡	第70号住居跡	第70号住居跡	SB05—Pit15		
第21号住居跡	第21号住居跡	第71号住居跡	第71号住居跡	SB05—Pit16		
第22号住居跡	第22号住居跡	第72号住居跡	第72号住居跡	SB05—Pit17		
第23号住居跡	第23号住居跡	第73号住居跡	第73号住居跡	SB05—Pit18		
第24号住居跡	第24号住居跡	第74号住居跡	第74号住居跡	SB05—Pit19		
第25号住居跡	第25号住居跡	第75号住居跡	第75号住居跡	SB05—Pit20		
第26号住居跡	第26号住居跡	第76号住居跡	第76号住居跡	SB05—Pit21		
第27号住居跡	第27号住居跡	第77号住居跡	第77号住居跡	SB05—Pit22		
第28号住居跡	第28号住居跡	第78号住居跡	第78号住居跡	SB05—Pit23		
第29号住居跡	第29号住居跡	第79号住居跡	第79号住居跡	第06号掘立柱建物跡		第06号掘立柱建物跡
第30号住居跡	第30号住居跡	第80号住居跡	第80号住居跡	SB06—Pit01		
第31号住居跡	第31号住居跡	第81号住居跡	第81号住居跡	SB06—Pit02		
第32号住居跡	第32号住居跡	第82号住居跡	第82号住居跡	SB06—Pit03		
第33号住居跡	第33号住居跡	第83号住居跡	第 A 号住居跡	SB06—Pit04		
第34号住居跡	第34号住居跡	第84号住居跡	第 B 号住居跡	SB06—Pit05		
第35号住居跡	第35号住居跡	第85号住居跡		SB06—Pit06		
第36号住居跡	第36号住居跡	第01号掘立柱建物跡	第01号掘立柱建物跡	SB06—Pit07		
第37号住居跡	第37号住居跡	SB01—Pit01		SB06—Pit08		
第38号住居跡	第38号住居跡	SB01—Pit02		SB06—Pit09		
第39号住居跡	第39号住居跡	第02号掘立柱建物跡	第02号掘立柱建物跡	SB06—Pit10		
第40号住居跡	第40号住居跡	SB02—Pit01		SB06—Pit11		
第41号住居跡	第41号住居跡	SB02—Pit02		SB06—Pit12		
第42号住居跡	第42号住居跡	第03号掘立柱建物跡	第03号掘立柱建物跡	SB06—Pit13		
第43号住居跡	第43号住居跡	SB03—Pit01		SB06—Pit14		
第44号住居跡	第44号住居跡	SB03—Pit02	第07号竈壇	SB06—Pit15		
第45号住居跡	第45号住居跡	SB03—Pit03	第08号竈壇	SB06—Pit16		
第46号住居跡	第46号住居跡	第04号掘立柱建物跡	第04号掘立柱建物跡	第07号掘立柱建物跡		第07号掘立柱建物跡
第47号住居跡	第47号住居跡	SB04—Pit01	Pit10	SB07—Pit01		
第48号住居跡	第48号住居跡	SB04—Pit02	Pit32	SB07—Pit02		
第49号住居跡	第49号住居跡	SB04—Pit03	Pit38	SB07—Pit03		
第50号住居跡	第50号住居跡	SB04—Pit04	Pit48	SB07—Pit04		

报告番号	発掘番号	报告番号	発掘番号	报告番号	発掘番号
SB07—Pit05		SB11—Pit04	Pit50	第46号土坑	第47号土坑
SB07—Pit06		SB11—Pit05		第47号土坑	第49号土坑
SB07—Pit07		SB11—Pit06	Pit109	第48号土坑	第48号土坑
SB07—Pit08		SB11—Pit07	Pit69	第49号土坑	第50号土坑
SB07—Pit09	第90号上坑	SB11—Pit08	Pit44	第50号土坑	第51号土坑
SB07—Pit10		第01号上坑	第01号上坑	第51号上坑	第52号土坑
SB07—Pit11		第02号土坑	第02号上坑	第52号土坑	第53号上坑
SB07—Pit12		第03号上坑	第03号土坑	第53号上坑	第54号土坑
SB07—Pit13	第89号上坑	第04号土坑	第04号上坑	第54号土坑	第55号土坑
SB07—Pit14	第91号土坑	第05号上坑	第05号土坑	第55号土坑	第56号土坑
SB07—Pit15	第93号土坑	第06号土坑	第06号上坑	第56号土坑	第57号上坑
SB07—Pit16		第07号上坑	第07号土坑	第57号上坑	第58号土坑
第08号孤立柱建物跡		第08号土坑	第08号土坑	第58号土坑	第59号土坑
SB08—Pit01	Pit100	第09号上坑	第09号土坑	第59号土坑	第60号土坑
SB08—Pit02	Pit103	第10号土坑	第10号土坑	第60号土坑	第61号土坑
SB08—Pit03	Pit105	第11号上坑	第11号土坑	第61号土坑	第62号土坑
SB08—Pit04	Pit03	第12号土坑	第12号七坑	第62号土坑	第63号土坑
SB08—Pit05	Pit05	第13号土坑	第13号土坑	第63号土坑	第64号土坑
SB08—Pit06		第14号土坑	第14号土坑	第64号土坑	第65号土坑
SB08—Pit07		第15号土坑	第15号土坑	第65号土坑	第66号土坑
SB08—Pit08		第16号上坑	第16号土坑	第66号土坑	第67号土坑
SB08—Pit09	Pit74	第17号土坑	第17号上坑	第67号土坑	第68号土坑
SB08—Pit10	Pit01	第18号土坑	第18号土坑	第68号土坑	第69号土坑
第09号孤立柱建物跡		第19号土坑	第19号土坑	第69号土坑	第70号上坑
SB09—Pit01	Pit22	第20号土坑	第20号土坑	第70号土坑	第71号土坑
SB09—Pit02	Pit26	第21号土坑	第21号土坑	第71号土坑	第72号上坑
SB09—Pit03	Pit28	第22号土坑	第22号土坑	第72号土坑	第73号土坑
SB09—Pit04	Pit08	第23号上坑	第23号土坑	第73号土坑	第74号土坑
SB09—Pit05		第24号土坑	第24号土坑	第74号土坑	第75号上坑
SB09—Pit06		第25号上坑	第25号土坑	第75号土坑	第76号土坑
SB09—Pit07		第26号土坑	第26号上坑	第76号土坑	第77号土坑
SB09—Pit08		第27号土坑	第27号七坑	第77号土坑	第78号土坑
SB09—Pit09		第28号土坑	第28号土坑	第78号土坑	第79号上坑
SB09—Pit10	Pit75	第29号上坑	第29号土坑	第79号上坑	第80号土坑
SB09—Pit11	Pit01	第30号土坑	第30号土坑	第80号土坑	第81号上坑
SB09—Pit12	Pit14	第31号土坑	第31号土坑	第81号土坑	第82号土坑
SB09—Pit13	Pit103	第32号土坑	第32号土坑	第82号土坑	第83号上坑
第10号孤立柱建物跡		第33号土坑	第33号土坑	第83号上坑	第84号土坑
SB10—Pit01	Pit35	第34号土坑	第34号上坑	第84号土坑	第85号土坑
SB10—Pit02	Pit42	第35号土坑	第35号土坑	第85号土坑	第86号土坑
SB10—Pit03	Pit51	第36号土坑	第37号土坑	第86号土坑	第87号土坑
SB10—Pit04	Pit60	第37号上坑	第38号土坑	第87号上坑	第88号土坑
SB10—Pit05		第38号土坑	第39号土坑	第88号土坑	第89号土坑
SB10—Pit06		第39号上坑	第40号土坑	第89号土坑	第91号土坑
SB10—Pit07	Pit07	第40号土坑	第41号土坑	第90号土坑	第92号上坑
SB10—Pit08	Pit28	第41号上坑	第42号土坑	第91号上坑	第94号土坑
第11号孤立柱建物跡		第42号土坑	第43号土坑	第92号土坑	第95号上坑
SB11—Pit01	Pit42	第43号土坑	第44号土坑	第93号上坑	第96号土坑
SB11—Pit02	Pit47	第44号土坑	第45号土坑	第94号土坑	第97号土坑
SB11—Pit03	Pit52	第45号上坑	第46号土坑	第95号土坑	第98号土坑

報告番号	発掘番号	報告番号	発掘番号
第96号土坑	第99号土坑	第146号土坑	第155号土坑
第97号土坑	第100号土坑	第147号土坑	第156号土坑
第98号土坑	第101号土坑	第148号土坑	第157号土坑
第99号土坑	第102号土坑	第149号土坑	第158号土坑
第100号土坑	第103号土坑	第150号土坑	第159号土坑
第101号土坑	第104号土坑	第151号土坑	
第102号土坑	第105号土坑	第152号土坑	
第103号土坑	第106号土坑	第153号土坑	
第104号土坑	第107号土坑	第154号土坑	第12号墓塚
第105号土坑	第108号土坑	第155号土坑	第13号墓塚
第106号土坑	第109号土坑	第156号土坑	第14号墓塚
第107号土坑	第110号土坑	第157号土坑	第15号墓塚
第108号土坑	第111号土坑	第158号土坑	第16号墓塚
第109号土坑	第112号土坑	第159号土坑	第17号墓塚
第110号土坑	第113号土坑	第160号土坑	第01号溝跡
第111号土坑	第114号土坑	第161号土坑	第02号墓塚
第112号土坑	第115号土坑	第162号土坑	第03号墓塚
第113号土坑	第116号土坑	第163号土坑	第04号墓塚
第114号土坑	第117号土坑	第164号土坑	第06号墓塚
第115号土坑	第118号土坑	第165号土坑	第09号墓塚
第116号土坑	第119号土坑	第01号溝跡	第01号溝跡
第117号土坑	第120号土坑	第02号溝跡	第02号溝跡
第118号土坑	第121号土坑	第03号溝跡	第03号溝跡
第119号土坑	第122号土坑	第04号溝跡	第04号溝跡
第120号土坑	第123号土坑	第05号溝跡	第05号溝跡
第121号土坑	第124号土坑	第06号溝跡	第06号溝跡
第122号土坑	第125号土坑	第07号溝跡	第07号溝跡
第123号土坑	第126号土坑	第08号溝跡	第08号溝跡
第124号土坑	第127号土坑	第09号溝跡	第09号溝跡
第125号土坑	第128号土坑	第10号溝跡	第10号溝跡
第126号土坑	第129号土坑	第11号溝跡	第11号溝跡
第127号土坑	第130号土坑	第12号溝跡	第12号溝跡
第128号土坑	第131号土坑	第13号溝跡	第13号溝跡
第129号土坑	第132号土坑	第14号溝跡	
第130号土坑	第133号土坑	第15号溝跡	第15号溝跡
第131号土坑	第134号土坑	第16号溝跡	
第132号土坑	第135号土坑	第17号溝跡	
第133号土坑	第139号土坑	第18号溝跡	
第134号土坑	第142号土坑	第19号溝跡	第19号溝跡
第135号土坑	第143号土坑	第20号溝跡	第20号溝跡
第136号土坑	第144号土坑	第21号溝跡	第21号溝跡
第137号土坑	第145号土坑	第22号溝跡	第22号溝跡
第138号土坑	第146号土坑	第23号溝跡	第23号溝跡
第139号土坑	第147号土坑	第24号溝跡	第10号溝跡
第140号土坑	第148/149号土坑	第25号溝跡	
第141号土坑	第150号土坑	第26号溝跡	
第142号土坑	第151号土坑	第01号井戸跡	第01号井戸跡
第143号土坑	第152号土坑	第01号基壇状遺構	第01号平場
第144号土坑	第153号土坑	第01号配石遺構	第01号集石
第145号土坑	第154号土坑	第01号埋壘	第01号埋壘

付 編

1. 小型宝塔・小型未開敷蓮華の材質分析について

東京国立文化財研究所

修復技術部 第三修復技術研究室 犬竹 和

(1) 調査目的

小型宝塔と小型未開敷蓮華は、漆箱の中に埋納された状態で発見された。これらの遺物は、金・銀・金銅・銅・鉄の5種類の金属で作られているものと、肉眼で観察される。中世寺院跡との関連が推定される第48号上坑から出土しているが、遺物を理解する上でいくつかの問題点があった。美術工芸品あるいは宗教的遺物としても優れた作品であるが、出土例がない。またそれぞれ材質、形状において明らかな違いがあり、その性格はわかっていない。その解明の一助とするために金属の化学分析を行った。

(2) 分析方法

小型宝塔と小型未開敷蓮華の化学組成を知るために、エネルギー分散型蛍光X線分析装置を使用して、定量分析を行った。分析条件は以下の通りである。

蛍光X線分析装置 : SPECTRACE 6000
(SPECTRACE 社製)

X線管 : Rh
管電圧 : 30kVおよび50kV
管電流 : 0.05~0.35mA
フィルター : Pd, Cu
雰囲気 : 大気中
検出器 : シリコン (リチウム)
ダイオード

定量用標準合金資料 : 住友金属鉱山㈱
中央研究所製

分析は、金・銀・金銅・銅製の4基の小型宝塔と4本の小型未開敷蓮華について行い、鉄製の小型宝塔と小型未開敷蓮華は除いた。

定性分析では、すべての遺物から鉄が検出された。しかしすべての遺物に鉄錆の付着が観察されることから、検出された鉄のほとんどがそれに由来しているものと考えた。また鉄を含有していたとしても、微量な不純物と判断した。そのため検出された鉄の定量分析は、行わなかった。

(3) 分析の結果

金製小型宝塔・小型未開敷蓮華 (表1-1・2)

分析部分は、小型宝塔の基壇部底面と小型未開敷蓮華の蕾部である。

定性分析では、小型宝塔と小型未開敷蓮華ともに、金・銀・銅・鉄が検出され、同じ構成元素であることがわかった。

定量分析の結果、小型宝塔と小型未開敷蓮華はともに金約88%、銀約10%、銅約1%で、よく似た元素濃度であることがわかった。

銀製小型宝塔・小型未開敷蓮華 (表1-3・4)

分析部分は、小型宝塔の基壇部底面と小型未開敷蓮華の蕾部である。

定性分析では、小型宝塔と小型未開敷蓮華ともに、金・銀・銅・鉄・鉛が検出され、同じ構成元素であることがわかった。

定量分析の結果、小型宝塔と小型未開敷蓮華はともに金約1%、銀約95%、銅約3%、鉛約0.1%で、よく似た元素構成であることがわかった。銅の分析値がやや高いのは、銅製品の錆の影響か、細ししやすい硬さにするために混合されたものなのか不明である。金・鉛は不純物であると考えられる。

金銅製小型宝塔・小型未開敷蓮華 (表1-5~8)

分析部分は、小型宝塔の基壇部底面、扉部、請花部の3カ所と、小型未開敷蓮華の蕾部である。

定性分析では、小型宝塔と小型未開敷蓮華ともに、金・銀・銅・鉄・鉛・砒素・錫・アンチモン・亜鉛が検出され、同じ構成元素であることがわかった。一部に水銀が検出されていることから、遺物表面は金アマルガム鍍金が施されていると考えられる。

定量分析の結果、小型宝塔と小型未開敷蓮華ともに、約98%の銅に鉛・砒素・錫・アンチモン・亜鉛の微量の不純物が含まれていることがわかり、よく似た元素構成であることがわかった。

実際には銅製小型宝塔・小型未開敷蓮華のように、微量の金や銀が不純物として含まれているはずである。しかし分析では、鍍金の金・銀と、不純物の金・銀が同時に分析されてしまう。そのため分析された金・銀の数値は鍍金によるものとして、欄外に金と銀との濃度比を記した。これを見ると、扉部の銀が多く、肉眼観察で他の部分と比べて扉部が、若干白っぽい色をしていることと合致している。

銅製小型宝塔・小型未開敷蓮華 (表1-9・10)

分析部分は、小型宝塔の基壇部底面と小型未開敷蓮華の蕾部である。

定性分析では、小型宝塔と小型未開敷蓮華ともに、金・銀・銅・鉄・鉛・砒素・錫・アンチモン・亜鉛が検出され、同じ構成元素であることがわかった。

定量分析の結果、小型宝塔は銅約96%に、微量の金・銀・鉛・砒素・錫・アンチモン・亜鉛が不純物として含まれている。小型未開敷蓮華は銅約90%に、微量の金・銀・鉛・砒素・錫・アンチモン・亜鉛が不純物として含まれている。鉛と砒素が、金銅製小型宝塔・小型未開敷蓮華の銅合金よりも多い。特に、蕾部は鉛約2%、砒素約3%と多く含まれているので、使用された銅素材が異なる可能性もある。

表1 定量分析の結果

No	試料	測定部位	元素濃度 (%)								鍍金		
			金	銀	銅	鉛	砒素	錫	アンチモン	亜鉛	金:銀濃度比	水銀の検出	
1	金製小型宝塔	基壇部底面	88.6	10.7	0.7								
2	金製小型未開敷蓮華	蕾部	87.8	10.3	1.9								
3	銀製小型宝塔	基壇部底面	0.8	95.4	3.7	0.1							
4	銀製小型未開敷蓮華	蕾部	1.5	95.1	3.3	0.1							
5	金銅製小型宝塔	基壇部底面			98.93	0.52	0.29	0.06	0.11	0.09	10:1	+	
6	金銅製小型宝塔	扉部			98.6	0.61	0.208	0.002	0.27	0.31	6:22	+	
7	金銅製小型宝塔	請花部			98.7	0.64	0.36	0.04	0.2	0.06	18:11	++	
8	金銅製小型未開敷蓮華	蕾部			98.85	0.41	0.5	0.05	0.18	0.01	21:1	+	
9	銅製小型宝塔	基壇部底面	0.24	0.25	96.9	1.6	0.7	0.04	0.1	0.17			
10	銅製小型未開敷蓮華	蕾部	1.1	1.8	90.5	2.91	3.3	0.1	0.16	0.13			

2. 埼玉県広木上宿遺跡出土漆箱の科学的分析

漆器文化財科学研究所 四柳 嘉幸

(1) はじめに

埼玉県児玉郡美里町所在の広木上宿遺跡は、縄文時代から近世にわたる複合遺跡であるが、なかでも中世寺院跡に関連する第48号上坑から金・銀・銅・金銅・鉄製の小型宝塔と小型木製撥菫華を納めた漆箱が出土し、類例のない貴重な資料として注目を集めた。

本稿ではその中の漆箱の塗膜を科学的に分析することによって、漆箱の製作技術や品質を明らかにし、遺跡・遺構の性格を探る手がかりを提供しようとするものである。

なお、分析にあたっては財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、ならびに同事業団・野中 一氏から種々便宜を図っていただいた。また、赤外線分析にあたっては石川県工業試験場・江頭俊郎氏の協力をいただいた。厚く御礼申し上げます。

(2) 分析方法と結果

漆器は同一素材で上質品から普及品までさまざまな品質のものがあり、表面からの観察では判断できないための2つの方法を用いた。

①塗膜分析 漆器の品質を決定する塗装工程(髹漆)や下地材料を解明する方法で、塗膜をポリエステル樹脂に包埋の上、これを#100~3000までの研磨材によって薄く研磨し、スライドガラスに貼り付ける。これを再び同様の工程で研磨し、金属顕微鏡や偏向顕微鏡で観察する。内外の器表観察は実体顕微鏡で行う。

②漆液の直接的な分析には赤外線吸収スペクトル法を行う。この方法は固有の振動をしている分子に、波長を連続的に変化させて赤外線を照射していくと、分子の固有振動と同じ周波数の赤外(IR)線が吸収され、分子構造に応じたスペクトルが得られるというものである。

[塗膜分析]

分析には20点の資料を作成して平均値を算出した。

分析資料として提供された塗膜は、①図版18-1~3、図版20-1・2(分析Aとする)と、②図版20-9の上層散乱塗膜とよばれる、どの部分が確認できないもの(分析Bとする)の2つである。以下塗装順に番号を付して説明する。

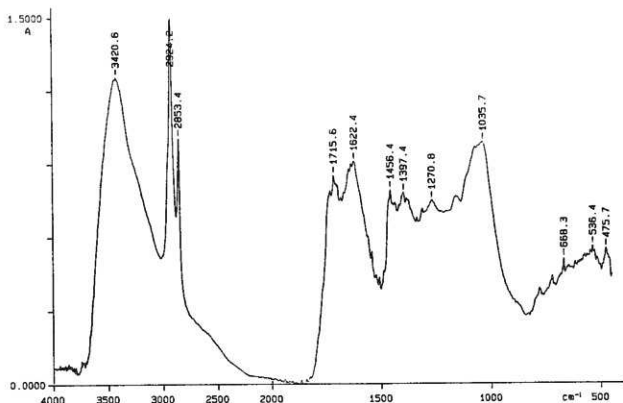
分析A(図版20-1・2、図版21)

①地の粉漆下地層。石英、長石を含むやや粗い鉱物粒子と漆からなる下地層で、層厚平均は345 μ mと厚い(最大は400 μ m)。下地が施される木胎は全く残っていない。②黒色漆層。下塗漆で下地同様凹凸が著しい。

古代以来の油煙(燻墨)を黒色顔料としたもので、下層に沈澱が見られる。層厚は24~61 μ mで、油煙の粒子は部分的にブロックをなすが、0.5 μ m前後の細かいものである。③漆層。層厚17~23 μ m。④漆層。層厚23~37 μ m。⑤漆層。層厚17~23 μ m。⑥漆層。層厚29~32 μ m。③~⑤は中塗漆層、⑥は上塗漆層で割りと均一で水平な堆積が観察できるが、研ぎ加工は施されていない。つまりそれだけ上手な花塗りといえる。また漆の質は③層が少し透明性に劣るぐらいで、各層とも同一のものが使用されているようである。上塗質の表層に漆一般に見られる多糖・糖タンパク・ウルシオール成分からなる酸化劣化防止層は強く形成されておらず、部分的にしか観察できない。

コクソ(刺学・木屎)部分については表面の状態を図版19-1、塗膜は図版21に掲載したが図版21-11ではコクソ影による断面逆三角形が観察できる。逆三角形の底辺の長さ(幅)は図版では1974 μ m(1.974mm)であるが、最大は4mmである。深さは平均900 μ m前後。コクソは細かい繊維状のものか確認でき(図版21-3)、漆が十分に染み込んでいる。コクソ影の上部には布着せが施されている(図版21-1)。明確なタテ糸、ヨコ糸の計測はできないが、層厚は167~340 μ mで、方形の繊維の節は19.5 \times 11.2 μ mである。

第1図 赤外線吸収スペクトル



分析B (図版20-9)

分析 A の①地の粉漆下地層にあたる部分は剝離により残っていない。②黒色漆層。下塗漆でこれも凹凸が著しい。層厚は24~60 μ mで、油煙(掃墨)の黒色粒子は2 μ m前後のブロックが粗く分散するが、0.5 μ m前後の細かいものが一般的である。下層に沈殿が見られる。③漆層。中塗漆層で層厚は24~41 μ m。④漆層。上塗漆層で層厚は24~34 μ m。③層より幾分透明性が良い。表面の酸化劣化防止層は薄く2 μ m前後である。[赤外線吸収スペクトル法] (図1)

パーキングエルマ社製顕微フーリエ変換赤外分光光度計(1650PC-DX型)によって塗膜の分析を行った。0.1mgを採取しKBr錠剤法によった。縦軸は透過率(T、%)、横軸は(cm^{-1} 、カイザー)である。

出土漆器の場合、経年変化による劣化・変質に加えて、使用や土中の遺存状況に左右されることが大きく、単純に現在のものと比較できないことが多々ある。本例もその1つで現在の塗漆膜とは様相を異にする。しかし1715 cm^{-1} や1622 cm^{-1} 、1065~1061 cm^{-1} (ゴム質)

の吸収が大きいのは、古い資料に共通するものであり3400~3420 cm^{-1} 、2924 cm^{-1} 、2850~2853 cm^{-1} 、1465~1440 cm^{-1} 、1280~1270 cm^{-1} 、1215 cm^{-1} 、785 cm^{-1} 、730 cm^{-1} (ウルシオール側鎖)などの吸収から考えて、漆と同定しても大過ないものと思われる。

(3) 小 結

漆黒の奥深く美しい質感と華やかな朱、蒔絵・漆絵などで彩られた漆器は、古代から律令国家による生産の独占と身分体系の一環として使用の制限があった。古代国家の解体によってその技術は地方に拡散し、11世紀にはじまる漆下地漆器の普及によっていっそうの漆文化の広まりを見た²⁾。やがてジャパンとよばれるほどの世界的な展開を見ることになるわけだが、各種漆器の製作技術や所有、流通の実態はよくわかっていない。かかる意味で広木上宿遺跡出土の漆箱と内容物の研究は、実に貴重な事例といえよう。

さて、分析を行った漆箱は13世紀後半~14世紀の年代があたえられており、野中 仁氏によると法景は

平面で約40×18cm(器高は不明)のもので、器形は合口形式が想定され、再絵などの加飾はなかったという。布着せはX線透視によると蓋の甲面全体に行われているらしく、他は基本的に図2のように矧目部分と木割れ部分のみ施されたものと思われる。

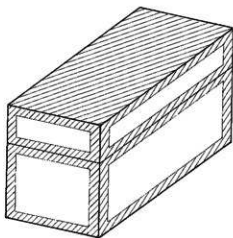
前述したように分析試料として提供された塗膜は、分析AとBの別個体があり、Aでは一部布着せとコクソ(刻字・木屎)部分が認められた。コクソは木割れ部分に施されたもので、断面逆三角形形状にしっかりとコクソ彫された後、縦線状のものからなるコクソが埋め込まれ、さらに布着せと地の粉漆が施されている。地の粉漆の裏面には細かい柾目の木理度が残っており、檜などの良材が選択されたものと思われる。

塗膜分析での所見によると、AとBでは明らかに髹漆が異なっていた。この解釈であるが、Aを外面とした場合、Bを内面の漆と見るか、蓋と身の違いなど色々な考え方があがるが、通常蓋と身の内外は同じ髹漆が施されるから、外面は丁寧に、内面は少し丁寧に省略したと見ることができよう。

この漆箱の髹漆の特色は下地が厚く、下塗に油煙と思われる黒色顔料を含む黒色漆⁹⁾を施した上に、中塗～上塗漆を施していることにある。平安時代の食器(碗皿)にも地の粉漆下地の上に油煙による黒色漆を施した例が見られ、古代を特色づける技法の1つであることが知られるが、この技法は中世においても継承されている⁹⁾。

古代漆箱は下地の薄いものが多く、木理のヤセが見える場合がしばしばであるが⁹⁾、本例では下地が厚いのでそうしたことはない。表面の発色は総体に茶黒色で柔らかな深みがあり、部分的に赤茶色になっているところもある。こうした雰囲気は、古代の漆箱と共通した特色である。古代漆箱の塗膜分析報告は極めて少ないが、9世紀の化粧箱としては、京都市右京区九条三坊の嘉壽出土例(胎は漆皮)があり、髹漆は炭粉漆下地層の上に黒色漆層、漆層の順に行われている⁹⁾。簡略化したものとしては、9世紀後半の漆皮箱と考えられる青森県浪岡町山元遺跡出土例があり、これは炭

第2図 布着せ図



粉漆下地の上に漆2層が施されただけのもので、表面の劣化・変質は著しく軽色を呈していた⁹⁾。

とまれ、正倉院をはじめとする伝世品の観察や箱・椀の分析から、古代の漆箱には本例のように漆下地で下塗に油煙による黒色漆を施した後、透漆を何層も塗重ねたものがあつたりすることは十分に妥当性がある。かかる意味で本例は漆工史上、古代と中世をつなぐ貴重な資料と位置づけられよう。次に中世の例から髹漆法の類例をとりあげてみたい。

中世遺跡出土の漆箱類としては福井県武生市家久遺跡、兵庫県春日町多利・前田遺跡、京都市右京区三条三坊、福岡市博多遺跡、福岡市七段田遺跡、太宰府条坊跡などがあるが、最も原形をとどめているのは家久遺跡の碟榑墓(13世紀前～中葉)副葬品の化粧箱と硯箱である⁹⁾。これは中世出土品としては最古の例であり、白磁四耳壺、太刀、短刀、烏帽子、京都系中世土師器、硯箱と内容物一式、化粧箱と内容物一式など豊富な遺物を副葬しており、中央と極めて密接な関係を有した有力荘官クラスの所持品として注目すべきものである。これらはすでに國學院大学で保存処理が行われ、内容の詳細も報告されているが⁹⁾、塗漆品の分析は行われていなかったため、現在筆者の手元で調査中である。詳細は別の機会に報告することになるが、広木上宿遺跡との係わりで注目したいのは化粧箱の塗装工程である。

それは、地の粉漆下地の上に黒色漆(油煙)、さら

に3～4層の透漆が施されていることで、広木上宿遺跡の漆箱と共通した技法であること、加えて加飾もなく、出土地は墓地和寺院跡であることなど、両者は極めて類似した性格を有している。また、家久遺跡・硯箱の下地は地の粉漆下地や黒色漆はみられず炭粉漆下地のみであった。つまり同じ箱とはいえ、化粧箱の方が上質技法による製作であることが判明しており、広木上宿遺跡の漆箱の性格を考える上においても参考となろう。

なお従来、手箱（化粧箱）や硯箱などの類いは漆工史あるいは漆芸史といった美術工芸史の分野で研究され、およそ考古学の対象とはされなかった。ところが、近年の中・近世の低湿地遺跡調査の増加に伴って、梅肌類をはじめとする漆器がかなり出土するようになったこと、陶磁器・土器類研究の進展が食器の互換性や

材質転換の対象として漆器をきけておれない状況が生みだされたこと、漆器考古学¹⁰⁾という文化材料科学をとりこんだ分野が生まれたことなどから、資料不足の漆工史の世界に一躍出土漆器が重要な位置を占めることになった。

考古学は資料そのものの属性研究から出発するわけだが、それは主として「表面の観察から得られる情報」である。しかし、階級性を具備した漆器は胎（素地）や下地、塗装工程、材料など「内面の分析から得られる情報」が品質を見定める重要な材料となるわけであり、いかに考古学と文化材料科学を駆使して遺物から各種情報を引き出すかが、今後の考古学を左右するといっても過言ではない¹¹⁾。そうした意味で本稿がいささかなりとも貢献できるならば、望外の喜びである。

註

- 1) 埼玉県埋蔵文化財調査委員会 1992 『広木上宿遺跡』遺跡説明会資料
埼玉県立埋蔵文化財センター 1994 『特集：広木上宿遺跡と小型土塔』埋文 さいたま 第16号
- 2) 四柳嘉幸 1991 『古代・近世漆器の変遷と塗装技術』『石川考古学研究会会誌』第34号
四柳嘉幸 1995 『振り出された縄文～中世の漆器』日本漆文化会誌
- 3) 漆器の表面色は一般に黒色・茶黒色に見えるが、実は漆に黒色顔料（油煙や鉄分など）を含むものと含まないものがあり、前者を黒色漆、後者を黒色系漆と区別している。中世では後者が一般的で、下地に炭粉粒子を用いたのであれば、黒色に見えるし退色もしにくい。
- 4) 四柳嘉幸 1994 『三島市御殿川流域遺跡群出土漆器の検体分析』『御殿川流域遺跡群Ⅱ—平成2・3年度一級河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡埋蔵文化財研究所

- 5) 中里壽克 1990 『中世寺金色堂と平安時代漆芸技法の研究』丕文堂
- 6) 岡田文男 1995 『古代出土漆器の研究』京都書院
- 7) 四柳嘉幸 1993 『青森県浪岡町山元(3)遺跡出土漆器の科学的分析』『山元(3)遺跡—青森県埋蔵文化財調査報告書第159集』青森県教育委員会
- 8) 小淵忠司 1994 『家久遺跡』『中世北陸の寺院と墓地—第7回北陸中世土器研究会資料集』北陸中世土器研究会
- 9) 内川隆志 1993 『中世榎柳菜の移築・副葬品の保存処理とその活用—福井県武生市家久遺跡』『博物館学紀要』第18集 國學院大学博物館学研究室
- 10) 四柳嘉幸 1995 『漆器』『概説 中世の上器・陶磁器』真福社
- 11) 四柳嘉幸 1996 『漆器考古学の方法と中世漆器』『考古学ジャーナル』(1996年4号)

3. 胎土分析

第四紀地質研究所 井上 巖

1. 実験条件

(1) 試料

分析に供した試料は胎土性状表に示すとおりである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

(2) X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製 JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target	: Cu
Filter	: Ni
Voltage	: 40kV
Current	: 30mA
ステップ角度	: 0.02°
計数時間	: 0.5秒。

(3) 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、次の実験条件で行った。

加速電圧	: 15KV
分析法	: スプリント法
分析倍率	: 200倍
分析有効時間	: 100秒
分析指定元素	: 10元素

2. X線回折試験の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示すとおりである。

胎土性状表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示されており、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト (Mullite)、クリストバライト (Cristobalite) 等の組成上の組み合わせによって焼成ランクを決定した。

(1) 組成分類

Mont-Mica-Hb 三角ダイヤグラム

第6図三角ダイヤグラム位置分類図に示す様に Mont-Mica-Hb 三角ダイヤグラムを1-13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont, Mica, Hb の三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。

三角ダイヤグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb) のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント (%) で表す。

モンモリロナイトは Mont / (Mont + Mica + Hb) * 100 でパーセントとして求め、同様に Mica, Hb も計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の1-4は Mont, MiCa, Hb の3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は三角ダイヤグラム位置分類図に示すとおりである。

Mont-Ch, Mica-Hb 菱形ダイアグラム

第7図菱形ダイアグラム位置分類図に示す様に Mont-Ch, Mica-Hb 菱形ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥岩 (Ch) の内、a) 3成分以上含まれない、b) Mont, Ch の2成分が含まれない、c) Mica, Hb の2成分が含まれない、の3例がある。

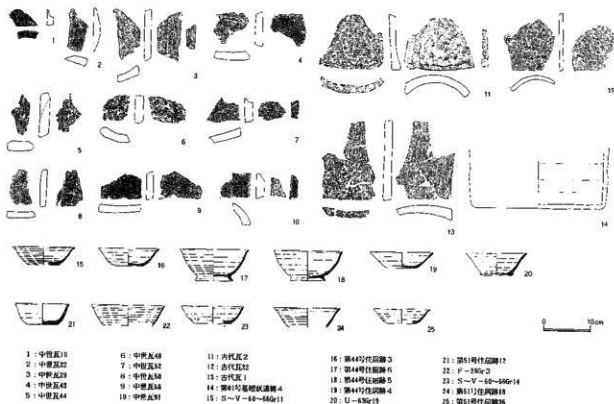
菱形ダイアグラムは Mont-Ch, Mica-Hb の組み合わせを表示するものである。

Mont-Ch, Mica-Hb のそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組み合わせ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $\text{Mont} / \text{Mont} + \text{Ch} \cdot 100$ と計算し、Mica, Hb, Ch も各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある1~7はMont, Mica, Hb, Ch の4成分を含み、各辺はMont, Mica, Hb, Ch のうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は菱形ダイアグラム位置分類図に示すとおりである。

第1図 分析資料



(2) 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI-Vの5段階に区分した。

I: ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは泡包している。

II: ムライトとクリストバライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。

III: ガラスのなかにクリストバライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。

IV: ガラスのみが生成し、原土 (素地土) の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。

V: 原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI-Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も、分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については胎土性状表の右端の備考に理由を記した。

(3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%)になる)で計算し、第2表化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 、 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO-CaO}$ の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

3. 分析結果

(1) X線回折試験

タイプ分類

胎土性状表には広木上宿遺跡出土土器と既分析桜沢窯跡、中堀遺跡、群馬県藤岡市の藤岡平遺跡群、白石大御堂遺跡の須恵器と瓦類の分析結果が記載してある。

第3表タイプ分類一覧表には胎土性状表に基づいて分類した胎土のタイプが示されている。土器胎土は各遺跡のタイプ全体で分類を新たに行った。胎土性状表から明らかな様に、土器と瓦類はA~Kの11タイプに分類された。

- Aタイプ: Mont, Mica, Hb, Chの4成分を含む、白石大御堂遺跡の瓦類だけが該当する。
- Bタイプ: Mont, Mica, Hbの3成分を含む、Ch 1成分に欠ける。白石大御堂遺跡の瓦。
- Cタイプ: Hb, Chの2成分を含む、Mont, Micaの2成分に欠ける。桜沢窯跡の瓦。
- Dタイプ: Hb 1成分を含む、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。広木上宿遺跡の須恵器

と瓦、桜沢窯跡の須恵器と瓦類で多く検出され、藤岡平遺跡群の須恵器でも検出された。白石大御堂遺跡の瓦と土師質土器各1個も検出された。

Eタイプ: Mica, Hb, Chの3成分を含む、Mont 1成分に欠ける。白石大御堂遺跡、藤岡平遺跡群の須恵器で検出され、広木上宿遺跡でも1個検出された。

Fタイプ: Mica, Hbの2成分を含む、Mont, Chの2成分に欠ける。藤岡平遺跡群と白石大御堂遺跡で検出され、広木上宿遺跡でも1個検出された。

Gタイプ: Mica, Hb, Chの3成分を含む、Mont 1成分に欠ける。藤岡平遺跡群の須恵器と白石大御堂遺跡の瓦が主体となる。広木上宿遺跡の瓦1個も含まれる。Eタイプと同じ組成であるが、鉱物の検出強度が異なり、タイプは別となる。

Hタイプ: Mica, Hbの2成分を含む、Mont, Chの2成分に欠ける。広木上宿遺跡の須恵器、桜沢窯跡の須恵器で多く検出され、白石大御堂遺跡の瓦類でも検出された。

Iタイプ: Mica 1成分を含む、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。広木上宿遺跡の瓦と須恵器。

Jタイプ: Mont, Hbの2成分を含む、Mica, Chの2成分に欠ける。白石大御堂遺跡の土師質土器。

Kタイプ: Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。高温で焼成されたために石英を除く鉱物は熱により分解してガラスに変質したものである。広木上宿遺跡の瓦と須恵器の大半はこのタイプである。同様に桜沢窯跡の須恵器、中堀遺跡の瓦でも検出された。藤岡平遺跡群の須恵器の多くもこのグループにはいる。

以上の結果から明らかな様に、広木上宿遺跡の胎土は D・H・Kの3タイプが主体で、桜沢窯跡もD・K、中堀遺跡もKタイプが主体で、桜沢窯跡と広木上宿遺跡の胎土には類似性がある。白石大御堂遺跡の瓦類と須恵器はA・D・E・F・G・H・Kと多くのタイプに分れ、統一性に欠ける。藤岡平遺跡群の土器もD・E・F・G・Kと白石大御堂遺跡と同様に多種にわたり、白石大御堂遺跡と藤岡平遺跡群の胎土の傾向は類似する。

石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地上を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂は各々固有の石英と斜長石比を有していると言える。

この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各々の集団の有する固有の技術の一端と考えられる。

第2図 Qt-Pl図に示す様に、土器と瓦はI~XIの11グループとその他に分類された。

Iグループ：白石大御堂遺跡の上師器

IIグループ：広木上宿遺跡の瓦と白石大御堂遺跡の瓦が共存する。

IIIグループ：広木上宿遺跡の瓦と白石大御堂遺跡の瓦と土師器が共存する。

IVグループ：広木上宿遺跡の須恵器が集中し、瓦1個が混在する。藤岡平遺跡群の須恵器もこのグループにはいる。

Vグループ：桜沢窯跡の須恵器が集中し、桜沢窯跡の瓦が共存する。藤岡平遺跡群の須恵器もこのグループに集中する。

VIグループ：白石大御堂遺跡の瓦が集中し、広木上宿遺跡の瓦が混在する。

VIIグループ：桜沢窯跡の須恵器と瓦が集中し、広木上宿遺跡の須恵器と瓦が共存する。

VIIIグループ：中堀遺跡の瓦が集中する。広木上宿遺跡の須恵器が混在する。

IXグループ：広木上宿遺跡の瓦と須恵器が集中する。

Xグループ：白石大御堂遺跡の土師器が集中する。

XIグループ：広木上宿遺跡の瓦と須恵器が共存する。その他：Plの強度が高い領域に白石大御堂遺跡の瓦が分散して分布する。

以上の結果から明らかな様に、白石大御堂遺跡に瓦と土師器はQtの強度が500以上の領域にあり、明瞭に広木上宿遺跡、桜沢窯跡、藤岡平遺跡群の瓦と須恵器と分類される。

中堀遺跡の瓦はVIIIグループに集中し、桜沢窯跡の瓦とは異質である。広木上宿遺跡の須恵器はIVグループに集中し、一部は桜沢窯跡の瓦と須恵器のVIIグループで共存する。広木上宿遺跡の瓦はIII、VI、IX、Xの4グループに分散し、統一性が乏しい。

(2) 化学分析結果

化学分析結果は化学分析表に示すとおりである。これらの結果に基づいて土器の分類を行った。

SiO₂-Al₂O₃の相関について

第3図 SiO₂-Al₂O₃図に示す様にI~IVの4グループとその他に分類される。a-a'線より下の領域にはIグループ、上の領域にはII~IVの3グループが分布する。

Iグループ：桜沢窯跡の須恵器と瓦が集中する。中堀遺跡の瓦、広木上宿遺跡の瓦と須恵器も共存する。藤岡平遺跡群の須恵器も混在する。

IIグループ：白石大御堂遺跡の瓦が集中し、広木上宿遺跡の瓦、藤岡平遺跡の須恵器が混在する。

IIIグループ：広木上宿遺跡の須恵器と瓦が集中し、藤岡平遺跡群の須恵器と共存する。

IVグループ：広木上宿遺跡の須恵器と瓦が混在し、

藤岡平遺跡群の須恵器が集中する。

その他： SiO_2 の低い領域には桜沢窯跡の須恵器、 Al_2O_3 の高い領域に白石大御堂遺跡の土師器が分布する。

Fe_2O_3 - MgO の相関について

第4図 Fe_2O_3 - MgO 図に示す様に、I~VIIIの8グループとその他に分類された。

Iグループ：広木上宿遺跡の瓦と須恵器が集中する。

IIグループ：藤岡平遺跡群の須恵器が集中する。

IIIグループ：広木上宿遺跡の瓦と須恵器が集中する。
桜沢窯跡の須恵器が混在する。

IVグループ：広木上宿遺跡の瓦が集中する。

Vグループ：桜沢窯跡の瓦と須恵器が集中し、広木上宿遺跡の須恵器が共存する。

VIグループ：中堀遺跡の瓦が集中する。

VIIグループ：白石人御堂遺跡の瓦が集中する。

VIIIグループ：桜沢窯跡の瓦と須恵器、広木上宿遺跡の瓦と須恵器が共存する。

その他： Fe_2O_3 の高い領域には白石大御堂遺跡の瓦と土師器が分散して分布する。

以上の結果から明らかな様に、桜沢窯跡、中堀遺跡、広木上宿遺跡の瓦と須恵器は独自のグループを形成し、明瞭に分れるものと広木上宿遺跡の瓦と須恵器の一部は桜沢窯跡の須恵器と瓦のグループに共存し、関連性が認められるものの2種類ある。

K_2O - MgO の相関について

第5図 K_2O - MgO 図に見られる様に、I~VIIIの8グループとその他に分類された。

Iグループ：広木上宿遺跡、桜沢窯跡、藤岡平遺跡群の須恵器と白石大御堂遺跡に土師器が混在する。

IIグループ：藤岡平遺跡群の須恵器が集中する。

IIIグループ：白石大御堂遺跡の瓦が集中する。

IVグループ：中堀遺跡の瓦と広木上宿遺跡の須恵器と瓦、桜沢窯跡の須恵器が混在する。

Vグループ：広木上宿遺跡の須恵器と瓦。

VIグループ：桜沢窯跡の須恵器と瓦が集中し、中堀遺跡の瓦、広木上宿遺跡の須恵器が混在する。

VIIグループ：広木上宿遺跡の須恵器と瓦が集中する。

VIIIグループ：藤岡平遺跡群の須恵器が集中する。

その他： K_2O の値が低く、 MgO の値が高い領域に白石大御堂遺跡の瓦と土師器が分布する。

以上の結果から明らかな様に、広木上宿遺跡の須恵器と埴輪はVIIグループに集中し、桜沢窯跡の須恵器と瓦はVIグループ、白石大御堂遺跡の瓦はIIグループという様に明瞭に分れる。

4. まとめ

土器胎土はA~Kの11タイプに分類された。広木上宿遺跡はD・H・Kタイプの胎土で構成されるものが多く、白石大御堂遺跡や藤岡平遺跡群の瓦と須恵器、土師器のタイプとは異なる。桜沢窯跡の瓦と須恵器の胎土はD・Kタイプが主体で、広木上宿遺跡の胎土と類似性がある。

石英(Qt) - 斜長石(P1)の相関ではQtの強度が500以下の領域に広木上宿遺跡、桜沢窯跡、藤岡平遺跡群、中堀遺跡の須恵器と瓦がグループを作り、500以上の領域には白石大御堂遺跡の瓦と土師器が分布し、明瞭に分れる。広木上宿遺跡独自のグループがあり、広木上宿遺跡の瓦と須恵器は少なくとも2種類はある。

化学分析結果でも、 Fe_2O_3 - MgO の相関では明瞭に遺跡毎に分れ、 K_2O - MgO の相関でも同様の結果が得られている。広木上宿遺跡の須恵器と瓦は白石大御堂遺跡や藤岡平遺跡群の須恵器や土師器、瓦などとは異質で、桜沢窯跡の須恵器や瓦との関連性が深い。中堀遺跡の瓦は桜沢窯跡や広木上宿遺跡の瓦とは異なる組成をしており、関連性は低い。

第2表 化学分析表

试料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total	備考	
広木上宿-1	0.53	1.28	23.69	63.39	2.54	0.19	1.08	0.14	7.10	0.08	100.02	瓦	14ce
広木上宿-2	0.62	1.10	21.31	64.67	2.73	0.53	0.83	0.37	7.47	0.37	100.00	瓦	14ce
広木上宿-3	1.30	2.92	23.19	54.67	2.38	1.49	1.31	0.54	12.03	0.17	100.00	瓦	14ce
広木上宿-4	1.40	1.82	22.54	50.92	2.21	1.31	1.23	1.99	17.00	0.47	99.99	瓦	14ce
広木上宿-5	1.22	2.04	23.69	57.13	2.50	0.87	1.26	0.82	10.00	0.47	100.00	瓦	14ce
広木上宿-6	0.82	2.18	25.96	55.96	2.00	0.62	1.47	0.39	10.60	0.00	100.00	瓦	14ce
広木上宿-7	1.72	1.98	20.75	58.67	2.33	0.66	1.55	0.45	11.89	0.09	100.00	瓦	14ce
広木上宿-8	1.31	1.63	22.76	59.17	2.96	0.82	1.77	0.17	9.41	0.00	100.00	瓦	14ce
広木上宿-9	0.88	4.67	20.70	52.80	2.95	1.41	1.38	0.97	14.24	0.00	100.00	瓦	14ce
広木上宿-10	2.13	3.65	20.66	54.22	2.58	2.18	1.36	0.82	12.41	0.00	100.01	瓦	14ce
広木上宿-11	0.43	1.39	25.57	56.87	2.36	0.50	1.54	0.55	10.78	0.00	99.99	瓦	9~10c
広木上宿-12	0.93	1.21	22.38	63.20	2.45	0.53	0.89	0.03	8.37	0.00	99.99	瓦	9~10c
広木上宿-13	1.40	1.59	22.69	57.89	2.52	0.59	1.32	0.49	11.51	0.00	100.00	瓦	9~10c
広木上宿-14	1.10	1.52	23.74	57.89	2.28	0.92	1.59	0.29	10.46	0.20	99.99	培塔	
広木上宿-15	0.99	1.16	23.72	54.95	1.85	0.46	1.27	0.88	14.31	0.41	100.00	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-16	0.71	1.96	25.35	52.16	2.70	1.04	1.64	0.59	13.57	0.27	99.99	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-17	0.28	1.53	22.85	60.18	2.24	1.62	1.25	0.20	9.85	0.00	100.00	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-18	1.33	1.25	23.42	56.29	2.97	0.64	1.03	0.41	12.65	0.00	99.99	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-19	1.04	1.50	24.00	54.11	2.39	0.61	1.45	0.75	14.14	0.00	99.99	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-20	0.16	1.50	23.66	57.77	1.69	0.67	1.18	0.09	13.14	0.14	100.00	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-21	0.64	1.07	19.93	64.25	2.73	0.59	1.06	0.57	8.95	0.21	100.00	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-22	1.08	0.94	18.73	69.36	2.13	0.34	1.06	0.40	5.95	0.00	99.99	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-23	0.58	0.98	24.19	60.52	2.30	0.50	1.39	0.33	8.99	0.21	99.99	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-24	1.02	1.78	21.89	53.75	2.63	0.79	1.18	0.73	16.30	0.01	99.99	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-25	1.33	2.14	30.44	48.09	3.67	0.60	1.44	0.35	11.73	0.21	100.00	須恵器・坏	8~9c
桜沢窯跡-1	1.20	0.84	28.67	40.56	2.02	0.70	2.22	2.23	20.45	1.11	100.00	坏	10ce
桜沢窯跡-2	1.22	1.83	23.55	54.68	2.21	0.99	1.57	0.00	13.63	0.32	100.00	皿	10ce
桜沢窯跡-3	1.33	1.65	25.16	52.46	2.09	0.89	1.57	0.90	14.47	0.37	99.99	高台付坏	10ce
桜沢窯跡-4	0.98	1.89	24.39	50.64	2.33	0.94	1.70	0.00	17.13	0.00	100.00	坏	10ce
桜沢窯跡-5	0.72	2.05	30.63	39.36	1.44	0.66	1.71	0.00	23.25	0.18	100.00	高台付坏	10ce
桜沢窯跡-6	0.68	1.42	27.34	52.08	1.92	1.00	1.95	0.00	13.62	0.00	100.01	高台付坏	10ce
桜沢窯跡-7	1.35	2.07	23.01	56.26	2.33	1.03	1.48	0.00	11.77	0.70	100.00	坏	10ce
桜沢窯跡-8	1.25	2.00	22.96	52.30	2.27	1.09	1.94	0.73	15.25	0.02	100.01	坏	10ce
桜沢窯跡-9	0.95	2.15	23.05	53.43	2.41	1.04	1.82	0.57	14.47	0.11	100.00	皿	10ce
桜沢窯跡-10	0.97	1.82	21.41	55.88	2.31	1.02	2.00	0.00	14.58	0.02	100.01	坏	9~10ce
桜沢窯跡-11	0.71	1.25	26.39	51.87	1.76	1.69	1.70	0.66	14.58	0.00	100.01	平瓦	9~10ce
桜沢窯跡-12	0.85	1.51	24.27	49.60	2.51	1.07	1.63	0.11	17.87	0.59	100.01	平瓦	9~10ce
桜沢窯跡-13	1.64	1.66	22.14	53.41	2.77	1.26	1.36	0.21	14.76	0.80	100.01	平瓦	9~10ce
桜沢窯跡-14	0.92	1.67	21.87	51.60	2.25	1.20	1.79	0.30	18.40	0.00	100.00	平瓦	9~10ce
桜沢窯跡-15	1.25	1.63	23.01	54.57	2.40	1.04	1.42	0.14	14.53	0.00	99.99	平瓦	9~10ce
中塚-16	0.88	0.57	19.45	55.69	2.06	0.90	1.45	0.52	18.21	0.26	99.99	平瓦	9 cl
中塚-17	1.06	0.87	22.38	59.00	1.88	0.49	1.58	0.31	12.06	0.37	100.00	平瓦	9 cl
中塚-18	1.09	0.70	21.53	58.77	2.11	0.56	1.03	0.04	13.66	0.50	99.99	平瓦	9 cl
中塚-19	1.03	0.96	20.59	59.53	3.37	0.50	1.32	0.00	12.37	0.34	100.01	平瓦	9 cl
中塚-20	1.32	1.70	17.23	61.41	2.22	1.14	1.20	0.45	13.03	0.31	100.01	平瓦	9 cl

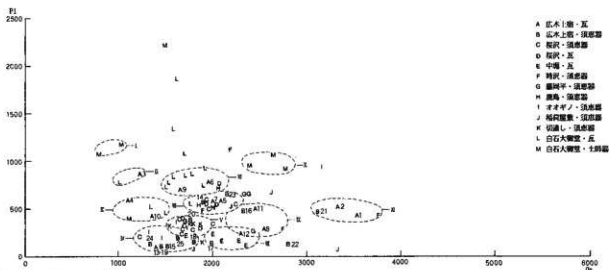
試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total	備考
時沢-11	0.89	6.63	19.98	53.17	1.72	1.27	1.40	0.38	14.44	0.12	100.00	須恵器・坏 平安(大歩)
時沢-12	0.73	0.57	22.11	65.62	2.73	0.36	1.01	0.26	6.33	0.26	100.00	須恵器・坏 平安(三反島)
時沢-13	0.88	1.02	23.51	61.87	1.46	0.85	1.38	0.59	8.23	0.21	100.00	須恵器・坏 平安(三反島)
時沢-14	2.09	2.29	20.07	59.91	2.65	1.16	1.30	0.60	10.53	0.00	100.00	須恵器・坏 平安(三反島)
藤岡平-14	0.63	1.22	25.23	55.15	2.17	1.11	2.10	0.31	11.32	0.26	100.00	須恵器・高台付椀 10c前後
藤岡平-34	0.59	1.18	24.09	55.05	2.38	0.50	1.51	0.67	14.40	0.24	100.01	須恵器・坏 9-10c
藤岡平-36	0.84	2.62	21.98	61.56	2.49	1.15	1.37	0.78	7.22	0.00	100.01	須恵器・坏 9-10c
藤岡平-37	0.64	0.67	15.55	70.07	1.47	0.78	1.05	0.47	9.29	0.00	99.99	須恵器・坏 9-10c
鹿島-3	0.82	2.54	26.97	55.04	1.91	0.79	1.42	0.30	9.96	0.26	100.01	須恵器・椀 四分
鹿島-4	1.02	2.73	22.29	49.93	1.98	1.18	1.26	0.69	19.62	0.00	100.01	須恵器・台付皿 四分
鹿島-5	0.84	1.04	23.09	57.29	1.72	0.56	0.91	0.00	14.55	0.00	100.00	須恵器・椀 四分
才オギノ-15	0.61	2.32	23.38	57.27	2.33	0.79	1.73	0.54	10.67	0.36	100.00	須恵器・椀 四分
才オギノ-16	0.39	2.17	23.42	55.34	1.96	0.90	1.51	0.00	14.32	0.00	100.01	須恵器・高台付皿 四分
才オギノ-17	0.17	1.43	32.15	44.79	1.45	0.67	1.41	0.00	17.72	0.22	100.01	須恵器・椀 四分
稲荷屋敷-1	1.23	2.80	22.35	58.21	3.59	1.75	1.12	0.05	8.90	0.00	100.00	須恵器・坏 9c
稲荷屋敷-2	0.27	0.82	21.27	64.31	2.87	0.45	1.17	0.39	8.34	0.11	100.00	須恵器・蓋 9c
稲荷屋敷-3	1.72	1.25	23.40	60.14	3.96	0.91	1.30	0.04	7.09	0.20	100.01	須恵器・坏 9c
稲荷屋敷-4	0.89	0.48	19.93	65.91	2.99	0.55	1.28	0.35	7.34	0.28	100.00	須恵器・高台付椀 9c
稲荷屋敷-12	0.86	2.70	21.88	53.16	2.10	1.36	1.64	0.00	15.96	0.33	99.99	須恵器・高台付椀 9c 切通し蓋址
稲荷屋敷-13	0.74	1.84	21.68	61.83	2.00	1.23	1.63	0.28	8.77	0.00	100.00	須恵器・坏 9c 切通し蓋址
稲荷屋敷-14	1.02	2.21	24.99	56.74	2.21	1.30	1.31	0.00	10.05	0.18	100.01	須恵器・坏 9c 切通し蓋址
稲荷屋敷-15	1.14	2.32	23.84	59.66	1.72	1.31	1.71	0.00	8.31	0.00	100.01	須恵器・高台付皿 9c 切通し蓋址
稲荷屋敷-16	1.32	2.02	24.41	54.29	1.83	1.29	1.43	0.25	13.07	0.10	100.01	須恵器・椀 9c 切通し蓋址
稲荷屋敷-17	1.33	2.02	21.17	57.85	1.98	1.40	1.34	0.16	12.60	0.14	99.99	須恵器・蓋 9c 切通し蓋址
稲荷屋敷-18	1.23	0.96	20.43	67.18	2.49	0.87	0.91	0.00	5.93	0.00	100.00	須恵器・甕 9c 八幡宮址
白石大御堂-1	0.60	2.68	24.56	54.72	2.48	0.99	1.06	0.22	12.16	0.53	100.00	丸瓦・巴文 13c
白石大御堂-2	0.81	2.75	23.57	53.85	1.89	0.97	1.07	0.11	14.39	0.58	99.99	軒平瓦・連珠文 13c
白石大御堂-3	0.52	1.80	22.30	52.88	2.30	0.91	1.32	0.28	17.52	0.17	100.00	軒平瓦・連珠文 13c
白石大御堂-4	0.95	2.72	24.27	53.96	1.80	1.13	1.02	0.45	13.68	0.00	99.98	軒平瓦・唐草文 13c
白石大御堂-5	0.41	2.17	21.83	48.99	1.65	0.76	1.06	0.29	21.84	1.01	100.01	軒平瓦・唐草文 13c
白石大御堂-6	0.35	2.58	21.78	55.48	1.57	1.19	1.31	0.56	15.18	0.00	100.00	平瓦 13c
白石大御堂-7	0.81	1.94	26.39	56.11	1.86	1.59	1.09	0.42	9.58	0.00	99.99	丸瓦・巴文 14-15c
白石大御堂-8	1.99	1.77	23.09	54.44	2.16	0.79	1.29	0.18	14.30	0.00	100.01	軒平瓦・均正唐草文 14-15c
白石大御堂-9	1.00	3.18	23.42	50.68	2.20	0.83	1.06	0.66	16.14	0.83	100.00	丸瓦 14-15c
白石大御堂-10	0.56	2.47	27.39	54.61	1.97	1.01	1.19	0.00	10.78	0.01	99.99	丸瓦 14-15c
白石大御堂-11	0.54	2.12	26.70	54.19	2.05	0.77	1.29	0.23	12.13	0.00	100.02	丸瓦 14-15c
白石大御堂-12	0.29	2.44	28.69	50.37	1.88	0.92	1.23	0.00	13.86	0.33	100.01	丸瓦 14-15c
白石大御堂-13	1.09	2.54	26.31	55.18	1.33	1.57	1.25	0.57	9.96	0.00	100.00	丸瓦 14-15c
白石大御堂-14	0.87	1.88	27.10	52.26	1.90	1.09	1.28	0.00	13.61	0.00	99.99	丸瓦 14-15c
白石大御堂-20	0.81	1.88	21.82	56.85	1.36	0.89	1.23	0.26	14.71	0.20	100.01	土師器・坏 古墳
白石大御堂-21	0.46	1.24	23.55	59.22	1.48	0.75	1.30	0.19	11.35	0.46	100.00	土師質土器・皿 12-13c
白石大御堂-22	0.76	3.46	25.71	50.10	2.78	0.84	1.94	0.54	13.55	0.32	100.00	土師質土器・皿 14c
白石大御堂-23	0.76	3.69	20.69	49.66	2.29	1.13	1.67	0.32	19.79	0.00	100.00	土師質土器・皿 14-15c
白石大御堂-24	1.03	4.11	22.19	51.60	2.77	1.05	1.56	0.10	15.55	0.06	100.02	土師質土器・皿 14-15c
白石大御堂-25	1.77	0.83	29.71	54.79	0.87	2.26	0.99	0.23	8.48	0.07	100.00	土師質土器・皿 15c
白石大御堂-26	0.73	0.68	28.21	62.98	0.62	1.03	1.28	0.00	4.47	0.00	100.00	土師質土器・皿 17-18c

第3表 タイプ分類一覧表

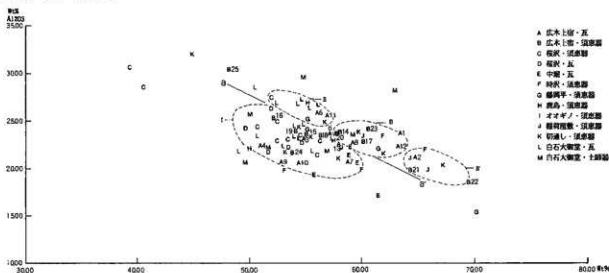
試料 No.	タイプ 分類	備考	
白石大御堂-2	A	軒平瓦・透珠文	13c
白石大御堂-21	A	土師質土器・皿	12~13c
白石大御堂-23	A	土師質土器・皿	14~15c
白石大御堂-10	B	丸瓦	14~15c
桜沢-6	C	高台付坏	10ce
広木上宿-3	D	瓦	14ce
広木上宿-5	D	瓦	14ce
広木上宿-10	D	瓦	14ce
広木上宿-20	D	須恵器・坏	8~9c
桜沢-4	D	坏	10ce
桜沢-5	D	高台付坏	10ce
桜沢-7	D	坏	10ce
桜沢-8	D	坏	10ce
桜沢-10	D	坏	9~10ce
桜沢-12	D	平瓦	9~10ce
桜沢-13	D	平瓦	9~10ce
桜沢-14	D	平瓦	9~10ce
時沢-13	D	須恵器・坏	平安(三反島)
藤岡平-14	D	須恵器・高台付椀	10c前後
藤岡平-37	D	須恵器・坏	9~10c
オオギノ-15	D	須恵器・椀	国分
稲荷屋敷-12	D	須恵器・高台付椀	9c 切通し窯址
稲荷屋敷-14	D	須恵器・坏	9c 切通し窯址
稲荷屋敷-16	D	須恵器・蓋	9c 切通し窯址
白石大御堂-7	D	丸瓦・巴文	14~15c
白石大御堂-22	D	土師質土器・皿	14c
広木上宿-4	E	瓦	14ce
時沢-11	E	須恵器・坏	平安(大歩)
白石大御堂-8	E	軒平瓦・均正唐草文	14~15c
白石大御堂-12	E	丸瓦	14~15c
広木上宿-9	F	瓦	14ce
オオギノ-17	F	須恵器・椀	国分
稲荷屋敷-1	F	須恵器・坏	9c
稲荷屋敷-3	F	須恵器・坏	9c
白石大御堂-3	F	軒平瓦・透珠文	13c
白石大御堂-13	F	丸瓦	14~15c
白石大御堂-20	F	十師質土器・坏	古墳
広木上宿-6	G	瓦	14ce
藤岡平-36	G	須恵器・坏	9~10c
鹿島-4	G	須恵器・台付皿	国分
オオギノ-16	G	須恵器・高台付皿	国分
白石大御堂-1	G	丸瓦・巴文	13c
白石大御堂-4	G	軒平瓦・唐草文	13c
白石大御堂-5	G	軒平瓦・唐草文	13c
白石大御堂-6	G	平瓦	13c
白石大御堂-24	G	土師質土器・皿	14~15c

試料 No.	タイプ 分類	備考	
広木上宿-11	H	瓦	9~10c
広木上宿-14	H	焙烙	
広木上宿-16	H	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-23	H	須恵器・坏	8~9c
桜沢-1	H	坏	10ce
桜沢-11	H	平瓦	9~10ce
鹿島-5	H	須恵器・椀	国分
白石大御堂-11	H	丸瓦	14~15c
白石大御堂-14	H	丸瓦	14~15c
白石大御堂-26	H	土師質土器・皿	17~18c
広木上宿-1	I	瓦	14ce
広木上宿-21	I	須恵器・坏	8~9c
白石大御堂-25	J	十師質土器・皿	15c
広木上宿-2	K	瓦	14ce
広木上宿-7	K	瓦	14ce
広木上宿-8	K	瓦	14ce
広木上宿-12	K	瓦	9~10c
広木上宿-13	K	瓦	9~10c
広木上宿-15	K	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-17	K	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-18	K	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-19	K	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-22	K	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-24	K	須恵器・坏	8~9c
広木上宿-25	K	須恵器・坏	8~9c
桜沢-2	K	皿	10ce
桜沢-3	K	高台付坏	10ce
桜沢-9	K	皿	10ce
桜沢-15	K	平瓦	9~10ce
中塚-16	K	平瓦	9c
中塚-17	K	平瓦	9c
中塚-18	K	平瓦	9c
中塚-19	K	平瓦	9c
中塚-20	K	平瓦	9c
時沢-12	K	須恵器・坏	平安(三反島)
時沢-14	K	須恵器・坏	平安(三反島)
藤岡平-34	K	須恵器・坏	9~10c
鹿島-3	K	須恵器・椀	国分
稲荷屋敷-2	K	須恵器・蓋	9c
稲荷屋敷-4	K	須恵器・高台付椀	9c
稲荷屋敷-13	K	須恵器・坏	9c 切通し窯址
稲荷屋敷-15	K	須恵器・高台付皿	9c 切通し窯址
稲荷屋敷-17	K	須恵器・蓋	9c 切通し窯址
稲荷屋敷-18	K	須恵器・蓋	9c 六輔窯址
白石大御堂-9	K	丸瓦	14~15c

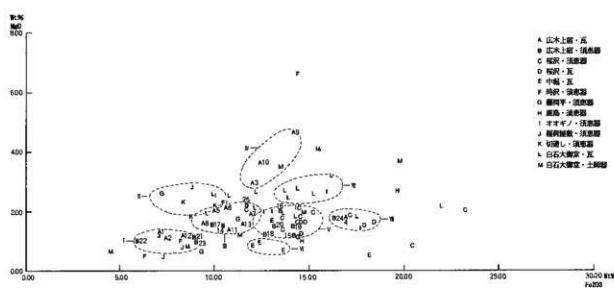
第2図 Qt-Pl 図



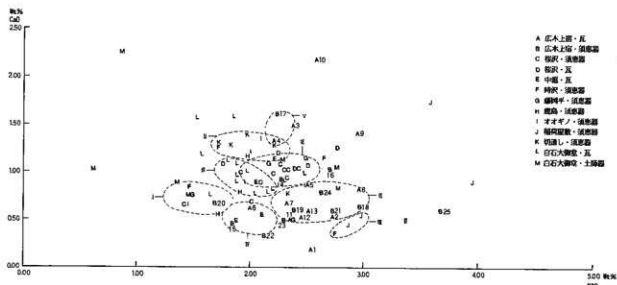
第3図 $SiO_2 - Al_2O_3$ 図



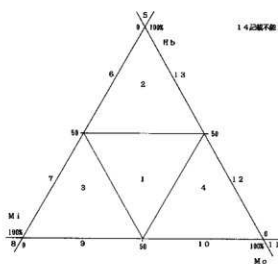
第4図 $Fo_2O_3 - MgO$ 図



第5図 K₂O-MgO図



第6図 三角ダイヤグラム位置分類図



第7図 菱形ダイヤグラム位置分類図

